

---

**ワケあり！**

まるは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワケあり！

### 【Nコード】

N6033U

### 【作者名】

まるは

### 【あらすじ】

作られた女子高生、高坂絹。養父のマッドサイエンティストのしようもない欲望のため、その高校生活を捧げる。嘘と科学と欲望とアクロバットの入り混じる、とんでも学園ライフ。マルチエンディング仕様。

### 【野いちご転載】

## 一ヶ月遅れの新入生

> i 2 9 9 4 3 | 3 8 4 9 <

( Illustration by ROOM )

「…というわけだ、分かったね？」

そう、説明がしめくくられた。

「分かりました」

絹は答えながら、制服のリボンを整える。

五月。

車の窓から見える緑が、眩しいほど。

絹は、それに目を細めた。

いよいよ、高校生活の始まりだ。

人より、一ヶ月遅れての入学。

療養生活のせいだった。

これで、やっと自由に動けるようになる。

「ついたよ」

校門の前に、車が横付けされる。

既に、授業の始まっている時間だから、静かなものだ。

閉ざされた門のそばに立っている守衛が、車に近づいてくる。

そう、守衛のいる学校なのだ。

私立 聖上学園。

頭脳明晰な金持ちしか入れないという、門の狭さではピカーな学校だった。

「では、いつてらっしゃい。健闘を祈るよ」

運転席から、親指が立てられる。

絹は、車のドアに手をかけ、降り立った。

ちょうど、守衛が側まできたところだ。

「高坂 絹、です。今日から通うことになりました」

守衛に向けて、ゆっくりと一礼。

「あつ、いや、まあ…ちょっとお待ちください」

守衛は、焦ったように赤くなりながら、携帯電話を取り出す。

職員に問い合わせるのだろう。

しかし、電話をかけながらも、ちらちらと絹の方を盗み見る。

ふふっ。

彼女は、そんな守衛に微笑んだ。

彼は、ますます赤くなる。

「失礼しました、どうぞ」

確認が取れたらしく、彼女は門の中へと案内される。

その前に、車を振り返る。

頑張るよ。

手を振って、運転席の眼鏡の男にアイコンタクト。

それを確認して、車は走り去った。

さあ。

突入だ。

「高坂 絹です。よろしくお願いします」

案内された教室で、絹は深々と頭を下げた。

頬の横に、長い黒髪がさらりとこぼれる。

教室の空気が、一瞬止まったのが分かった。

みな、絹に見とれている。

彼女自身、その感情の流れを手取るように感じていた。

ふうん。

穏やかなまま、絹は軽く教室を見回す。

なあんだ、と。

そう思ったのだ。

さっき、守衛でテストしたが、予想以上の反応だった。

教室でも、やはり同じ反応を感じる。

なあんだ　　チヨロイじゃん。

目を伏せ、いま思ったことが、表にあふれ出さないように気をつける。

人間は、何故か美醜には敏感で、美しいものを見ると、目を奪わ

れるのだ。

絹は、内心であきれていた。

くだらない、と。

綺麗な顔、綺麗な髪、綺麗な物腰、綺麗な言葉。

全部揃えば、金持ちの坊ちゃんお嬢ちゃんでさえ、この有様な  
か。

本当に、くだらない。

心の中で、ドス黒いカンジがぐるぐる渦巻くのを抑えつつ、絹は  
指定された自分の席へと着く。

一番後ろの、窓側から二番目。

「…どつぞよろしく」

窓際の席の男に、小首をかしげてください。

彼は、絹の顔を見ながら、時を止めていた。

こいつか。

写真で見せられた顔だ。

こいつが、広井 将。

絹の ターゲットの一人。

「絹さんは、お体の具合が悪いと伺ってましたが、大丈夫ですか？」

休み時間になった時、最初に近づいてきたのは、委員長と紹介された女性だった。

さすがに金持ち学校の委員長は、びんぞこ眼鏡や三つあみではない。

綺麗に編みこんだ髪と、役に立つのかと心配になるくらいの小さい眼鏡。

「ええ、一過性の病気で、完治しましたから、体育にも参加できます」

周囲の遠巻きの視線を感じつつ、絹は穏やかに答えを返した。

それより。

えらく、隣席の広井 将の視線の食いつきがいい。

さっきの授業の間、とにかくじーっと、食い入るように見ていたのだ。

いまも同じだ。

こいつも、面食いか。



絹は、そう判断するしかなかった。

これは、仕事が簡単そうだ。

その方が、彼女にとっても助かるのだが。

「部活動などは、何か考えてますか？ もう活動紹介は終わってしまいましたが、興味があれば、パンフレットを持ってきましたよ」

委員長の親切な言葉に、絹は軽く記憶を探る。

そういえば、絹はボスにいろいろ知識を植え込まれていた。

確か。

「こちらに、天文部はありますか？」

私、星が好きなんです。

いけしゃあしゃあ。

絹は、心にもないことを口にしてみた。

すると。

はっと、将が反応した。

委員長も、ああと呟いた。

「天文部でしたら…こちらの広井くんが所属している部ですね。彼に案内してもらおうといいと思いますよ」

あとは彼と話せとばかりに、「何か分からないことがあったら声をかけてくださいね」と言い残し、委員長は去った。

これで、絹は彼の方を見る口実が出来たわけだ。

視線を送る。

彼が自分を見ているのを確認して、にっこりと微笑んだ。

「天文部について、教えてくださいませんか？」

「あ、ああ…」

将は、釣り針に簡単に引っかかった。

ほんと　チヨロイ。

## 悪魔との契約

「いま帰りましたー」

肩をコキコキ鳴らしながら、絹は自宅へと戻った。

帰りのお迎えは、助手君だ。

送り迎えが行われるのは、今日だけ、ということになっている。

歩いて通えない距離ではないし、金持ち学校だからこそ、歩いて通う意味もあるのだ。それはまた、別の話。

「やあ、お帰り」

眼鏡の奥の瞳を、キラキラさせながら、ボスが出迎えてくれる。

「広井将と接触しました」

カバンをそこらに放り投げながら、絹はボスに報告を入れる。

「ああ、分かってるよ…一部始終見ていたからね、よくやった」

言われて、ああ、と思い出す。

制服の胸ポケットに、ペン型の超小型カメラが設置されていたのだ。

落ちないように、ポケットにひっかけるフック部に、マイクと共

に仕込んである。

学校にいる間の絹には、プライバシーなどないのだ。

一応、自分の意思で切ることは可能である。

女子トイレの中まで、見せるわけにはいかないのだから。

「でもボス…あの男、えらく食いつきがよかったです…何か仕込みました？」

制服のジャケットを脱ぎ、居間のソファに投げかける。

「さ、さあ…知らないなあ」

問いかげに、眼鏡の中年男はあらぬ方を見た。

年は40前。

自宅でも常にネクタイを締め、上に白衣を羽織っている。

理系が服を着て歩くと、きつとこんな感じだろう。

「隠し事もいいですけど…仕事に障るようなことは、早めに教えといてくださいよ」

面倒くさいから。

目の端で、助手も白衣に着替え始めていた。

この家に住むのは、三人。

ボスである眼鏡が　高坂　巧。

事実上の、絹の保護者になる。

その二十代後半の、やや根暗そうな黒い服ばかりを着る助手が  
島村。

名前は知らない。

どんなに黒いカラスな服装をしたとしても、最後にはいつも白衣  
を着るのが台無しな感じだ。

そして、高坂　絹。

ぶつちやけて言えば、ボスの指示で動く　下っ端だった。

「いやー将くんは、一番いいね…同じクラスに投入して大正解」

巧は、自分の体を抱きしめながら、身をくねらせていた。

40前の男の所業とは思えない。

「先生、回りくどいことをせず、てっとり早く、拉致ったらどうで  
すか？」

島村は、時々ぼそっと怖いことを言う。

いや、怖いと言えば助手君よりも、やはりボスが一番か。

「何を言い出す！ 君は、人の愛で方を知らんのか！」

そう。

この気色悪さが、怖さの源だ。

「で、初日の接触は最高でしたけど、こっからどうします？」

絹は、ソファにひっくりかえって、今度は靴下を脱ぎ始める。

どうにも、あの学校は窮屈だった。

男さえいなければ、今頃ここで下着一つになっていただろう。

いや。

本当は、いまも別に脱ぎ散らかしたところで、この二人が動じることはないだろう。

「そうだなあ、怒らせたり困らせたり泣かせたり…ああ、想像するだけで、胸が締め付けられるよ！」

そう。

ボスは　　ゲイだ。

しかし、別に隣席の将自身に、狙いを定めているのではない。

ボスが愛しているのは。

「ああ、やっぱりチョウの血は争えないな」

そう。

ボスの恋焦がれる相手は、広井チョウ朝。

彼の、父親だ。

あの高校で二人は出会い、恋に落ちるハズがなかった。

広井朝は、完全なノンケだったのだ。

そこから、ボスの歪んだ野望が始まるのである。

「さて、絹君：今後のことを話し合おうか…その前に」

巧は、指を鳴らした。

助手が、リモコンのスイッチをぴつと押す。

瞬間。

居間は、フロアごと下降し始めた。

「大事な話を盗聴されるといけない…研究室に行こう」

歪んだ野望とやらのせいで、ボスはバカらしい肩書きを手に入れ

ていた。

『マッド・サイエンティスト』

最初、ゲイでマッドサイエンティストだと聞かされた時は、頭のおかしいオヤジだと思った。

しかし、一般住宅の地下に、無許可で研究所をこしらえる本物のイカレだと知ったら　いっそ、覚悟が決まったのだ。

ここなら、生きていけるかもしれない、と。

生きる。

それは、彼女にとっては大事なキーワードだった。

絹は、ボスに金で買われた手駒だったのだ。

しかも。

『広井家の息子たちと、お近づきになっちゃおう』計画、のためだけに、だ。

これが、笑わずにいられるか。

ゲイの一念で、ボスは岩をも砕こうとしているのだ。

高校時代、彼は広井朝の信頼を勝ち得、親友としていつも側にい



る幸福を味わうことが出来た。

しかし、卒業間近。

ついに耐え切れなくなったボスは、彼に告白してしまったのである。

『すまん：親友のままじゃだめか？』

分かりきっていた玉碎。

それから、何かと朝が親友であろうと気遣う素振りを見せるのに耐え切れず、ボスは別の大学を選び、『この世界を滅ぼす力を手に入れてやる！』と、マッドサイエンティストなる怪しい職業についてしまったのだ。

その勢いを二十年も持続したまま、につくき記憶の眠る母校を破壊してやろうと、下見に訪ねたところ 中等部3年だった将と鉢合わせ。

朝そつくりの彼に、ボスは母校破壊をやめ、別の計画を思い立ったのだ。

それが、『仲良くなっちゃおう』計画、なのである。

極端から極端に走る親父だ。

絹は、その計画のために買われた。

ごみためみたいに押し込められた、子供たちの中から、ボスに選

ばれたのだ。

絹は、行き場のない子供たちが收容される違法施設の、下から一番目のエリアにいた。

人間として扱われないが、役に立つ駒にするために訓練される場所。

そして、商品として売りに出されるのだ。

絹は、その中でも学問はトップクラスだったし、運動神経もよかった。

ボスの選んだ理由は、年齢・体型・髪質・頭脳・健康状態。

それだけ条件が揃えばよかったらしい。

たとえ 醜い顔をしていたとしても。

そう。

絹は、美しさとは無縁の、どうしようもない顔だったのだ。

施設に詰め込まれる前。

絹だって普通の両親のもと、普通に生活をしていた。

小学校二年まで、だったが。

しかし、美醜というものの認識ができてはいた。

周囲の子供たちも。

そして彼女は、自分がブスであることを知り、ブスである不遇を知ったのだ。

その後、両親が死に 変な人たちに捕まって、絹は怪しい施設に押し込まれたのである。

そんな醜い自分を、ボスが望んだ。

「大丈夫、顔なんてものは単なる飾りだ。私が、いくらでも飾ってやるよ」

その後、まるでサイボーグでも作るかのように、彼女のパーツは入れ替えられ、この顔が出来上がったのである。

包帯が取れて、初めて鏡を見た時の絹の気持ちが分かるだろうか。

鏡を放り出し、それが割れるのも気にせず、大笑いをしたのだ。

本当に、ただの飾りだ、と。

こんなに簡単に、入れ替えてしまえる。

もう、過去の彼女を知る人間に会ったとしても、絶対に分からない。

それどころか。

この顔で、一つの財を築けそうなほどだ。

大声で、狂氣的に絹は気が済むまで笑った。

そして、ボスのバカらしい計画に付き合うことに決めたのだ。

朝の息子たちが通う学校に入学する、美しい女生徒として。

入学が一ヶ月遅れたのは、このサイボーグ作業が、予定より遅れたためだった。

しかし、遅れて入学した方が、注目を集められる　と、ボスはしたり顔だ。

名前も変える。

この絹という名前は、自分がつけた名前ではない。

ボスがくれた名前だった。

戸籍も、学校への入学手続きも、全て彼がその裏側の力をちよちよいっとネ、と使って作り上げてくれる。

もはや、ここにいるのは　高坂　絹。

それ以外の何者でもない。

絹は、ボスを悪魔だと思った。

こんな力を持つ人間が、神なはずはない。

無償で、彼女に贈り物をするはずなどないのだ。

これは、契約。

そう。

悪魔と交わした、魂を売り渡す契約だったのである。

ママ

二日目の朝。

ゆっくりゆっくり、歩いて登校したため、予鈴の少し前の到着になる。

途中何度か、クラスメートの車が止まり、乗るように誘われたが、「風景を見たいので」と、優雅にお断りした。

「おはようございます」

絹は、にこやかな笑顔を浮かべ、隣の将に挨拶をした。

写真でも見たし、昨日も見た。

しかし、昨日はそこまでじろじろ眺め回すわけにも行かず、通り一遍、全体の把握をただけだった。

今日は挨拶とともに、じっと彼を見てみる。

予鈴までの、ささやかな観察だ。

男にはもったいない、柔らかかそうな黒髪は短く。

お坊ちゃまにしては、色白でもない。

大き目の目と、きりっとした眉。

狩猟犬を思わせる、しなやかな身体は、バランスがいい。

白皙の美少年ではないが、健康的な色男だ。

こっつというのが、好みなんだ。

ゲイの好みなど、絹が知るはずがない。

しかし、将が一番父親に似ているというのならば、これがボスの  
ストライクゾーンということになる。

「ん、何か？」

あまりじつと見すぎたのだろう。

将は、怪訝を返してきた。

それに、にこつと微笑んで返す。

あ、赤くなった。

おまけに、純情路線か。

絹は、てのひらの上で、彼を転がしている気分になった。

簡単すぎて、物足りないほどだ。

「今日の放課後、お時間ありますか？」

そつ。

最初からこれを言い出すきっかけを探していたのだ　というフ  
リで、彼女は穏やかに語りかけた。

「えっ!？」

驚いたような将の声に、予鈴の音がかぶる。

すぐに、担任が入ってくるだろう。

「また、後で…」

思わせぶりに微笑んで、絹は彼から視線を外した。

しかし、続きが気になるのだろう。

ホームルームが終わるまで、将はちらちらと彼女を見続けていた  
のだった。

放課後　別にデートに誘ったつもりはない。

天文部とやらに、案内してもらおうと思ったのだ。

帰り支度を整えた絹は、将が動き出すのを待った。

教室の幾人かが、二人で連れ立って歩き出すのを見ている。

それは、ただの遅れて入学した新入生と、将のツーショット、と



いう意味合いではない。

噂の美少女新入生と連れ立って歩いている、将という構図だった。

彼女の存在こそが、視線のメインディッシュだ。

ああ。

つまんない。

絹は、この飾り物の顔が、その真価をいかんなく発揮している事実に、あくびが出そうだった。

何で、顔だけで世間の反応は違うのだろう。

絹の中身は、こんなにもドス黒いというのに。

見た目が綺麗なら、中身はオガクスだって構わないのだろうか。

その上、上品に振舞わなければならないのが、肩がこってしょうがない。

いつそ、自分の中身がオガクスならば、肩もこらないのに。そんなバカなことを考えているうちに、天文部と書いてある部屋にたどりついた。

金持ち高校らしく、部室はすべて部室棟と呼ばれる建物に、教室のようにずらっと並んでいる。

隣は、音楽関係の部活なのか、ピアノの音が流れていた。

「ちわー」

おぼっちゃまにしては、フランクな挨拶で、将は部室のドアを開ける。

既に、何人が来ていた。

しかも。

あん？

絹は、違和感を感じた。

制服の違う、華奢な子たちもそこにいたのだ。

あの制服は。

確か。

中等部　　そう、絹が理解しようとした時だった。

「ママー！」

中等部の制服の一人が、がたと立ち上がるや、大声で叫んだのだ。

その視線が、まっすぐに自分に向いているのを知って、絹は動き

を止めた。

はて。

こんなでかい子供を、生んだ覚えはなかった。

中等部の制服を着た男の子だ。

その子が、絹をママと叫んで　しかも、飛び付いてくるではないか。

両手を軽くホールドアップさせながら、彼女は抱きつかれたまま、状況を把握しようとした。

中等部とは言え、背は平均的な絹と同じくらい。

そんな年令や図体で、「ママ」なんて、よく叫べるものだ。

「り、了!」

しかし、焦って動き出したのは、絹ではなく将だった。

彼女から、その男の子を引き剥がそうとする。

ああ。

そこで、気付いた。

「こいつが将の弟だ、と。」

「こら、離れる！」

絹の腰に回した手と、乱暴に弟の肩にかけた手では引き離された。

これでやっと、弟くんの顔が拝める。

絹は、小首を傾げながら、了を見た。

真っ赤になった必死な顔。

写真では、もう少しあどけなさがあったが、いま興奮しているせいか、その面影がなりをひそめている。

将よりも線が細く、華奢な感じがした。

髪も、茶けて天パがかっている。

可愛い担当、甘えっ子か。

「よく見る…似てるけど、違うだろ。絹さんは、母さんじゃない！」  
再び飛び付きそうな弟に、将が強い言葉を投げる。

まだ、彼の手は絹の腰に回っていて、半ば抱き寄せられている感じだ。

弟の相手に忙しく、気付いていないようだが。

しかし、気になる言葉だ。

絹が、誰に似ている、と？

「ごめんね、絹さん…了、母親を写真でしか知らないから」

いつの間にか、絹さん、だし。

そんな将の呼び方よりも。

はっはーん。

やっと、絹はボスがしかけた事が、何だったかに気付いた。

道理で昨日、将がこの餌に食い付いたわけである。

絹の顔のモデルは 彼らの母親だったのだ。

「ごめんなさい…」

中等部二年 広井了。

ようやく落ち着いたのか、別の意味で赤くなりながら、彼は小さくなっていった。

部室の端。

入部のあいさつどころではないまま、絹は広井ブラザーズに挟まれていたのだ。

今頃、自宅ではボスが、モニターを見ながら鼻血でも出しているかもしれない。

いきなり、了に抱きつかれた上に、いま両手に華なのだから。

絹の顔を母親に似せて作って正解だと、ほくそ笑んでいる方もしれなかったが。

ただ、変なサプライズを作るのは、やめて欲しい。

平和で馬鹿な仕事だから、黙って抱きつかせたが、絹は体術の訓練も受けているのだ。

反射的に投げ飛ばしていたら、どうするつもりなのか。

まだ、お嬢様稼業は、つけ焼き刃だ。

ボロを出しては、ボスの計画もおじゃんなのに。

「許してやってよ、絹さん」

将にまで頭を下げられて、絹は随分自分が黙り込んでいることに気付いた。

「驚いただけです…大丈夫、怒ってなんかいませんよ」

にこっ。

絹は、優しく了の手を取った。

ママが忘れられない可愛い子には、暖かいスキンシップを。

「き、絹さん…」

涙目で、感激したみたいな弟くん。

ああ。

心に、かすかによぎる感覚。

ああ　いじめたい。

この顔が、彼らに関わるためだけに作られたものだと知ったら、  
どれほど傷つくだろう。

絹は、傷つきはしない。

顔は利用できそうだが、愛着などこれっぽっちもないのだから。

暗い欲望が、胸の中で生まれる。

ただの仕事だと思っていたこれに、予想外のやり甲斐が見いだせ  
そうだった。

絹は、ただ彼らに優しくすればいい。

もし万が一、ボスの計画が破綻して、バレるようなことがあった  
ら。

優しくした分だけ、彼らの心は奈落へと落ちるだろう。

にっこり。

ますます微笑みを浮かべた。

「いつまで握ってたんだ」

いつの間にか、了の手が積極的に握り締めているのに気付きたる将の鋭い一発が、弟の頭に入った。

手が離される。

さっきのぬくもりを、忘れないでね。

絹は、少しうっとりしながら、そう思った。



## 本当のママ

「はっはっは！ でかした！」

家に帰り着いたら　ボスが赤飯を炊いていた。

まじですか。

絹は、予想を超えたその事実にも、笑っていいのか困っていいのか分からない。

しかし、ボスは満足しているようだ。

何よりである。

「すぐ握ります」

本当なら、マッドサイエンティストの助手のくせに、いまの島村は三角巾とエプロンで、赤飯のおにぎりを作っている。

この家で、家事ができるのは、島村と絹。

彼がどこで家事の腕を磨いたかは知らないが、絹は必要にかられて仕方なく、だ。

あの施設では、何でも自分たちでやらなければならなかった。

「いやあ、あの了くんはたまらないね。はあ…いじめてみたい」

思い出すだけで身をくねらせるボスの感想に、絹は笑ってしまいそうになった。

なるほど、と。

あの感覚は、女だろうとゲイだろうと、共通して覚えるものなのか、と。

だが、それを口に出して、ボスと分かちあうつもりはない。

自分は、悪魔との契約を履行するだけだ。

たとえ自分の感情と一致するところがあっても、それは単なる副産物。

ボスの指示の範囲内での、個人的な楽しみである。

「ああ、天文部…懐かしい」

「できました」

一人トリップするボスに、赤飯おにぎりの盛られた皿が差し出される。

それをむんずつと掴んで、ボスは宙を見上げるのだ。

「そう…天文部の観測会…チョウと二人きり、丘の上で美しい星を見上げたのだよ」

「……………」

ボスの話をよそに、島村は次に皿を絹へと突き出した。

受け取る。

炊きたてなのか、まだ温かい。

「で、ボス……」

もしかっと、赤いおにぎりにかぶりつきながら、トリップ中のボスに話かける。

まだ、目は戻ってきていないが、耳は聞こえているだろう。

「この顔のモデルになった人のことを、前知識として欲しいんですが」

サプライズのせいで、何にも情報がないのだ。

しかし。

ボスは、むっと顔をゆがめて 言った。

「イヤだ」

「あの女は、私のチョウを奪ったんだ。なぜ、そんな憎い女の話をしなければならぬ」

ブンブン。

ボスは、子供のように怒りだす。

「もう、思い出したくもない」

しかし、言葉は矛盾に満ちていた。

絹は、黙って自分の顔を指す。

これがある限り、ボスは毎日思い出すのではないか。

「はっ！」

その指先の顔を見て、ボスは馬鹿馬鹿しいという顔をした。

「顔が似ているからと言って、同じものか？」

おまえが、私からチヨウを奪ったのか？

実に、ボスは論理的だ。

分かりやすく、意外にも単純だった。

ああ、そうだ、これなのだ。

ボスは、ゲイのマッドサイエンティストだが、絹をちゃんと認識  
してくれている。

手駒でも、駒として磨いてくれるのだ。

いつか、この馬鹿らしい茶番に飽きるまで。

絹にとっては、その事実はとても大きいものだった。

彼には、朝と息子たち以外の顔など、単なる見分ける記号にすぎない。

どんな絶世の美女が現れようとも、それだけは揺らがない。

だからこそ、絹は何でもやるのだ。

「情報だけなら、僕が出せますよ」

島村が、赤飯にかぶりつきながら、助け舟を出す。

「チョウ関連のファイルは、極秘ファイルの中だ」

お前にも探せないよ、ボスは言い放つ。

「先生：それは広井朝と息子らのファイルだけです。望月桜のは、そこらの雑多ファイルと一緒に入ってます」

うぐつ。

助手の、なめらかかつ平坦な声の突っ込みに、ボスは赤飯を喉に詰まらせた。

望月 桜。

それが、あの兄弟の母親の名前か。

「その名前を出すなー！ 忌々しい！！！」

食べかけの赤飯を、助手に投げつける。

べしゃっと、顔のあたりにおにぎりの塊が張り付き 床に落ちた。

「まったく、不愉快だ！」

ヒステリーを起こして、ボスは居間を出て行ってしまっ。

絹は、少し呆然としたまま、それを見送る。

島村は。

髪の毛に赤い米粒をつけたまま、てきぱきと片づけを始めたのだった。

「ほい」

しばらくして、島村が印刷した用紙をくれた。

ボスは、まだすねているのか、自室から出てこない。

「ああ、ありがとう」

長ソファの肘掛に、両足を長く伸ばしながら、絹は片手におにぎり、もう片手にファイル、という二刀流になった。

「あ、そっぴゃ」

ファイルも興味あるが、絹は助手にも聞いてみたいことがあったのだ。

「島村さんは、マッドサイエンティストの助手なんですよ。こんな茶番に、よく付き合っつね」

絹はいいのだ。

彼女はそのために買われたのだから。

しかし、彼は違う。

具体的には知らないが、島村にも目指すものがあるはずだ。

だから、ボスの助手になつたに違いないのに。

「お前が学校に行っている間、先生はモニターを見ながら、人工衛星を撃ち落とす装置を作っている」

淡々と島村は、物騒なことを言った。

「じつじつ…」

宇宙に浮かぶあんなものを、撃ち落としてどうしようというのか。

おそらく、まともな理由と目的ではないだろう。

絹は、深く追求しないことにした。

それより。

「先生は、遊んでいるだけじゃない」

淡々としながらも、きつぱりとした島村の声。

こっちの方が、重要だった。

彼もまた、絹とは違う意味で、ボスに畏敬の念があるのだ。

もぐつと、おにぎりの最後のひとかけらを飲み込む。

「あ、あとひとつ」

指を舐めながら、絹は質問を追加する。

ボスには、聞き辛いことがあった。

心構えとして、聞いておきたいこと。

「なんだ？」

絹は、一度唇をしめらせて。



ゆっくりと、こう言った。

「あのさ…ボスと……デキてんの？」

あの島村が 点目になっていた。

それが、絹の気になるところだった。

ボスはゲイだ。

そんな彼と、いままで同居しているわけだから、可能性として捨てきれなかったのだ。

点目が、少し色を取り戻す。

彼は、ぼりぼりとカラスみたいな頭をかいて。

「幸い、好みじゃないそうだ」

珍しく、苦笑いめいた表情で、島村は居間を出ていった。

ふーん。

やっぱりボスは、朝一途なのか。

しかし。

助手に入った島村が、最初にボスの趣味を聞かされた時は、さぞ複雑だったのだろう。

そんな推測ができるさっきの声に、絹は密かに笑ってしまったのだった。

望月 桜。

その資料に印刷された顔は、確かによく似ていた。

絹の顔を、自然に大人びさせれば、この顔になっていくのだろう。

享年 28歳。

事故死。

ボスや朝と同じ学校、学年、部活。

ということは、ボスの記憶の中に、何度も彼女は登場しているはずだ。

おそらく、意図的に脳内で抹殺されているのだろう。

さすがに、実際には手を下していないだろうが。

もし、手を下しているのなら、いまだにボスが、桜に忌々しさを覚えるはずがない。

ざまあみろが関の山。

生きている間に、勝てなかったからこそ、腹が立ってしょうがないのだろう。

20で学生結婚。

21で出産。

いまでも昔も、デキちゃった結婚は健在のようだ。

叩き上げの技術職から大手電気メーカーにのしあがった広井家。

あの学校でいうところの成金組。

そして、桜は。

「ん？」

絹は、ぱらぱらと書類をめくった。

肝心の、桜の家のデータがない。

「島村さん」

絹は、一枚紙が抜け落ちているのかも、と彼を呼んだ。

「家の情報は…ない」

はあ？

居間に戻ってきた彼の返事は、やはり平坦なものだった。

「余りに大物の子女は、学校にさえ出自を伏せるそつだ」

はあ、さいで。

絹には、理解できない世界だった。

ともかく、朝よりも遙かに、身分とやらは高かったわけだ。

ふむ。

「あ、おまえもその口だから」

絹の思考を、島村がさつくり破る。

「は？」

口とは、なんのクチのことか。

「おまえも、学校の資料は出自不明扱いだからな」

いろいろかぎ回られると面倒だから。

は。

「あははははっ！」

さすがの絹も、これには声を出して笑わずにはいらなかった。

光栄なことに、高貴な桜と同じ扱いなのだ。

「ははっ…確かにわたしの本当の身分は明かせないわね」

桜とは まったく反対の意味で。

京

朝。

チヨウのことではなく、時間的な朝。

絹は、歩いて登校する。

「おはようございます」

住宅街ですれ違う人にあいさつをすると、一瞬、向こうは戸惑った顔をする。

絹の顔のせいだ。

美しいものは、それだけで人の思考を奪うのか。

飾り物と知らずに集まる羽虫たち。

だから、絹はほほえむ。

偽物をありがたがる彼らの姿が、滑稽だからだ。

住宅街を出ると、少し大きな道に出る。

この道を、あとはまっすぐ歩き続けたら、学校につくのだ。

「高坂さん、乗っていきませんか？」

そこで、車通学のクラスメイトに何回か声をかけられる。

男もあれば、女もある。

まだ、ほとんどクラスメイトとは話をしていないので、絹に興味があるのだろう。

「いえ、結構です…ありがとうございます」

たおやかに会釈して、絹は歩き続ける。

広井兄弟以外と、仲良くする気はなかった。

ボスが見たいのは、他の学生ではないのだから。

「あれ、絹さん…歩き？」

また停まった車の、後部座席のスモーク窓が開く。

絹さん。

そう彼女を呼ぶのは。

「おはようございます、広井くん」

将だ。

あいさつを投げると、座席の奥から、了も顔を出す。

「おはよう！ 昨日はごめんね！」

兄の背中に、のしかかるようにして。

その了の瞳に、憧憬というものが、しっかりと見いだされる。

絹が、昨日植えつけたそれ。

「よかつたら、狭いけど乗っていかない？」

将の申し出に、絹は少し考えた。

ボスのことだ。

今頃、家で拳を振り上げながら、『乗れ！ 絶対乗れ！』と騒いでいそうだった。

「ご迷惑ではないですか？」

一応、控えめな発言を試みる。

答えなど、最初から分かっていた。

「大歓迎！」

答えたのは、兄の頭を押しつぶしてはしゃぐ 了だった。

「徒歩通学って、大変だね」



後部座席に、三人並んで座る。

将は真ん中。

さっきの仕返しにか、身を乗り出そうとする了を、がっちりブロツクしている。

「いえ、外を歩くのは楽しいです」

自由な外は最高だ。

本当に、絹はそれを楽しんでいた。

その真意までは、彼らには伝わることはない。

彼らのイメージする絹は、過去までも美しいのだろうから。

「そっだよね、外って…あっっ！」

同調しようとした弟は、将の肘の一撃で黙らされる。

それに、くすつと笑おうとしたら。

「うっせーぞ、ジャリども」

低く恫喝するような声が、車内に響く。

絹は、びくつとした。

この空間には、不似合いな音。

助手席だ。

男が、身をよじるように振り返る。

あつ。

絹は、すぐに気づき、そして理解した。

この男が

「京にい、絹さん恐がるから、しゃべっちゃだめ！」

了は、恫喝にまったく物怖じしていない。

助手席の男が、長兄の京。

一つ上の二年生。

「絹だか木綿だか知らねえが、オレの安眠を妨げんな」

ガラスの悪いおぼっちゃまだ。

さっきまで静かだったのは、熟睡していたのか。

「すみません、乗せていただいたのに…静かにしています」

絹は、ちょうど助手席の後ろ。

京から一番見えない位置。

「女か…」

京は、反対側へ身をひねり、座席の頭を越すように、絹を見た。

待ち構えていた彼女は、特上の微笑みで迎え撃つ。

見開かれる、目。

止まる時間。

彼ら兄弟にとってこの顔は、ただ美しいだけのものではない。

DNAに突き刺さる顔なのだ。

「お前…」

茫然と、呟かれる言葉。

しかし、彼は最後まで言い終わらなかった。

車が、止まったのだ。

「到着いたしました」

静かな運転手の言葉。

「乗せて下さって、ありがとうございます」

絹の席は、最初におりるべき位置。

運転手が、ドアを開けに回ってくる前に、彼女はすつと車を降りた。

「あ！ 絹さん！」

降りてついてくるのは、将だけ。

中等部は、校舎そのものが違う。

了は、そっちへ行かなければならない。

同じ校舎のはずの京は。

まだ、車を降りられないようだった。

ワイルドな長男、元気な次男。そして、可愛い三男。

これでようやく絹は、兄弟全部と対面できた。

そして、手応えも感じていたのだ。

ボスの読み通り、この顔にしたのは正解だった。

たいした労力も必要なく、簡単に釣り上がるのだから。

「口は悪いけど、いいアニキなんだ、許してやって」

京のことを、弟が詫びる。

仲のいい兄弟なのは、車での雰囲気であっていた。

それに、京のガラの悪さも、おぼっちゃまの範囲をはみ出しそこねている。

本物の恫喝は、あんなもんじゃない。

浮かぼつとする記憶を、絹は再び深くに押し込めた。

将を振り返る。

「私がお邪魔してたんですもの、気にしないで」

教室に入って、仲良く話しながら席についた。

この光景を、クラスメートはどう見ているのか。

同じ車から降りたのを、見た人もいるだろう。

誤解なら、大歓迎だ。

そうすれば、変な男も寄ってこないだろう。

絹の手間も省けるし、将相手の仕事もやりやすい。

もう少し、この顔に慣れるまで、邪魔は欲しくなかった。

綺麗な子の悩みなど、想像でしか分からないのだから。

だが。

誤解が広まるより先に 変な男の方が、先にやってきてしまっ  
た。

## 昼休み

それは、昼休みのこと。

息のつまる教室を出て、絹は中庭のベンチで深呼吸していた。

昼食は、学食を利用するつもりだが、早い時間は混むので、時間をずらすのだ。

将は、きれいにこしらえられた弁当持参だった。

きっと、家にシェフでもいるのだろう。

男友達数人と食べているので、この時間の仕事はフリーだと思っていた。

そんな彼女に、影が落ちた。

見上げる。

「高坂さん、いま一人？」

見知らぬ、男子生徒。

もしかしたらクラスメートかもしれないが、広井ブラザーズに忙しいから、他の男など、見てはいない。

「すみません、人と待ち合わせなんです」

こんなシーンを、ボスが見たいはずがない。

さっさとやりすぎそう。

「広井なら、バカづらで弁当食べてるよ。彼以外に、まだ知り合いないでしょ？」

勝手に隣に座るな。

そして、将をバカづらと言っな、とも思った。

今頃ボスが、この男目がけてミサイルを発射しようとしているかもしれない。

「本当に、待ち合わせですから」

それでも立ち去らないなら、絹が移動するしかない。

「そう邪険にしないでよ、友達になりたいだけなんだから」

手が 伸ばされる。

はあ。

絹は、ため息をもらした。

肩を抱こうとしているようだ。

手が着地する前に、立ち上がって逃れようと思った。



が。

「いだだだだ！」

突然、男は情けない悲鳴をあげる。

驚いて隣を見ると、腕を後ろに持っていかれていた。

「待ち合わせだっつってっだろ」

ベンチの後ろ。

悪者の腕をひねりあげている、その騎士は。

「京さん……」

昼休みの息抜きが　ボスのお土産をつれてきた。

「ありがとうございます…助かりました」

逃げ去ったクラスメート(?)に、感謝しなければ。

絹は、まさか京が釣れるとは思わず、我知らずにこやかになっていた。

写真と、今朝、座席ごしに見た顔。

じっくり見ておきたかった。

将の輪郭を荒削りにして、やわらかい髪を嫌うような逆立て、目を少し細めると 京になる。

「たまたま、通りかかったただけだ」

不承不承。

そんなポーズで、絹の言葉を素直に聞き入れない。

「でも、助かりました」

にこり。

さて。

京のような悪ぶりたい男は、どう攻めるべきか。

下手に押すと、逃げそうだ。

引いてみるか。

絹は、それ以上京には構わず、空を見上げてため息をついた。

あたたかい春の日差しを浴びながらも、意識はベンチの後ろ、だ。

少しの沈黙。

「待ち合わせの相手、まだこねーのか？」

よしっ。

自分から話を振ってきた京に、絹は心でガッツポーズを作った。

ボス、やりました。

「あれ…ウソです」

苦笑を浮かべ、絹は白状した。

待ち合わせがあるなんて嘘っぱちだ。

その秘密を京にバラすことで、間の壁を少し壊したように見せる。

「あ、ああ、なんだ、ウソか」

どきっ。

隣に人影を感じ、ちらりと見ると、京が背もたれに両腕をかけるように座っていた。

誰もこないと分かって、座ってもいいと思ったのか。

すぐには、立ち去らないでいてくれるようだ。

ボスは、今頃喜んでることだろう。

さすがに、今日は赤飯はないだろうな。

昨日のことを思い出して、絹は目を細めた。

「お前…」

呼ばれて、はっとする。

京の相手を、おろそかにするところだった。

「お前…あんまり、一人でいない方がいいぜ」

空を見上げながら、何気ない感じでそう言われた。

一人でいるなど、言われても困る。

広井ブラザーズのみがターゲットなのだ。

「結構、一人でこうしているの…好きなんです」

多少、風変わりに思われるかもしれない。

学園生活を、エンジョイしにきているわけではないのだ。

彼らに疑わせないためには、多少エキセントリックでもいいだろう。  
う。

この顔なら、それも許されるに違いない。

「お前、美人だから気をつけろっつってんだ…将でもいいから、虫

よけにつけとけ」

自分の弟を捕まえて、殺虫剤扱いか。

それよりも。

「美人…私が？」

一瞬、身体からドス黒いものが、漏れだすかと思った。

絹は、それをあわてて飲み込みながら、白い自分を演出する。

「あ、ああ、自覚したほうがいい…徒歩通学なんかしていると、さらわれるぞ」

京の言葉は、滑稽の極みだった。

絹はカメラ、マイクの他に、体内に発信機が埋められている。

たとえ、彼女が真つ裸にされたとしても、発信機が自分の位置をボスに伝えるだろう。

絹も、おとなしく捕まってなどいない。

最悪なものは、突然の死だけ。

それ以外は　きっとボスがなんとかしてくれる。

「校内で、一人でいられるところがないのも困りますし…車通学したいなんて…言えません」

将には親しみやすさを。

了には優しさを。

そして、京には少しの反発を。

彼の思い通りには、ならないのだ。

それを、肌で感じてもらえればいい。

「親に送ってもらえば、いいだろ？」

わざわざ、運転手を雇うお金の余裕がないと思われたか。

話が、面白い方向に転がってきた。

それを、絹は逃さない。

「父も母も…いないんです」

真実でもありながら、絹という存在の設定でもあるそれを、ひらめかせる。

言うことは聞かないが、絹の秘密を見せる。

遠さと近さ。

飴と、鞭。

「あ、すまん……」

そして、京の心に 母の死を甦らせる。

「いえ……いいんです。いまは、とても幸せですから……ただ、お世話になっている方に、今以上のご迷惑はかけられません」

こんな素晴らしい高校まで、通わせてもらっているのに。

絹の身の上話を、京は静かに聞いている。

心に死んだ母、桜が頭にちらついていることだろう。

「だから……さらわれることがないよう、がんばります」

こつ見えても、意外と強いんですよ。

絹は、健気さをアピールした。

彼らの想像以上に、本当に強いので、それに嘘はなかったが。

「……天文部」

ぼそつ。

京が、長い沈黙の後、そう切り出す。

部活が、どうしたと言うのだろう。

「天文部、入ったんだよな？」

将か了が、しゃべったのか。

朝初めて出会ったばかりなのに、情報が早いことだ。

「はい、そうですが…」

「オレもユーレイだが、一応部員だ…これから、帰りはうちの車で送ってやる」

あつは。

本当に、絡んできた男子生徒には感謝しなければ。

おかげで、京公認の帰りの足を手に入れたのだ。



## 暗がりの憂鬱

「お前は、天才だー！」

帰りついた絹は、ボスに絶賛された。

わざわざ、玄関まで出迎えてもらえるほど、喜んでいようだ。

もう、広井家の車は走り去った。

見送った後に、絹は家に入ってきたのだから。

「すみません、勝手に家を教えて」

一応、絹は午後にはマイクにしゃべりかけたのだ。

『教えてマズイことがあれば、何かで知らせて下さい』と。

信号弾でも打ち上がるかと、授業中は時々窓の外を見ていた。

しかし、外は静かなまま。

「はっはっはっ、大丈夫だ。家の中に入れたって、ボロは出さないぞ。最悪、自爆システムも搭載だ、この家は」

高らかに笑うボス。

自爆システム、ついてるのか。

絹は、別の方向に感心していた。

さすがは、マッドサイエンティスト。

やることが違う。

「いやあ、京くんの悪っぱさは、チヨウウへの反抗かな…跡取りなんかにならないゾ、とか言ってるのだろうか…ああっ」

うっとり、幸せそう。

ボスの様子に、絹も嬉しかった。

「あ、つまらん他の男には、くれぐれもつつを抜かすなよ！」

うっとりから、少し時間がたつと、鋭い釘を刺された。

絹が、つつを抜かしていないのは分かっているだろう。

しかし、そのどうでもいい男に、将をバカ扱いされたのが、気に入らないのだろう。

「もう少しで、追尾型プチミサイルの在庫が、一つ減るところでした」

島村が、頭をかいている。

やっぱりボスは、物騒なことを考えていたようだ。

「気をつけますが…ちよつとこの顔は、高級すぎますね。余計な魚

が寄ってきそうです」

絹は、不可抗力は認めて欲しいという意味で、そう言ったつもりだった。

「そう…大物を釣り上げてもらわなければ、困るんだよ」

しかし、ボスはくくく、と怪しげに笑う。

「究極の目的は…チョウなのだからね」

言葉に、絹は海よりも深く理解した。

要するに、三兄弟を足掛かりに、家にまで入り込み、チョウと接触してこいと　そう言うのだ。

家に行く、口実ね。

絹は、新たなミッション追加に、静かに思案をめぐらせたのだった。

将と一緒に天文部に到着すると、すでに京と了は来ていた。

「絹さん…」

了に手を振られ、絹も小さくそれを返す。

「おっ、高坂さん、来たね」

部長と紹介された男が、まるで彼女を待っていたかのような発言をする。

軽く会釈だけして、やりすごそうとしたが、話は続けられた。

「高坂さんの、歓迎観測会を考えてるんだけど、夜に出られるご家庭かな？」

へえ。

絹は、話の内容に動きを止めた。

なかなか、そそられる話のようだ。

しかし、まだ広井ブラザーズが行くとは決まっていないので、即答は避ける方向にする。

「どうでしょう…聞いてみないと」

ちらりと、京に一瞬視線を送った。

彼には、絹の秘密の事情を話している。

秘密、と言っても、絹という存在の架空の秘密だが。

「ごつすること、京は自分に送られた、ヘルプの視線だと思っだろつ。」

「えー絹さん、行くつよー。観測会楽しいよー」

了の言葉から読み取ると、どうやら参加方向のようだ。

「丘の上でみる星座は、絶品だよ」

将も、気合いをこめてアピール。

丘。

ボスも、そこで観測したのだろうか。

朝と一緒に。

「うちの車で、ちゃんと家まで送るって、保護者に言っとけ」

ついに、京参戦。

絹が、交通手段に困っていると考えたのか。

親ではなく、保護者という単語を使うところが、二人の間の秘密を、暗に匂わす。

「ありがとう、京さん。じゃあ、帰って聞いてみますね」

大体、行くことは決まった。

聞くなど、単なる話の流れにすぎない。

ボスが、拒むはずがなかった。

さて。

夜の観測会か。

カメラが効かないかもしれないから、ボスと相談する必要がある  
そうだった。

「京さん、か」

天文部では、暗幕を閉めて、小さなプラネタリウム装置で夜空を  
楽しめる。

天井にドーム状の天幕が用意される本格派だ。

朝の会社で作った、寄贈品と聞かされた。

そんな暗がりの中、隣の将がぼつりと兄の名を呟いたのだ。

しかも、弟としては変な呼び方で。

右は了、左が将。

京は、少し離れた向かい側に座っている。

「なんで、兄貴だけ名前と呼ぶんだ？」

ぼそぼそ。

部長が、初夏の星座の解説を始めている。

それでも聞こえるということは、絹の耳のそばでしゃべっているのだろう。

マイクは、ちゃんと声を拾えているだろうか。

ふーん。

『広井くん』という、呼ばれ方が気に入らないようだ。

ふっ。

暗がりでは、絹は微笑んでいた。

この暗がりなら、彼女の内側の暗さも目立たない。

クラスでは、一番絹と仲のいい将。

しかし、兄弟の中で一番でないのが、不満なのだろう。

昨日は、彼の知らないところで、京と出会い、親しくなり、帰りに送ってもらったことになったのだ。

その事実も、不満を上乗せしているのだ。

「『将くん』と、呼んでもいいの？」

彼の方を向き、囁く。

ドス黒い吐息を闇に紛らわせて。

少しの沈黙。

「う、うん」

暗闇の中の、秘密の出来事。

反対側で、了が絹の腕を抱えてきた。

頭を、そつと撫でてやる。

この子は、『了くん』だな、と思いながら。

「音、ちゃんと拾えてましたー？」

玄関に入り靴を脱ぎながら、絹はただいまより先に、気になっていたことを聞いた。

居間のボスが、黙ってVサインしていたので、ばっちりのようだ。

しかし、昨日までのようにはしゃいでいないので、たいして喜んではないのか。

残念に思っているよ。

島村に、静かにというゼスチャーをされる。



唇の前に、人差し指を立てるそれ。

よく見ると、ボスはヘッドホンをはめている。

何か聞いているので、邪魔するな、ということか。

「なに聞いているの？」

島村に近付き、小声で囁く。

彼も同じように声をひそめて。

「次男坊の囁き声を、エンドレスで聞いている」

ヘッドホンが、雰囲気出るんだそうだ。

は、はあ、さいで。

「ふ、ふふふ…」

よく聞くと、小さい声でボスは笑っていた。

夜中に聞いたらホラーなその声も、いまの絹には仕事の満足感を与えてくれる。

「あ…：そくだ…：カメラ、暗がりでも大丈夫？」

それは、本当に島村に囁いただけの声だったのに。

ばっ！

動いたのは、ボスだった。

既に引き伸ばされ、パネルになった写真が出されるのだ。

映っているのは 京。

普通の写真よりは暗めだが、それがより彼の雰囲気を引き立てている。

あの暗がりで、これほどの性能なら、申し分ないだろう。

さすがは、ボスが作ったものだけはある。

パネルの京は、こっちを睨んでいるように見えた。

こっち。

そう。

絹と、二人の兄弟のいる方。

暗がりです、見えないものを見ようとしていたのか 何か、見えていたのか。

末っ子パワー

ピンポン。

朝食が、ちょうど終わる頃。

チャイムが鳴った。

誰も訪ねてこない家を考えれば、珍しい出来事だ。

いまこの家で、普通の活動をしているのは、絹一人。

ボスと島村は、寝ているか、地下の秘密部屋で怪しげなことをしているか。

だから、応答に出るのは、絹以外になかった。

「はあい、どちらさまでしょう」

インターフォンの通話を開く。

カメラには、何も映し出されていない　　と思ったら。

「ばあーっ!」

下からいきなり、了が飛び出してきた。

「了くん……」

絹は驚きながらも、ボスを探してしまった。

リアルタイムで見せたかったのだ。

しかし、残念なことに、ボスはこなかった。

「今日から、お迎えもするよっ！ 準備できたら、出てきてー」

天真爛漫な了の声に、はははと声にしない笑いを浮かべた。

だいぶ、彼女に入れ込んできてくれたようだ。

誰の提案かは知らないが、ご苦労なことだ。

インターフォンにも、録画機能を付けた方がいいかもしれない。

帰ってきて相談しようと、絹は準備をして玄関を出た。

「絹さん、おはよー」

了は車を下りて、玄関前で待っていた。

「おはよう、了くん。朝までありがとう」

腕を取られながら、絹はお礼を言った。

「おはよう、絹さん」

ドアが開いて、中から将に招かれる。

今日は、彼女が真ん中かと思ったら。

「へへへっ」

了が、するつと先に乗り込んだ。

「将兄い、もちよつと詰めてよ」

「てめっ」

兄弟の攻防を、目を細めて見ていると、視線を感じて、ふつと顔を上げる。

珍しく助手席の窓が開いていて、京が自分を見ていた。

「おはようございます、京さん」

貴重な睡眠時間を、木綿のためにさいていいの？

心の中で、呟く。

木綿　いい得て妙だ。

京が、最初に言った言葉。

木綿を、絹と見間違っている人たち。

「ああ…」

京の返事を聞きながら、絹は車に乗り込んだのだった。

「ねえねえ、歓迎観測会、いって言われた？」

車中。

絹の隣を、独り占めしている了に聞かれる。

「はい、みなさんのおかげです……」

にこり。

「やったー！ 夜も一緒だーっ」

はしゃぐ了。

「よかった」

安堵する将。

「……」

沈黙のままの京。

昨日、ようやくヘッドホンを外したボスに、一応聞いてみた。

「愚問だな」

やっぱり。

しかし、問題はその後だった。

「観測会か…演出として、流れ星が欲しいな」

ボスは、真面目に考え込んでいた。

いや、いいりませんから。

流れ星演出のために、どこかの星を壊しそうなボスを、さすがに絹は恐れたのだ。

くすつ。

だから、つい思い出し笑いをしてしまった。

「えっ、なにになに？　いまの思い出し笑いでしょ…！」

何思い出したの？

可愛い顔して、意外と鋭い了につっこまれる。

私のボスで、あなたたちを狙ってる男ですよ　なんて、言うわけにはいかない。

しかし、少しは彼らに言葉として聞かせたかった。

「昨日…観測会のことを聞いた時、保護者が喜んだのを思い出しただけです」

いつか、直に会うこともあるだろう。

その時に、いい印象を与えたかったのだ。

「保護者って…おとーさんとかじゃないの？」

やっぱり、鋭いちびっこだ。

「あ…それは…」

だが、絹の口から、言わなくてもいい。

言い淀むだけで、十分だ。

「了」

一言、しっかりした音が、末っ子を呼ぶ。

助手席からだ。

絹の事情を知る、ワイルドな騎士さま。

「人には事情があるんだ…詮索するな」

まあ、怖い。

了は、すっかり小さくなってしまった。

「いっ、いっめんね、絹ちゃん」



へこんでしまった、了の手を取る。

「大丈夫よ…気にしないで」

鞭の次は 飴でないと。

「あ、絹さん！」

学校に到着し、車を降りた彼女を、了が捕まえる。

すっかり、ご機嫌は直っていた。

「絹さん、お昼学食だよね？」

降りてくる兄たちに聞かれないうようにか、小声で囁かれる。

「そう…だけど」

情報の速い末っ子に、絹は少し驚いていた。

あなどれないな、と。

「中等部と高等部の校舎の間に、広場があるでしょ？ お昼休みにそこにきて。お弁当、一個余計に作ってもらったんだ」

近づく兄たちの気配に、了は猛烈な早口でまくしたて 約束だよ、と言って、ダッシュで逃げて行った。

まだ絹は、何の返事もしていないというのに。

しかも、お弁当を彼女の分まで、用意していると。

昨日から、こんなことを計画していたのか。

「なんか、了に変なこと言われてない？」

近づいてきた将が、走り去る弟の背中を、怪しげに見つめている。

「あいつの浅知恵なんて、可愛いもんだ…ほっとけ」

すたすたと、先に歩みを進める京。

「いえ、変なことは、何も」

京は行ってしまったので、必然的に将と並んで歩くことになる。

「ならいいけど…あいつ、時々後先考えないことするから」

お兄ちゃんと言う生きものは、苦勞するのか。

ぼやく将に、薄く微笑む。

兄弟の真ん中で、個性を出し損ねたのか、将は二人に比べるとインパクトが弱い。

このままだと、いいとこなしになるわよ。

心で、将に発破をかける。

ボスが一番気に入ってる彼には、もうちょっと頑張っ  
て欲しかったのだ。

「私には兄弟がないから、弟ができたみたいで楽しいです」

だから、少しサービス。

了は、恋愛対象ではないと、ほのめかすのだ。

「そ、そっか」

分かりやすく、安堵した表情を浮かべる将。

ここで、安堵してしまうのが 彼の甘さだ。

人の心なんて、あっという間に変わっていくというのに。

中等部と高等部の、校舎の真ん中。

昼休み、絹はそこを目指した。

実際、行ったことはなかったので、方角だけを頼りに歩く。

公園のような広場に出た。

噴水まではないが、植物が植えられ、気持ちのいい景色だ。

こんなところが、あったのね。

中等部と高等部の生徒が、ここで混じっている。

瑞々しい新緑の植え込みを見つめながら、絹は気持ちのいい風を吸った。

「絹さん!」

袋を下げて、末っ子が登場だ。

「ベンチ埋まっちゃうーこっち!」

空いたベンチに荷物を置きながら、彼女を呼ぶ。

どんな時間でも、テンションが高いな、と感心しながら、近づいて行った。

「はいつ、絹さんの分」

袋から、本当に彼女の分のお弁当が出てくる。

「ありがとう!」

男に弁当をもらうとは、変な感じた。

セオリーでいうなら、逆だろっに。

「えへへっ、嬉しいな」

自分の分と、ポットを出しながら、了はご機嫌だ。

「でも、何故お弁当を？」

絹は、唐突な行動の理由を聞く。

「昨日さー」

何を思い出したのか、了が唇を尖らせる。

「将兄いが、京兄いに絹さんの朝のお迎えを提案したんだよね…何で帰りだけなんだ、って」

あら、真ん中くんも、頑張ってたのか。

初めて聞かされる内部事情に、絹は隙間を埋めるように、脳内を補充していった。

「京兄いが帰り、将兄いが行きの提案したから、僕も何かしたいな、って」

了は、出遅れた自分に不満があるようだ。

兄たちに張り合いたい年ごろか。

「でも、私の分まで、お弁当を作ってもらうのは、悪いわ」

さすがに、絹の女としての立場がない。

「えー」

了は、泣きそうに顔をくしゃっとした。

自分の提案だけ、拒否されたと思ったようだ。

こういふ顔が、よく似合う子だと、絹は心で微笑む。

「だから明日からは、私もお弁当を作ってくるわ…だから、ここで一緒に食べましょ？」

ちよつと面倒臭いと思いつつも、これもボスのため。

絹は、喜ぶ了を見ながら、おいしくお弁当をいただいたのだった。

「何か、お礼をしないといけませんよね」

帰ってきた絹は、ボスに相談を持ちかけた。

朝夕の送迎に、今日はお弁当まで、ごちそうになってしまったのだ。

ずうずうしい女だと思われるとマイナスなので、何かお返しをしないといけないだろう。

「ふむ、お礼か…」

ボスも、次の一手になると思っているのか、真面目に考え込んだ。

「レーザー用の人造ダイヤなら、今日完成しましたが」

島村が、真面目な顔で、また変なものを持ち出す。

「ええい、チヨウの息子たちに、そんなまがいものをあげられるか  
！」

ボスは、本物のダイヤを持ち出しかねない勢いだ。

いえ、もう少し、学生らしいものを。

絹は、どこから突っ込んだらいいのか、分からなかった。

「何か仕込んで、チヨウにばれると厄介だしな」

ああ。

広井家は、電気屋の親玉なのだ。

ボスの製品は、見抜かれる可能性があるということか。

「あの兄弟なら、手作りのもので、お手軽に喜びそうじゃないですか？」

難しく考える二人に、島村はさらっと言う。

ふーむ。

手作りのお手軽、ね。

「それじゃ、ま…」

絹は、台所に向かうことにした。

「お手軽に、クッキーでも焼いてみますか」

しかし、彼女の知っている料理は、実用的なものだけで、菓子類には詳しくない。

「島村さん、レシピ出せます?」

絹は、自分用のパソコンを持っていなかった。

いまのところ、携帯電話もない。

一方通行とはいえ、自分の声はボスに届くからだ。

そのうち、広井ブラザーズにメアドや番号を聞かれるだろう。

その時に、ボスの判断を仰ごうと思った。

電話にも、いろいろ仕込みたいだろうし。

「クッキーのレシピ…」

島村は、少し慥然としているように見えた。

マッドサイエンティストの助手に頼むには、少しかわいそうだったかもしれない。



## 同罪

絹は、歩いて買い物に出る。

家では、お嬢様扱いされるわけもないし、家政婦がいるわけでもない。

明日からのお弁当の材料や、クッキーの足りない材料のためには、買い物だって行かなければならないのだ。

しかし、それは嫌いなことではない。

自由に外を歩ける幸せを噛み締めながら、絹は大通りに面したスーパーへと向かっていた。

そんな彼女の側に、車が止まる。

「高坂さんじゃないか」

オーマイガッ。

絹は、この瞬間の記憶を、抹消したかった。

この間、京にひねり上げられた男子生徒だったのだ。

「広井はいない、な…こんなところに、徒歩でどこへ？」

絹は歩き続けているのに、それに車まで合わせてくる。

しつこいな。

「買い物です、急いでますので失礼を」

「買い物？ 歩きで？」

大げさに驚いた様子だ。

あの学校に通う子女に、あるまじきと思っているのか。

「急いでるなら、乗せていくよ」

まだ、食い下がる。

絹は、くるりと振り返り、嫌味なまでの笑顔を浮かべた。

「いいえ…結構です。すぐそのスーパーですから」

この男の素性は知らないが、歩いてスーパーに行く女など、お嬢様には分類しないような気がした。

「スーパー？」

やはり、驚いている。

「アクティブなお嬢様だなあ」

うるさい。

無視してもいいのだが、これからの学園生活で、絡んでこられる

のも厄介だ。

「私は、あなたの思うようなお嬢様ではありませんから…もう、話しかけてこないでください」

ぴしゃり。

絹は、笑顔まで止めて はっきりと、この男の介入を拒絶する。

呆然としている彼を置き去りに、絹はスーパーへと入って行った。

ついてこない、わね。

後ろを振り返り、それを確認して、ようやく彼女はほっとしたのだった。

「おはようー絹さんっ!」

インターフォンのカメラいっぱい 了の顔。

今日は、ボスがリアルタイムで見ている。

声を殺して身悶える彼に、絹は朝から上機嫌だった。

録画機能は、すでにつけられたが、リアルタイムで見ると聞かなかったのだ。

島村が、ボスは徹夜明けだ、と言って通りすぎていく。

しかし、徹夜の疲れも了で癒されたようだ。

「おはようございます」

その影響で、いい笑顔で広井ブラザーズに对面できた。

「絹さん、今日…いい匂いする」

今日の彼女は、真ん中の席。

昨日のことを教訓にした将に、先に引っ張り込まれたのだ。

両手に花の彼女に、了が顔を近付けてくる。

「はい、了くん」

末っ子の鼻に、くすくす笑いながら、絹はラッピングされた小袋を出した。

「わぁ、クッキーだ！」

ちびっ子が紐を解くのは、マツハクラスだ。

「おいしいといいのだけど…」

将の方を向き直り、彼にも。

「あ、ありがとう」

将は、すぐに開ける様子はなかった。

しかし、緩む顔で袋を眺めている。

「京さんも…」

真ん中の席は、助手席に手を出しやすい。

絹は、クッキーの袋を二つ差し出した。

「えー京兄だけ、二つ？ ずーるーいー」

目ざとい了が、突っ込みを入れる。

将の視線も痛かった。

京は顎を向けて、探るように絹を見ている。

「京さんの分は、ひとつですよ」

二つの袋を受け取らせながら、彼女はにこりと微笑んだ。

「えーじゃあ、最後の一個は？」

計算が合わないと、了が食い下がってくる。

絹は、すでに開けられた了の星型のクッキーを一つ取ると、未っ子の不満そうな口に、一つ入れてあげた。

その顔を、目を奪われたように了が見ている。

瞳の中に映る、自分を見ながら。

目を細めて。

こう言った。

「最後の一個は…運転手さんの分です」

兄弟の誤解は　これで万事解決。

クッキープレゼントも無事終わり、絹と将は教室へと向かう。  
席につくと、早々に彼女に黒い影が落ちた。

「おはよう、高坂さん」

あー。

その声に、顔を上げるのもいやだった。

また、奴だ。

やはり、クラスメイトだったのか。

昨日、はっきりと拒否したのに、しつこすぎる。

ただ、唯一の救いは、隣に将がいることだ。

せめて、彼を巻き込めば、ボスも喜ぶだろう。

「おはよう…ございます」

絹は、ちらりと横の将を見た。

ヘルプの視線だ。

幸い、将はこっちを見ていたので、すぐに目が合う。

「高尾…絹さんと知り合いだったのか？」

事情を知らない彼は、怪訝に男に呼び掛ける。

「おまえとは話してない…高坂さんに用があるんだ」

高尾と呼ばれた男は、明らかに蔑視した声で、将の言葉を拒絶する。

ああ、いつぞ。

絹は思った。

いつぞ、ボス、ミサイルうちやっして下さい。

半ば、本気でそう思ったのだ。

「ねえ…高坂さんのお父さんって、高坂巧って言わない？」

絹の机に両手をついて、高尾は衝撃的なことを口にした。

父、と言うのは間違いだが、巧とは間違いなく　ボスの名だ。

絹は、忌々しくも顔を上げてしまった。

一体、どこから調べたのか。

学校の絹のファイルは、不明扱いなはずなのに。

「当たり前？　やрийい」

確信を、得てはいなかったのだろう。

いまの絹の顔で、理解した、というところだ。

「ここに通つといて、お嬢様じゃないとか言いだすからさー、驚いたよ」

絹が、拒否の言葉を吐けないでいるのをいいことに、ぺらぺらとしゃべり続ける。

昨日、あれから彼女の事を調べていたのか。

そんな高尾の顔が、すうつと絹に降りてくる。

声が、ひそめられる。

「高坂巧って、妾の子だったんでしょ……君も、そうなの？」



嘲るような言葉。

絹だけではなく　ボスも。

ドンガラガッシャーン！

絹が我に返った時、高尾は後方の机を巻き込むように吹っ飛んでいた。

彼女の真横に、突き出された拳。

「将くん！」

HR前の教室が、一瞬で騒然となる。

「絹さんに、謝れ！」

しかし、彼は興奮で周囲の状況など、見ていない。

たった今、自分が吹っ飛ばした男子生徒を、怒鳴りつけるのだ。

「先生を呼んで、急いで！」

委員長の、的確な指示が遠くに聞こえる。

だが。

絹も、実は　冷静ではなかった。

その男は、いま、ボスを嘲笑したのだ。

妾の子、と。

彼女は、ボスの経歴など知らない。

絹には必要のない知識だ。

そして、この男の口からも、出る必要のないもの。

「殴ったぞ！ こいつ、僕を殴った！」

腫れ上がり始めた頬を押さえながら、ヒステリックに彼は将を指差し、がなりたてる。

うるさい。

絹は、そんな様子にも怯まずに、高尾の方へと近づき、膝をついた。

目の高さが、同じになる。

一瞬、彼は動きを止めて。

「言うなら、私の悪口だけにしておきなさい……またボ……先生のこゝとを悪く言ったら、今度は、私が殴るわよ」

黒い波動と共に、絹は掠れるほど小さい声で、そう言った。

声を、細く細くより合わせると　針になる。

絹は、高尾の全身を言葉で刺し貫こうとしたのだ。

ひっ、と。

彼は震えた。

それを見届けた後、彼女は立ち上がると、将の方を振り返る。

素手で、顔を殴るなんて。

「保健室へ、行きましょう…将くん」

黒い波動を飲み込んで、絹は目を伏せながら、彼に手を伸ばした。

将の手に触れると、そこは既に真っ赤になっている。

骨が折れていないといいが。

「でも…ありがとう」

一緒に教室を出ながら、彼女は言った。

彼は、絹を守ってくれたのだろうか、その向こうにいるボスをも守ったのだから。

絹、将、高尾　三人仲良く、職員室への呼び出しだ。

将は右手に包帯を巻き、高尾は左頬に大きなガーゼを貼り付けられている。

影の薄い担任が、三人を眺めてぼやいた。

「ケンカ沙汰など、滅多にないのに」

厄介事を起こしてくれるなとばかりに、ため息をつかれる。

良家の子女の通う学校だ。

変なモメ方になると、面倒な親がしゃしゃり出てくるのだろう。

高尾の親なら、ウザそうだ。

「広井が、僕を殴ったんです」

僕は被害者ですと、高尾がまず主張する。

絹は、ちらりとも見ずに、それを聞いていた。

「はい、僕が殴りました…でも、それは、彼が絹さんを侮辱したからです」

まっすぐに担任を見ながら、将はそう言い切った。

気持ちありがたいが、この担任には、その男気は通用しそうにない。

「侮辱……?」

そして、絹に話が振られるのだ。

どう言っべきか。

絹は、言葉に迷っていた。

全部を言つと、ボスの名前を出さなければならぬ。

マイクで全て、家に伝わってしまうだろう。

その件を、蒸し返したくなかったのだ。

「家庭のことを……」

絹は、曖昧にそう言った。

「ふむ…しかし、たとえ侮辱があつたとしても、殴るのは感心しないな」

そう。

どうあつても倫理上、悪者は将になつてしまう。

絹だつて、あんな真似をするとは思つてなかつたのだ。

「広井くんは、親御さんに来てもらうからそのつもりで」

ハツと。

担任の言葉に、絹はハッと顔を上げた。

一筋の 光の道が見えたのだ。

彼女は、高尾の前にさっと回った。

いま、すべきなのは。

バチーーン！

絹は、彼の無傷な右の頬を張った。

その派手な音に、職員室の空気がシューーンと静まり返る。

彼女は、そのまま担任を振り返った。

「では、私も暴力を振りましたので…一緒に保護者を呼んでください」

呆然とする担任に、絹はにこりと微笑んだ。

自分にできる、ボスへの精一杯のお詫びだった。

## 指名手配扱い

「あわわ…わ…うおお」

帰り着いたら、ボスが居間を歩き回っていた。

天井を向いたり床を向いたり、また天井を向いたり。

絹は、声をかけられないまま、居間の入り口に立ち尽くした。

あのボスが、すっかり動揺していたのだ。

その事実には驚きもしたし、彼女がやらかしたことが、それほど大きかったということでもある。

「余計なことをしてくれたな」

近づいてきた島村が、やや不機嫌を匂わせながら、絹の前に立つ。  
う。

彼女は、判断を誤ったのだろうか。

ああすれば、ボスとチヨウウの再会が、自然になされるはず。

そう思ったのだが。

「おかげで、今日中にメドが立つはずだった、人体発電システムが流れたじゃないか」

しかし、島村の不満は、学校でのことではなかった。

彼女の言動により、ボスが動揺してしまい、研究が遅れたことだったのだ。

「すみませんボス…明日、ご足労願います」

島村は、アテにならないので、絹はボスに直接声をかけた。

彼は足を止めて、キツと強い眼差しで絹を見る。

彼女は、覚悟をして言葉を待った。

「あああああ…チヨウは私を覚えているだろうか！ ネクタイは何色がいいだろう！ スーツは！」

だが。

即座に崩れるように、オロオロと言葉を並べ立てる。

絹はほっとしながら、笑みをこぼした。

よかった、と。

ボスはもう、高尾の言葉など忘れきっている様子だったのだ。

「あの高尾って男」

ボスが浮かれながら、クローゼットに物色にいったのを見送った



後、島村がぼそりと口を開く。

「父親が、先生の同級生だ。そのツテで、高坂って名字だけで、いちかばちか聞いてきたんだろう」

引つ掛けに、簡単に乗るな。

ウカツな絹を、責めているように感じた。

「ボス方面から、話がくるとは思ってたから……気をつける」  
しかし。

あの男の父親なら 高校時代、さぞやボスとの相性は悪かった  
だろう。

息子に、あんなことをしゃべるくらいなのだから。

ということは。

チョウとも同級生、というわけだ。

もっと厳密に言えば 桜とも。

翌朝、車の中は、異様な雰囲気だった。

了はともかく、将と京の気配が険悪だ。

二人とも、ほぼだんまりで。

昨日の事件が、尾を引いているのだろうか。

問うことも出来ないまま、了とだけ話をしているうちに学校にっ  
いてしまう。

その意味は、昼休みに解かれることになった。

「もー、昨日は家で大変だったんだよー」

了との、広場でランチタイムの時だ。

やはり広井家は、将の暴力沙汰でもめたのか。

「絹さんが、クラスメイトに侮辱されたって聞いて、京兄いまで怒  
りだしてさー」

ん？

話の雲行きが、変だ。

絹の話になっている。

確かに、彼女が原因なのだが。

「あ、将兄いに、入学式の写真だしてもらって、僕も悪い奴の顔、  
覚えたからね」

ああ。

高尾は、ついに広井ブラザーズ全員を、敵に回したということか。

「写真見たら見たで、京兄いがまた怒ってさ…前にも絡んできたんだってね」

昼休みの、ベンチ事件のことだろう。

「パパ帰ってきて、話聞いて写真見たら、パパまでそいつに怒り出して…家中、大変」

かえって、僕が怒る隙間がなくなっちゃったよ。

原因の自分としては、不謹慎なのだが、それには笑ってしまった。

きっとチヨウも、高尾の父を思い出したに違いない。

「でも、将くんが叱られなかったみたいで、よかった」

チヨウの様子からすると、一安心だ。

「うん、ゲンコー発で済んだ」

無邪気な了の言葉に、絹は軽く笑う。

「でも、あの高尾っていう人には、気を付けてね。パパも、高校時代にその親に、しつこく絡まれてたみたいだから」

心配そうな了に頷く。

どうやら、上二人の兄弟は、高尾への敵意をむき出しにしていただけだと分かった。

それが険悪な気配を作っていたのだ。

納得した絹は、放課後の呼び出しに、心を飛ばそうとした。

だが、了がぶぶつといきなり吹き出したので、その意識は飛び散ってしまっ。

「そういえば、絹さん…あの男を職員室で張り倒して、自分の保護者も呼べてタンカきったんだってね」

うぶぶぶ。

想像して笑った。

将は、一体どんな大げさな説明をしたのかと、絹を苦笑させたのだった。

## 再会

いよいよ、放課後。

「ごめんね、絹さん巻き込んで」

将と共に、応接室に来るように言われたので、二人で向かう。

保護者を交えた説教が待っているだけなのだから、うきうきするわけにはいかない。

だが。

「気にしないで…」

絹は、嬉しさを表に出さないように、気をつけるのが大変だった。

今日、ついにチヨウと会うのだ　ボスが。

三人の息子から、遠回りに彼に近づこうとしてたボスに、その機会を作れたことが嬉しい。

あとは。

チヨウが、ボスを喜ばせてくれるかどうか。

それと、これを機に、二人の間に交流が復活すること。

絹が願っているのは、そういうところだ。

「失礼します」

応接室につくと、将が先に　それから、絹が入った。

中にいるのは、教師と。

ボス。

だけ。

あれ？

将の保護者が、まだ来ていない。

「こんにちは…」

眼鏡の男を見て、将が絹の保護者と判断したようで、頭を下げる。

軽い会釈を返しているボス。

彼の心中は、きっと複雑だろう。

本命のチヨウが、まだ来ていない。

しかし、そっくりな将はきてくれた。

喜んでいいのか、落ち込んでいいのか分からない状態だろう。

平静を装っているのが、いっそかわいそうに思える。

「あー…広井くんのお父上は……」

教師が、不在の人間について語ろうとした時。

「すみません！ 遅れました！」

ノックもなしに、ボタンと応接室のドアが開く。

翻る、背広の裾と ネクタイ。

絹は、その一瞬。

眩しさを覚えた。

「すみません、仕事が長引いて…」

猛烈に乱れた状態で飛び込んで来たと言っのに、彼は背広とネクタイを入り口で整え、両手で髪を押さえて、取り繕う素振りを見せた。

ああ。

絹は、異様に懐かしい気持ちを味わった。

もしも、将と20年後に再会したら、きっとこんな気持ちを味わうのだろう。

ボスの言う通り、彼は一番将と似ていたのだ。

彼から子供の輪郭を削り、穏やかな年齢のシワを刻めば、きっとこう。

しかし、あんな勢いで応接室のドアを開けるなんて、ヤンチャの血は抜けきってはいないようだ。

中から、皆に見られていることに気づいたのか、チョウはゴホンと咳払いをして。

だが。

その動きが 止まった。

将を見て、ではない。

絹を見て、だ。

そうよね。

その点だけは、彼女も覚悟はしていた。

亡くなった愛妻にそっくりに作られたのだから、驚いてもしょうがないだろう。

しかし、いまの絹の気持ちとしては、ボスを見て驚いて欲しかった。

苦しいジレンマだ。



「広井さん…どうぞ」

止まったままのチョウに、教師がソファを勧める。

「あ、はい…え…えー！ 巧！？ お前、巧か！？」

我に振り返ったチョウは、しかし、次に絹の保護者を見て大きく驚いたのだ。

父の驚愕ぶりに、息子も目をむいていた。

「久しぶりだな」

ボスが。

絹は、胸がじーンとしていた。

ボスが、チョウに話しかけたのだ。

彼こそ、いま泣きたいほど嬉しいだろう。

自分を認識し、驚いている事実。

しかし、チョウの言葉に嫌悪の色などはなかった。

「なんだ、お前か。久しぶりだな、元気してたか？ 全然連絡も寄越さないで…」

ざくざくと淀みなくボスに歩みより、強引に握手をし、肩を叩く。

仲のよかった旧友への動きだった。

そのまま、積もる話に突っ走ろうとする勢いを 教師の咳払いが止めた。

「えー…すみません、そちらの話は後で」

この瞬間、絹とボスの教師に対する気持ちは、同じだっただろう。

お前 邪魔。

「うちの息子どものお気に入りが、お前の娘とはなー」

ようやく終わった説教に、応接室を出るなり、チヨウはボスの横を歩きながら、話しかける。

将と絹は、少し先へ歩き出している。

彼女は、首筋のぞくぞくが止まらなかった。

確かにチヨウは、彼女の顔に驚いてはいたが、それよりもボスを懐かしむ様子を見せてくれたのだ。

「娘…というか」

ボスは、言葉を濁した。

表現しづらいのだろう。

「私：先生に拾われたんです」

だから、絹はくるっと振り返って、チヨウに言った。

将も聞いているが、どうでもよかった。

見ず知らずの娘を拾って育てている　優しい人。

そうチヨウの意識に、植え付けられればよかったのだ。

「絹さん」

将が慌てて、キョロキョロする。

誰かが聞いていないか、心配だったのか。

しかし、いまの彼女は上機嫌で、たとえそれを広められたとしても、痛くもかゆくもなかった。

どうせ広井ブラザーズとしか、親しくする気はないのだから。

「あ、そう…だったのか」

チヨウは、絹とボスの両方の顔を見比べながら、複雑な表情をした。

その複雑な顔のまま。

チヨウは、隣に耳打ちするように手で口に覆いを作った。

「まさか…顔が似てたから拾ったんじゃないよ、な…」

しかし、絹の耳には、しっかりと届いている。

彼の脳裏には、妻がちらついてしょうがないのだろう。

久しぶりに再会した旧友が、桜そっくりの養い子を連れてきているのだから、勘ぐってもしょうがない。

ボスは。

立ち尽くしたように 止まった。

ボス！

絹は、踵を返して彼に駆け寄っていた。

分かっている、こんな偶然はない。

桜そっくりの顔の女の子を、知らずに偶然拾うはずなどないのだ。

この場合は、人工的に作ったのだが。

ボスは、その不自然を否定できずに、止まってしまったのである。

「そうです…先生は、私がこの顔だったから拾ってくれたんです。でも、私は幸せだからいいんです」

絹は、よろけそうなボスを支え、チヨウにきっぱりと言ったのだ。  
った。

どんな虚像でも、演じきると決めたのだから

「あ、いや、お嬢さん…そんなつもりでは」

絹に聞かれていた事実と、それで旧友を傷つけたかもしれないこととで、チヨウは戸惑った顔をしている。

早く。

絹は思った。

早く、ボスを元気にして！

彼女ではなく、チヨウならそれが出来る。

言葉を失ったボスを、早く引つ張り上げて欲しかった。

「すまん、巧。お前も、桜を忘れないでくれたんだな…ありがとう」

だが。

やや、逆効果な言葉を吐く。

その名前を、ボスは聞きたくないだろうに。

「いや…いいんだ。葬式にも行けなくて、すまなかった」

しかし、ようやく自分を取り戻してきたのか、ボスが意思を感じる動きをした。

それから、支えようとする絹の身体を離す。

彼女は、それに素直に従った。

ボスが大丈夫というのなら、それでいいのだ。

「一体、二十年…音沙汰もなく、お前は何をしてたんだ」

ぼんぼん。

しっかりしろという風に、チヨウウに腕を叩かれる。

ボスは、その腕を見た後、彼を見た。

「ずっと…ずっと研究をしていた」

ふうと、息を吐き 彼は言う。

高坂巧の人生を、ややオブラートをかけた形で話すのだ。

ああ。

絹は、そっとボスから離れた。

そして、将の方へと向かう。

もう大丈夫そうだと。

これからきくと、懐かしい昔話が始まるのだ。

「絹さん……」

将の腕を取って、先を促す。

「部活に行きましょ……将くん」

二人きりで、どこかでゆっくり話しをしてくれるといい。

絹は、そう願っていた。

「あ、ああ……じゃあ、父さん……今日はありがとう」

「先生……ありがとう」

だから、お邪魔虫は退散だ。

チヨウの前には、この顔は 邪魔すぎる。

ぼ……。

今日、ボスは絹よりも遅く帰ってきた。

そのまま何もしゃべらず、居間のソファにひっくり返ると、魂が抜け落ちたように天井を見上げている。

今日一日の出来事を、まだ処理しきれずにいるようだった。

そんなボスの前に、島村がてきぱきと夕食を並べている。

しかし、手をつける様子もなく、長く長くぼんやりとしていた。

絹と違って、ボスが一体チヨウとどんな話をしてきたのか、他が覗き見ることは出来ない。

「先生…食事をしてください」

島村が、ついにしびれを切らして、言葉で言った。

一応、今日何があったのか、彼も理解はしているだろう。

しかし、その気持ちを理解したり、共感したりは出来ないのだ。

「あ、ああ…しかし、胸がいつぱいだ」

ようやく、少し地に足をつけたようだが、ボスは胸を押さえている。

「話…ゆっくり出来ましたか？」

邪魔をしないように離れていたが、ずっと絹はそれを気にしていた。



彼女の言葉に。

ボスの頬が、ゆっくりとバラ色に染まるではないか。

「話したというか、聞きだしたというか、話させられたというか…」

もじもじし始める彼は 40前で、しかも男だ。

だが、この一瞬だけは、まるでオトメのようだった。

絹の方が、よほどその感覚は欠落しているので、島村と同じく共感や同調は出来ない。

ただ。

いまのボスの表情を見る限り、とても幸せだったのは伝わってくる。

「そうですね…よかったですね」

だから、絹も嬉しい。

20年ぶりのコンタクトは、うまくいったのだ。

それに。

彼女のでしゃばった言葉を、ボスは注意しなかった。

フェイクは入っているが、核心に近い話まで、今日は彼らの前でしてしまっただというのに。

絹も、必死だったのだ。

反応を間違えれば、チヨウのボスへの態度が、変なものになってしまいそう。

大波を、無事に乗り越えられたことを、絹は喜んでいた。

「連絡先の交換は、しました？」

彼女の言葉に、ボスは慌てて胸ポケットから携帯電話を出して、中を確認しているようだ。

そして、ほおっと深い安堵のため息をついたのだった。

## 観測会

チヨウとの再会事件が落ち着いた頃 観測会がやってくる。

金曜日。

今日は、部活のメインが夜なので、放課後になるとすぐに帰宅して、準備に取り掛かった。

「よし、出来た」

時計を見ると、6時になろうとしている。

ちょうどいい時間だ。

観測会用の、夜食を作っていたのだ。

広井ブラザーズに差し入れするので、大掛かりに。

更に多めに作って、ボスと島村の夕食にもする。

6時半には迎えがくるので、絹は夜食を包み、身だしなみを整えた。

学校の活動の一環なので、制服のままだ。

私服で来ても咎められないと聞きはしたが、カメラの仕込んであるペンは、この制服のポケットが一番収まりがよかった。

「観測会…チヨウが、好きな星について、熱く語っていたなあ」

はっと気づくと、ボスが後ろにいた。

もうすぐ、迎えのインターフォンが鳴るのを予測して、待ち構えにきたのか。

「チヨウさんの好きな星は、なんだったんですか？」

話の種に、絹は聞いてみた。

彼女にとって、星座は楽しむものではなかったので、知識としてある程度だ。

「いまの時期ならぎりぎり、南に欠けた『おおかみ座』が、見えるかもしれないな…チヨウは、いつも初夏からそれを探していた」

またコアそうなのを。

聞いたこともない星座だ。

「じゃあ…ボスは？」

思い出にひたりかけた彼は、ふっと現実に戻ってきた目になった。

自分の好みを聞かれるとは、思っていなかったようだ。

「さそり座だな…アンタレスは、美しい」

さそり座と、おおかみ座は近いと　ボスは教えてくれた。

今夜、絹が探す星が、大体決まった。

ピンポーン。

「絹さん！ 準備できたー！？」

元気のいい、お迎えが来たようだ。

「では、行ってきます」

絹は夜食とカーディガンを持って、観測会へ出かけたのだった。

「観測場所まで一時間はかかるよ。絹さん、仮眠しとく？」

車が走り出すと、将が最初にそう切り出した。

星が、きれいに見られるところへ行くには、それくらいかかるのか。

「いえ、初めてですから、起きてます」

車中の出来事を、ボスも楽しみにしているだろうし、膝の上の夜食をひっくり返したら大変だ。

「観測会って言ったら、パパも来たがったんだよ…お仕事で、だめだったけど」

了の話の前半部で、さぞやボスは期待しただろう。

しかし、後半ではがっかりだ。

ボスの落胆を想像して、笑みが浮かびそうになった時。

「絹さんは、何の星が好き？」

あ。

いきなり振られた将の質問に、彼女は既視感を覚えた。

同じ質問を、でかける前にしたのだ　ボスに。

一瞬、頭の中を星空が巡る。

「そう…ね……アンタレス、かな」

好きな星など考えていなかった絹は、ついボスの星をパクった。

おおかみ座とか、知ったかぶりしても、ボロが出るだけだ。

「ああ、赤くきれいな奴か」

将は、有名なそれを思い描くように、車の天井を見上げる。

「サソリの心臓だな……」

ぼそり。

助手席の京が呟く。

「でも、絹さんがさそり座が好きなら、将兄イは逃げまわらなきやぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。」

了は、吹き出しそうになるのを、口をおさえて我慢している。

「ああ…確かに、将は逃げねえとな」

助手席は、鼻先で笑う。

「い、いや、た、ただの神話だろ！」

焦る将。

神話？

絹は、神話にはうとい。

彼女が、首をかしげていると。

「将兄いね、オリオン座が一番好きなんだよ…さそり座に刺し殺されちゃった星座」

了が、楽しくてしょうがないという風に、絹にチクる。

オリオンと言えば、冬の星座の代表だ。

なぜ、夏の星座のさそりと絡むのか。

「それ以来…オリオンは、さそりを恐れて、さそりが夜空にある時は、こそこそと隠れているのでした…っ」と

京は、物語の結末を読み上げるように、話を締める。

「兄貴！ 了！」

上と下にかかわれていることに気づいた将は、いい加減にしろよと制止するが 兄弟のニヤニヤは止まらないのだった。

「うわぁ」

丘の上。

絹は、車から降りて、まず夜空を見上げた。

ずしんと 自分にのしかかるような、星空だったのだ。

さすがに、観測会に選ばれる場所だけのことはある。

「すっごくいでしょー」

自分の手柄のように、了が笑った。

「いいから、さっさと下ろせよ、チビすけ」



そんな末っ子は、京に頭を小突かれて、慌ててトランクの方へと回っていく。

何が出てくるのだろうか。

見ていると。

「よっと」

そこから出てきて、組み立てられ始められたのは 天体望遠鏡  
だった。

あら、ほんかくてき。

絹は、彼らの準備のよさを、ただ見ているしか出来なかった。

しかも、3人ともマイ・天体望遠鏡持ちだ。

1つを3人で分け合うような、清貧さはない。

さすが、お金持ち 時々、忘れそうになるが。

「絹さんは、これ使って」

将は、組み立てた望遠鏡を彼女に差し出す。

「え…でもそれは、将くんのじゃ」

自分に差し出されるとは思わず、絹は戸惑った。

「ああ、大丈夫……それ、親父から借りてきた奴だから」

オレのはちゃんとある、と。

将は、車からもう一つ取り出して、また組み立て始めたのだ。

チヨウウの。

運転手の照らす懐中電灯だけでは、そんな年季物かどうかは分からない。

しかし、もっとはっきり見ているボスには、見覚えのあるものなのだろう。

カメラがよく映すように、絹は望遠鏡の前に立った。

「ありがとう……使ったことはないけど、大丈夫かな」

ボスも、きつと持っていたのだろう。

この望遠鏡と並んでいたのだ。

「大丈夫……僕が教えてあげる」

自分の分の準備ができた了が、絹の腕を取る。

「おい、了」

ひとつ余計に準備しなければならぬ将から、弟は彼女を連れ去

ってしまおうとするのだ。

「解説がいるなら…してやろうか？」

反対隣にいた京が、珍しく自分から話を振ってきた。

ふむ。

「ありがとうございます、京さん…じゃあ、ご迷惑でない範囲でお願いします」

久しぶりに、京とコミュニケーションを取るのもいいか。

右に京、左に了。

出遅れた将は、絹の少し後ろに陣取ることになった。

「オレが組み立てたのに…」

将が、不満そうに呟いたのが、最後の抵抗だった。

「初夏の星座は、最初に北斗七星を確認する」

あちこちから聞こえる部員の声に紛れながら、京が見つつけやすいヒシヤクの星座を指す。

「その一番最後の星から、右下に曲線を描くように大きな星が並んでいるだろ？」

暗がりゆつくりと、京の左手が絹の前で曲線を描く。

その線の途中にある、うしかい座とおとめ座の大きな星を教えられる。

「春の大曲線って言うんだよ」

了が口をはさむ。

視界に入りきれない、パノラマな星空に、絹は仕事を忘れないように気をつけるのが大変だった。

気づくと、引き込まれてしまうのだ。

チヨウの好きな、おおかみ座を習う。

別に、彼女から切り出したわけではない。

了が、「パパっておおかみ座が好きなんだよね…地味なのに」と、話を振ったのだ。

「親父は、ケンタウルス座に追われるんだな…親父といい将といい、狙われるのが好きな奴だ」

後ろを振り返りながら、京は一人ハブられた弟に声をかける。

「しるわい」

しかし、それは弟の神経をさかなでただけだったようだ。

すっかりフテ腐れている。

あとで、フォローしなければ。

「じゃあ、オレの好きな星座は…ケンタウルスにするかな」

ふと。

京が、いいことを思いついたというように、ふっとそれを漏らした。

「えー…パパを追いまわしたいの？」

了が、異議あり と、口をはさむ。

それに、京は笑って。

「さそりはオリオンを夜空で監視しているが、もしも、そのさそりが暴れたら…ケンタウルスが射殺することになってるんだぜ」

視線を。

絹は、頬に感じる。

京のものだ。

深い意図はない。

絹に好意があることを、ほんの少し揶揄してみせたのだ。

「暴れないように…気をつけなきゃ」

しかし、絹の心臓には、ボスの使命があるため　ドクンとそれが跳ねた。

射殺されないようにしなければ。

「夜食作ってきました、どうぞ」

観測中の大きなあたりは、他の部員の邪魔になるので、彼らは一度、離れた車に戻った。

「うわーおいしそ」

手も拭かずに、了がさっそく巻物に手を伸ばす。

絹は、ウェットティッシュを出して、彼に手渡した。

「おいしいー」

口に入れた後に手を拭くのは、手遅れじゃないだろうか。

しかし、了は無邪気に喜んでいる。

「将くんも、どうぞ」

今日は、すっかり腐らせてしまったので、機嫌を直してもらわな  
い。

「ありがとう」

助手席の京は、見つらいように首をひねっているので、絹は前に差し出した。

「どござ、と。」

「このう時は、バンがいいよねえ…おっきいバスみたいの」

パパに買ってもらおうか。

もぐもぐと食べながら、了はこともなげに言う。

「そうだな…いまのままじゃ、父さんが来なくなっても乗れないしな」

将が、ちらりと運転席を見る。

そこには、空気のように静かに、運転手が座っていた。

いざとなれば、父親を運転手にすればギリギリ乗れるか、とか考えているのかもしれない。

「そういえば…絹さんの保護者、親父と同級生で同じ天文部だったんだろ」

卵焼きを食べながら、将が話を振る。

ボスの話だ。

絹は、少し緊張した。

「えっ、そうなの？」

了が、初耳とばかりに口を挟むし、京も興味深そうに前から視線を投げる。

「そっだよね…？」

将と絹の、二人の秘密だったのだとばかりに、彼女に確認をしてくる。

あの、保護者呼び出し事件だ。

ボスが天文部だったのは、別途チヨウから聞いたのだろう。

「はい…そっです」

にこりと微笑みながら、答える。

将も、満足そうに笑みを浮かべた。

これで彼は、兄弟の中で優位に立った気分を味わっているに違いない。

絹のことを、より自分は知っているのだ、と。

「じゃあさ…その人も一緒に、観測会にくれればいいと思うよ…」この部、保護者の参加大歓迎だから」



ますます、バンがいると思わない？

しかし、了は。

ボスの存在さえ、広い車を欲しがる口実にしてしまったのだ。

「おつかれー」

「また、来週」

観測会はお開きとなり、片づけを終えた部員たちが、別れの挨拶を投げながら帰っていく。

一応、絹の歓迎観測会ということだったので、みんなの前で改めて挨拶はしなければならなかったが、それを除けば、ほぼ放置。

皆、仲良しと肩を並べて、好き好きに観測しているようだった。

たまに、部長が見回ってくるくらいだ。

観測会というのは、広井ブラザーズと親交を深めるには、いいイベントのようだった。

「おつかれさま…眠くない？」

車に乗り込んで、将が気遣ってくる。

「眠いー」

しかし、答えたのは絹ではなく 了だった。

彼はもう、目をこすり始めている。

「お前が眠いのは、いつものことだろ」

ゆっくり寝るなら、助手席は譲るぞ。

京がちびっこに話を振る。

「やだ…絹さんに膝を貸してもらおう」

ちゃっかりしているちびっ子に、絹はくすくすと笑った。

「どごぞ」

膝くらい貸してあげよう。

彼女は、自分の膝をぼんと叩いた。

夜食の空箱は、トランクに入れさせてもらっているのだから、そこは空いているのだ。

「わーい」

「おい、了」

兄の制止も聞かず、了は絹の膝に頭を置いた。

「じめんね、絹さん」

弟のわがままっぷりに、将が謝ってくる。

「いいの…」

よしよしと、了の頭に触れると　すうっ。

もう、彼は寝息を立てていた。

すうすう。

気持ちのいい寝息だ。

絹はしばらく、それを聞いていたが。

初めての観測会に、自分でも知らないうちに気を張っていたのだ  
ろっ。

気づけば、その寝息に引き込まれていた。

すう。

将の肩を借りるように、自分が眠ってしまったことを　絹は知  
らなかった。

## 万年筆

土曜の朝。

あれ。

絹は、違和感と共に目を覚ました。

暖かい毛布の感触。

見知った匂い。

ハッ。

がばつと、絹は飛び起きた。

そこは 二階にある自分の部屋で、自分のベッドだ。

いつもどおりの朝のように思えた。

が。

違った。

絹は、制服のまま、眠ってしまっていたのだ。

慌てて、昨夜の記憶をたどろうとしたが、帰りの車の途中で、ブチッと切れていた。

ああ。

ぐっすり寝入ってしまったのだ。

ということは、車から降ろすのに、京か将の手を借り、このベツドまで運ぶのに、ボスカ島村の手を煩わせたということになる。

あー。

絹は、起き出して着替えながら、自己嫌悪に足を突っ込まなければならなかった。

帰り着くまでのエネルギーを、計算して残せなかった自分に、だ。

ボスと島村に、顔を合わせづらい。

しかし、怒られるなら、さっさと怒られておいたほうがいい。

絹は、覚悟を決めて階下へ降りた。

「おはようございます」

居間に人影を感じて、挨拶を投げると　そこにはボスがいた。

「ああ、おはよう…昨日は…ふふ、ふふふふ…私も…チョウと観測会に…ふふ…ワゴン」

穏やかに朝の挨拶を返そうとしたようだが、ボスは昨日という単語を出した途端、いつも通りに壊れていった。

一瞬にして、会話の記憶が甦ったのだろう。

唇から怪しく漏れる単語が、それを物語っていた。

チヨウが参加する時には、ひとつの国を滅亡させる予定があったとしても、キャンセルして参加する気だろう。

「重かったぞ」

ボスは問題ないようだが、島村はそうはいかない。

居間に入ってきて、絹を見るなり一言。

ああ、彼の手を煩わせたのか、と。

「それと…お前を受け取って抱えた時、長男と次男に派手に睨まれたから、せいぜいそれを利用するといい」

しかし、島村は　　結局、ボスのよき子分なのだ。

思考の方向が、やはりボス寄りだった。

「おはよう…」

月曜の朝のお迎えに、絹はいつも通りの挨拶。

しかし、いつも通りでは済まない部分もあった。

「あの…金曜は、ご迷惑をかけたみたいで…ごめんなさい」

車が動き出して、絹は恥ずかしさで身体が縮んだように、そう言った。

実際は、島村の言うとおり、その事実とやらを有効に利用させてもらうだけなのだ。

「あ、ああ…気にしないで…全然平気だから」

将の言葉に、絹は困った笑顔で返した。

「え、金曜…何かあったの？」

絹よりも先に、意識がなくなった了は、知らないのだろう。

「私もね…寝ちゃったの、車で」

「えー、絹さんの寝顔…僕も見なかったなあ」

了の変化球の答えに、絹は苦笑してしまった。

「あ…そういえば」

将が。

何かを思い出したように　しかし、表情を少し曇らせて、絹を見る。

「そういえば…保護者の方以外に、若い男の人がいるみたいだった

けど」

家の人？

きた。

気になることを黙っていられないのか、将が聞いてきた。

多分、京も耳をそば立てていることだろうが。

「島村さん…のことかな」

絹は、あえて名前をつかった。

違う名字で、他人行儀に呼ぶことで、家人ではないことを匂わすのだ。

「先生の助手で…えっと、住み込みのお弟子さんみたいなものです」

言葉の直後、将は固まり　京は、ゆっくりと身体をひねって、後ろを見た。

「島村さんが、なにか？」

とりあえず、わざわざ後ろを向いた京に向かって、首をかしげて聞く。

彼は、絹の顔から何かを読み取るうとするかのように、じっと見た。



「お前……」

その唇が、低く開く。

「お前……そいつに、物みたいに運ばれてたぞ」

ぶふっ。

彼女は、本気で品なく吹き出しそうになった。

あわてて。手で口をふさぐ。

何て愉快なことをしてくれるのか、島村は。

お姫様だっこまでは言わないが、物と形容されるなんて。

これでは、大して利用もできないではないか。

「ふふ…島村さんらしい」

絹は、ようやく大きな波を飲み込んで、その余波だけでやわらかく笑ったのだった。

体育ともなれば、絹は将を見られなくなる。

彼女は、胸ポケットのペンカメラのスイッチを切って、更衣室へと入った。

男女別の体育になるので、隣のクラスと合同だ。

「今日は、50m走の記録をとるんですって」

誰かが聞きつけてきたのか、早い情報に、更衣室は騒然となった。

お嬢様方は、体育が苦手なのだ。

コウサカという名字なので、おそらく絹の走る順番は早めだろう。

どのくらいのスピードで走れば、おかしく思われないか サン  
プルとしては、少ないかもしれない。

まあ、適当でいいか。

彼女は、バレッタで髪を上げた。

そのうなじに。

絹は、ゆっくりと振り返る。

いま。

何か視線を感じたのだ。

しかし、振り返っても着替え途中の女生徒たちがいるだけで、誰も自分の方を見ているようには思えない。

気のせいかな。

絹は、再び着替えに戻った。

だが、また感じた。

今度は振り返らなかった。

視線に、何度も反応して振り返るのも変だと思ったからだ。

まあ、女生徒の視線なら、大したこともないだろう。

そう絹は、夕力をくくったのだ。

そして、事件は起きた。

50m走とやらを、そこそこで乗り切り、授業が終わって更衣室へと帰ってきた絹は。

そこで愕然としたのだ。

ペンが ない。

確かに、制服の胸ポケットに収めていた、それがなくなっているのだ。

慌てて服にまぎれていないか、全て確認する。

足元も。

しかし、ない。

「どうかした？」

制服に着替えなのまま立ち尽くす絹に、委員長が声をかけてきた。

一体何が。

いや、誰が　そして、何のために。

下手に電気関係に詳しい人間に見られると、バレてしまうかもしれない。

早く探さなければ。

だが、更衣室で感じたあの視線以外、何の手がかりもなかったのだ。

絹は、ペンと認識しているが、見た目はシックな様相の万年筆だ。

高そうに見える。

しかし、この学校の生徒が、そんな金銭感覚でペンを盗むとも思えない。

「万年筆が…なくなってるんです」

絹は大事にならないように、更衣室の隅で委員長に相談した。

「え…なくなってるって…ここ以外で落とした、とかは考えられない？」

委員長も、盗難とは信じられないのだろう。

もっともな意見を、言ってくれ。

しかし、絹は更衣室に入る直前に、スイッチを切ったのだ。

他で落とすなんて、ありえない。

「はい…最初の着替えの時まで、確かにありました」

慎重な口調で、絹は言った。

それを、信じてもらうしかない。

「既に着替えて出た人もいるから…まずは、拾得物として届けられていないか、事務に聞きましょう」

それでいい？

建設的な言葉だ。

着替えの際に床に落として、先に戻ってきた人が拾ったということも考えられる。

絹は、着替えを済ませて事務へと向かった。

委員長には、教室に戻って結果を報告することにして、一人で行くことにしたのだ。

後ろ暗いものだけに、何かトラブルが起きるかもしれない、と。

「万年筆…ですか…届けられていませんね」

やっぱり。

あの視線は、何だったのだろう。

絹は、事務室の廊下に立ったまま、ほんのちよつと前の出来事を、思い出そうとした。

女性から、特定の女性に送る視線。

好意、憧れ、好奇、嫌悪、憎悪、嫉妬。

良い感情にせよ、悪い感情にせよ、その相手の持ち物を取るというのは、ありえないことではなかった。

良い感情なら、「あの人の持っているものが欲しい」。

悪い感情なら、「あいつの困る顔を見てせいせいしたい」。

まあ。

多分 後者だろうな。

絹は考えた。

前者なら、物は大事に持ち続けられるだろう。

しかし、後者なら。

「……！」

アシがつく前に、どこかに捨てるはずだ！

はっと、絹は顔をあげて歩き出した。

もう休み時間が終わる。

既に、焼却炉の藻屑となっていないことを祈りながら、絹はそこへと急いだのだった。

## 汚れた英雄

「おい」

もう、授業が始まるチャイムが鳴ろうとしているのに、彼女に声をかける人間がいた。

それどころではないが、聞き覚えのある声に振り返ると　京がいるではないか。

数人の男子生徒と一緒にだった。

どうやら、移動教室の途中のようだ。

「あ…京さん……」

お金持ち学校で、血相を変えて急ぐ絹は、さぞや目立っただろう。

「どうした？」

怪訝に聞かれるが、悠長に相手ができる心境ではない。

「あ、あの…形見の万年筆がなくなって」

とりあえず、非常事態だと伝えればいい。

ただの万年筆では、リアリティに欠けると思ったのだ。

こんな時まで絹の脳は、律儀に演技を計算してくれる。



だが、心は相当焦っていた。

だから、早く私を焼却炉に行かせて、と。

「先いつてる…」

「おい、京」

京は。

持っている荷物をクラスメートに押し付ける。

それから、絹の腕を取るように、彼女が行こうとしていた方へ、歩き出したのだ。

「心当たりは？」

どうやら、探すのに付き合ってくれるようである。

「あ、あの…授業」

まさか、こういう展開になるとは思わず、絹は慌てた。

「いい…それより、心当たりはないのかって聞いてんだ」

いまの光景を、ボスに見せたかった。

まだ、そんなことを往生際悪く思いながら、絹は小さく答える。

「焼却炉に来てなければ…どこかで見つかるんじゃないかと思って」

彼女の言葉に、京は片方の眉を上げた。

「生徒は、勝手に焼却炉は使えない…清掃の管理人がいるはずだ。聞けば分かる」

絹の手首を握って、京は定めた目標に向かって歩き出す。

そんな二人を追い立てるように 始業のチャイムが鳴った。

「万年筆：いえ、ありませんね。それに、まだ今日のゴミは届けられていませんよ」

管理人の言葉に、絹は心からほっとした。

少なくとも、焼かれておしまい にはなっていないのだ。

となると。

絹は、苦い表情を浮かべた。

京に、それを言わなければならないのか、と。

「京さんは…授業に戻ってください。あとは何とか……」

彼女が抵抗しようとする、その額をピンと指で弾かれた。

「形見なんだろ？ とつとと探すぞ」

グダグダうるせえ。

京は、ざくざくと歩き出す。

あーあ。

覚悟を決めなければならぬようだ。

「じゃあ…」三箱を

言ったら、彼は少し不機嫌な顔で振り返る。

「お前…いじめられてんの？」

そう思われても、おかしくないだろう。

「分かりません…でも、心当たりがないから…」

曖昧に濁すしかなかった。

「また、高尾の野郎じゃねえのか？」

人前で、殴られたり叩かれたりした男の名前が出てくる。

だが、今回に限って言えば、濡れ衣だろう。

「女子更衣室で、なので…」

そんなところに高尾が入って、万が一見つかりでもしたら、汚名

どころの話ではない。

「しょうがねえ…更衣室の外のゴミ箱からだな」

ゴミは、放課後に清掃員が回収するという。

掃除そのものも、生徒はしないのだ。

だから、ゴミ箱の中にあるというのなら、この時間　きっと安全だと思われる。

それを祈って、絹はゴミ箱に手を突っ込んだ。

授業中であつたのが幸いだ。

少なくとも、こんな姿を他の生徒に、目撃されることはない。

面倒な教師に見つかる前に、万年筆を探し当てたかった。

あはは。

いくつものゴミ箱をひっくり返ししながら、彼女は自虐的に笑っていた。

手分けしているので、京はすぐそばにはいないのだ。

お金持ち学校で、こんな綺麗な顔をしておきながら、ゴミ箱を漁るなんて、と。

野良猫のような、みじめな気分だった。

「こら、君…授業中に、何をしている」

しま、った。

絹は、ゴミ箱から手を離し、ぱっと立ち上がる。

まだ、全部終わっていないというのに、教師に見つかってしまったのだ。

「す、すみません、大事なものをなくして」

汚れてしまった手を、絹は後ろへ隠した。

「いくら大事なものでも、ゴミ箱に手を突っ込むなど…しかも、授業をさぼって！」

ああ、だめだ。

聞く耳を持たない教師の前で、絹は絶望感を味わった。

「とにかく、職員室へ…」

そう、促されそうになった時。

「おい…これか？」

角を曲がった京が、現われるではないか。

手には 万年筆。

「あ…」

あ、あ、あ！

絹の、唇は大きく震えた。

それは間違いなく、絹の大事な万年筆だ。

「広井くん！ 君もか！」

二人の間の空気を読まず、教師は名指しで京に近づく。

「ほい」

しかし、教師など眼中にも入れずに、絹に万年筆を渡そうとするのだ。

彼の手や、シャツの袖口は汚れたまま。

京も、本当にゴミ箱を漁ってくれたのだ。

人一倍、プライドが高そうなのに。

「あ、ありがとう…ありがとう京さん」

絹の手も汚れていたが、しっかりとそれを握り締める。

ああ、よかった、と。

「分かってますよ、先生。説教でしょ？」

頭から湯気を出しそうな教師に、京が首をすくめる。

「手を洗ったら行きますんで、先に行つててください」

彼が、両手を開いて汚れっぷりを見せると、教師はうつと顔をしかめる。

「洗ったら、すぐに来なさい！」

逃げるように、彼は職員室へ向かった。

「さて」

それを見送った京が、じつと絹に視線を送る。

「あ、あの……」

もっと彼に、お礼を言おうと思つたら。

「手え洗つて……とつとと逃げるぞ」

彼は、まったく教師に従順ではない男だった。

「で……いままでスイッチが入れられなかった、と」

帰ってきた時のボスは、不機嫌に感じた。

「はい、ずっと広井京と一緒にしたので、何らかの故障が外に出た場合、ごまかせないと思いました」

これが、スイッチを入れられなかった理由。

「オレは、体育後にスイッチを忘れている…と踏んだんだがな」

島村が敬語を使わない時は、絹に向けたものだ。

随分、マヌケに思われているようである。

「確認しよう」

手を差し出され、絹は万年筆をボスへと渡した。

「しかし…」

じっと見つめるボス。

まだ汚れているのだろうか。

水は使えないので、絹がティッシュで綺麗に何度も拭いたのだが。

「しかし…これを探す京くんを…見たかったあ」

ヨヨヨヨ。

万年筆を握り締めながら、よろけるボス。



申し訳なく、絹は苦笑した。

「それに…一緒に授業をさぼったのだろっ…うっ、サボタージユな京くん」

ほんと、すみません。

見せてあげたかった絹も、心の中で合掌する。

「今後、同じことが起きた時の対処用に、何か仕込まないといけませんね」

島村が考え込み始めた。

「狭範囲発信機でもつけとけばいいだろう。絹に携帯を持たせて、そっちで受信させればすぐに見つけられるように…ああ、京くん」

一瞬だけ、さっとボスは科学者の顔に戻ったが、最後にはまた長男の名前を呼び出す。

「携帯を受信機に…それならカモフラージュも完璧ですね」

感心したように、島村は復唱する。

「仕入れてきて、さっそく改造します」

彼は、白衣を脱いで出かけていった。

「とじろっど…」

ボスが、ゆつくりを顔を上げる。

どちらかというと、科学者寄りの顔で。

「犯人の女が、また同じことをして、それを見つけたら」

どうするかね？

言葉に、絹は目を伏せた。

「泥棒なんて汚名はいやでしょうから、それを盾に二度と同じ事をしないように言うだけですな」

ふむ、とボスが考え込む。

「いっそもう少し発展させて、下僕にするってのはどうだろう」

彼は 真顔だ。

一体、どんな高校生活を送ってきたら、そんなことが言えるのか。

## 欲しいもの

「え…絹さん携帯持ってなかったの？」

朝のお迎えの時、三兄弟に驚かれた。

代表で、言葉に出して驚いたのは、了だったが。

「昨日買ってもらったばかりで、慣れなくて」

そう、だからさっき車に乗ろうとしていた絹は、島村に追い掛けられたのだ。

携帯を、忘れそうになったためである。

昨日、ほぼ徹夜で改造していたらしく、朝に絹は受け取ったばかり。

その矢先に、忘れて出てしまったので、追い掛けてきた島村の顔を見られなかった。

さぞや、お気に召さないんだろうな、と。

「携番とメアド、カモーン」

了が、カバンから携帯を取り出しながら、テンション高く言っ。

「えっと…どこかな」

受け取ったのは、本当に今朝だ。

島村も、改造した部分の使い方しか教えてくれなかったため、基本操作が分からない。

まだ、普通の無線機の方が、よほど使い方を仕込まれていた。

「あ、貸して貸してー」

了に取られる。

受信機の機能は、分かりづらいやり方で出すので見つからないだろうが、一心心配で見守る。

了は、猛烈な勢いで絹の携帯のボタンを、速押ししていた。

感心する速さだ。

「このメアド…絹さんが決めたの？」

その手が、ぴたりと止まる。

「うっん…全部島村さんに任せたから」

どんなアドレスにしているのか。

「“sakurasaku”…ママの名前が入ってる！」

ママに過敏に反応する末っ子は、嬉しそうに身体を上下に跳ねさせた。

「いや、母さんの名前と言つより…合格発表みたいだぞ」

弟の都合のいい解釈に、将が口を挟む。

「ま、早死にしたおふくろより、そつちの方が縁起がよさそつだな」

京の言葉は、了をさくつと刺した。

一瞬にして、末っ子の顔が険悪なものに変わったのだ。

「京兄って、デリカシーないよね!」

島村がきまぐれで決めたメアドのせいで、兄弟喧嘩に発展してしまつた。

携帯電話。

改造済みのそれは、実は二つの機能が追加搭載されていた。

一つは、当初の目的の受信機として。

もう一つの機能は、すぐに役に立つてくれた。

再び訪れた、体育の日だ。

絹は、この授業がくるのを、密かに楽しみにしていた。

一度うまくいったことで、犯人が味をしめている可能性があったのだ。

更衣室で視線を感じても、絹は、もう振り返らなかった。

さつさと着替えをすませて、そこを出る。

だが、集合先の体育館には行かず、廊下の途中で立ち止まった。

「気になる？」

そんな絹に、委員長が声をかけてきた。

前回の事件の時、万年筆が捨てられていたことを、一応報告していたのだ。

「ええ」

しらばっくれてもしょうがないので、絹は素直に認めた。

「少し付き合っわ」

ありがたいような、邪魔のような。

まあ、委員長がいるならいるで、臨機応変に対応しよう。

そう、絹が思った直後。

ビィィィーッ！

火災報知器の警報が、廊下をつんざいた。

周辺にいる生徒が、いつせいに動きを止める。

違う！

絹は、すぐに理解した。

火災報知器じゃない！

チーター並の素早さで、絹は 更衣室に走っていた。

バン！

ドアを開けると、耳が割れそうなほどの音量だ。

床に携帯が、落ちている。

音の原因は、それだ。

そして。

その側で戸惑いながら立つ、三人の女。

音、大きすぎ！

絹は、島村に文句を言いながら、携帯を拾い上げ、警報を切った。

画面を見ると、案の定電源が入っている。

「委員長。そこで、待っててください」

遅れて駆け込んできた委員長は、ちょうど出入口のところ。

逃げ場をなくすために、そこをふさいでおいてもらった方が、都合よかった。

「ちょっとお話ししたいんだけど…よろしいかしら？」

三人の女生徒を前に、絹はとびきりの微笑みを浮かべたのだった。

「この携帯ね…特定の手順を踏まずに電源を入れると…さっきみたいになるの」

絹は、ゆっくりと種明かしをした。

島村の提案だ。

彼女の持ち物に携帯があれば、万年筆なんかより、そっちに興味を示すだろう、と。

陰湿な読みは、ビンゴだった。

「し、知らないわよ！勝手に鳴り出したのよ！私たち、何も知らないわ！」

三人の中で、一番気の強そうな子が、わめきたてる。



「そう…じゃあ、これに指一本触れてない、と言っのね」

絹は念を押した。

「そ、そうよ！」

シラを切りとおして、ごまかす気が。

絹は、ため息をついた。

「前回、万年筆を紛失した時、警察で指紋を採取してもらってます。今回の携帯についたそれも合わせて、指紋照合してもらえば、すぐに分かることですよ」

絹は、静かに言葉を突き付ける。

「ばっ…何ばかなこと言ってるの！それが私たちじゃないって結果が出たら、絶対あなた訴えるわよ！」

ヒステリックに裏返る声。

だから絹は、毅然とその子を見る。

「ええ、それで結構です…では、警察に連絡しますのでお待ちを」

絹は、自分の携帯の番号に、指をかけた。

「わ、私は関係ないわ！松島さんが勝手に！」

「ちょ、ちょっと！私のせいにする気!?!」

あらま。

あっさり出た裏切りに、絹は苦笑した。

はったりなのに、可愛らしいこと。

前回の万年筆など、綺麗に拭き上げてしまっていて、指紋など取ってもいない。

後ろめたいことをすると、ボロが出やすいものだ。

「そう。じゃ、松島さん以外行ってもよろしくてよ」

絹は、携帯をしまった。

通報する気が、なくなったことを見せたのだ。

「ちょっと、私は宮野さんのためにやったのよ！」

「松島と呼ばれた生徒は、もう一人を見る。」

一番おとなしそうな子が、そこでガタガタ震えていた。

ふうん。

「私に、何か御用？」

絹は、静かに彼女に呼び掛けたのだった。

「あなたが、広井くとベタベタするからでしょ！」

おとなしい宮野さんとやらは答えず、代わりに松島さんがわめきたてる。

「宮野さんは、中等部の中から広井くんを見ているのに、何でぼつと出てきたあなたが、広井くと仲良くしてるのよ！」

予想の範疇の、話の展開だった。

嫉妬、というわけだ。

「宮野さん……」

うるさい女は放置して、絹はそっちに話しかけた。

「中等部の中から見てるって言ったわね……見てて、何か変わった？」

単純すぎる展開に、怒る気もそがれた絹は、穏やかな声を出せた。

「変わらない……そつでしょ？ 物語とは違うものね」

宮野は答えないので、勝手に話を続ける。

「見ているだけで満足なら……こんなことはしないわよね」

松島がお節介をしたのは事実だろうが、この子もそれを本気で止めなかったのだ。

「だからね……」

絹は、一回息をついだ。

「欲しいものは、自分で行動を起こして取りに行くことよ……でない  
と、絶対手に入らないわ」

と、私に説教する権利はないけど。

やや自虐的に、絹は笑った。

彼女は、いまの位置を、自分の力で手に入れたわけではないのだ。

しかし、絹には欲しいものもない。

しいていうなら、ボスがこの茶番に飽きても、絹を手駒として使  
つてくれること。

欲しいもののある彼女らの方が、よほど人間らしい。

いっそ、羨ましいくらいだ。

だから、余計なことと分かっていながら、言ってしまったのであ  
る。

「委員長、お待たせ……行きましょうか」

絹は携帯をロッカーに戻しながら、話を終えることにした。

一度見つかったから、彼女たちも、もう悪さはしまい。

「あ、松島さん…今度、私のものがなくなったら…分かってますわよね」

ただし、首謀者だけは釘を刺しておいたが。

さてさて　少しは化けるとおもしろいけど。

絹は、宮野をチラ見した後、委員長を促したのだった。

「高坂さんって…すごいわね」

更衣室事件直後の体育で、委員長に言われた。

二人一組で、柔軟体操をしている時だ。

「もっと、おとなしい人だと思ってたわ」

絹は、苦笑するしかない。

そっちの方が地に近いとは、言いづらいのだ。

「職員室で、高尾くんをひっぱたい話を聞いた時は、信じられなかったけど…この分じゃ本当ね」

更に、前の話も蒸し返されてきた。

侮れない情報網である。

絹は、言葉で答えられないまま。

黙っていることが、何よりの肯定になるだろうが。

「でも、取り澄ましてるよりは、ずっと面白いわよ」

絹の身体を、ぎゅっつと後ろから押しつぶす委員長。

絹の上半身が、ぺたりと足にくっつけられてしまっ強さだ。

「あ、やっぱり…」

委員長が、絹をつぶしたまま呟く。

「高坂さん、本当は運動神経いいでしょ。さっきのダッシュもすっかかったし、身体もやわらかい」

この間の50m、手を抜いたのね。

鋭い読みに、絹は遠い目をしたくなった。

「普通です…それに、運動部にも興味ないですから」

絹は、変な興味を抱かれなくなかった。

彼女の仕事は、決まっているのだ。

「えー残念…うちのテニス部に誘いたかったのに」

委員長が、笑いながら言う。

心なしか、言葉が崩れてきている。

ほんの少し、距離が縮まったような。

位置を入れ替え、今度は絹が委員長をつぶしてやる。

「待つて待つて…私、そんなに柔らかくないから…」

ぎゅう。

あわてる委員長をそのままに力を加えながら　絹は、くすくす  
笑っていた。

何だか、笑いたくなつたのだ。

カメラの回っていない、ささやかな絹の一瞬だった。

## 新入部員

「今日から入部する、宮野彩花さんだ」

部長の紹介で、ぺこりと頭を下げる恥ずかしそうな女生徒。

ほんとに、動いてきたよ。

絹は、呆れたような感心したような気持ちを拭えずに、彼女を見ていた。

連れがいないところが、宮野の勇気を伺わせる。

目が合うと、絹にむかって会釈してきた。

「あれ、絹さん…宮野さんと知り合い？ 同じクラスでもないのに隣にいた将が、不思議そうに聞いてくる。」

「体育の時に、ちょっと…将くんも、よく名前知ってるわね」

曖昧にごまかしながら、絹は逆に質問を返した。

「あ、体育は合同だもんね…オレは、中等部ん時に、一緒のクラスだったから。おとなしい子だから、話したことはあんまりないけど」

よかったわね、個別認識はされてるわよ。

絹は、心の中でそう呟いた。



しかし、将をまんまとかつさらわせるわけにもいかない。  
ボスがご立腹になられるからだ。

「今年は、途中入部が多いなあ…また歓迎観測会を開かないと」  
部長の言葉をすりぬけて、宮野が近づいてくる。

相変わらず絹は、将と了の両手に花の状態だった。

「あの、高坂さん…よろしくお願いします」

名指しで、改めてぺこりとされて、絹は苦笑する。

これは、宣戦布告ですか、と。

天然で素直そつなところが、手ごわい気がする。

「私も入部して日が浅いから、お役にたてないかも」

だから、絹は言葉を限定して受けとめた。

入部についての『よろしく』のみ、に。

「あ、いえ、そんな…広井くんもよろしく」

あわあわしながらも、次は頬を染めながら、将にあいさつだ。

「ああ、よろしく…星が好きなんて知らなかったよ、中等部から入

ればよかったのに」

「中等部の頃は、夜に出してもらえなくて……」

「そっかー女の子は、心配だろうしね」

「そっなの……」

話、はずんでるようじゃない。

絹は唇の端を、一瞬ひくつかせた。

今頃、さぞやボスはご立腹だろう。

「なんだ、あの小娘は！」

予想通り、帰った途端怒られた。

ボスは、ぶんぶん湯気を出している。

いや、あの兄弟に、いままで虫がついていなかったのが、逆に不思議だ。

「体育って……もしかして、アレが犯人？」

部室での情報で、島村が推理を述べる。

更衣室の件は、彼らは知らないのだ。

「まあ、そのへんです…実行犯じゃありませんけど」

絹が白状すると、ボスが目をひんむいた。

「だから、下僕にしろと言ったのだ。あの様子では、全然堪えていないではないか」

まったく、返す言葉もありません。

絹は、失態にため息をついた。

おまけに発破までかけたなんて、言えるはずがない。

まさか、ほんとに行動を起こすとは。

「将くんを、もってかれるんじゃないぞ！」

絹には、ボスから発破が飛ぶ。

ん？

「あ、ボス、質問」

彼の言葉で、ふと疑問が頭をよぎったのだ。

「なんだね、絹くん」

不機嫌な顔のまま、ボスは返す。

「もし、ですが…私が、三人の誰かに告白されたら…どうします？」

あの三人に女を近付けるな、と言つのなら、一応絹も女だ。

ボスにとって彼女は、単なる融通の効くカメラのようなものだろうが、向こうはそうは見えない。

釣り針の手応えの感じからは、いつかそつという日がきてもおかしくなかった。

「むむっ」

ボスは、即答できないようだ。

「いや、まてよ…だが、それでは…うおう…」

一人で頭を抱えて、葛藤しはじめる。

ボスの脳内も、大変なようだ。

「おまえ…」

代わりに、平坦な声の島村に呼ばれる。

「兄弟の中の、誰か狙ってるのか？」

言葉に、絹も頭を抱えた。

「うーん…どうだろう。誰が都合がいいか、とかは考えるかもだけ  
ど」

悩む彼女の言葉に、島村が珍しく―ふつと笑った。

ボスも複雑なのだ。

チヨウ含めて三兄弟を、できるなら女のいる世界から、隔離してしまいたいだろう。

しかし、彼はチヨウに嫌われることはイヤだから、そんなことはできない。

となると、この女性ひしめく世界で、彼らをなんとか魔の手から遠ざけなければならないのだ。

その役も、絹の存在が担っているはずだった。

しかし、いかんせん受け持ちの人数が多い。

うーむ、どうしたら一番ボスにいいのかなあ。

「……ん？」

「…さん？」

「絹！」

「はいっ…！」

いきなり呼び捨てにされ、絹は姿勢を正して返事をしてしまった。

あれ。

三兄弟が、自分を見ていた。

朝の車の中だ。

そう、学校へ登校中に、彼女はついつい考え込んでしまったのである。

しかし、いま自分を呼び捨てにしたのは。

「京兄い、絹さん呼び捨てにするなんて！」

了が、前の座席をぽかぽか殴る。

「お前も呼び捨てにすりゃいいだろ」

めんどくさそうに、京は前を向き直った。

「えっえー…ど、どうしよう…呼び捨てなんて……」

了が、絹を見ながら、赤くなってもじもじしている。

話の展開が読めない、な。

彼女は、頭の中で整理をした。

ぼーっと考え込んでいた絹を、我に返そうとして名前を呼んだら

しい。

京が呼び捨てたものだから、了が絡んで　　いまの有様、というわけか。

「あつ…き…き…」

了が、口をぱくぱくしている。

「絹さん…何か、心配事でも？　　深刻な顔してたけど」

弟の努力など無視で、将が親切に聞いてくる。

あー、あなたたちを、どう転がすか悩んでいるんですよー。

絹は、心の中で暗く呟いた。

このまま、後部座席にずぶずぶと沈んでしまいそうだ。

「いえ…だいじょ…」

彼女が、心の内の悩みをしまつて、スマイルを浮かべようとした時。

「きつ、絹…ちゃん…」

決死の覚悟のようなの声は　　墜落したのだった。

放課後になると、部活の時間だ。

絹は、憂鬱だった。

ボスに、とにかく宮野を近付けるなど、言われているのだ。

しかし、三兄弟もいるのだから、あからさまな事も言えない。

「あ、高坂さんも今から？」

将と教室を出た矢先　きましたよ。

絶対、出てくるのを待つてただろうタイミングで、宮野が現れたのだ。

しかも、最初にならず絹をダシに使う。

「あれ、宮野さんも今から？」

行き先は一緒なのだから、自然と一緒に歩くことになる。

うーん、ボス、すみません。

やる気になった乙女パワーのすごさに、絹は天井を見上げてしま  
う。

「でも、絹さんに女友達ができてよかったよ…クラスにまだ馴染め  
てないみたいで、心配してたんだ」

将のさわやかな言葉に、絹は肩を落とした。



宮野が狙っているのが自分とは、気付いてもない。

鈍いなあ。

しかし、言葉通りに思い込まれるのも厄介だ。

「あら、でも宮野さんは…私をそんなに好きじゃないわよね？」

刺が出ないように、絹は首を傾げながら言った。

「え？」

怪訝の将。

「そ、そんなことはありません！ 高坂さんは、綺麗で強くって、私の憧れです！」

あー。

絹は、自分が失敗したことを知った。

相手は、天然素直のお嬢さんだったのだ。

言葉通りに、絹に対しても、特別な眼差しを見出せた。

憧れの絹と、好きな将の二人セットに、宮野は素直に絡んできたわけだ。

「絹さん、もてもてだね」

自分がほめられたようにニコニコする、このさわやか次男坊をどうにかして。

絹は、頭が痛くなってきた。

「おい、絹」

しかし、彼女にも味方がいないわけではなかった。

部室で、プラネタリウムの準備が終わった頃、彼女は京に呼ばれたのだ。

「今日は、こっちで見ろ…あいつに両手に花なんぞ、100年早い」  
自分の隣を指定してくる。

お。

思わぬ展開だった。

「あ、じゃ、僕もそっちいくー」

耳ざとく聞き付けた了が、席取りにとんでくる。

おかげで絹は、珍しく京をはべらすことになった。

「え？」

同じ言葉で戸惑っているのは、将と宮野。

何故、二人して捨てられたような目をするのか。

しかし、既に絹の両側はふさがっているので、動かしようがない。

「じゃ、電気消すよ」

広井家のことに、気付いてもいない部長が、明かりを落とした。

これでもう、席は確定だ。

まあ。

宮野と絡むと、調子が狂うので助かる。

「おい…」

瞬間 絹は、びくっとなった。

将とは違う、もっと近すぎるささやきだったのだ。

「あのちまっとしてるのは、どうせ将狙いなんだろう？」

よっほど、兄の方が鋭いな。

囁きに、絹は感心した。

「さあ、よくわかりません」

しかし、すつとぼけるしかない。

認めると、それについてコメントしなければならなくなる。

京にそれを言うと、バランスが崩れそうな気がした。

まだボスは、その後はどうするか、決めていないのだから。

「ねえねえ、見てあの将兄いの顔」

反対側から、了がくすくす笑う。

絹は、残念ながらそこまで夜目が効かないので、了の言う表情は  
見えない。

宮野と、よろしくやっているのだろうか。

「まさに…茫然自失、だな」

京のニヤついた声の是非は、帰り着くまで分からなかった。

## 才能の無駄遣い

「はいつ、これが初期の呆然顔！そして、後半のブルー顔だ！」

二枚の写真パネルが、絹の前に取り出される。

ボスは、とても上機嫌だった。

あらら。

次男坊の、鬱そうな顔も珍しい。

ボス曰くの、ブルー顔に注目した。

少し悪っばくも見える。

好青年の意外な表情、という感じだ。

「ああつ、チヨウの翳りとそっくり…傑作だ」

パネルは、ボスに奪い取られた。

そのまま、パネルと熱い抱擁。

ふむ。

ああいう顔をしているうちは、宮野の存在も、そう心配しなくてもいいかもしれない。

その宮野絡みで。

「また来週、歓迎観測会ですよ……」

梅雨間近になってきている。

来週を逃せば、次はもう梅雨明けになるだろう。

まあ、その日に雨が降れば、必然的に順延なのだが。

「ああ、チヨウは来るだろうか」

うろろろ。

パネルを抱えたまま、ボスはうろろろしはじめた。

うーん。

あの親父が絡むと、途端にボスは乙女になってしまう。

「直接、電話して誘ったらどうですか？」

息子と旧友に呼ばれたら、チヨウだって時間をやりくりするかもしれないのに。

「電話！　そうか、電話か！」

ボスは、さっと懐から携帯を取り出す。

「いや……しかし……ああ」

だが、またしても携帯を握り締めて、乙女に転落するのだ。

「忙しいでしょうから、もう少し遅い時間がいいかもしれませんね」  
無駄に悩ませるのもかわいそうなので、絹は早めに助言した。

「そ、そうだな！ 大人らしい時間に電話しよう」

問題を先送りできて、ほっとした顔のボス。

本当に電話できるか あやしいなあ。

絹は苦笑しながら、そんな事を思っていた。

結局、ボスが電話できたのは、観測会がある週になってから、だった。

『ああ、ちょうど行くこうと思ってたところだ』

という答えが返ってきたらしく、しばらくボスは手がつけられない舞い上がりっぷりだったのだ。

気象庁から気象衛星までハッキングして、念入りに天候を調べたり、自分用の天体望遠鏡を作り始めたり。

やることが、とことん徹底している。

「高校の時の望遠鏡は、もうないんですか？」

絹の素朴な疑問に、ボスの表情が曇った。

「…粉々にして…捨てた」

あー。

悪いことを聞いたようだ。

ボスは恋に破れ、世界を滅ぼす勢いで、マッドサイエンティストになった人である。

やさぐれピーク時に、思い出の天体望遠鏡を、大事にできるはずがなかった。

「あ、そうそう」

絹は、さつと話題を変えた。

「息子情報では、チョウさんがみんな乗れるように、ワゴンを買ったらしいですよ」

金持ちの思い切りのよさが、今回はうれしい。

行き帰りにボスたちが、ゆっくり話す時間が作れるのだ。

「い、いつそんなことを!？」

その会話を聞いた覚えがないだろうボスが、慌てふためいている。



絹は、笑いながら自分の携帯を出した。

「はい、了くんからです」

見せたのは、メール画面。

絵文字たっぷりの、未っ子からの報告だ。

「し、島村！」

メールを見た直後、彼は助手を呼んでいた。

「はい」

すぐに現れる。

「絹にくるメールは、自動的に私のPCへも来るようにしてくれ」

「どうやら、絹だけがメールを見ているのが、気に入らなかつたらしい。」

「ついでに、通話の音声も拾えるようにします」

島村は有能なので、ボスの希望を軽く上回る変更策を口にしたのだった。

ボスの一念が通じたのか　無事、観測会は晴れ渡った。

学校から帰ってきた絹は、前回より多く夜食を作り始めた。

今回は、ボスとチヨウも一緒なのである。

という事は。

「島村さん…留守番ですね」

いちいち、彼が夕食を作らなくていいように、絹は一人分小分けしてラップをかけた。

「ああ、だからカメラは置いてつてもいいぞ」

島村の発言に、絹は動きを止めた。

ボスも一緒なら、確かに必要ないかもしれない、と。

絹は胸ポケットから、それを取り出そうとした。

「いや、つけておきなさい」

しかし、ボスは止める。

「私はチヨウの相手が忙しいから、ほかをゆっくり見ることとはできないだろう」

帰ってきて録画を見る、と切に言うのだ。

「はい」

絹は、素直にカメラをセットしたままにした。

「島村：人工衛星は撃ち落とせそうか？」

彼女の胸ポケットを確認した後、ボスは助手に向かってにこやかに言った　怖いことを。

「少し、位置的に難しそうですが、一基います…落としてみますか？」

「できれば、流星群にしたいからなあ」

「うーむ…期待にお応えしたいのですが、流れ星に見えるほど大きい人工衛星を複数、となると、難しいですね」

まっあってまっあって。

絹は、二人の会話に乾いた笑いを浮かべた。

相変わらず、物騒な相談をしている。

「明日、衛星落下がニュースになったら、みんな驚くんじやないですか？」

彼女は、やんわりと止めてみた。

本気でやると言われたら、絹に止めようはないのだが。

「まあ、一基、当たって落ちただけでは、美しくないな…また別の

機会にしよう」「

「申し訳ありません」

ボスと島村は、絹の制止に関係なく、中止することにしたようだった。

さすがに、専門的かつ科学的アンモラルには、絹の入る余地がない。

「あ、その代わり」

島村が、ボスに言った。

「その代わり…最高の夜空を、先生に贈りますよ」

彼は、意味深な言葉を吐いた。

## 保護者つき観測会

一勝　そして、一敗。

迎えに来たワゴンが到着した時の、絹の気持ちだ。

一勝は、勿論チヨウがいること。

運転手も別にきているので、ボスと語らう準備は万端だ。

一敗は。

「高坂さん…今日はよろしくお願いします」

既に、車に宮野が乗っていたこと。

ボスと二人、それに一瞬動きを止めてしまった。

「彼女、観測会は初めてだろ？　いろいろ聞かれたんで、説明するより一緒に連れていこうと思って」

車も広くなっただしね。

将は、二人の気持ちも知らないで、いいことをした気分になっている。

あのブルーな顔は、どこへ行ってしまったのか。

広すぎるワゴンも、これでは考え物だ。

「絹さん、こっちこっち」

了が、自分の隣の座席をぽんぽんと叩く。

「よろしく」

絹は、軽く宮野に会釈だけして、呼んだ了の隣へと乗り込んだ。

宮野がいる限り、変に將の方に割り込むのも、わざとらしく感じる。

「年寄りには、年寄り同士の方がいいだろ…巧はこっちこいよ」

チヨウが、前方の座席へボスを呼ぶ。

いまきつと、ボスの心の中では、天使が笛を吹きながら飛んでいくことだろう。

この一瞬だけは、彼は宮野の存在さえ忘れたはずだ。

「あ、ああ…」

足取りがフワフワしているようなので、絹は心配で見送ってしまった。

が、無事に席までたどりついて、ほっとする。

若者組の後部座席は、椅子を横向きに設置しており、広い空間になっっている。

電車の座席を彷彿とさせる。

運転席、助手席、その後ろにボスとチヨウが並ぶ2席。

後部には、3×3で座れそうだから、合計10人乗りか。

なかなか、奮発したようだ。

絹が了の隣に座ると、向かいの席に将と宮野がいる計算になる。

助手席にいた京が、ゆっくりと後ろへと回ってきた。

「よしと」

彼は、絹の反対側の隣へと収まる。

一瞬。

将と京の間で、火花でも散ったかと錯覚した。

「やっぱり京兄いも、一人じゃ寂しいんだ」

ぶぶぶ。

ちよっとズレてる了が笑ったが 笑っているのは、末っ子だけ  
だった。

「そんなに、保護者が気になんのか？」

あの丘へと向かう車の中、ぼそつと京に囁かれた。

無意識に、何度もボスの様子を伺っていたのを見られたのだ。

いや、仲良くしてるといいなあと、気になって。

とは、言えない。

「一緒に出かけるって…ほとんどないから」

向かいの二人には聞かれない音量で、京に囁き返した。

内容は、曖昧だ。

ボスと血がつながっていないことは知られているので、何となく  
雰囲気だけ理解してもらえばよかった。

「いろいろあるんだな」

理解しがたそうに、京は絹の言葉を受け流す。

あ。

なんか。

視線が痛い。

絹は、おそろおそろ顔を、京から自分の正面へ向けた。



将様だ。

内緒話がお気に召さないのか、ボスのいうところの「翳り」らしいものが、見え隠れし始めている。

自分が宮野相手にいい人になるうとして、それで勝手にブルー入られても困る。

絹は、ふつと視線をそらした。

「高坂さん…天体望遠鏡って持ってます？」

その微妙な雰囲気もものともせず、宮野が彼女に話しかけてくる。

「いいえ…持ってないわ」

絹は、事実だけを答えた。

いろいろ尾ひれをつけて話を膨らめます気には、ならなかったのだ。

だが。

「あるぞ」

どこからか、声が聞こえる。

絹は、はっと顔を前へ向けた。

進行方向　車の前方だ。

ボスが、身体を半分ひねってこっちを見ていた。

「お前の分も、作ってきている」

なんとあっさりと。

ボスは、そんなことを言うのだ。

あのチヨウに浮かれ騒いで時間がない中で、絹の分まで天体望遠鏡を作っていたというのだ。

「自作か…すごいな」

チヨウにほめられて、彼は鼻たかだかだ。

絹は ただただ、嬉しかった。

「天体望遠鏡って、自分でも作れるんだー。後で見せてね、絹さん」  
了が、興味深そうにニコニコしてくる。

「ええ」

絹も、ニコニコになっていた。

やはりボスは、手駒をちゃんと磨いてくれる人だったのだ。

ついでとは言え、絹のために天体望遠鏡を作ってくれたのである。

この世なんて滅んでしまえ　そんな気分になる日が来なければ、きつと彼女はそれを大事にするだろう。

「お父さんと仲、いいんですねー…いいなあ」

宮野が、純粹に羨ましそうだ。

お父さんじゃない、と言つと説明しなければならぬので面倒だ。

どうせ、チヨウおよび三兄弟は、知って（感じて）いるだろうから、絹はもう説明せずに流そうとした。

「おとう…あ、ううん…なんでもない」

反射的に何か言いかけた了が、はっと気づいたように口をつぐんだ。

そつえば。

彼女の件を、一番詳しく知らないのは了だろう。

京には、自分自身で匂わせ、チヨウと将には目の前でしゃべった。

ほんぽん。

絹は、言つのをやめてくれた了の頭を撫でる。

よく我慢した、と。

頼むから、天然宮野を揺り起こさないで欲しかった。

誰にでも天敵はいる。

絹にとってのそれは、どうも本当に人のいいお嬢様、ということになるか。

簡単に傷つけたり、摘み取ったりできそうなのが、厄介だ。

あまり分かりやすく絶望に突き落とすと、世をはかなんでしまいたい  
そう。

「絹…」

反対側から呼ばれ、彼女は視線をそっちに動かした。

10人乗りとは言え、そんなに余裕はないので、ちょっと京よりに顔を動かすだけで、すぐそこに彼の顔がある。

そのまま、京と話をしていたら。

「絹さんとお兄さんって…」

天然宮野が、ぼろりという。

「すごくお似合い…もしかして、付き合ってたりますか？」

絹は、眉間を押さえていた。

この アマ。

一生懸命、バランスを維持しようとしている絹に、大量の石を積み重ねる真似をしてくださったのだ。

その質問に、答えるかと？ 答えるかと！？

絹は、ついボスをチラ見してしまった。

「違いますよ」

絹は、できうる限り、穏やかで　そして、少し含みを持たせた言葉でいった。

この含みというのは、宮野に向けたものではない。

否定される、京に向けたものだ。

すっぱり否定すると、京を不機嫌にさせたり、寝た子を起こす可能性だってあった。

だから、微笑みながら、穏やかにかわすのである。

その後、やや苦笑ぎみに京を見ておく。

さあこの含みを、どうか存分に頭の中でいいように自己解釈してくれ、と。

「えー京兄いと付き合ったら、絹さん絶対いじめられるから、やめたほうがいいよー」

了に服を引つ張られ、彼女は苦笑を笑みへと変化させてしまつ。

末っ子だけに、そのいじめとやらの言葉が、具体的な響きに聞こえたのだ。

「どんな風にいじめられるの？」

絹が、了の方を向き直ると。

「えっとね！ デコピン！」

了の主張に、ますますおかしくなる。

「私も、一回されたわ」

万年筆を捜している時。

「えーあれ痛いでしょー」

了にしたのとは違うようで、全然痛くはなかったが。

「兄さん、絹さんにまでデコピンしたの？」

将が、やっとしゃべる隙間を見つけたように、絡んできた。

このまま呆然と、ブルー王子になっけていても、いいことは何もないと気づいたのか。

「ちゃんと、手え抜いたろ」

京も、どのことか覚えていたらしく、彼女を軽く睨む。

変なことを言つな、ということか。

「そうね…痛くなかったわ」

彼を援護すると、了がブーブー抗議を始める。

ずるいずるいと。

「お…この景色は」

チヨウが、後方の喧騒など知らぬ様子で、そう言った。

後ろの連中も、思わず窓の外を見る。

「懐かしいな、巧…もうすぐあの丘だ」

隣席の、ボスに目を細めながら、彼は語りかける。

「ああ…このまま坂を上つたら…すぐそこだ」

ボスは、自分の言葉をかみ締めていた。

あの高校時代と、そして今の気持ちがひしめいているのだろうか。

絹は、じっとボスを見てしまった。

「レジャーシート、大きいのを持ってきました」

気の利く宮野のシートを、観測場所に大きく広げる。

本当に大きい。

この上で、宴会ができそうだ。

天体望遠鏡の準備をしている男たちが来るまで、宮野と二人でシートシートの準備をしていた。

「高坂さんって…ミステリアスですね」

また、彼女が変なことを言い出す。

思ったことを、素直にいちいち口に出さなくてもいいのに。

「普通ですよ」

シートが飛ばないように、隅に石を置きながら、絹は取り合わなかった。

「えっ…全然違いますよ、何だか謎めいてる…懂れます」

だれかっ！ この子、だまらせてー！！

絹は、シートにがっくりと膝をついた。



「あ、絹さん…望遠鏡、預かってきた」

その空気を、切り裂いてくれたのは 将だった。

暗いのでよく分からないが、えらく小型のようだ。

筒の部分が、とても短い。

「後で、オレにもちよつと見せて」

ぼそぼそっ。

京の真似なのだろうか。

彼は、とても近くで絹に耳打ちしてきた。

「わかったわ」

同じように、秘密の音量で返す。

ささやかな内緒話で、彼が喜ぶなら安いものだ。

「はい、宮野さんの望遠鏡…親父のだけど」

次に、将は前回絹の使った望遠鏡を、彼女に持ってきた。

ああ。

持っていなかったのか。

絹への質問は、ボスの製作発言でうやむやになってしまったのだ。  
あれ。

「じゃあ、お…お父さんの望遠鏡は？」

いつも、心でチヨウと呼んでいるクセのせいで、そう言ってしまう  
いそいで焦った。

「ああ、君の保護者が、うちの親父にも見せよつと、もう一台作っ  
てきたらしい」

さすが！

さすがボス、ぬかりはない。

絹は、心の中でガッツポーズをしていた。

これだけ小型なら、3つもバッグに入るはずだ。

ボスの望遠鏡の性能に、驚くがいい！。

まだどれだけの性能か、見てもいないのに、絹は自分の手柄のよ  
うに威張っていた。

「これはすごいな…金星がまるで触れそうだ」

チヨウの感嘆の声に、絹はにこにこしてしまった。

もっと驚いて。

つきつきと絹も自分の望遠鏡を覗き込む。

しかし。

操作が分からない。

こだわりのボスが、いろいろ仕込んでいるようで、絹は戸惑っていた。

すると、手元がぼつと明るくなった。

見ると、宮野がペンライトを差し出していた。

「よかったら、使ってください」

シートにペンライトにと、気配りのお嬢さまだ。

「ありがとう」

この分だと、夜食も出てくるな。

絹は、バッテリーングを予感した。

「ちょっと貸せ」

ペンライトで、手元のスイッチやつまみをよく見ようとするより

先に、望遠鏡は京に取られた。

機械に詳しいのか、彼は勝手にどんどんいじっていく。

「うお…」

京にしては珍しく、変な声をあげた。

「ちょっと、見てみる」

ペンライトを消し、促されるままに、絹はのぞきこんだ。

赤茶けたものが見える。

と、言うか、それしか見えない。

レンズいっぱい赤茶けているだけ。

「いくぞ、よく見てろよ」

覗いたままの彼女の横で、京が手を動かすと、カメラが引いていくように、赤茶けたものがだんだん球体であることが分かってきた。

「これ、なに？」

絹は聞いてみた。

「火星だ…」

京のため息が、大きくかんじられる。

「この望遠鏡は、展望台クラスだぞ…いや、あの巨大望遠鏡よりすごいかな」

京の感想に、絹は顔を上げた。

いま、ボスが具体的に称賛されているのだ。

「それを、こんなに小さく作るなんて…おまえの保護者…何者？」

ゲイです。

ぱつと頭に浮かんだ最初の言葉を、絹はさつと消した。

「先生は…科学者よ」

頭に『マッド』がつくけどね。

絹は、浮かんだ言葉に、笑いをこらえるので大変だった。

## 原始の空

「見せて見せてー」

了が二人をかき分けるように、望遠鏡を覗き込んでくる。

ボス、がんばったんだなあ。

「すごー…うわあ」

奇声をあげてはしゃぐ了を見下ろしながら、絹はそんなことを思っていた。

やってることは、時々すちゃらかだが、本当にすごい科学者だ。

それを、世界のために役立てようとは、まったく思っていないし、お金を稼ぐ道具にしようとも思っていない。

もし万が一、チョウがボスの愛にこたえていたら、いまここにいないのは、ただのゲイのおっさんだったかもしれない。

複雑だが、彼がノンケだったことに、感謝すべきだろう。

「これ…何で商品化しねえの？」

ボスの方を見ていた絹に、京が不思議そうに言う。

売れると、思ったのだろうか。

「僕もこれ欲しいー」

了が、足をぱたぱたさせている。

「先生は、商人じゃなくて科学者だから」

絹が苦笑すると。

「多分これ…新特許の塊だぞ」

一般以外に、研究用、軍用と引つ張りだこになるクラスの、な。

京の言葉には、危険な香りがした。

もともと、ボスはもっと危険な思想だ。

彼が将と出会わなければ、今頃地球はなかったかもしれないのだから。

人工衛星撃ち落とす技術とか、入ってるんだろっちなあ。

絹は、望遠鏡を見つめた。

そつえば。

絹は、ふと島村のことを思い出した。

出かける前に、彼が何か気になることを言ったのだ。

撃ち落としに断念した後。

「あっ！」

声をあげたのは、了だった。

夜空に顔を向けたのは、将と京。

下界を見たのは 絹。

いま、一瞬にして、闇の濃度が変わったのだ。

暗いは暗かったのだが、ずっしりと重い、ただの闇になる。

下界を見た絹は、それに気付いた。

町の明かりが 全て消えていた。

大停電が起きたのだ。

大停電が起きた じゃなくて、起こしたのね。

絹は、笑うしかなかった。

やることの発想が、やはり一般人離れしている。

ボスに綺麗な夜空を見せるため、多数の家庭を暗闇に陥れたのだ。

「絹さん、空みて空！」



了に、袖を引つ張られた。

「……！」

声にならないとは、まさにこのことだった。

星が、落ちてきそうだ。

これまでだって、ここから見る星空は綺麗だと思っていたが、そんな考えは吹っ飛んだ。

一面の星が、ギラギラと刃物のように輝く。

美しいというより、怖いほど。

きつと。

古代の夜空は、こつだったのだ。

空を見上げていた絹は、その圧迫感に耐えきれず、後ろによろけた。

ぱたり。

シートに、そのまま仰向けになる。

視界に入りきれない星。

「絹、チビすけに踏まれるぞ」

暗くても分かるらしい。

寝転がった絹を、京が目ざとく見つける。

「ふ、踏まないよ。それに、チビじゃないや！」

了の反論をBGMに、彼女は空に目を奪われたままだった。

「んー…星に踏まれた気分」

絹は、くすくすと笑う。

このまま、踏み潰されても本望かもしれない。

「…ありがとね」

絹は、小さな小さな声で、囁いた。

「ん？ 絹さん、何が言った？」

了の耳に、音の破片が引っ掛かったようだ。

「ひとりじゃー」

そう。

家にいる一人に聞こえればいい、独り言だった。

大停電が復旧したのは、それから30分後。

それまで、みなこの滅多にない星空を、存分に味わったのだ。

「僕もっ、おなかいっぱい」

下界に戻ったあかりを見ながら、了がおなかをなでている。

「それを言うなら、胸がいっぱいだよ」

将のつつこみを聞きながら、絹は思い出したことがあった。

「あ、お夜食、作ってきたんです…そろそろいかがですか？」

しかし。

思い出したのは、宮野も同じだったようだ。

そうだよ、気配り姫がいたよ。

絹は、がっくりした。

「お前も、作ってきてんだろ？」

京に助け船を出されて、気力を少し取り戻す。

「そうね」

遠慮したってしょうがない。

絹は、宮野に使わなかったペンライトを返した後、立ち上がった。

「みんなで、車で食べましょうか」

どうにもここは暗くて、絹はうまく動けない。

夜目の効く、広井兄弟が羨ましいほどだ。

変な表情をすると、見咎められる可能性もあるので、逆に気をつけなければならぬだろうが。

自分の脱いだ靴の傍で、絹はあわあわしてしまった。

暗がりでは靴をはくのが、こんなに大変だとは思わなかったのだ。

座ってはけばよかったものの、つい目算で足を靴に入れようとして。

「あ……」

よろっ。

「絹さんっ!」

がっし。

近くにいた将が、彼女の身体をとっさに支えてくれたおかげで、ひっくり返るなんて醜態をさらさずにすんだ。

「あ、ありがとう」

どうにもやっぱり、お嬢様稼業が付け焼刃で、ボロがちらほら出てしまう。

宮野なら、きっとこんなことは

「きゃっ」

「あわわっ、危ない！」

暗がり、宮野と了の声が交錯する。

ドッスン！

何か 誰か倒れたようだった。

前言撤回。

本家のお嬢様も、しっかり転ぶようだった。

「ごめんね、宮野さん…上手に支えられなくて」

車に戻った了は、とても不満そうな顔をしていた。

将のように、上手に彼女のよろけを、助けたかったのだろう。

「う、ううん…大丈夫、気にしないで」

持ってきた夜食を広げながら、宮野は恥ずかしそうに微笑んでい  
る。

自分も、ハタから見たらあんな風なのだろうか。

我ながら、よくやるなあ。

まとった猫の大きさに、絹はにっこり微笑んでみた。

猫の微笑みだ。

猫は、とても元気そうだった。

さて。

絹も、持ってきた夜食を取り出す。

まずは、と。

前部座席の、チョウとボスへの差し入れだ。

一緒にするより、二人分を別にしておけば、邪魔しないで済む気がしたのである。

「はい、どうぞ」

絹は、年長者二人に、夜食とお茶を振舞った。

「おお、おいしそうだ…私たちの分まで、ありがとう」

チヨウがにこやかに、夜食を受け取る。

気を利かせて、大きな折り詰めひとつだ。

二人で箸でつつきあえ、というサインである。

だが。

「うん、うまい」

チヨウは、絹の予想の上をいった。

箸には目もくれず、手づかみで巻き寿司をつかんでかぶりついたので。

「すまないな」

そんなチヨウから、目を一瞬も離すことなく、ボスが声だけで彼女をねぎらった。

「いえ……では」

絹は、これ以上邪魔しないように、後方の席へと戻る。

若者たちには、既に宮野の夜食が振舞われていた。

出遅れたのはしょうがない。

ボスたちの給仕の方が、最優先だったのだから。

「絹さんのも、見せて見せて」

エビフライを片手に、了がせかす。

「はいはい」

絹は、持参した折り詰めを開けた。

「僕、絹さんのお寿司好きー」

こっちの末っ子も 手づかみだった。

ウェットティッシュ…ああもついいか。

絹は、苦笑しながらその光景を見守ったのだった。

「ただいまー」

いろいろあったが、楽しい観測会だった。

今日はボスも一緒だったので、寝こけることなく、絹は無事帰宅したのだ。

「おかえりなさい、先生」

島村が、玄関まで出迎える。



「……」

しかし、その先生は ふわふわした足取りのまま、荷物を玄関に置いて自室へと去って行ってしまった。

いま口を開くと、チヨウの記憶がこぼれ落ちてしまつとも、思っているに違いない。

しょうがなく、絹は望遠鏡の入っているバッグを持ち上げようとした。

「……」

こつちも無言の男が、そのバッグを絹から奪つ。

「商品化なんて、とんでもないな」

島村は、ぼそりと言った。

ああ。

丘の上で、感心した京の言葉に、ひっかかっているのか。

「ボスをほめてるのよ」

彼の家は、電気屋だ。

民間の技術屋なのだから、「売れる・売れない」の判断は重要だろつ。

「当たり前だ：この望遠鏡の存在が明らかになったら、NASAだろつが自衛隊だろつが、まとめて飛んでくる」

先生が発明した、特殊レンズ欲しさに、な。

島村も、科学者だ。

マッド・サイエンティストと、理解して助手をやっている男だ。

彼もまた、研究は商売とイコールではないのである。

「でも、ボス：1個、チヨウさんにあげたわよ」

絹のマイクは拾っていないが、遠くの二人のやり取りを見る限り、チヨウ用の望遠鏡は、そのまま彼が持って帰ったはずだ。

島村は、即座にバッグを開け、望遠鏡の数を確認した。

そして 敗北した顔で、再びそれを閉じたのだ。

「分解して、調べられないといいが」

ボスと違って、島村がチヨウを信用していないのが、その言葉で分かった。

しかし、いくらすごい天体望遠鏡だからと言って、旧友にもらったそれを、チヨウが分解して利益に役立てようとは思わないだろつ。

「そんなに、心配しなくてもいいんじゃない？」

「先生が、うっかり変な組織に組み込まれるのが、いやなだけだ」  
絹の言葉に、即座に返される、島村の気持ち。

そうね、うっかり連れ去られたら大変ね。

心配しすぎだとは思ったが、その一点については、彼と同じ  
気持ちだった。

## 雨

「なあ、絹」

週明けの朝。

車の中で、京が呼び掛けてきた。

何事だろう。

珍しい事態に、絹は首を傾げる。

「おまえの保護者：紹介しろ」

しかし、内容はボスに関することだった。

どうやら、あの天体望遠鏡から、興味を抱いたようである。

絹は、つつい胸の万年筆を見下ろしてしまった。

いま、ボスはどういう反応をしているだろうか、と。

「突然どうしたの？」

絹は、少し慎重になった。

京が興味があるのは、ボスの持つ技術だ。

だが、将来技術屋のトップに立つはずの彼と、マッドサイエンテ

イストが相容れる気がしなかった。

「いや、一度研究風景が見てみたくて、な」

父親のツテを使わないところが、京らしい。

「京兄いね、昨日パパがもらった望遠鏡を分解しようとして、すっごい怒られてたんだよ」

ぷつと笑いながら言っつ了の言葉に、絹は笑えなかった。

チヨウウがやらなくても、京がいたのだ。

今頃、島村がこめかみに交差点を浮かべていることだろう。

「気になったんだよ、どんなレンズ仕込んでるか」

京に、悪びれる様子はない。

「それでパパ、望遠鏡を知らないところに隠したんだよ」

今頃、ボスが喜んでるのは置いておくとして。

「京さん、ごめんなさい…紹介できないわ」

絹は、複雑な気持ちのまま、彼の申し出を取り下げた。

「何故？」

おなかの底から、不満そうな声を出す。

島村の心配が、彼の介入をきっかけに、現実味を帯びそうだったのだ。

「先生の、能力だけが目当てなら……私がいやなの」

ボス、怒ってるだろうなあ。

絹は、万年筆を見ないようにしながら、複雑な気持ちを噛みしめたのだ。

「兄貴ね、本当は工業高校に行きたがってたんだ」

休み時間、将がそう教えてくれた。

「父さんの会社の仕事に、一番興味持ってるのも、兄貴さ」

将は、ちらりと窓の外を見る。

しとしとと、雨が降っていた。

だから、京はボスの能力に興味があるのだ。

困ったことだが、その情熱は認められる。

自然に社長の椅子が、転がり込んでくると、あぐらをかいているボンクラ跡取りよりは、百万倍マシだった。

「将くんは、なりたいものないの？」

一方、将は次男坊。

親の会社なら、いいポストにはつけるだろう。

しかし、彼はそれを望んでいるのか。

「パイロット……に、なりたかったのは、子供の頃、だな。いまは、どうなんだろう。親父の会社の、おもちゃ部門がおもしろそうかな」

曖昧な思考を拾い集め、将は散漫に言葉にした。

「電気会社って、おもちゃも作ってるんだ」

絹は、ふふつと笑った。

「うん、ふつうのおもちゃ会社に動力部だけ納品するのもあるし、うちが独自で開発してるのもあるよ。ゲームとかは、了の方が詳しいけどね」

三人三様。

それぞれ、得意分野が違うようだ。

「絹さんは、将来なにかなりたいもの、あるの？」

雨音が微かに聞こえる中、将は笑みを浮かべながら聞いてくる。

ずっと、胸にしけた空気が滑り込んできた。

キモチワルイ。

「まだ…何も考えてないわ」

何の疑いもなく、笑顔で未来の話するなんて。

アア、キモチワルイ。

- - - mail - - -

雨のバカー (<|>)

絹さんと一緒に、お弁当食べられないーっ

(T|T) /

- - - - -

了からの泣きメールを見ながら、絹はお昼をどこで食べるか、考えなければならなかった。

これから、本格的な梅雨だ。

広場での食事も、難しくなるだろう。

お弁当を、机の上に出しながら、一人で食べるかと考えかけた時。

「あれ、絹さん、今日は一人？ 教室で食べるの？」



将が、目ざとく聞いてくる。

「ええ、雨だし」

絹は、残念な目で外を見た。

「へえ、いつも外で食べてたんだ」

将が、すつとぼけたことを言う。

ん？

絹は、その言葉にひっかかった。

まさか、と。

「そう、いつも了くんと、広場で食べてるんだけど…」

絹は、試しにそう言うしてみる。

彼の反応を見ながら。

「えっ！？ 今まで、了と食べてたの？」

ハイ、釣れた！

予想通りの展開に、絹は微笑みそこねた。

あのおしゃべり未っ子が、お昼の件を黙り通していたのだ。

なかなか大きい事実だった。

他の兄弟が、乱入してくるのを阻止したかったのだろう。

それだけ、あの時間を大切にしていると言っことだ。

「あんにやる…」

記憶の中の弟に、将は毒づいている。

帰ったら、兄にいじめられそうだ。

「それなら、今日はオレたちと食べない？ 男ばかりで悪いけど」

気を取り直した将が、誘ってくれる。

彼の傍に集まる男は、やはりさわやか系が多い。

高尾みたいなのは、絶対にいない。

しかし。

さわやかとは言え、男の中に絹を誘っていいのか。

「じゃあ、お邪魔させてもらおうかな」

どづして、将はこづ、迂闊で甘いのだろう。

「お邪魔します…」

近くの机に集まっていた彼らのところへ、絹は案内された。

「今日は、彼女も一緒にまぜてくれよ」

さらりと言う将とは対照的に、彼らはみな一瞬動きを止めた。

初めて、この教室であいさつした時を、思い出す。

「あ、ああ、高坂さんなら、大歓迎だよ」

はっと我に返ったように、一人が立ち上がって、彼女の席を作ってくれる。

ほーら。

絹は、つまらなく目を伏せながら、将につぶやいていた。

いくら、仲良しの男友達とは言え、その中に綺麗な顔の女を放り込んだらどうなるか、考えなかったのか。

おかげで絹は、お姫さまのように扱われるではないか。

「高坂さんと一緒にお弁当なんて光荣だな」

「えっ、自分で作ってるんだ、家庭的なんだ」

きわめつけは。

「将と、付き合ってるんじゃないよ、ね？」

私、しーらないって。

「ええ」

絹はもう、頭で考えるのもばかばかしくなって、唇の先だけで答えていた。

少しは、いい人を卒業するべきなのだ、将は。

宮野の件といい、今日の件といい、全然自分を有利に動かせていない。

だから、あんなブルー顔を覚えてしまうのに。

絹はもう、将の顔を伺ったりしなかった。

彼がしゃべらないのが、何よりの証拠なのだから。

## お宅訪問

「何故、あそこで将くんを見ないんだ！ いや、その前に京くんを私に何故、紹介しない！」

帰宅した絹を待っていたのは、外の天気よりも陰鬱なボスのお叱りだった。

「先生、長男の方は……」

京の件については、島村が応援してくれるようだ。

「ええい、うるさい……技術など、いくらでもくれてやるわ」

しかし、自分の価値をさっぱり理解していないボスは、ただただ駄々をこねる。

あの一家が絡むと、冷静さは銀河の彼方だ。

「変な組織に目をつけられると、広井一家の観察どころじゃすまなくなりますよ……逆に、彼らにも何か被害が及ぶかもしれません」

島村は、根気よくボスに訴えた。

さすがに、広井一家を巻き込むと聞かされて、少し冷静になったように見える。

「もし……彼らに何かあったら……楽に死ぬると思うなよ」

仮想の敵に向かって、ボスは真つ黒いオーラで呟く。

「いまのままなら、大丈夫ですから」

絹は、そのオーラに触れながら、彼をなだめた。

自分も黒いせいがか、すんなりと受け入れられる。

いつそ、同種のオーラであることは、安心感を覚えるほどだ。

絹には、この悪魔がいる、と。

将のように、きれいな目で未来を語ることはできないが、暗い道でも一人で歩いているわけではないのだ。

「安全な技術だけ、選んで流すというのは構わないですがね…ただし、父親の方に、ですよ」

余りダメダメ言つと、ボスが怪しい方に走っているのだからうか。

島村は、少し穏やかな表現になった。

「チヨウウに？」

少し呆然と、ボスは呟く。

「電気屋が、喉から手を出して欲しがる技術なら、腐るほどありますよ…会社も潤つ、先生も感謝される」

島村の言葉に、ボスはみるみる目を輝かせ始めた。

「よし、いまずぐ選別始めるぞ！」

絹も一緒に、地下研究所まで運ばれる。

彼女は、はしゃぐボスの向こうの島村を見た。

「商売つ気のあることは、キレイなんじゃ？」

「ボスを、自分を哀れむような目で見るのは、その辺にしとけ」

結構　鋭いじゃん。

絹は、言い返せなかった。

「チ、チ、チ、チヨウが…チヨウが…家に遊びにこいと！」

電話を切ったボスが、身体も言葉も転びそうになっている。

役に立ちそうな発明品を、いくつか見せたい、と連絡したのだ。

「週末にチヨウウの家にー」

くるくる回るボスに、絹は微笑んだ。

持っていくものは、すべて技術を提供するつもりだから、京も満  
足するだろう。

「カメラで記録したいでしょうから、一緒に連れていったらどうです?」

島村が、絹を指差す。

ボスは、即座に彼女を見た。

「そ、そうだな、私もチョウの相手で忙しいからな」

どうやら、彼女も同伴することが決まったようだ。

週末に、ボスと出かけるのか。

変な気分だ。

ただこの間、島村に痛い一言を言われていたので、彼を見た。

絹の中の暗い感情。

それを好ましく思ってなさそうな彼は、しかしボス第一主義。

絹が同行することが、利益があると思われたのか。

「絶対に、技術供与に先生の名前を出させるなよ。金もだめだ」

島村が、ボスに聞こえないように、耳うちしてきた。

絹は、お目付け役ということか。



確かにボスでは、チヨウの言いなりになりかねない。

その時に、ボスに怒られようが止めろ、と。

本当に、ボスには百害あって一利なし、の仕事だ。

「企業の金の流れから、産業スパイが先生の存在に感づくとも面倒だからな」

自宅に招待でよかったと、島村は本気で警戒をしている。

これが会社なら、もっと警戒が必要だったろうから、と。

「そんなに心配なら、島村さんもくれば？」

絹は、素直にそう思ったのだ。

しかし。

「ああいつ手合いが出てくるなら、オレは逆に顔を出さない方がいい」

ああいつ手合い？

島村が、何を指して言っているのか、絹には分からなかった。

「よく来てくれたね」

大きな郊外の家。

チヨウと、二人の使用人に出迎えられる。

その使用人が、二人して絹の顔に驚きを隠せないでいた。

亡くなった奥様に、そっくりなせいだ。

あらかじめ、チヨウや兄弟は言ってなかったのか。

「ああ、すまないね、絹さん…気を悪くしないで」

チヨウは、さりげなくフォローする。

ボスの手前、小さく「いえ」と、答えるだけだった。

「じゃあ、私の部屋へ…」

チヨウが言い掛けた時。

「絹さん！」

大きな声で、すつとんでくるミサイル。

「了くん」

熱烈に抱きつかれ、絹は微笑んだ。

抱擁騒ぎは、久しぶりだな、と思いながら。

「絹さん、来るって聞いてなかったよー！ どうして教えてくれなかったのー」

抱きつきながらも、口から出るのは不満。

車での通学でも、メールでも言わなかったせいだ。

「今日、先生に誘われたの、ごめんね」

ボスの前で、にこやかに嘘をつく。

彼は、チヨウに夢中で、絹の嘘など耳にも入っていない。

「絹さんがいるなら、僕もパパの部屋いくー」

何かあるかも知らないような了は、抱擁から腕を組むに形を変化させた。

「こら、了。絹さんは、遊びに来たわけじゃないんだぞ」

チヨウに釘を刺され、坊やはブーっと唇を尖らせて抗議する。

「声が大きいんだよ、了は」

絹の腕から、ダッコちゃん状態の了が、べりっとひきはがされる。

後方だ。

振り返ると、将が弟をはがいじめていた。

「おはよ、絹さん」

じたばたもがく弟を、しっかりキープしながら、にこっとスマイル。

「おはよう、将くん」

「将兄いー放してー」

絹のあいさつと、末っ子の抵抗が重なる。

「後で、お茶の時間を作るから、それまで待っていなさい」

末っ子の甘えぶりに苦笑しながら、チヨウはさりげなく二人をこれからのことから遠ざけたのだった。

「よお」

部屋に案内されると 京がいた。

「京…お前は呼んでないぞ」

チヨウは、眉間を押さえる。

兄弟三人とも、朝から絡んでくるとは思わなかったのだろう。

しかし、京はすつと姿勢を正すと、チヨウを無視してボスへと近づいたのだ。

「先日は、先生の天体望遠鏡を分解しようとして、失礼しました。是非、今日はオレも同席させてください」

そして、あいさつのつもりか、右手を出すのだ。

落ちたわ。

絹は、遠い目をした。

「勿論だよ、いくらでも見ていきたまえ！」

落ちたのは　ボス。

京の手をしつかと握り返し、彼の同席に許可印を押したのだ。

父親に許可を取らないで、ボスを落とす策士だった。

まあ。

チヨウは警戒しているようだが、今日のは息子に分解されてもいいものばかりだ。

絹も口を挟まないで、その光景を見守った。

「すまん、巧。わざわざ、オレに気を遣ってもらって」

絹のアシストで、荷物の中から、装置を出しているボスに、チヨウは苦い響きを込めた。

何の見返りもいらないと、ボスが言ったせいだろうか。

「私には、研究を金に変える能力はない…いや、いらないんだ。ただ、私が作ったものを、お前がどう生まれ変わらせてくれるか…それが、見てみたい」

それが、二人の愛の結晶さっ！

絹は、ボスの本音をアテレコしていた。

京は説明をはじめより先に、出された品を手にとって、食い入るように見ている。

「それはね…」

絹は、ボスの手伝いができるように、一通り島村にたたき込まれてきていた。

「それは、発電機よ…人間の体温を電力に変えられるの」

うちのマッドサイエンティストたちのいう、安全な、とはこのレベルだ。

しかし、使用分野を一步間違えれば、確実に軍用クラス。

「人間の体温から電気を？」

「夏なら、外気温でもできるそうよ」

島村の受け売りだ。

京は、唾然と自分の手の中の製品を見つめていた。

## 猫の皮をはぐ

「すごすぎて…困るな」

ひととおり説明を受け、操作し終えたチヨウは、ため息と共にソファに沈んだ。

既に2時間くらいは悠にたっており、多少の疲れはしょうがないだろう。

しかし、その疲労とはまた違う系列の気がした。

「巧……本当に、うちの技術顧問で入らないか？」

チヨウは、真剣そのものだ。

「技術顧問？」

ボスの目は揺らいでいる。

技術顧問という肩書きが、魅力的なのではない。

チヨウに必要とされている事実が、限りなく魅力的なのだ。

「そう、技術顧問だ。これだけの技術を、友達だからと言って、タダでもらうわけにはいかん。予想の範囲を越えている」

まあ、ボスの価値を高く見てくれたことは、同意する。



「うちの技術屋どもに、これらの出所を聞かれて、サンタさんがくれました、と答えさせる気が」

チヨウウは熱弁をふるう。

ボスの目はもう、釘づけだ。

絹は、正気に戻すため、座っているボスの後ろに回り、肩に手を置いた。

はっと、ボスが揺らめく。

「おじさま…」

今日の絹は、島村の代理だ。

だから、ボスを守るのが最優先。

「おじさまは、先生を守れます？ 全世界の…先生の技術を悪用したい患者全部から…先生を守れますか？」

微笑んでみたが、目までは笑えなかったかもしれない。

しかし、本気を伝えるには、そのほうがいいだろう。

「絹！」

振り向きながら、ボスが叱咤の声を上げる。

しかし、絹はまっすぐにチヨウウを見ていた。

「なるほど…巧を囲いこむには、それくらい覚悟がいるといことか…」

ふう。

彼の吐息は 天井に向かって吐かれた。

「ちよつと…来い」

京に、腕を取られた。

まだ、チヨウが技術顧問の話を完全にあきらめたかどうか、言葉で確認し終わっていないというのに。

京は、彼女を部屋の外へ引っ張っていこうとするのだ。

その有無も言わせない力に、ドアの外に放り出される。

「ど、どこに行くの?」

更に、廊下を引っ張っぱられる。

絹としては、ボスが気になるので、余り遠くには行きたくなかった。

「隣…オレの部屋だ」

ボタン。

大変近くて、ようございまして。

しかし、隣とは壁ひとつはさんでいる。

声も姿も、完全に遮断されていた。

あの二人は、どんな話をしているのか。

「一体、何事？」

綺麗に片付けられた部屋。

掃除をしているのは、本人ではないに違いない。

「お前、この間の観測会の時から思ってたが：先生は年上の、しかも社会人だぞ。その相手に、何保護者みたいなことやってんだ」

決めるのは、先生だろうが。

京は、保護者にいちいち口を挟むな　そう言いたいのだ。

技術顧問という父親の言葉に、京も心踊ったのだろう。

それなのに、絹が横から蹴りを入れたのである。

「京さん…私は怖い。先生は、私を引き取ってくれた大恩人よ…  
その人に降りかかる危険があるなんて、考えたくもないの」

この件に関して言えば、完全に京とは決別だ。

今後の付き合いにも、影響が出るかもしれない。

それでも。

絹は、ボスを守らなければならないのだ。

たとえ、ボスにそれを望まなくても。

「だから、大げさすぎるって言ってるんだ」

大げさ？

絹は、微笑んだ。

悲しかったのだ。

「京さんの中では…そんなに先生の評価は低いのね」

あれだけの製品を、直に見ておきながら。

「私が悪者なら、あの発電機で人の体温や、周囲の温度を奪いつくすことに、応用するかもしれないのに…」

真夏に　凍死だってできる。

「どんなものだって、悪用できるわ…ただ、そんな人を先生に近付

けたくないだけ」

絹はそうまとめたが、京に自分のダークな面を見せた気がしていた。

ボス、すみません。

京を敵に回したかもなあと、彼女は隣の部屋の雇用主に呟く。

「お前、先生のこと…好きなのか？」

しかし、京の言葉は、絹を笑いの渦にたたき込んだ。

うぶつと吹き出しそうになるのを、こらえなければならない。

「あはは…好きよ、大好き。いるかどうか分からない、神様より尊敬しているわ」

それでも笑いが抑え切れず、絹は身体を折るようにして笑ってしまふ。

恋という感覚で扱われるのが、おかしくてしょうがない。

恋なんてものは、夢を見る能力が生み出すものだ。

絹にはまだ、そんな余裕などない。

仕事をこなし、ボスを守るだけだ。

「お前…そっちの顔の方が、“らしい”な。少し、悪そうだが」

京は、肩をそびやかしながら　笑った。

坊っちゃんのを考えることは分らない。

母親に似た顔の女が、ダークでも構わないのだろうか。

「私は私よ…どんな顔をしていても、私」

あの醜い顔でも。

自虐的に、絹は呟く。

ただ、この兄弟は絹が醜い顔であったなら、見向きもしなかっただろう。

そこが、ボスとは違うところなのだ。

絹の中に、深く貫かれているわだかまり。

「先生の前に立ちほだから、お前の壁は厚そうだ」

京は苦笑したが、絹が考えたような、嫌悪などは見て取れなかった。

「まあ、なんにせよ…聖女ぶられるより、まだ悪女くさい方が好みだがな」

どつちら。

ボスのことを、京はあきらめてくれた気がする。

しかし、その代わりに、不穏な言葉が投げられた。

色恋の香り。

「ふふふ…それはどうもありがとう…話が終わったなら、私は戻るわね」

だから 彼好みの悪女らしく、かわすことにした。

バランスを壊したいなら、ボスの許しをとってきて。

心の中の言葉を飲み込みながらも、絹は少しだけ肩が軽く感じられた。

かぶる猫の分量が、少なめでいいというのは、結構楽になるものなのだ。

部屋を出ながら、絹は再び重い猫をフル装備したのだった。

桜は散ったのか

「さて、一段落したし…お茶にしようか」

絹が再びチヨウの部屋に戻ると、彼に笑顔で先手をつたれた。

さっきの件が、どう決着したのか気になるのだ。

「大丈夫だよ、お嬢さん…巧のことはあきらめたから…ははは、季節はずれのサンタのおかげにしとくさ」

チヨウの軽やかな笑い声に、ボスは微妙な表情をしていた。

きっと、未練があるに違いない。

絹が、ほっとして微笑むと、ボスに睨まれた。

さつと顔をそらして、視界に入れないようにする。

「チビたちも待ってるだろうから、居間に行こうじゃないか」

促され、ボスはソファから立ち上がった。

「あ、私片付けていきます」

あらかた片付けられている製品だが、ここに置いたままだと心配だ。

「ああ、すまないね…京、手伝ってあげなさい」



遅れて戻ってきた京と、二人で片付けることとなった。

ついさっき、ダークな部分を見せた相手と、一つの作業というのは、少しやりづらい。

そんな、絹の視界に。

ふーん。

壁ぎわの棚に飾られた、フォトフレーム。

将によく似た男と、絹によく似た女。

女の腕には赤ん坊。

男は、両腕に一人ずつ子供を抱えている。

広井家の、一番幸せな一日、というところか。

「あんまり、見んな」

手が止まっていたのに、気付かれたようだ。

京は、彼女の見ているものを、歓迎していなかった。

「仲のいい、家族の写真じゃない」

再び作業に戻りながら、絹は感想を口にする。

母は死んだかもしれないが、どうも京はその過去を悪く扱いた  
いようだ。

「オレは、一番覚えているから…いろいろ思うところがあるんだ」  
確かに。

長男の彼は、一番母親を覚えているだろう。

甘えたい盛りに、いなくなったのだ。

悲しさも、人一倍覚えたに違いない。

「笑ってもいいぞ…」

不意に、京は声をひそめた。

この部屋には二人で、誰も聞いていないというのに。

「オレはまだ…おふくろが、死んでないと思ってる」

声をひそめないと 何か、怖いものが襲ってくるかのようだっ  
た。

望月桜 いや、広井桜は死んでいない？

絹は、笑いはしなかったが、怪訝な目は隠しきれなかった。

子供心に、京がそう思う何かがあったのか。

「でも、確か事故にあった…」

資料では、そうなっていた。

「あ…知ってたのか…そうか、先生は親父の同級だったな…ああ、おふくろは、車を運転中、ハンドルを切りそこなって電柱に激突した」

事故の詳しい内容までは知らなかったのだが、随分エキサイトな死に方だ。

「でも、それもありえないはずなんだ…絶対に車を飛ばしたりしないはずなのに」

100キロ近く、出ていたそうだ。

普通道路で100キロなんて、スピード狂としか思えない。

なぜ、桜はそんな無茶な運転をしたのか。

とても急ぐことがあったか 何かに追われていたか。

「その上、遺体を見てない…」

「それは、京さんが小さかったから見せなかったんじゃない」

彼の言葉に、すぐに絹は反論した。

あのチヨウの性格を考えれば、そうして当然だ。

「親父も…見てないんだ」

しかし。

彼の補足に、絹は動けなくなった。

何、ですって？

ありえない話だ。

夫が、妻の遺体を確認していないなんて。

普通ならば、本人確認のために、必ず身内が見るはずなのに。

「親父が見たのは、死亡診断書だけ。遺体は、おふくろの実家に取られた」

発電機を手に持ったまま、京は忌々しそつに目を細める。

桜の実家　　いわゆる、望月家。

島村の資料では、どういう家柄なのかは分からない。

不明扱いにされていたからだ。

少なくとも、広井家よりも遙かに大物。

京の様子からすると、桜の実家とは親交もなさそうだ。

「お母さんの実家って…?」

資料にはないが、家族なら知っているかもしれない。

絹は、ゆつくりと言葉にした。

「それは……」

京の言葉が、淀んだ瞬間。

「絹さん、早くしないとお茶さめちゃうよー」

元気な、邪魔者が入ってしまった。

さすがに了の前では、この話ができない。

一瞬、京と暗黙のアイコンタクトを終え、唇を閉ざしたのだった。

とんでもない話を聞いてしまった。

お茶の間も、気もそぞろだ。

桜が生きているかも しれない。

全て鵜呑みにするわけにはいかないが、京はそう信じたがっている。

そんな爆弾を抱えて、彼はいままで生きてきたのだ。

弟たちに、話すこともできずに。

だが、おそらく死んでいるだろう。

それが、絹の見解だった。

桜が生きていて、自分の意思で動けるといふのなら、何がなんでも帰ろうとするはずだ。

既に、事故が起きて十数年。

それほど長い間、連絡が途絶えたままなのだ。

死んでいると考える方が、自然だった。

たとえ、ウソの死亡診断書を書かせられるほどの、大物がバックにいたとしても。

冷静な部分とは別に、絹は驚いてもいた。

京の執念だ。

最悪の結末を自分の目で確認していないということは、人をこんなにも長く縛り付けるものなのか、と。

といううとは。

絹は、ゆっくりとお茶を飲むチョウを見た。

彼もまた、いまだにその事実に縛られているというところか。

京と違って、彼は大人だったのだ。

もっと細やかに、記憶しているだろう。

「絹さん大丈夫…？　なんか元気ないよ」

了に心配され、絹ははっと表情を正した。

「平気よ…なんともないわ」

この家は、一見平和そうに仲良く見えるが、亡霊にとり憑かれている。

「ちょっと失礼」

絹は、お手洗いを装って居間を出た。

亡霊を探すわけではない。

あの親子以外にも、亡霊にとり憑かれているかもしれない人間が  
ここにはいるのだ。

「すみません」

絹は、さつき部屋を出たばかりの、年配の女性の使用人に呼びかけた。

そう。

彼女を追ってきたのだ。

「お手洗いはどちらでしょう」

絹は、笑顔で聞いた。

写真の桜と、同じ微笑を浮かべながら。

「そんなに似ているんですね」

使用人は、絹にお手洗いの説明をしながらも 目に涙を浮かべていた。

きつと脳裏には、桜がよぎっているのだ。

「あっ、申し訳ございません…あまり見ないよう言われておりましたのに」

エプロンの裾で目を拭い、彼女はぺこぺこと頭を下げる。

「いいんですよ…事故で亡くなられたとか、お気の毒です。できれば、お線香を上げたいのですが、案内していただけますか？」

絹がそう言うと、使用人は感激したように、彼女を二階へと案内してくれた。



チヨウの部屋の、反対隣の部屋だった。

ドアを開けると、一目で女性の部屋だと分かった。

きつと、桜が生前ここに住んでいたのだ。

そして そのままにしていたのだろう。

そんな部屋に不似合いな、小さな仏壇。

この家の財力を持っているなら、金ぴかの大きいものでも余裕で買えるだろうに。

その小ささが、かえってチヨウの悲しみの大きさを表している気がした。

位牌と一緒に、一人で映っている写真が飾ってある。

名前の通り、桜の舞い散る中で映っている写真だ。

ん。

線香を上げながら、絹はその写真を見ていた。

紅い 桜。

普通の桜は薄紅なのに、写真の中の桜はえらく赤い。

「お近くに、こんな桜があるんですか？」

絹は、手を合わせて聞いた。

後方の使用人が、ぐすつと鼻をすする。

「いえ、それは奥様のご実家の桜だと聞いております…写真もそちらで撮られたものだと」

それならもしかしたら、撮ったのはチョウではないのかもしれない。

結婚する時に、桜と一緒に持ってきた写真の可能性があった。

遺体を返さないような実家だ。

彼女が結婚後、頻繁に出入りできたとも思えない。

「いつか一緒に、その桜を旦那様と見に行きたいと…それが、奥様のささやかな望みでございました」

使用人は、すっかり泣き崩れながらも、絹の推理を裏付けてくれた。

紅い桜ね。

確かに綺麗だが。

見ようによっては 血の雨にも見えた。

絹が居間に戻ると、えつと言う顔をされた。

隣の席のボスに、だ。

「絹さん、おかえりー」

ソファの後ろから、了が首に腕を絡めてくる。

反射的に、投げ飛ばしたくなる瞬間だ。

「あれ…絹さん、何の匂い？」

くんくんと、了が鼻を鳴らす。

あつ。

ようやく、さっき見せたボスの反応を理解する。

線香だ。

その匂いに、気付かれたのだろう。

「了くん…お茶に届かないわ」

はがいじめられたまま、絹はくすくす笑って両手を宙に踊らせた。

カップはテーブルの上だ。

「あ、ごめんね」

了をひきはがすことに成功。

こんなところで、線香の匂いを当てられるなんて、とんでもない。

その単語で、家族全員に桜の存在が甦るのだ。

はやく、匂いが飛ぶことを願った。

「そつえば、お嬢さん」

チヨウに呼び掛けられる。

「オダ”って聞いたことはないかな？」

穏やかな世間話のようだったが、唇だけがとても慎重だった。

「さあ…心当たりはないですが…それはなんですか？」

軽く返す絹に、チヨウは苦笑した。

「ああいや、勘違いだったようだ…そうだ、巧、さっきの製品の…」

最初から。

絹が反応しなければ、最初から別の話に切り替えることを、チヨウは決めていたのだ。

この話が、すぐに埋もれてしまうように。

多分、桜に関することだろう。

こんな亡霊の住む家に、亡霊と同じ顔の女が来たのである。

呪縛されたままのチヨウは、絹を桜の親戚か何かだと思ったのか  
もしれない。

この顔は、遺伝ではないので、彼の願いは虚しいのだが。

紅い桜と、オダ。

島村さんなら、何か見つけそうだな。

もしかしたら、既に動き始めているかもしれない男に、絹は望みを託すことにした。

「織田の血桜」

家に帰りついた絹を待っていたのは、島村の一言だった。

言い残すなり、ボスの荷物を預かって、さっさと奥へ行ってしま  
う。

「ちょ……」

やっぱり、島村は調べたのだ。

桜の実家について。

「織田の血桜とは、マニアックなものを引っ張ってきたな…ははは」

しかし、もっと驚いたのは、ボスがそれを軽やかに笑ったからだ。

「って…ん？ 織田って…チョウが言ったのは、もしかしてそのことか！？」

自分の言葉で、自分で驚き始める。

遅いです、ボス。

絹は、うーんとうなった。

「しかし、なんでチョウはお前に、織田の名前なんか聞くんだ？」

心底不思議そうだ。

絹だって知りたい。

大体、織田ってどちらさま？

「織田は、血族の名前とも、集合体の名前とも言われているが…関西を本拠地とする悪者の集団だ」

戻ってきた島村は、稚拙な表現をした。

悪者、だなんて。

「お前がいたところも、織田絡みだぞ」

追加情報に、絹は時を止めた。

「織田は、非合法の塊だからな…この国を牛耳ってる最大の悪であることは確かだ…ははは」

ボスは、どこまでも軽やかだった。

「ああ、島村：織田は、血族でも集団の名前でもなく、個人名だ。当主のみ、そう呼ばれるんだ」

マッドサイエンティストたるもの、正しい知識を持たねば。

真面目に、ボスは訂正を入れてくる。

面食らっているのは、島村だ。

「えらく、詳しいですね…」

彼のつつこみに、ボスは黙り込み 天井を見た。

「さて…録画でも見るか」

いきなり、話が急旋回した。

「ごまかそうとしてる!？」

それはもう、あからさまだった。

チヨウウの、あの華麗な会話の切り替えを、少しは見習えと言っくらしい。

呆気にとられる二人を置いて、ボスはさっさと自室へ行ってしまったのだった。



## 釣り

悪者の、織田ねえ。

とりあえずは、桜の実家の手がかりなるものは見つかったが、それはほんの入り口だけだ。

まだまだ、雲を掴むような話だった。

大体。

桜の実家や、彼女の死の真相を知って、どうしようというのだろ  
う。

絹は、根本的に立ち止まっていたのだ。

自分の過去にも関係のある連中だが、既に違う人間になった彼女は、関わり合いになりたくなかった。

「難しい顔をしてるわよ」

いつの間にか、委員長が目の前に来ていた。

HRが終わったようで、彼女は鞆とラケットを持っている。

そういえば、テニス部だったか。

「雨なのに、部活があるの？」

絹は、笑顔を作りながら聞いた。

鬱陶しい梅雨だ。

「屋内コートもあるのよ」

優しい答えに、絹はさすが金持ち学校と、心で呟いていた。

「高坂さんも興味があるなら、是非一度見学にきて欲しいわ」

まだ、彼女の運動神経をあきらめていないような発言に、絹は小さく指で×を作る。

そんな時だった。

「あーっちゃん」

後部ドアから、お軽い男の声が飛ぶ。

「部長？」

それに反応したのは、意外にも委員長だった。

あーっちゃん？

すごい呼ばれ方だと驚きつつ、ドアの方を見る。

「どつしたんですか？ わざわざ」

委員長が駆け寄り寄る先には。

「渡部様だわ」

ひそっと。

近くの女生徒が呟いた　桃色の声で。

うわぁ。

この「うわぁ」は、絹の身体が引く響きだった。

広井兄弟とは、質の違う美形が現れたのだ。

軽やかでやわらかな茶色の髪と、やはりやわらかく整った甘い顔。

絶対に、彼女がきれいにならないタイプだ。

「あーちゃん、こないだガットの張替え手伝ってもらったよねー…  
これお礼」

部室で渡すと、他の女の子に睨まれちゃうだろ？

絹は、耳をふさぎたかった。

なんか、こいつ　ムカつくタイプ。

「絹さん、部活いこうか」

彼女の様子も気づかず、将が帰り支度を済ませ立ち上がる。

そうだ。

さつさと、声の聞こえないところまで行けばいいのだ。

絹も立ち上がり、教室を出て行くとした。

その時。

すつと。

渡部と呼ばれる男の目が 絹の顔を追った。

柔らかな瞳を、呆然と見開きながら。

「おはよう」

将と登校すると、教室で委員長が釣れた。

「おはよう…：どうかしたの？」

絹に狙いを定めて来た気がして、彼女は厄介なことじゃないといいな、と思っていたのだ。

「高坂さん…：男子テニス部の部長、知ってる？」

委員長は、絹の机の真正面に張り付いた。

声は、なぜか辺りをはばかりるようなものだったが。

男子テニス部の部長。

絹の頭に、昨日の甘軽い男がよぎる。

「いいえ、昨日拝見したのが初めてよ」

軽く、表情を曇らせてしまった。

そういえば。

教室を出て行く間際、ちらりと見られたのだ。

しかし、それは珍しい反応ではない。

いまでも学校では、学年の違う人とすれ違う時、同じように見られることが多々ある。

だから、いつものこととスルーしていたのだが。

「そ…：そつなのね…：あの後、とてもしつこく聞かれたから」

考え込む委員長。

ああ。

絹は苦笑した。

それは、単なるナンパ方向の話ではないのだろうか、と。

「あーちゃんは、部長が気になるのね」

だから、さっさと茶化して話を終えようと思った。

「もう、やめてよ部長みたいに呼ぶの…恥ずかしいんだから」

珍しい彼女の赤くなった頬に、絹はくすくすと微笑む。

その笑みが。

「おかしいなあ…高坂さんの名字が、望月か青柳じゃないかって何  
度も聞くから、てっきり知り合いかと思ったのに」

笑みが 凍りつく。

出た。

望月桜の亡霊が出た。

青柳という、見知らぬ名前を連れて。

そして、凍りついたのは。

絹は、ゆっくりと隣の席を見た。

そう。

凍りついたのは、将も同じだったのだ。

ボスに聞けたらなあ。

絹は、うーんと唸った。

織田に関して、変な知識を持っているボスならば、望月も青柳も、もしかしたら知っているのかもしれない、と。

しかし、あの奇妙なすつとぼけ以来、織田の話はまったく出なくなっただ。

出ることが不自然だったし、ボスが桜について調べよう、などと  
思っはすもない。

ん？

そこでふと、絹は引っかかった。

そっだ。

ボスは、自分から桜のことを調べようなどと、思っことはないだ  
ろっ。

たとえ、こっして点々と、彼女の亡霊の痕跡に出会ったとしても。

それなら。

「将くん…顔色が悪いわ、どうしたの？」

まださっきの委員長の言葉から、毒が抜け切っていない将に、声をかけた。

「あ、いや…うん」

言いよどむ。

さあ。

絹は、思った。

さあ、わだかまっていることを、口に出して、と。

この件で、絹が個人的に動けないというのなら、動く口実が真横にいたのだ。

ボスも、将が知りたいと思えば、決して止めたりはしないだろう。

「さっきの話の望月って…」

そうよ。

絹は手招きをした。

「それ……母さんの実家の名字なんだ」

よしてきた。

軽くガッツポーズ。



「あら…じゃあ、ご実家のお知り合いかしらね、男子部の部長さん」

その話を、知らぬ素振りで引き伸ばしていく。

「私がお母さまに似ていたから、親戚と間違われたのかしら」

京ほど、大きくはなかった将。

了ほど、母を知らないわけじゃない将。

「あ、も、もう…昔の話だよ…母さんは死んだんだし」

何かを怖がるかのように、将は口を閉ざした。

そのまま、窓の外を向いてしまう。

あーもー。

釣り上げ 失敗。

## 部長

「絹さん、少しいいかな」

放課後、将が思いつめたような顔で、声をかけてきた。

ん？

「あの、男子テニス部の部長に、少し話を聞きたいんだけど」

影のある表情のまま、彼はそう言うのだ。

釣り上がってないと思ったら、口の中に針が入ったままだったのか。

「どうしたの？ 何か気になることでも？」

何かを怖がっている気がして、絹は静かに聞いた。

京は、疑ってはいたが、怖がってはいない。

一方将は、母親を覚えている、ぎりぎりくらいの年齢だったはずだ。

何かを知っているのだろうか。

「うん…母さんの、本当のお墓がどこにあるのか…知りたくて」

ああ。

将も、母親の遺骨が広井家になんかいないことは、知っているのだ。

しかし、それだけのことには思えない。

「顔色が悪いわ…何か、怖い思い出でも？」

絹は、いたわる声を出した。

京とは違う記憶がある　そう、彼女は察知したのだ。

「あ…いや…母の死顔が、時々鮮明に甦ってくるんだ。まっさおで、唇が土色で…思い出すと、背中が冷たくなって」

将は、言葉が喉にひっかかるような声を出す。

子供心に、それは怖いものだったのだろう。

ん？

しかし、絹は彼の言葉が気になった。

「お母さんの、死顔を…見たの？」

おかしい。

話が食い違っている。

チヨウも京も、桜の死に目にあえなかったはずなのだ。

なのに、なぜ。

「うん…なんだろう…病院の中をぐるぐる回ってた記憶があるんだ…知らないおじさんたちが押してるベッドの上に、母さんが…そこから…よく覚えてなくて」

見て、いた。

将は、病院にいた母を、見ていた。

家族の中で、ただ一人　その死を。

「兄貴は、母さんが死んだって信じてないみたいだし…ずっと誰にも言えなかったんだけど…やっぱり母さんは、死んでるんだと思う」

それなら、きちんとお墓参りがしたいんだ。

肩を落とす将の腕に、優しく手を伸ばす。

そっと触れて。

「何か分かるか確証はないけど、委員長に紹介してもらいましょう」

桜の亡霊は、将にも絡み付いていた。

「ちょっと待ってね…男子部から呼んでくるから」

そう言って、委員長は部室棟の一階へと消えた。

運動部は、大体一階に集中している。

その入り口辺りで、二人は部長の渡部を待つことにした。

青柳って名前と、望月を並べたのが気になるなあ。

この顔を桜と結びつけたというのなら、望月が出てくるのは分かる。

しかし、青柳という名字を出したのは、なぜなのか。

将と待ちながら、絹は推理を組み立てようとした。

のに。

「はあい…絹ちゃん」

突然、耳の後ろから囁かれ、絹は振り返りながら飛びのいたのだ。

まったく気配がなかった。

しかも、彼女をちゃんづけで呼ぶ人間など、いないはずだ。

振り返った先には

「こんなところで、何してるの？」

柔らかなハンサム、渡部様だった。

彼は、まだ部室へ行っていなかったのだ。

それに。

この男は、彼女のことを何と呼んだか。

もしかしたら、委員長が名前を教えたのかもしれないが。

彼はラーマソフトより軽い男で、ほぼ初対面の相手を、そんな風に呼べる人間なのかもしれないが。

調べられた!?

絹は、それを警戒して身構えたのだ。

桜を知っている人間が、桜に似た彼女のことを調べるのは、至極ありえることに感じた。

「高坂…絹ちゃんだよね…こっちは広井んちの次男坊か」

笑顔を浮かべながら、絹と将を交互に見る。

将に対する言葉が、微妙に適当なのは、男だからか。

それとも 広井だからか。

「あの…少し伺いたいことが」

将は、怯まなかった。

渡部に向かって、母の質問をしようとするのだ。

なのに。

将を無視して、彼は絹の方へと向かってきた。

「絹ちゃん…付き合う相手は選ばないと…」

周囲をはばからない、明るい声。

絹は、警戒したまま動けなかった。

「その顔で、広井と付き合っていると…誰かさんみたいに、殺されちゃつよ」

最後の言葉は、絹の耳元で。

あざ笑う声に聞こえた。

「あら、部長…こつちだったんですか」

委員長が、戻ってくる。

部長はまだ来ていないと、教えに戻ってきてくれたのだろう。

「こちら、高坂さんと広井くん…部長にお話があるんですって」

苦く渦巻く空気。

委員長は、しゃべっている途中で、それに気づいたようだ。  
語尾が、怪訝に揺れた。

「うん、でももう話は終わったから。行くつか、あーちゃん」

軽い男は、委員長の腰に手を回して、回れ右させる。

絹は、目だけを動かして、渡部を追った。

振り返りざまの彼と、その瞬間、目が合う。

「いいねえ…絹ちゃんのその目。生きてるって感じ…やっぱり、いくら綺麗でも生きてないと、ね」

軽く片手を上げて、バイバイと手を振られた。

委員長が、何度も何度も振り返って、彼らの方を気遣う様子を見せたが、渡部に力づくで連れていかれてしまう。

とんでもない爆弾だった。

ちょっと知っているかも、じゃない。

相当知っているに違いない。

もしかしたら、織田関係の人間なのかもしれない。

「あの人……知ってるよね」



将が、ぼつりと呟いた。

最後の辺りの言葉は、聞こえていないはずだ。

しかし、相手は将を広井の人間だと知っていたし、付き合う相手を選ぶと言ったのだ。

「そうね…知ってそうね」

だが、知っているからといって教えてくれるような、好意的な人間には、とてもじゃないが見えなかった。

食わせものだわ。

女好きの軽い男、というのはどうやら飾りのようだ。

人間、見た目どおりではないということくらい、絹は自分でよく知っているというのに。

「でも…将くんが直接聞くと…きっと、傷つけられるわ」

母に思い入れがある分、その傷は深くなるだろう。

お前の母は、殺されたのだと　　そう言われたら。

「うん…そうかもしれないな」

意外にも、将はすんなりそれを納得した。

自分への敵意のようなものを、感じ取ったのだろうか。

「けど、一番傷つくのは、子供の頃にもう終わったから……大丈夫だ  
と思う」

将は、少し笑った。

倒れないようにふんばる、男の笑顔だった。

「イヤダ」

帰った絹は、ボスにいきなり、そう宣言された。

何と言われるのか、最初から分かっていたかのように。

そうだろうなあ。

絹は、その言葉を聴いて、反論することなく「ただいま帰りました」とだけ言った。

いくら将や京が知りたがっているとは言え、ボスの大嫌いな桜について調べるとは、やっぱり思えなかったのだ。

彼女に織田が絡んでいるという事実が、なおさら彼をそうさせるのかもしれない。

まだ、絹には「織田」は漠然とした存在だが、彼女のいたところを運営している連中だ。

悪者と安直に称されるように、関わるとロクな目にあいそうになった。

ボスも、そういう経験があるのかもしれない。

織田絡みのところに、絹を買い付けにくるような、裏社会の人間なのだから。

ただ、将はそういうワケにはいかない。

今日のあの様子からすると、再び渡部に話を聞きに行く可能性が高かった。

その時、下手に彼が深く首を突っ込むと　危険ではないのだからか。

「ボス…これだけ教えてください」

絹は、ツーンとした横顔に声をかける。

「将くんが、渡部って男に食い下がっても平気ですか？」

あの男が、無害なのかどうか。

彼女は、それだけは確認しておこうと思ったのだ。

ボスの大好きな、次男坊のために。

ピクリ。

ボスの頬が、一瞬ケイレンした。

「もし、ダメなら早めに教えておいてくださいね…でないと、止められませんから」

桜の死への好奇心と、ボスの欲望とを秤にかけるなら、勿論、絹は後者を優先する。

だからこそ、知っておかねばならないこともあるのだ。

「……だ」

珍しく、ボスの唇が歯切れが悪い。

「はい？」

絹は、聞き返した。

「だめだ！ ずえーったいダメ！ 渡部の性悪にもう近づけるな！」

キツと絹へと向き直り、ボスは大上段から命令する。

それに、彼女はにっこりと笑った。

やっぱり、と。

やっぱり、あの男は危険な織田絡みなのか。

「了解、ボス」

絹は、よい手駒だ。

ボスの言うことは、ちゃんと聞くのである。

ただし 向こうが、勝手に絹に近づいてくるのは、止めようが

なかった。

昼休み。

久しぶりに晴れて、お弁当を持った彼女が、了との待ち合わせの広場に向かう途中のことだった。

「はあい、絹ちゃん」

出た。

なぜ、茂みをかきわけて、ガサガサ現れるのだろうか。

「君を見かけて、廊下から出ちゃったよ」

後方の校舎を肩越しに指しながら、渡部様は情熱さをアピールする。

絹には、そんなウソくさい情熱は、体温ほども感じなかったが。

「こんにちは…では、私はこれで」

通り一遍のあいさつだけして、絹は立ち去ろうとした。

「あれあれ…広井と一緒にご飯かなー」

カんに触るとぼけ声。

そして、ついてこようとする。

「将くんなら教室です」

絹は、彼と距離を取る発言をした。

そうしないと、この男がまた将に絡む気がしたのだ。

「やだなあ、絹ちゃん…広井なら3人もいるじゃないか」

こいつ。

絹は、立ち止まった。

暗黙に、京や了も射程に入れている言葉だったのだ。

「何か、私に御用ですか？」

このまま、了のいるところへ連れて行くのは危険だった。

あの了だ。

母の死を一番知らない了。

ひっくり返せば、一番あの時代に傷つかなかった人間である。

そんな人間の前に、渡部を連れて行って、将の時のようなことを言われたら、面倒なことになると踏んだのだ。

「用かあ…そうだねえ…僕と一緒に、昼ご飯食べない？」

にっこり。

女の心をとろけさせる、極上の笑顔のお誘い。

幸い、絹は心のドアに、全部戸板を打ちつけているので平気だった。

「すみません、先輩は、とても私の手に負える方じゃないと思いますので…」

彼女は、そのバリケードを彼に見せた。

「……高坂巧に、話を聞いた？」

笑顔の中に、不適さの見える目で、ボスの名前を出す。

絹は揺らがないよう、よりバリケードを強くして、こう答えた。

「はい、そうです」

やはり 調べられていた。

見詰め合う というより、荒野で対峙するガンマンのような状態だった。

梅雨時の、やや湿度をはらんだ風なので、荒野のように砂埃は舞わなかったが。

「そう…あの人も、はぐれものだからね。あんまり本家とは関わり



たくないだろうけど…僕のことくらい、よく言ってくれてもいいのに」

はあ、やれやれ。

渡部は、苦笑交じりにボスについて話をする。

絹は、迂闊に反応しないようにしたまま、言葉をかみ締めた。

彼女の知らない話をしているのだ。

「可愛い、甥っこのなにねえ…」

光る 目。

表情を変えない絹に、それが注がれる。

はあ、そいじ。

感想はそんなものだ。

なるほど、ボスの親戚か。

道理で彼について、はっきりと知っている口ぶりだったわけである。

もっと深く突っ込むと、ボスは妾の子らしいので、この渡部の親の異母兄弟、ということになるのか。

更に突っ込むと。

渡部が織田絡みとするのなら、ボスもまんざら絡んでいないわけではない、ということになる。

その辺がつながって、逆にすつきりしたくらいだった。

ボスとこの男の血が、一部混じっているからといって、ボスの価値に揺らぎが生じることはない。

「それだけでしょうか？」

絹は、静かに言った。

もう話を終わりにしたかったのだ。

「んー、そんなそっけない態度とっていいのかなあ……」

ムカつく、すつとぼけ笑いが浮かぶ。

まだ、切り札があるのだとでも言いたいのか。

「高坂巧のことなら、何でもすぐ分かるんだよ……同じ世界で生きてるんだから」

絹の後ろに、ゆっくりと回りこむ渡部。

わざとらしく優しい手が、彼女の両肩に乗せられる。

全身に鳥肌が立った。

刹那。

「ねえ……735号」

甘い甘い囁き。

頭が、真っ白になる。

視界が暗く翳る。

絹の 時間が止まった。

どのくらい、そこに立ち尽くしていただろう。

もうとっくに渡部は立ち去ったというのに、絹は一步も動けなくなってしまうた。

735号。

5の倍数はきりがいい。

なぜか、人はそう思う。

そして、他の数字より何となく覚えられるのだ。

だが、それは忌まわしい番号だった。

風が、絹の髪を揺らす。

なのに、彼女の中の時が、動き出そうとしない。

「あ、絹さん、こんなことにいたんだ」

余りにこない彼女を心配してか、了が向こうから駆けってくる。

見ているのだ。

ちゃんと、絹は了を見ている。

なのに、彼が白くぼんやり霞んでしまう。

「き、絹さん！ ど、どうしたのー！」

オロオロとした彼が、絹を正気づかせるように腕を取る。

なぜ、そんなに了は、心配そうな顔をしているのだろう。

「……っ」

声が出なかった。

代わりに 涙が出ていた。

お弁当を落とし、絹は両手で顔をおおう。

ああ、と。

もう二度と、聞くことのないはずの番号だった。

彼女は、高坂絹として、新しい人生を歩き始めたはずなのだ。

あの顔と一緒に、捨てたはずの番号。

「絹さん、大丈夫？ どうしたの？」

あの施設で、彼女が呼ばれていた番号。

それを知る人間が、ボス以外にいたのだ。

しかも、この学校に。

ああ、ボス。

ボス。

絹は、家にいる彼を呼んだ。

ボス　ダメかもしれません。

## 復活

熱が出た。

自分の心が、こんなにまで脆弱だとは思わなかった。

絹は、熱い喉から苦しく息を吐きながら、自室の天井を見ていたのだ。

熱でぼんやりしているおかげで、頭がうまく働かないのだけは助かる。

そつでなければ、彼女の熱はなお上がりそうだった。

「おい、メシ」

ノックもなしに、島村がドアを開ける。

「どうせ知恵熱だろうから、普通食だ。置いとくから、食べるよ」

枕元にお盆ごと置かれる。

ちらと視線が投げられたが、彼はさっさと出て行った。

知恵熱。

島村は科学者だから、冷たくも正しい言葉を吐く。

精神的なものから来たのだと、知っているのだ。

こういう時に、仕込んだカメラとマイクは助かる。

絹のこの状態を、客観的に味方の人間が見ていてくれることだ。

そう　味方。

彼女は、ボスにとっては「歩」の駒ではあるが、唯一の「歩」なのだ。

その「歩」が、「角」とぶつかった。

斜めから切り込んでくる、曲者。

織田寄りの人間で、ボスの甥で、絹の過去を知っている。

「絹……」

心ばかりのノックの直後、「王」が部屋に入ってきた。

大きく反応は返せないが、絹は顎を動かして彼を見た。

熱のせいで、音と視界がぼやける。

そんな中、ボスは彼女を見下ろした。

「これが、渡部の息子の資料だ。今後、邪魔させないように、黙らせる材料に使え」

印刷した紙束が、布団の上落ちる。

ちょうど絹の胸の辺り。

ああ。

やはり、ボスは建設的だ。

あの男が、今後広井家ウォッチングの邪魔になると判断したのである。

学校内のことは、絹がなんとかしなければならぬ。

余計な首を突っ込まれて、彼女が学校にいられなくなったら困るのだ。

「はい…」

絹は、肘で身体を支えながら、ベッドから身を起こした。

震える手で、しかし、資料をしっかりと掴んだ。

加減のできない指のおかげで、紙にしわが刻まれたが、そんなことは気にしない。

絹は、枕もとの食事も忘れて、働かない頭で資料を睨み始めたのだった。

「絹さん…大丈夫？」



翌朝、迎えにきた了の一言目がそれだった。

「ええ、もう大丈夫よ…ごめんね、驚かせて」

まだ少し、足元がフワフワしているが、熱はほとんど下がっている。

昨日の今日で休んだとなると、あの渡部という男が喜びそうで、気合いで起き出してきたのだ。

あの言葉は、さしてショックではなかった。

そう、彼に思わせなければならない。

弱みを見せたら、何度でも抉ってくるだろう。あの「角」は。

「歩」の対処法としては。

折れないこと。

ただそれだけ。

最初から、向こうが有利なのは分かりきっている。

だから、何を言われても何をされても、絶対に倒れないこと。

それだけしか、「歩」が生き残る道はない。

新たな「歩」を打ち込むように、絹は心を何度も新しくして、「

角」に立ち向かうしかないのだ。

車に乗り込むと、将も心配そうに見る。

昨日の午後は、ずっと授業中に、真っ青な顔を見られていただろう。

「大丈夫よ、将くん…もう平気」

にっこり。

絹は、いつものように微笑んだ。

渡部の資料を読み、自分が「歩」としてどう動けばいいのか、昨日覚悟ができたからだろう。

彼らに対して、いつもどおり動ける。

そんな絹を、高等部の玄関口で、試練が待っていた。

「おっ…ホントに登校してきた」

よっぼど暇なのか。

笑顔の貴公子 渡部様だ。

「おはようございます」

絹は、にっこりと微笑む。

そして、その程度の知り合いという風に、すれ違おうとした。

「もう平気なのかな…絹ちゃん」

奥歯に、しっかりと物を挟んでおっしゃってください。

一緒にいた将が、不穏な気配を感じたようで、足を止める。

既に面識があつて、不快な思いもしているのだ。

下手に反応されると、厄介である。

絹は、しっかりと足を止めて振り返った。

「ええもう…すっかり元気です。ご心配をおかけしました？」

極上の微笑みで、しかし最後はやわらかく上がる疑問形で、渡部を突き放す。

心配なんかしてないでしょ、と。

そして、再びスタスタと歩き出す。

後方で、こらえきれないような渡部の笑い声が上がったが、絹はもう振り返らなかった。

渡部 圭一。

大手ゼネコン「渡部組」の長男。

それが表の顔。

「織田」の中では、父親はその右腕の役職についている。

絹のボスは、その右腕の異母兄弟というワケだ。

よほど資質がないと判断されない限りは、世襲制らしいので、あの男が、将来右腕に就任するのだろう。

金持ち学校にしては珍しく、テニスの腕がよく、インターハイにも出場したほどの腕前だ。

そのほか、ボスの資料には、父親のこと、祖父のことまで詳しく書かれていた。

注目すべきは、祖父。

ボスの父親だ。

これがまあ、無類の女好きときている。

いまも生きているらしいが、孫と同じ年の子がいるというから大笑いだ。

勿論、正妻の子ではない。

その子も、この学校に通っている。

3年の、森村という男子生徒だ。

絹は、その存在に興味を持った。

叔父と甥が、同じ学年にいる。

しかも。

その森村が、どれだけマゾなのか知らないが、あの渡部と同じテニス部なのだ。

うまくすれば、対渡部用ストッパーに使えるかも。

まずは、どんな人間か調べなければならぬが。

幸い、絹には委員長という、かすかなツテがある。

余り表だつて話を聞くと、ボスに怒られるので、体育の時を見計らった。

カメラを切つて、と。

「委員長…森村さんって男子テニス部員、知ってる？」

絹は着替えながら、彼女にさりげない感じで聞いてみた。

「ん？ 森村副部長のこと？」

んー。

返事に、微妙に引っかかる。

アレが部長で、コッチが副部长、と。

「ど、どんな人？」

何だろう、胸騒ぎがする。

「そうねえ、静かでしたっけかな…部長と正反対」

ふふふ。

思い出し笑いをしながら、委員長は教えてくれる。

絹はいやな予感が外れそうで、ほっとした。

「部長と仲がいいわね…いつもダブルスは二人で組んでるわ」

前言撤回。

そのダメオシに、森村計画が、暗礁に乗り上げたことを知ったのだった。

「渡部ってのは、何者なんだ？」

まさか、京にそんなことを聞かれるとは思っていなかった。

部室での、プラネタリウム鑑賞の時だ。

将には相変わらずくつついてるのがいて、京に隣に呼ばれたのである。

反対隣には、やっぱり了がいたが。

「男子テニス部の、部長さんだそうですね。」

将が、しゃべったのだろうか。

兄に泣き付くタイプには見えないので、意外だった。

「ふ、ん…で、どんな知り合いだ？」

んー。

将から聞いた割には、変な質問だ。

「どうして、そんなことを？」

絹は、墓穴を掘らないよう、気を付けて言葉を探した。

渡部絡みには、地雷があるのだから。

「昨日、お前が泣かされた相手って、そいつだろ？」

誰から聞いたのか。

確かに、あの事件があったのは昼休みだったし、人が誰もいなかったわけではない。

誰が目撃した人に聞いた、というところか。

「あの人…先生の親戚なんです」

下手な言い訳をすると、彼が渡部に食ってかかりかねない。

それだけは、避けなければ。

「先生の悪口を言われたんです」

そう。

攻撃されたのは、絹ではないと。

そうしておけば、京に変な怒りを植え付けずに済む。

「先生絡むと、強気なお前さんがね…」

笑いは、苦笑だったのか。

顔が見えないので、よく分からない。

「いつも強気なわけじゃないですよ」

弱みを握られたショックで、自分が崩れてしまったのが、今にして思えば悔しい。

悪い人間など、山ほど見てきたというのに。



「あんまりウゼえようなら…呼べよ」

男気溢れる言葉に、絹は微笑んでいた。

嬉しかったからではない。

「ありがとう…京さん」

渡部絡みで京に助けを呼ぶなんて 絶対にありえなかったからだ。

## 誕生日

「よっ、モリリン！」

その声が聞こえた瞬間、絹は廊下の曲がり角に張りついた。

晴れ間のランチに行くには、校舎を出なければならぬ。

三年の教室は一階にあるので、鉢合わせる可能性もあるのだ。

そう　渡部と。

「モリリンなら、シューズの紐の予備、持ってるよねー。僕の汚れちやってさー」

声を聞くだけで、ムカつく男だ。

紐が切れたならまだしも、汚れただけで替えるのか。

「……ああ」

対する声は、低く静かだ。

モリリンなんて、ふざけた呼び方をされて気の毒な　ん？

絹はそっと、首だけを出して見た。

渡部の背中の方こう、清潔感ある短めの髪に、眼鏡の男子生徒が立っていた。

随分、背が高い。

「さっすが、モリリン」

渡部の背中が、楽しげに揺れる。

「渡部様、あまり森村さんに無理を言っではいけませんよ」

通りすがりの女生徒に、くすくすと笑われている。

「僕のは僕のもの。モリリンのも僕のものだからいいんだよー」

見事なジャイアニズムを披露しながら、渡部の関心は森村から女生徒へと移った。

話は終わったとばかりに、渡部は行ってしまふ。

絹とは、反対方向だったので助かった。

森村は。

一度、後方の渡部を振り返って見る。

その顔が、再び前に向き直った時。

氷よりも、もっと冷たい顔をしていた。

ぞくつ。

絹の背筋に、悪寒が走る。

違う。

気付いた。

委員長は、間違っている、と。

あれは 仲良しの目じゃ、ない。

「絹さん、誕生日っていつ？」

森村直後の、ランチタイム。

絹の意識の一部は、そっちへ行っていたが、了の声に引き戻される。

「誕生日？」

三兄弟の中で、そんなことを言い出すのは、了くらいだろう。

「うん、もう過ぎたとかじゃない、よ、ね？」

最後の方は、心配になったのが、声が揺れる。

「七月よ…七月七日」

「冗談でも何でもなく、真実だ。」

学校の書類も、それで出されているはずだった。

「ちえ、京兄と同じ月かあ」

七夕に驚くより先に、そんな不満を言われるとは。

「あ、でもでも、七夕なんてロマンティックだね…」

だから、天文部に入ったんだね。

一人で楽しそうだ。

天文部に入った動機など、もっと下世話なものだと言うのに。

「でも、いつも梅雨明けしてなくて、星なんか見えないわ」

誕生日が、雨でなかったことの方が少ない。

「あっ、北海道なら、梅雨がないから晴れてるかもよ！」

ぼーん。

軽い音で、了の話が飛んだ。

どんな思考回路をしているのか。

「僕、一番素敵な絹さんの誕生日を考えるよ」

瞳が、輝いている。

俄然、やる気になった目だ。

「り、了くん？」

金持ちの感覚は、分からない。

北海道、なんてセリフが出るのだ。

誕生日旅行に行こう、と誘われるのではないか。

「京兄も将兄も、絹さんの誕生日知らないよね…くふふ」

既に、二人を出し抜く気満々だ。

「了くん…北海道旅行に誘っても、私断るわよ」

なんといかもう。

くすくす笑いながら、釘を刺す。

「ええーどうして分かったのー？　なんで断るのー？」

驚きとブーイングに、更に絹は、笑いをこらえなければならなかった。

「二人きりで旅行なんてだめよ…了くんも男の人なんだから」

落ち込ませないように、一人前扱いすると　了の顔が赤く染ま

った。

「了に…なんか言った？」

翌日の教室。

車の中では聞けなかったらしく、一緒に登校した将が、席に着くなりそう言った。

「え？」

どつという意味が分からずに、聞き返す。

了に、何か異変があったのだろうか。

「あ、いや…なんか昨日から、地に足ついてないみたいで…コケるし、ぶつかるし、間違っただの部屋に入ってくるし」

将の言葉は、困惑に満ちていた。

それに絹は、笑ってしまいそうで困るのだ。

昨日、一人前扱いしたせいで、了の中で何か芽生えてしまったのか。

母親に似た、お姉さんのような絹　それが、少し形を変えてしまったのかもしれない。

「了くんも思春期だから、いろいろ悩みがあるんじゃないの?」

罪作りなことをしてしまったようだが、それを説明するわけにもいかなかった。

知らぬふりをするだけだ。

「そっか…」

将は、納得したようだ。

カンが悪くないが、ツメは甘い。

だから、絹は助かるのだが。

「そういえば、了くんに誕生日を聞かれたわ…将くんは、誕生日はいつなの?」

男に先に誕生日を聞かれるというのは、多少おさまりの悪いことだった。

こういうアニバーサリーは、女性の方が率先して動かないといけないのに。

彼らの誕生日を知ること、いろいろ口実ができ、ボスが喜ぶかもしれないのだ。

資料でひととおりのプロフィールに目を通していたが、本人の口から聞いておかなければならなかった。



「オレは11月…15日」

一瞬、言葉にためらいがみられた。

ああ。

「七五三ね」

にこっと笑って指摘すると、将は顔をくしゃっと歪めた。

余り好きではないようだ。

「子供っぽくて、ヤなんだよ」

京は、7月17日。

了は、3月31日。

と、それぞれ聞いておく。

これで、なんなりと計画も立てられる。

「3月31日ですって…年度の終わりだから？」

ふと、そう思ってくすつと笑ったら、将が微妙に苦笑した。

「それ、本人に言うといやがるから…やめてやってね」

うちの親、名づけのセンス悪いんだよ。

将の言葉に、猛烈に笑いがこみ上げてしまった。

「実は、誕生日と名前には関係があるのだよ」

家に帰り着くと、ボスがいきなり玄関先で講義を始めた。

目がキラキラと輝いている。

「た、ただいま帰りました」

絹は、笑顔を浮かべそこねながら、とりあえず玄関を上がった。

「3月末日の了くんは、絹も気づいただろうが…あとの二人には気づいておるまい」

ふっふっふ。

てくてく、居間に向かうさなか、そんなことで勝ち誇られても困る。

「まず、将くん。彼は、11月生まれ…ここに着目だ」

テストに出る重点項目を教えているようなボスの声を横目に、絹はソファにかばんを置く。

「11月の別名は？」

はい、絹くん と、指を差される。

「し、霜月です」

思いつくものを答えた。

「ブツブツ…11月の別名は、サムライの月です」

腕組みをして、ダメな生徒を見る目で見ないでください。

絹は、苦笑した。

しかも、その答えはマッドサイエンティストというよりは、おばあちゃんの知恵袋だ。

「11月を漢字で書くと、武士の『士』に似ているから、サムライの月、というわけで…将くんという名前になりました」

えっへん。

ボスの勝ち誇ったままの解説に、絹は将のセリフを思い出していた。

『うちの親、名づけのセンス悪いんだよ。』

まあ、将はマシな方が。

「そして京くん…7月17日は何の日だね」

「知りません」

絹は、即答した。

少なくとも、世間一般に知られている名称は、その日にはなかったはずだ。

ハッ。

ボスは、お手上げという風に、両手を軽く持ち上げて見せる。

「7月17日は…京都の祇園祭のメインイベントデーなのだ！」

どうだ、すごいだろう。

ボスの全身から、私だけが知っている知識というオーラが、ばんばんに放出されていた。

やっぱり、将が一番マシな名前のつけられ方だな。

ボスのオーラを、さりげなくスルーしながら、そう納得した。

京都、か。

織田の本拠地は、関西だったはず。

ということは、京の名前を決めたのは 桜かもしれない。

絹は、ふとそう思った。

## 兄弟

絹が、本当に自由に動けるのは、体育の時だけ。

だから、何か個人的に動きたい時は、その日が来るまでじっと待たなければならない。

本当は、この行動は余計なもの。

分かってはいたが、絹の中で目覚めているものがあつた。

渡部に対する敵対心と、桜の死に対する好奇心。

正確には、前者が後者の気持ちを引き上げた、と言っている。

渡部が絡まなければ、絹はきっと深入りする気はなかつただろう。

しかし、既に彼女の本当の正体を知る人間がいる。

その事実が、逆に覚悟をさせてしまったのだ。

どんな悪人集団であろうとも、もはや怖いものはない、と。

「ひとつ、貸しにしとくわね」

体操服の委員長が、階段で待っている彼女の方へ戻ってくると、ひとつウィンク。

「ありがとう、委員長…後で埋め合わせするわ」

その後、物陰へ現れた存在を見つめながら、委員長をねぎらった。  
彼女は、そのまま雨の渡り廊下を横切って、体育館へと向かっていった。

「はじめまして、森村さん」

制服のまま、そう絹は挨拶をした。

「何か用ですか？」

中指で、眼鏡の位置を直す仕草。

レンズの奥の目は、絹をじっと観察しているようだ。

しかし、あの渡部に見せた氷の視線ではない。

「ええ…いろいろお話を聞きたくて…長くなりそうです」

絹は、甘い微笑みは浮かべない。

それでは、渡部と同じになってしまいそうな気がした。

「僕は、あなたを知りません…お付き合いする必要はないようですよ」  
が

絹の顔ごときでは、釣られる気配はない。

あの渡部を毎日見ているせいで、美形に対して免疫ができてしま

っているのか。

「私、高坂絹と申します…高坂に聞き覚えはありませんか？」

知らない可能性も高い。

妾の子同士の交流が、あるとは思えなかったから。

だが、持っているカードから、切っていくしかできないのだ。

カードを、全部使っても釣りあがらなければ、絹の負け。

無言で、森村はじつと絹を見る。

そして言った。

「君が、新しい渡部の玩具か…」

「彼は、私を玩具だと思っているんですね」

雨にけぶる図書室の窓。

ここに絹を連れてきたのは、森村だ。

授業をサボることになった、二人の密会場所。

「会ったことは一度しかないけど…兄さんは元気かな？」

眼鏡を一度取り、ハンカチで綺麗に拭う。

声には、勿論愛情などはない。

儀礼的なものだ。

「ええ…少し風変わりですけど」

ただ元気と言うには、はばかられる空気。

森村がまとう、負のオーラを感じるせいか。

「そう…で、僕に何の用？」

拭き上げた眼鏡をかけながら、森村が聞いてくる。

「渡部さんのことを、教えてもらおうと思ひまして」

あなたは、渡部の敵ですか？ 単刀直入には、聞けない！

外側から埋めて、森村という男を探らなければ。

「調べなくても大丈夫…渡部は君にすぐ飽きる…玩具にされるのは、いまだけだよ」

これまで、ずっと彼がそうだったのだと、森村は示唆する。

逆に言えば、それほど長い付き合いなのだ。

「何故、渡部と付き合ってるんですか？ あなたは、とても彼を好



きには見えないのに」

絹は、一步踏み込んだ。

森村の外皮は固い。

外堀を埋めようとして追い返されるなら、中に飛び込むしか策がなかった。

「同じ学年にいたのが、運のツキ……」

ぼそり。

森村の表情が、完全な無表情に沈んだ 次の瞬間。

「僕が、渡部にくっついてるんだよ……」

唇の端だけが、ゆっくりと上がる。

部屋の湿度を、全て凍り付かせるほどの冷気の粒。

絹は気圧され、ぶるっと震えた。

「あれは……僕の獲物だ。放っておいてくれ」

そこには。

狂気と憎しみしかなかった。

「絹さん？」

将に呼びかけられ、はっとする。

我知らず、ぼーっとしていたようだ。

「なあに？」

それをなかったことにするために、笑顔で聞き返す。

ぼんやりなど、していなかったのだと。

あの森村という男の憎しみが、記憶になって絹の足に絡み付いていた。

あれは、きっと 殺意というのだ。

彼は、いつか渡部を、抹消しようと思っている。

その機会を、傍でずっとずっと狙う気なのだ。

一体、どんな出来事が、森村に憎しみを与えたのか。

恐ろしくて、想像したくもなかった。

首筋を軽く震わせて、べっとりと張りつく記憶を跳ね飛ばす。

そんな悪寒を払拭する、将の存在。

彼の瞳の強さは、太陽の下にいるのと同じパワーを感じるのだ。

「あ、いや…そっぴや絹さんの誕生日、7月なんだってね」

了に聞いたのだろう。

しかし、普通は自分が誕生日を聞かれた時に、聞き返しそうなものだ。

その辺が、将らしいと言つべきなのだろうが。

「アニキも7月だから、一緒に何かやるっか…アニキを一人で祝おうとすると、なぜか嫌がるから」

最後の方、将がにやっとしたので、絹もつられてしまった。

なるほど、と。

高校にもなつて家族に誕生日を祝われるのは、かつこ悪いとでも思っているのだろう。

「素敵ね…」

3人の中の、誰にも抜け駆けをさせないという意味では、兄弟と一緒に祝うのがいいのかもしれない。

ボスも喜ぶだろう。

しかし。

将という男が、だんだん心配になってきた。

誰にでもいい人はやめると、行動で警告を出したにも関わらず、またこんな計画を立てているのだ。

たまには、抜け駆けのひとつもしてみろと言いたくなる。

隣のクラスの宮野も、相変わらず彼に絡んでくるし。

もしかしたら、将はお友達レベルでしか、絹を認識しなくなったのだろうか。

「了くんが、二人で北海道旅行に行く計画を立てようとしてたのは…ふふ、笑ってしまってたわ」

だから。

爆弾を放り込んでみる。

「え？ 旅行！？ 二人きり！？ 絹さん、そ、それで…何て答えたの？」

あわあわあわあわ。

将は赤くなって、焦りまくった。

「おことわりしたわよ…二人きりはだめって」

返事に、彼は腹の底からほーっと安堵の吐息をつく。

「あのマセチビめ…」

うなる将を見ながら、絹は少し安心していた。

まだ、大丈夫そうだと。

しかし、彼の本心を知るためには、いつもこうして試さなければ  
ならないのか。

それが、少し困りものだった。

森村

「やつ、絹ちゃん」

部活に行く時、不吉な呼ばれ方をした。

この学校で、彼女を「ちゃん」「づけで呼ぶのは。

わ・た・べ・さ・ま・だ・け。

正直、足を止めたくはなかった。

「将くん、先に行つてて」

同行している、彼だけはここから引き剥がさなければならぬ。

余計なことを聞かれないようにと、余計な手出しをかけられないように、だ。

「待ってるよ」

しかし、この場面で言うことを聞かない将。

その気持ちを、少しは抜け駆けの方に使え、とツツこみたくなる。

「そんなに慌てて、広井を離さなくてもいいじゃないか…ねえ、絹ちゃん」

甘い笑顔と、耳障りに感じる声が近づいてくる。

「何の御用ですか？」

森村いわく、彼が自分に関わってくるのは、一過性のものだと言っていた。

早く興味をなくしてほしいものだ。

「今日の体育：サボったでしょー。悪い子だなあ」

アーメン。

絹は、クリスチャンでも何でもない。

しかし、この瞬間、心で十字を切っていた。

将も聞いているし、胸のマイクもしっかり聞いているはずだ。

そして、あの密会を　おそらく、渡部に知られている。

「何のことでしょう…おっしゃってる意味が、よく分かりませんが」

絹は、完全にシラを切った。

渡部と森村は違うクラスなので、さぼった事をリアルタイムでは知らなかったはずだ。

後から情報が入ってきたとしても、それは森村から直接ではないだろう。

「いいんだよー…そんなとぼけなくても。先生に言ったりしないから」

小ばかにした言葉。

「でもさ…」

もう一歩、絹の方へ近づく。

「アレは、僕のオモチャだからさ…ちょっとかい出さないでくれる？」

歪んだ 声。

「どうせ…壊れたら捨てるんでしょう？」

甘さの消えた声のほうに、よほど絹は対応出来る。

それに、渡部はニヤリと笑った。

「いやいや…壊れるならとっくに壊れてるよ…あいつ、超合金並みに頑丈だね」

絹も、にこりとした。

森村の心が、とっくに狂気に壊れていることを この男は知らないのだ。

「体育…サボったんだ」



ぼつり。

渡部がいなくなって、将がそう呟く。

む、蒸し返さないで。

渡部に対応して、すりへった精神力の時に、今度はそっちから話  
がくると、絹も頭が痛くなりそうだった。

マイクの向こうも、同じように言っている気がする。

これで絹が、万年筆のスイッチを切る時間に、よからぬことを画  
策していると、ボスにバレてしまった。

「渡部さんの親戚って人がいて…そっちなら、もう少し穏やかに話  
が聞けると思って」

あくまでも、目的は桜の話だったのだと 将に思わせたかった。

正確には、森村を対渡部用ストッパーにしたかったのだが。

フタを開けてみれば、とんでもない男だった。

あの様子だと、渡部の人生のストッパーにはなりそうだが、絹の  
高校生活の助けにはならないようだ。

多分、彼は最大の好機が来るまで、渡部に従順なフリを続けるだ  
ろつから。

「そんなこと…一人でしちゃ駄目だよ」

少し、将が傷ついたように見えるのは、気のせいか。

時折現われる、あの翳りが顔を出していた。

「母さんのことで、絹さんが傷つくかもしれないって…それは、変だろ？」

完全に止まった足を動かして、将が彼女の腕を取る。

少し、強い力。

引っ張られるように、絹は歩き出した。

「大丈夫よ…私、意外に頑丈だから」

言って、あっと思った。

さっきの、渡部の言葉だ。

ぐっと。

腕を掴む手に、力がこめられた。

将は、歩き続ける。

その、影を帯びた横顔。

「母さんも、そう言って死んだよ」

抑揚のない、直線の声。

母のことを、そんな風に突き放して言うなんて。

「…ごめんなさい」

反論できなくなった。

絹を失いたくない　そんな、将の声が聞こえてしまったせいだ。

「森村に会ったんだな？」

帰りついた絹は、ボスの一言目に、にっこり微笑んだ。

「ただいま帰りました…素敵な弟さんでしたよ」

森村の話を正確にするのは、難しい気がした。

ある意味、ボスに似ている。

森村は、個人を抹殺しようと考えているが、ボスは世界を滅ぼそうと考えたのだ。

スケールが、違うだけな気がしてきた。

「ボスの言葉通り、渡部を黙らせる材料にならないか、動いてみませんか…広井兄弟じゃないので、ボスも見たくないかと思って」

正論を並べた。

学校のことは、絹が何とかしなければならぬ。

その一つなのだ。

しかし、森村が無理とすると、渡部の攻撃は飽きるまで放置する  
しかないのか。

それと、桜の死の真相。

あてになりそうなのが、その渡部しかないのも考えものだ。

「弱味を握るのが、てっとり早いぞ」

怪しげな装置をガチャガチャひねりながら、島村が言う。

「あいつに弱味……」

現実性を感じなかった。

あるとしたら、森村か。

たかが玩具のことで、絹に釘を刺しにきたのは、どういうワケか。

彼と絹がつるむと、困ることでも。

「ボス、森村さんに一度会ったことがあるんですよ…何か、気になることとか、ありませんでした？」

絹が気づいたのは、渡部を憎んでいることくらい。

「早く帰りたかった記憶しかない」

ボスのツーンとした返事に、絹はお手上げのポーズをする。

「ああ、でも」

何かを思い出したような声。

「本家の連中が、変にざわついていたな…何故かまでは興味がなかったが」

漠然とした、雲を掴む話に やっぱり絹は、お手上げだった。

「森村：学校のデータが不明扱いにされてるぞ」

何かの装置をいじり続ける島村が、ぼそりと言った。

絹の行動や情報から、彼も調べてみる気になったのだろうか。

「それは、ありえないな…あの渡部の息子でさえ、一般情報だからな」

ボスの否定に、島村がぴらりと印刷した紙を出す。

それを受け取ったボスの目が、だんだん中央に寄ってきて。

「な、生意気な！ 私の弟の分際で！」

ビリリッ。

絹が見る前に、紙は破られてしまった。

まあ、見たところで、情報が伏せられていると書いてあるくらいだろうが。

「ありえない……どこから圧力がかったんだ」

更に紙を細かくちぎりながら、ボスは不満たらたらだった。

兄である自分が一般扱いだったのに　どうも、不満の根っこはそのあたりのようだ。

「渡部は、表側に出る立場だから、情報開示しても問題がないはずなんだがな……」

ボスは、さかんに眉間にシワを集めている。

「母親の血筋に、何かあるんじゃないですか？」

島村の冷静な言葉に、一瞬ボスは立ち止まった。

彼の母が、誰か知っているのだろうか。

「もりむら……もり……もり……青柳の分家筋だったか……あの辺の血筋は、ごちゃごちゃしてて、覚える気がない」

ボスが投げ出そうとした言葉は、絹のアンテナに引っかかった。

「青柳!？」

望月と青柳　渡部が並べた、二つの名刺。

絹は、即座に食いついた。

そうだ。

ボスも、調べる気はなくても、一応そっち方向の血筋なのだ。

「青柳って、織田一派において、どんな役割の一族なんですか？」

絹の質問に、ボスが一度唇を閉じた。

「ばかばかしく、つまらない一族だ」

彼は、まったく価値を感じていないようだ。

そんな言葉で、一蹴しようとする。

「お前に話すと、すぐ別の意味で首をつっこみそうだから…教えな  
い」

ツーン。

出た。

ボスの、必殺技。

これをやられると、絹はもう先に進めなくなる。

んー。

せっかく見つけた手がかりも、ボスの野望の前ではゴミ屑扱いになってしまった。

桜だけでも手一杯なのに、森村の謎まで上乘せされる。

共通のするのは、「青柳」という名字くらい。

桜について言えば、関係している　　かもしれない、ということだが。

知っているだろう人間は、ボス、渡部、森村。

どれも、一筋縄ではいかない人間だ。

ボスの機嫌のいい時に、聞くかあ。

絹は、とりあえず味方を選択した。

そのボスを機嫌よくするためには、もう少し広井兄弟でサービスをしないといけない。

「こんにちは、高坂さん」



にうつ。

しかし。

宮野は、相変わらず絡んでくる。

天文部の部室で、後からやってきた彼女が、まっすぐに絹の方へと駆けてくるのだ。

絹の隣には、将。

勿論、彼へも挨拶。

宮野にしてみれば、好きな二人が一緒にいるということは、一石二鳥でおいしいことだろう。

しかし、男女の関係やボスの気持ちは、そんな単純なものでは片付かないのだ。

「そういえば、高坂さん。渡部様とお話してらっしゃいませんでした？」

「悪気のない世間話だ。」

しかし、聞きたくない名前。

「数回…必要だったからよ」

その内二回は、将も一緒だった。

「そう…なんですか。気を付けて下さいね…渡部様、人気がありますから」

気を付けたいのは、渡部自身に、だ。

宮野が言ってるのは、きっと取り巻きだろうが。

「宮野さんも、彼のことは様づけなのね。ファンなの？」

せっかくアドバイスしてくれたので、絹は恩を仇で返すことにした。

将も、彼のことはよく思っていないはずだ。

その相手を様で呼んでいるのだと、彼にアピールする。

「あ、いえ、友達のがうつつちゃって…高坂さん綺麗だし…渡部様とお似合いかなって」

あせったどさくさにまぎれて、何を言っているのか、この天然娘は。

あの男だけは、勘弁して。

絹がこめかみを押さえる横で、将が不機嫌になってゆく。

どつちら宮野の言葉は、しつこく不興を買ったようだ。

## 刺客

「あなたが、高坂さん？」

言葉は標準語だが、イントネーションが、明らかに関西な声に呼び止められる。

昼休みの、広場への移動中　一階から、外へ向かおうとしていた。

振り返ると、なんだか眩しい。

日本人離れた、濃いめの美人が立っていた。

学校なのだから、アクセサリーなどはつけていないのに、全身から金色のオーラでも出しているんじゃないかと思う眩しさ。

こんな歩くゴージャスに、知り合いなんかいなかった。

「渡部のことで、話があるのだけど」

すぱっと本題を切り出す。

しかも、様づけではない。

彼と親しいのだと、アピールしているのか。

先日の、宮野の警告が甦る。

「考えてらっしゃることは、全部誤解です。では、私は行くところがありますので」

話とやらを先回りして、絹は五秒で終わらせた。

そして、すたすたと再び歩き始める。

「なに勘違いしてんねん。うちは、渡部派やあらへん。また、渡部がいらんことしよ思てるから、警告しに来ただけや」

素早い言葉は、標準語では苦手なのか。

こてこての関西弁で、引きとめられる。

んー？

思わぬ雲行きに、絹は微妙な気分になった。

とりあえず、ゴージャス姉さんを振り返る。

「あんた、渡部の不興買ったやろ？ あの男が、むやみやたらに一人の女ほめる時は、痛い目見せよて思てんねん」

取り巻きたちの前で、ぎょうさんほめちぎったで。

あのやりクチ、ムカつくねんと、どんどんしゃべくってゆく。

かなり、おしゃべりな性格のようだ。

ふうん。

渡部が率先して、取り巻きをけしかけようと思っているのか。また、めんどくさいことになりそうだ。

しかし、本人じゃないだけ、マシかもしれない。

まだ、絹は対応できそうだった。

「丁寧に、ありがとうございます」

見た目もしゃべりも行動も、この学校には珍しいタイプだ。

絹は、とりあえず助言にお礼だけ言った。

「あいた…ごめんな、場所悪かったわ」

そんな姉さんが、顔をしかめながら、おもむろに拝むポーズ。

いやな気配がして、絹は振り返った。

気の強そうな美女五人。

宮野グループと違って、全員肝の座った顔をしている。

はーん。

これが、渡部の刺客か。

「はいはい、皆さん…帰って帰って」

五人と絹の間に、ゴージャス姉さんが割って入る。

そして彼女らを、虫のように散らそうとするのだ。

「ちょっと、天野さん…あなたには関係ないでしょ」

いきなりの邪魔に、しかし、相手も怯まない。

「もー、あなたたちが顔揃えてるだけで、何の用かすぐわかるわよ。渡部臭いから、はやくどこかへ行きなさい」

イントネーションだけ関西弁に戻った。

しゃべりづらそうだ。

「あなた、渡部様に相手にされないからって、逆恨みはおよしなさいな」

ほほほと高笑いで、ゴージャス姉さんこと天野を馬鹿にする美女軍団。

「あなたたちこそ、あんな頭も尻も軽い男にくつついてると、自分の価値さげますわよ」

ふふん　ゴージャス天野も、まったく負けていなかった。

「標準語もしゃべれない、西の山猿の居場所など、この学校にはな

くてよ」

痛いところをつかれたのか、天野の頬が引きつる。

「あんたらに聞かせてやりたいわあ、渡部の関西弁。こつてこつてやで」

ついに。

ゴージャス天野の、標準語は崩れ去った。

さて。

絹は、その舌戦を冷静に見ていた。

長くなりそうだな。

もはや、天野VS五人になっている気がする。

絹が、ここにいる必要を感じなかった。

「あつ、絹さん…遅いよー」

そうしている間に、遅い彼女を了が迎えにきてしまう。

美女軍団の険悪な空気に、まだ気付いていない。

「んー私も、ご飯食べたいんだけどねえ」

絹は、視線でちらりと女性陣を見た。

「え、あのお姉さんたちが、どうかしたの？」

了が、目を丸くしながら睨み合う彼女達を、ようやく確認した。

「うん…でもまあいつか…」飯い」

どうせ、絹など視界外の状態だ。

彼女は、六人を置き去りに、了と昼食としゃれこんだのだった。

「あんだ、それないやる！」

昼食と楽しいおしゃべりを終え、高等部の校舎に戻ってきた絹は  
ゴージャス天野に呼び止められた。

どうやら、途中で彼女が抜け出したのに気づいたようだ。

「私がいる必要、なさそうだったので」

渡部の敵という意味では、あの五人にとっては、絹も天野も大差  
ないのかもしれない。

けしかけた渡部には、そこが多少の誤算だったろう。

「あいつら、シッコイんや…もー。最初にガツンと言ったかんと、  
またどうせ来るで」



あーあ、と。

ゴージャス天野は、両手を腰に当てて天を仰ぐ。

「でも…随分、渡部さんにお詳しいんですね」

そこは、特筆すべきところかもしれない。

彼が関西弁を使う姿など、想像もつかないのに。

「幼稚舎から一緒や…中学なってこっちきて、やっとオサラバできる思ったら…また一緒やる。頭イタイわぁ」

お。

思わぬところから、拾い物が出てくるものだ。

本人は嫌そうだが、この腐れ縁の知識は、役に立つものがあるかもしれない。

しかも、珍しく「いい人」属性のようだ。

ここしばらく、情報については氷河期だった絹には、真夏の日差しに見えた。

しかし、どこから聞き始めているのか。

彼女も『織田』絡みなのか。

まず、そこか。

「関西ってことは……あなたも『織田』ですか？」

声をひそめて呟くように言う。

マイクは拾っているだろうが、しょうがない。

「あかんで…あれは、関西の黒歴史や。そんな簡単に口に出したらあかん」

シーツ。

ゴージャス天野は、慌てて周囲をつかがうように、唇に人差し指を当てた。

「うちのおとんの会社は、健全な建設会社やで。あんな真っ黒なヤクザ集団と一緒にせんという」

どうやら。

彼女は、違うようだ。

建設会社。

渡部の家も大手ゼネコンのはずだ。

渡部組。

「天野…建設」

もつひとつ、絹の頭によぎった会社名。

「そつや。うちは、関西の建設業界の女帝になる女や」

ふわはははは。

勝ち誇るように、ゴージャス天野は高らかに笑うのだった。

結局、予鈴に邪魔されて、ゴージャス天野から大した情報を聞き出すことはできなかった。

頻繁に彼女に会うのも不自然だし、ボスもいやがるだろうから、またお節介に現われたところを聞くしかないだろう。

と、その前に。

五人が来るのだが。

部活に行く途中なので、将と一緒に時だ。

「高坂さん…ちょっといいかしら？」

昼休み、見事にゴージャス天野に邪魔されたせいで短気になったのか、将がいても気にせず声をかけてきた。

「いえ…よくないです」

立ちふさがる、悪のおねえさまズに、絹ははっきりと拒絶を表し

た。

瞬間的に、相手の顔が引きつる。

「何事？」

将が、耳打ちしてくる。

迫力のある美女五人のお出迎えに、驚いているようだ。

「渡部って人の取り巻き」

さつとそれだけ答えると、「おー」と将がまじまじと彼女らの顔を見る。

「五人もかあ」

妙に感慨深げだ。

つくづく、平和な頭にできているようだ。

そんな女性たちに、なぜ絹が呼び出しをかけられているのか、考えて欲しいものだ。

「そんなにお手間は取らせなくてよ…ちょっとあちらでお話しない？」

ぴつきぴきにこめかみを引きつらせてそんな事を言われて、誰が  
ついていくと思うのだろうか。

ゴージャス天野とのやりとりを、既に見ているというのに。

「お話はありません、お断りします…いこ、将くん」

絹が、取り付く島を見せるはずがない。

まだ五人を眺めている将の腕を取り、彼女らをすり抜けようとす  
る。

その前を　　身体でふさがれた。

「ごめんなさいね…どうしてもお話ししたいの」

ふふふと微笑まれて、絹は視線を横に流す。

さて、どうしたものか、と。

「ねえ…」

そこへ、将が口を開く。

そうだ。

彼と一緒にだったのだ。

ここまであからさまな妨害をされれば、将だって黙っているはず  
がない。

「五人の中の、誰が渡部さんの彼女なの？」

そこか。

お前が、気になっているところは、そこなのか！

絹は、ひっくり返りそうになった。

だが。

その言葉は　五人の仲に、亀裂を入れたのだ。

「驚いた…」

絹は、笑いながら部室棟に到着した。

将の放った一言が、五人を仲間割れに導いたのだ。

皆が、「私が一番」と言い出したのである。

そのまま、内輪でドロドロの舌戦が始まったので、二人はその隙に逃げ出したのだ。

「よく、あんなうまい言葉を言えるわね」

将にしては、上出来の知能技だった。

「ああ…あれね」

くすっと、何かを思い出したように笑う。

「前に、兄貴の周りにいた女の子たちに同じこと言ったら、とんでもないことになってね…使えるかなって」

言葉に、絹はもつと笑った。

その光景が、容易に思い浮かんだのだ。

「兄貴もコリたのか、それ以来、女の人たちを連れ回さなくなったなあ」

あの京も、渡部みたいなことをしていた時期もあったのか。

そう絹が、脳裏の彼に新しい情報をくっつけようとした時。

「誰が…何だつて？」

背後から。

低く、引きつる声。

二人同時に、ぱつと振り返っていた。

広井家の長男が、腕組みして突っ立っているではないか。

「あつ、いや…全然つ、普通の世間話」

将が、無罪を主張するが　まあ、無理だろう。

おそらく、後半は聞かれているに違いない。

「余計なこと言つな」

ゴスツ。

平手で弟の頭を上から抑えつけるように、ぐいぐい重力を加える。

「いて…兄貴いてえ…何も言っていないって」

必死で抵抗する将。

その光景に、絹はくすくすと笑いを止められないでいた。

「京さんが、モテるって話を聞いていただけですよ」

笑いながら、助け舟を出す。

あんど　京の顎がこつちを向いた。

目が合う。

「こいつも、生意気にも結構モテるぞ」

頭を抑えている弟を、更にぐりぐりする。

「いて…兄貴…何適当なこと言っ…」

じたばたする弟が、手と言葉に抵抗したが。

「あつ、こんなところにいたんですか」



後からやってきた宮野の存在が  
った。

将の抵抗を台無しにしたのだ

確かに、モテているようだ。

了敗北

ゴージャス天野に再会するのは 意外に早かった。

翌日の昼休み。

最近、1階に降りると騒ぎが起こるので、絹は慎重だった。

「お、高坂さん」

本日は、ゴージャス天野。

マシな方が。

「こんにちは」

絹は、反射的にキョロキョロした。

例の五人が、また出てくるのではないかと思ったのだ。

「あ、せやな…外いこ」

すぐに気づいたらしく、彼女に促される。

いや。

あなたと一緒にいる必要も、ないんですが。

「きーぬちゃ……げっ、アマー…」

しかし、校舎から出るより先に、背後からかけられたお軽い声が裏返った。

「あいた、お山の大将がひっかかってもた…はよ出よ、高坂さん。孕まされんで」

振り返るなり、ゴージャス天野も、お嬢様にあるまじき言葉で応戦。

そのまま、絹の背中を押す。

「待て、アマ…なんで、お前が絹ちゃんど？」

「あなたには関係あらへん…この子は、うちの妹分や…なれなれしゅ呼ばんというて」

猛烈な速度で歩く天野に押される絹も、足を高回転させる。

それでも、後方の男がひきはがせないということは、ついてきているということだ。

しかも、いつの間にか妹分にされている。

おそらく、渡部の攻撃をかわす防弾幕にするつもりなのだろう。

根っからのお節介のようだ。

まさかな方角から、対渡部ストッパーが現われた、ということだろっか。

校舎から押し出されたところで、ようやく足を止めたゴージャス  
天野が振り返る。

「いい加減、気に入らん娘、つぶすような真似やめい。どうせ、あ  
んたになびかんかったとか、そんなとこやる？」

あんた、いつつもそうや。

ビツシィー！

指を突きつけ、決め付けポーズ。

オーラがゴージャスなだけに、迫力はものすごいものがある。

「アマ…お前が絡むと、いつもややこしいことになるんだよな。絹  
ちゃん…こいつ、トラブルメーカーだぞ。関わらない方がいい」

歩くトラブルメーカー、渡部のセリフとは思えない。

「あんたに言われとない」

うーん。

二人の対決を見ながら、絹は今日も抜け出してもバレない気がし  
てきた。

「ああ、天野女史は有名だな」

帰りの車。

世間話の中で、京が反応する。

さすが、一年長くこの学校にいたので、噂くらいは耳にしたことがあるようだ。

「歩くスポットライトとか、フラッシュ女史とか、あだなだけは豊富だぞ」

言いながら、京も笑っている。

「昨日の昼休みに、絹さんと一緒にいたおねーさん？ 確かに派手だったよねー」

了の記憶からも、すんなり引き出されたようだ。

人の記憶に残る才能は、誇っていいだろう。

「でも、あの女の人たち、なんだったの？ 絹さん、待ってなかった？」

了の記憶は、余計なものを掘り出した。

「そうだな…なんで三年の天野女史が、おまえの話に出てくるんだろっな」

京が、見逃すはずがない。

「絹さんに何かあるって、昼休みくらいしかないんじゃないか？  
了との昼ご飯が、問題だとオレは思ってるんだけど」

真面目な顔してババンバン。

将は、正論っぽく了の昼の楽しみを奪おうとする。

「ええー」

とぼつちりを食ったのは、了だ。

ゴージャス天野の話が、自分に及ぶとは思ってもみなかっただろ  
う。

「私は、別に大丈夫よ……」

校舎の違う了に会う、貴重な機会なのだ。

ボスが、淋しがるではないか。

「分かった」

何かを決意したような将の声。

何が分かったのか。

「今度からオレも、一緒に行くよ」

同じクラスだから、行き帰り一緒に安全だろ？

なんと。

ここで将は、昼食タイムに割り込むという荒技を繰り出したのだ。

「ええー」

不満たらたらな了の声。

彼にはかわいそうだが　　今頃、ボスはVサインだろう。

「そう言えば、誕生会の話が出ていたな」

ボスが、なぜだかソワソワしている。

話が出たのは今日、というわけではない。

まだ広井兄弟から、具体的な話は聞かされていなかった。

「どうかしました？」

絹の誕生日に、興味を示すはずはない。

あるとしたら、京の方。

京都の祇園祭とやらに、興味でもあるのか。

「いや、会の場所は広井邸なのか？」

「ごほんごほんと、不自然な咳払い。」

「あー。」

絹は、そこで察したのだった。

「広井邸で誕生会とやらがあり、そこにチヨウが参加するのではないかと期待しているのだ。」

「どうも　ボスも参加したらしい。」

「聞いておきますね」

くすくす笑いを止められない絹は、勿論ボスの意向に沿うつもりだ。

「いや、うん…まあ」

曖昧に反応するボス。

「広井兄弟で、こんな状態になることはない。」

「さすがは、チヨウの威力といったところか。」

「そんなボスの後ろを、珍しくぼーっとしたような島村が通る。」

「あ。」

「そんな彼を目で追った絹は、見てしまった。」



ゴンツ。

壁と、正面衝突する島村を。

はっと、彼はそこで我に返ったようだ。

絹の視線に気付くと、逃げるように居間を去って行った。

「島村さん…具合でも悪いんですか？」

珍しい様子に、絹は聞かずにはいられない。

「ここ二、三日、あんな感じだぞ…研究のことで、頭いっぱいなんじゃないか？」

ボスの言葉に、絹はとりあえず納得した。

一緒に住んでいるとはいえ、彼女はほとんど島村のことは知らないのだから。

昼食タイムに将が加わるようになって、確かにトラブルは減った気がする。

「そろそろ、梅雨明け宣言、出るんじゃないかな」

まだ雲はあるが、雨は減ってきた。

将と二人でランチに向かう最中、絹は空を見上げた。

七月。

絹の誕生日が間近だ。

このまま梅雨が明けると、もしかしたら誕生日は星が見られるかもしれない。

誕生会は、絹と京の誕生日の中間の土曜日になった。

広井邸でベーシックな集まりかと思いきや、昼から移動を開始して、素晴らしい星の観測会をしようと提案されたのだ。

知り合いのペンションの近くだから、そこに泊まるのだと。

さすがは、星好き一家。本格的だ。

これだけ大がかりな計画だから、勿論チョウが絡んでいる。

「絹さんも、保護者が一緒の方が安心だろうから、行けるか聞いてみてよ」

素晴らしい申し出に、絹は二つ返事でオーケーを出したかった。

しかし、一応は「聞いてみるね」と、保留にしておく。

今頃、「チョウとお泊まり！」と、ボスが小踊りしているに違いない。

また、日本の気象衛星が乗っ取られるのか。

「京さんへのプレゼントは、何がいいかなあ」

ボスに抜かりはないだろうが、絹は悩みどころだ。

何か形に残るものを渡して、見るたびに彼女を思い出し出してくれると好都合に思えた。

「なんでも喜ぶよ」

将が、アテにならないことを言う。

「京さん、気難しそうだから…悩むわ」

将や了は、何でも喜んでくれそうなのだが。

「絹さんからももらえるなら、何だって喜ぶって」

言葉に微かなひっかかりを感じて、絹は彼を見た。

その、微妙な困り笑いはなに!？

また、将はいい人になろうとしているのか。

## 祭の前

「高坂さんっ」

この、イントネーションは。

放課後、将と部室に向かおうとしていた時、呼び止められた。

「こんにちは」

振り返ってあいさつすると、ゴージャス天野がいた。

将が、三度瞬きをした気持ちはよく分かる。

「最近、アレには絡まれてへんのやね、よかったよかった」

上機嫌な様子に、なおさら眩しく感じる。

「アレもいまは部活で忙しいからなあ。インハイ終わるまで、あんま心配せんでええで」

うんうん、と自分の言葉に頷く。

ああ。

最近静かなのは、将という番犬のせいだけではなかったのか。

悪い奴なのに、結構テニスは真面目のようだ。

テニスと言えば。

「森村さんも出るんですか？」

あの、冷たい目をした男を思い出す。

「あんた、森村も知ってるんか。あいつ、ダブルスやったっけな。出るんちゃう？」

彼の名前への反応は、さらりとしたものだ。

ゴージャス天野は、森村にはたいして興味がないのか。

「彼は、関西出身じゃないんですか？」

織田絡みの母がいるなら、関西かと思ったのだが。

「違うで。こっちきてからやなあ、あいつ見たん」

答えを聞きながら、絹はこの辺で切り上げようと思った。

ゴージャス天野は、織田側ではないので、これ以上は知っていません。うにない。

「あ、せやけど」

ぽつと、彼女が言葉をこぼす。

不思議そうに。

「せやけど、なんであいつ毎年、がっこ休んで一緒に祇園さんに行ってるんやろ」

祇園さん 京都祇園か！

しかも、渡部と一緒に、か。

うわぁ、怪しい臭いがプンプンする。

鼻にまとわりつく織田臭さに、絹は顔をしかめたのだった。

「森村さんって？」

ゴージャス天野が立ち去って、再び二人になると将が聞いてきた。

そういえば、彼のことは知らないんだっけ。

「先生の親戚…何故か、あの渡部さんとよく一緒にいるんで、気になっ」

「こういう時、親戚関係というのは強い。」

「そうなんだ」

将は、疑うことなくすんなり納得したのだ。

「でも祇園かあ…母さんと一回行ったなあ。暑かったのは覚えてる」

へえ。

将の思い出話は、興味深い。

「ちょうどアニキの誕生日だからね、宿でケーキを食べたなあ」

将の小ささでは、その辺が記憶の限界だろうか。

京なら、もっと覚えているに違いない。

「お母さん、京都の人？ 京さんの名前もそれっぽいし」

さりげない質問に、将は考え込んだ。

「どうだろうなあ…なまりはなかったと思うんだけど」

さっきのゴージャス天野のこてこてっぷりが、頭に残ってるのだらう。

しかし、渡部のケースもある。

なまりだけでは、判断しづらいだろう。

祇園祭に、なにか秘密の匂いがするが、なぜか連れていかれるという、森村くらいしか聞く相手がいなかった。

もう一回、会ってみるかなあ。

絹の中に、その気持ちが芽生えたが、いくつか問題点があった。

ボスと渡部が、それを許してくれないんじゃないかと　　そう思ったのだ。

将が、珍しく学校を休んだ。

「ただのハライタだ」

京は、一言で切って捨てる。

「夕食前に、厨房につまみ食いに入ったんだよ、おなかすいたっておかしくてしょうがなさそうな、了。

「今日のあいつは、トイレの住人だな」

詳しく想像したくない方向の、話になってきた。

「大丈夫？　お見舞い、行った方がいいかな」

家に行くとボスが喜びそうなので、絹はそんな下心を持った。

「い、いや…今日はやめてやれ」

「うん…将兄い、かわいそうだから」

しかし、兄弟二人に止められては、さすがにゴリ押ししようもない。



残念。

そんな絹の気持ちをよそに、了が異様に上機嫌だ。

「将兄には悪いけど、今日はお昼は絹さんと二人」

そして 正直すぎる口。

あ、あははは。

自分の欲望に素直な彼に、苦笑するしかなかった。

「オレが行ってやろうか？」

ニヤツ。

そんな声が、助手席から聞こえる。

「京兄いつ！ そんなことしたら…僕、呪うからね…」

せつかくの久しぶりの楽しみを奪われまいと、未っ子も必死だ。

精神攻撃まで視野に入れてきたか。

「はいはい…勝手にしろ」

放り投げるような、しかしニヤニヤするような声。

かわいくてしょうがないのだろう。

「あ、絹さん…心配なら、僕、高等部に迎えに行くよ」  
将という番犬がないのだ。

了も、移動を心配してくれている。

「大丈夫よ」

いま、渡部はテニスのおかげで、絹を攻撃対象から外しているのだ。

逆に、安全にさえ思える。

「僕、少ししか待たないからね…ちょっと待ってこなかったら、すぐ迎えに行くからねっ」

可愛い了の主張に、絹はハイハイと微笑んだのだった。

そう。

確かに、渡部はいま忙しい。

だが。

「しぎげんよう」

五人の女が、忙しいわけではなかった。

忘れてなかったのね。

昼休み、1階で絹は足止めを食らってしまつた。

天野の気配を探すが、いま渡部がおとなしいので、彼女も完全に油断していたようだ。

現われる様子はない。

さつさとやりすごさなければ、了が迎えにきてしまつた。

「ごきげんよう、さようなら」

絹は、挨拶を即座に別れのものに変え、脇をすりぬけようとした。

しかし、相手は五人。

影分身のようにスライドして、行く手をふさがれてしまつた。

あーもう。

「誰が渡部さんの恋人か、決着はついたんですか？」

将からの受け売りの技を繰り出してみる。

しかし、先頭のボス級の女は、それにフフンと笑った。

「渡部様の愛は、地球規模ですよ…誰か一人しか選ばないなんて、そんな器の小さい男じゃありませんわ」

自慢げに言われる言葉に、絹はあきれる。

それって、ただ単に渡部に丸め込まれただけじゃ。

複数の女を囲うのを、正当化するだけのへ理屈。

さすがは、あの女好きの祖父の血を引いているだけのことはある。

「じゃあ、なぜ私に絡んでくるんですか」

彼女らの前で渡部が絹をホメちぎっていたことが、嫉妬の原因らしい。

どうしてそれも、地球規模の一環にしてくれないのか。

「渡部様が…取り立ててあなたの顔をほめたのよ!」

「そんなこと、私たちにもなさらなかったわ」

「『可愛い』とか『綺麗』はおっしゃってくださいるけど、あなたの顔だけは特別おほめになったのよ」

その時のことを思い出したのか、涙目になって悔しがる女性もいた。

あー。

絹は、額を押さえた。

それはどう聞いても 渡部のイヤミだ。

彼は、この顔を偽物だと知っているのだから。

陰険すぎる。

記憶の中の渡部に、絹はアップパーカットをくらわせたのだった。

「で、私にどうしろと」

いちいち絡んできて、どういふ要求があるというのか。

今後もう口つかれると面倒なので、さすがに絹も彼女らの要求がなんなのかを聞いておこうと思った。

顔をホメられたから、どうしたいというのだ。

「整形してちょうだい」

きっぱり。

先頭の女は、即答だ。

は？

「うちのお抱えの美容整形医師を紹介するわ、費用も私持ち。勿論、醜くなんかしなくてよ」

真顔だ。

本気だ。

絹は 頭が痛くなってきた。

金持ちの考えは、飛躍しすぎる。

「ご希望の顔があれば、期待に沿いますわ。ですから…その顔を捨ててちょうだい」

今日ほど、天野の登場を切望したことはなかった。

余りに異星人すぎる思考に、絹は脱力してしまったのだ。

蹴散らして行きたいのに、その気力を奪われた。

とりあえず、答えは決まっている。

「おことわりします」

しゃべると、口から自分の魂が出てきそうだ。

それくらい、絹は疲労していた。

「手荒な真似はしたくなくてよ…はいと言ってくださらないかしら」

絶対、頭おかしい。

脅しに切り替わった女性陣に、絹がドン引きしていた時。

五人の頭の向こうを、更に頭ふたつほど高い存在が通り過ぎる。  
はっと。

絹は、それが誰であるかに気づいて、口の中に魂を戻した。

「森村さん！」

絹の会いたかった男だ。

すっ。

高い視線が、絹の方へと向けられる。

ああ、と。

目が彼女を認識した。

「……………」

しかし　そのまま、行ってしまった。

ガン無視デスカ！

兄の養い子は、一瞬にして見捨てられたのだった。

「何してんねん！」

神！

こんなにまで、関西弁が愛しく思えたことはなかった。

「天野さん、またあなたですよ」

ゴージャス天野の登場に、五人の美女はざわめく。

意識がそれた一瞬を、絹は見逃さなかった。

分身の術をすりぬけ、五人の包囲網を突破したのだ。

「ちよっ！」

気づいた天野が、頓狂な声をあげるが、絹は振り返らなかった。

今は、それどころではなかったのだ。

森村は、校舎の外へと向かっていた。

絹の行く方向と同じだ。

出て行くついでに、用事をすませよう。

滅多にない好機だった。

「森村さん」

背の高い人間は、便利だ。



どんな距離からでも、見逃しづらい。

振り返る、冷やかな瞳。

絹の存在を、快くは思っていないようだ。

彼女が絡むと、渡部がきつとつかかってくるだろう。

この間の、図書室の一件もバレていたし。

「ひとつだけ」

拒絶される前に、絹は人差し指を立てた。

挨拶も、さっきのことも抜き。

最重要項目を、1つだけ突きつける。

「祇園祭で、何があるの？」

ざわり。

聞いた直後、絹の首筋の産毛が、一斉に逆立った。

冷やかな目、ではない。

絶対零度級の、凍りつく目だ。

それは 怒りで出来ていた。

その怒りが、まっすぐ絹に向けられる。

長い腕が、彼女に伸ばされかけたのに、反射的に飛びのいていた。

殺気さえ、そこにはあったのだ。

防御本能だった。

「絹さん」

了が割って入ってこなければ

絹はどうなっていただろうか。

## 変態の話

「もう森村には関わるんじゃない」

家に帰ると お目玉が待っていた。

うーん、やっぱり。

全部、見られていたのだ。

絹も、さすがに言い訳のしようがなかった。

が。

「と言っても、また首をツッコミかねないな。知ってることだけ教えてやるから、それでこの件は終わりにしなさい」

はあ。

ボスが、本当にしようがないという風に、大きなため息をつく。

おっ！

思わぬ人が、折れてくれた。

絹は、味方の参戦に小踊りする。

さっさと好奇心を満足させて、広井家に集中させたいのだろう。

もともとは、桜の死因を探っていたら、渡部や森村にたどりついたのだ。

しかし、祇園祭にあの反応は異常すぎる。

本当に、森村に殺されるかと思った。

「あー」

ボスは、一瞬ウツな表情になる。

そんなに、いやなことを言わなければならないのか。

「アレが、青柳の分家の出で、毎年祇園に連れていかれてるのなら……おそらく、私の推測だが……」

一瞬の間が、絹には何分にも感じられた。

「おそらく……種馬にされている」

ボスは平然と、女子高生の前で、種馬と言いつつ放った。

さすがは、科学者。

正答の前では、言葉の品性は関係ないらしい。

しかし、絹はさすがに頭が真っ白になって、絶句してしまった。

たね？ え？ たねっ？

「青柳一族は、大昔から織田の遺伝子コーディネーターだ」

えと、そうか、変態の話か、うん、そうか。

混乱したまま、絹は変な単語で自分を納得させようとしたのだった。

「血の近さ、遠さ、容姿、健康状態、頭脳、体力。それらを計算して、理想の子供を作るのが、青柳の仕事だ」

やっと絹はソファに座り、ボスの話を聞いていた。

原始的な、遺伝子操作か。

なんとなく、絹にも理解できてきた。

「重要な一族の、婚姻相手を探したり作ったりすることが多いが、な」

絹の頭に、渡部がよぎった。

あの容姿、運動能力が、意図して作られたものだとしたら 納得できそうだな。

「森村に、何の価値を見いだしたかは知らないが、ブリーディングの材料にされているのだから」

詳しく想像したくなくて、絹は顔をしかめた。

彼は、毎年京都で、理想の子供を作らされているというのだ。

「なんで、言うことを聞いてるんだろう」

京都まで行かなければ、そんな地獄も避けられるはずなのに。

あの彼が、そんなに素直に言うことを聞くとも思えないのだが。

「相手は…悪人だぞ」

いつの間にか、島村が部屋の隅にいた。

なぜ、そんな隅に。

絹はつつこみたかったが、今は素直に言葉を聞く。

「言うことを聞かないなら、弱みでもなんでも握って…言うことを聞かせるだけだろう」

マッドサイエンティストも、悪寄りの人間だ。

悪の考えることなど、簡単に分かるに違いない。

そりゃあ。

そりゃあ、殺意も覚えるわな。

ぞっとしながら、絹はその事実を噛み締めた。

「デキのいい子供は、あちこちの分家に養子に出される。森村も、もう何人かの子供の親だろう」

ボスは、青柳は好きではないらしい。

彼の科学者の美学と反するところでもあるのだろう。

モラルだけで、毛嫌いするはずはない。

ボスそのものが、モラルを既に欠落しているのだから。

「デ、デキの悪い子供は？」

絹は気になって、おそるおそる聞いてみた。

「聞かない方が、いいと思うぞ」

島村が、先に口をはさんでくる。

ボスも、絹の方を見ないようにしている。

本当に 聞かない方がよさそうだ。

二度と森村に、祇園祭の話はすまい。

自室に戻った絹は、それを心に決める。

そして、不謹慎ではあるが、彼が渡部と言わず、織田そのものを

ぶつ壊してくれることを、願わずにはいらなかった。

しかし、そのえげつない話のおかげで、桜の秘密に一つ近づいた気がした。

彼女は、おそらく遺伝子コーディネーターで生まれた、デキのいい子だ。

絹はベッドに腰掛け、大きく息をついて脳を活性化させた。

最初から望月という家に生まれたのか、はたまた養子に入ったかまでは分からない。

しかし、これで渡部が、なぜ望月か青柳という名字を並べたのか、納得がいくのだ。

そして、桜は誰かの嫁になるか、次世代の自分を作る道具になるはずだった。

だが、チヨウと恋に落ち、駈け落ち同然(?)で、結婚したのだ。

更に、妄想を膨らませるなら。

彼女を連れ戻そうとする、織田側の人間に追い回され、カーチェイスの果てに事故。

遺体を何に使うかは知らないが、織田側が引き取って ジ・エ  
ンド。

遺伝子コーディネーターという青柳の肩書きを考えると、ただ静



かに埋葬、とは思えなかった。

ここにいられなくなったら、探偵にでもなるのかな。

気分の悪くなる話を、絹は違う考えで塗りこめてしまったかった。

軽い、現実逃避だ。

しかし、こんな推理を、京や将には絶対できそうになかった。

## 冥王星から愛をこめて

忌まわしい祇園事件が、ボスの説明で一段落すると、絹は頭を切り替えた。

再び、ボスの要求通り、広井ブラザーズの相手に専念することにしたのだ。

ボスも誕生会に参加する気満々で、気象衛星のチェックから、京へのプレゼントまで、抜かりはないようである。

絹も、そろそろプレゼントを選ばないといけないだろう。

金持ちだからなあ。

絹は、頭が痛かった。

何を買っても、安っぽくなってしまいそうだ。

「島村さん、誕生日にもらってうれしいものは？」

ちよつと、アンケートをしてみる。

「政府転覆のニュース」

超真顔だ。

聞いた私が、バカでございました。

「ハハハ、島村くん。そういうのは、自分でやってこそ価値があるのだよ」

君の野望も、まだまだだな。

違う方向に、ボスがたしなめる。

「すみま…っ」

ガンツ。

異音に、絹がはっと顔を向けると、島村がソファの角あたりで脚を抑えていた。

この間ほどひどくはないが、まだ少しぼーっとしているようだ。

「島村さん、変じゃないですか？ やっぱり」

本人を目の前にして、絹は聞いてみた。

このマッドサイエンティストの助手が、あちこちアザを作っているのは、どういうことか。

「変な薬でも試しました？」

自分をも、実験材料にしかねない彼らだ。

「ああ、それなら…」

ボスが、心当たりがあるように人差し指を立てた。

お。

しばしの間、ボスは真理に行き着いたのか。

「先生……」

しかし。

即座の、島村の牽制に　上司は、軽く両手をホールドアップさせた。

「分かった分かった……島村くんは、薬のやりすぎでぼーっとしてるだけだ」

わざとらしくも、とんでもない言葉で、ボスはフォローする。

嘘だと、丸バレではないか。

まあ、ボスの様子からすると、そんなに深刻な内容ではなさそう  
だ。

京へのプレゼントに対する悩みと、どっちが重いだろうか。

買い物に行こうか。

いいものが思い浮かばなくても、実際に何か見ていけば、じっくりくるものが見つかるかもしれない。

誕生会の一週間前の土曜日。

絹は、具体的な行動を起こすべく、出かけることにした。

駅五つくらい遠出をすれば、欲しいものは大体何でも手に入るエリアがある。

ボスに渡されているカードがあれば、とりあえず買い物には困らないだろう。

ぼん。

そうだ。

絹は携帯を取り出して、メールを打ち始めた。

起きてるかなあ。

時計を見ると10時。

すぐにメールは返ってきた。

起きていたようだ。

『 ( W . ) 。 。 〇  
おはよ…きぬさん〜  
ゞ ( 。 ー ^ \* ) 』

訂正 メールで起きたようだ。

返信で、京の誕生日のプレゼントを買いに行くので、付き合っ  
て欲しいと告げる。

『行く！』

すぐしたくする！

（ ^o^ ）ノ』

速攻のおこたえ。

よし、末っ子釣れた。

絹は、ガッツポーズした。

ボスは、おそらくいま秘密部屋だが、メールは自動転送なので、  
このメールも見ているはずだ。

またペンが活躍しそうだ。

あの万年筆をつけていても、おかしくない服はないだろうか。

出かけるために、部屋のクローゼットを漁り出した。

そういえば。

週末に学校外で、広井ブラザーズに会うのは初めてだ。

その相手が、了というところが、可愛らしい選択だったが。

メールがもう一度鳴った。

『車空いてた！』

家まで迎えに行くよ

( \* ^ \_ ^ ) b 『』

あらら。

電車での移動の予定が、地球に優しくない方向に変わったようだ。

まあ、どうせこの星は、ボスの気分次第で壊されるものだし、いっか。

絹は怖いことを考えながら、準備を続けたのだった。

「お待たせー」

薄い真っ白のパーカーに、膝が出るくらいのハーフパンツ。足が大きく見えるバスシュに、メジャーリーグのキャップ。

現われた了は、年相応の元気な少年のいでたちだった。

あらら。

小花柄のワンピースに、ボレロ風の上着（胸ポケットのある服のため）の絹とは、系列の違うファッションになってしまった。

もう少し、了の趣味を把握しておけばよかった。

今更着替えに戻るわけにもいかず、絹は『お姉さんと買い物に出た弟』風の組み合わせで、我慢することにしたのだ。

「多分、京兄イのプレゼントなら、ハンズとかロフト系の方があると思うよー。服は、いろいろうるさいから」

将と違って、弟くんは具体的に方向を決めてくれた。

助かった。

絹は、彼の指定に従うことにする。

「了くんは、何を買ったの？」

車で移動中、聞いてみる。

「ラジコン」部屋の足を飛び回らせられるへり」

えへへへ。

少し子供っぽいプレゼントな気がしたが、了らしいといえそうか。

一応、メカっぽいところは、評価されるだろう。

「天文系から見てみよっかーいいのなかったら他の階いこー」

到着するなり、腕を取られた。

テンションも機嫌も、高い位置で跳ねている。



楽しくてしょうがない感じだ。

誘われて嬉しいのだろう。

名指しで一人誘ったことだけで、そんなに喜んでもらえるなら、また誘いたくなる。

甘え方を知っている子だ。

絹さえも、釣られて笑顔が多くなってしまっ。

天文コーナーで、見知らぬものを二人でこねくりまわしてはしゃぐ。

「こっちは？」

「うーん、いまいちかなあ」

あれこれ見ている間に、ふと、絹の目に止まったものが。

「なんで天文コーナーなのに、CDが？」

パッケージには、惑星の写真。

ホルスト 「組曲：惑星」

「あー、僕それ知ってる『木星』が有名だよ。ほら、『ジュピター』ってカバーされた奴、流行ったでしょ」

流行ものは、最近シャバに戻ってきた絹には、ちと厳しい話だった。

「冥王星が…ないわ」

CDのパッケージをひっくり返して曲名を見て、絹は小さく呟いていた。

「あ、そっか…冥王星って、惑星から除外されちゃったんだよね」

了が、ぼんと手を打つ。

なんだか可愛いそのしぐさに、絹はくすつと笑ってしまう。

でも、多分彼の言葉は違う。

パッケージを見る限り、この曲が作られたのは、いまからちょうど100年くらい前。

逆だわ。

気づいた。

逆だ　この曲が作られた時、まだ一番遠い冥王星は見つかったいなかったか、惑星と定められていなかったのだ。

だからこの曲は、海王星までで終わってしまった。

一番最後に惑星の仲間に入り、一番最初に仲間から外されてしまった遠い遠い星。

冥王星自身、こんな遠い星で自分の論議をされているなんて、きつと知らない。

自分の歌だけがないなんて。

きつと知らない。

「絹さん？」

パッケージを見つめたまま、絹が考え込んでしまったため、了に呼びかけられる。

「あ、ごめんね……」

でも、CDから何となく手が離しづらい。

「プレゼント…それにするの？」

考えてもいなかったことを聞かれて、絹はふと動きを止めた。

「京さん、クラシックは好き？」

質問に、了はウーンとうなる。

「聞いているの、見たことはないなあ」

確かに、そんなタイプには見えない。

「うん、これにしよう」

絹は、悪戯心で笑みながら、もう一枚CDを取った。

2枚。

「え、もう一枚は？」

言葉に、彼女はにこっと目を細める。

「自分用よ」

2枚のCDを持ってレジに行く絹に、なぜか了も真似して1枚取る。

「それは？」

絹の質問に、了もにこっと笑った。

「自分用だよ」

真似っこさん。

二人で、顔を見合わせて小さく笑う。

京に贈る時には、カードを添えるのだ。

『冥王星から 愛をこめて』

いまも確かに在るのに、いつか忘れられていく、絹と同じ運命の星。

## お嬢様の本気

了が、ひとつ上の階を見ている間に、絹はお手洗いへと向かった。

鏡の前で手を洗いながら、髪型のチェックをする。

プレゼントも決まったし、一安心。

京が、皮肉のこもったそのの、本当の意味に気づくことは、もしかしたら一生ないかもしれない。

しかし、確かに絹はあのCDに、自分という人間を込めたのだ。

水を止め、バッグからハンカチを出す。

絹の後ろを、二人の女性を通りすぎ　　ない。

鏡ごしに、目が合った。

あっ。

知らない人間だった。

しかし、絹よりももっと年上の、大人の女二人が、彼女に手を伸ばしてくるではないか。

その手に握られる、白いもの。

全て、鏡ごしの出来事。

とっさに、右に一歩。

濡れたままの手で、右の女性の伸ばされた腕を脇に挟むように掴む。

腕ごと身体を振り回して、もう一人の女の方に放り投げる。

「きゃあっ!」

「いたあい」

遠心力で吹っ飛ぶ身体にぶつかられ、二人まとめてトイレの床にすっ転ばせることになった。

本格的に、武道をやっている人間ではない。

倒れたはずみに落とした白いものは、ハンカチだった。

それを拾い上げ、ちょっと匂いをかいただけで絹は顔を顰めて離した。

覚えのある匂いだ。

訓練でも出てきた、クロロホルム様だ。

なるほど。

腕に覚えがなくても、この布きれを押し付けさえすれば、なんとかなると思ったのだろう。

あちこち押さえながら、立ち上がるお姉さまたち。

絹は、ピラリとそのハンカチを二人に閃かせた。

「ごめんあそばせ…護身術を習ってますの」

不適に微笑んで威嚇する。

おそらく、あの五人組の誰かの差し金だろう。

どういいう見張り方をしていたかは知らないが、こんなところにまでお迎えがくるなんて、穏やかじゃない。

しかし、その行動の雑なこと。

さすがはお嬢様が、自分で考えるやり方だ。

かわいらしすぎる。

「ご主人にお伝えいただけるかしら？ 今度こんな真似なさつたら、学校で護身術を披露しますわよって」

絹は　ハンカチを引き裂いた。

クロロホルムで絹を拉致して　そのまま美容整形。

うっかり彼女が下手をうっていたら、そうなっていたのだ。



やり方が雑だったとは言え、本気で行動を起こす執念だけは恐ろしい。

女二人が走り去った後　綺麗に手を洗い直して、絹はやっとお手洗いをした。

いつの間にか置かれていた「清掃中」の黄色い看板。

変なところで、芸が細かい。

「すごいねー絹ちゃん、撃退したんだ」

看板の横を、一步通り過ぎようとした彼女は、その瞬間、凍り付いた。

聞き覚えは、もちろんある。

その呼び方も。

「あなたの差し金には、思えませんでしたが」

横目で、ちらり。

出てすぐの壁に、もたれている　渡部を見る。

「うん、違うよ…助けて絹ちゃんに恩を売ろうかなーと、ここで待ってたんだ」

ここに。

いけしゃあしゃあと、勝手な理屈を言う。

元凶そのものに助けられたとしても、絹が恩なんか覚えるはずがなかった。

「テニスが忙しいでしょうから、お構いなく」

なぜ、ここにいるかは分からないが、休みの日まで会いたくはなかった。

もう、関わらないと決めた矢先なのに。

「部長、こんなところに……って、高坂さん」

フロアの方からやってくる女性が、彼女を呼ぶ。

はっと、顔を向ける。

「委員長、なんでここに……」

絹の疑問に、渡部が先に笑いだした。

なんなのだ、一体。

「ここ、うちの系列の店なの」

知らない絹に、苦笑がちな声。

あーもう。

金持ち学校なのだから、親がデパートの一つや二つ持っててもおかしくない。

「いきなり部長、いなくなったと思ったら、高坂さん追い掛けていたんですね…もう」

「ごめん、ごめん、あーちゃん。さ、続きの買い物に戻ろうか」

絹に、ウインク一つ残して、性悪渡部は去っていった。

委員長…その人と一緒にいるのはやめた方が。

絹の願いは、声には出来なかった。

島村ショックを抜けて

ピーカン

梅雨明け宣言も出て、明るい夏の太陽になった空。

ボスは、朝からそわそわしすぎていた。

誕生会の当日。

正確には、一日目だ。

今日、昼間にペンションに向かい、泊まり掛けで天体観測をする。

ピンポーン。

お迎えのチャイムだ。

ボスの背筋が、びくうつと伸びた。

「やつほー絹さん。準備できた?」

カメラの向こうで、了がぴょんぴょん跳ねている。

「ええ、ばっちり」

さあ、出かけようと思っていた絹は、島村がいないことに気付く。

「島村さんは?」

「私が起きたのと入れ違いで研究室から出てきたなあ、徹夜したみたいだぞ」

と言うことは、寝ているのかも。

「一応、一言言ってきますね」

絹は、島村の部屋の前へ行った。

そう言えば、この部屋に入ったことはなかったなあ。

彼が、部屋にこもってるのを見たことがない。

もっばら、研究室か居間あたりだ。

「島村さん」

コンコン。

ノックをするが、返事はない。

ドアを、ちよこつとだけ開ける。

ベッドと机しかない部屋だ。

毛布が芋虫みたいになっているので、寝ているのは間違いない。

この時、ふと絹に悪戯心が起きた。

彼には寝顔を見られたことがあったので、やり返しておこうと思  
ったのだ。

ふんふふーん。

足音を立てずに、ベッドに忍び寄る。

寝顔はいけーん。

ひよい。

そんな、絹の目に映ったのは

あれ。

死んだように眠る、島村の頭の横に落ちているものが。

写真。

「……………！！」

声にならない悲鳴をあげて、絹は飛び退いた。

そのまま、ドアまで後退して、そそくさと部屋を出る。

み、見なかったことにしよう。

島村の秘密を盗み見てしまった罪悪感から、絹は記憶の抹消を試  
みた。

写真に映っていたのは　ゴージャス天野だったのだ。

島村シヨックが抜けきれないまま、絹は荷物を持ってワゴン車に乗り込んだ。

あれは、ええと。

ボスは既に、チヨウの隣の指定席に座って上機嫌モードだ。

とても、こんな話題を出せる状態じゃない。

ま、まあ、多分悪いことじゃ、ない、よ、ね。

自分にそう言い聞かせながら、絹はとりあえず保留箱に入れた。

そんな彼女の視界の端で。

「じゃんけん、ぼんっ!」

将と了が、何故かじゃんけんをしている。

「よっし」

「うええー」

勝ったのは将。

了は、しょぼくねながら京の隣の席にすわった。

ははん、なるほど。

今日の後部席に座るのは、四人だ。

京と了が同じ側に座るということは。

「ここに、いいの？」

くすくす笑いながら、絹は将の隣の席を指す。

「そそ」

にこやかな将の向かいでは、了が往生際悪く、絹を手招きしている。

了には悪いが、せつかくじゃんけんて勝った将をむげにも出来ず、彼の横に腰掛けた。

「絹さん、三時間くらいかかるから、のんびりしててね」

座席に腕をかけ、振り返るようにチヨウが声をかけてくれる。

「はい、お世話になりますー」

につこり微笑んだら、その瞬間、チヨウの時間が止まった。

ああ、しまった。

絹は、出来るだけ自然に顔をそらす。



「この顔は、彼には毒なのだ。」

「親父」

京の静かな呼び掛け。

「あつ？ ああ、なんだ」

我に返ったチヨウの声。

「親父まで入ってくんなよ、ただでさえ面倒なんだから」

「え？ なんのこと？」

曖昧な京の言葉に、食い付いたのは了。

「ああ、肝に命じとくよ」

チヨウは、軽やかに笑いながら、体を前に戻した。

うーん。

絹は、反応に困って苦笑するしかない。

「ねえ、京兄い、何の話？」

「うるせえな、おまえみたいのが、一番ちゃっかりしてんだよ」

京は近付いてくる弟の顔に手のひらをあてると、ぐいと遠くに押

しやったのだった。

車は高速にあがり、北の方へ針路を取る。

「どんなところ？」

具体的な目的地は聞いていないので、将に話を振ってみた。

「いいとこだよ。星が、とにかくサイコーに見えるんだ。多分、こないだの大停電くらい」

手放しでほめる将に、絹も微笑んでいた。

島村のやらかした、あの停電の空は、いまでも彼女の心に焼き付いていた。

あれに、また会えるかと思うと、胸が高鳴る。

星なんて、興味なかったはずなのに。

危険な気持ちでもあった。

星に、うつつを抜かせる立場ではないのだから。

「絹さんの好きなさそり座も、きつときれいだよ」

オリオンを殺したさそりの話を、将はもう気にしている様子もない。

「絹さんは、巧と同じ星が好きなのか…仲よしだなあ」

話に、チヨウが割り込んできた。

「有名な星座だからだよ」

苦笑混じりに、ボスが答える。

そういえば、とつさにボスの好きな星座をパクったのだ。変なところで、ボスにとぼっちりがいつてしまった。

「仲よしでいいじゃないか…巧も照れるな」

誤解したままのチヨウが、肘で隣をこづく。

「あつ、いや…」

いま、ボスがもっているのは、照れたからじゃない。

チヨウにこづかれた事実には、舞い上がっているからだ。

絹は、それにくすつと笑った。

京が　何か言いたげに、自分を見ていた。

彼女の、猫の毛皮の中を覗こうとする目だ。

だめよ、見せないわ。

絹は、そんな彼にっこりと微笑んだ。

## 出し抜かれる男

「ついたー」

車が止まるや、了が一番に飛び出していく。

昼間だというのに、下界と違って明らかに気温が低い。

「いらっしやいませ」

高原の空気に肺の中身を入れ替えていたら、ペンションの中からお迎えが出てくる。

「お待ちしております…」

年配の女性の声が、絹で止まった。

もう慣れた慣れた。

絹は、殊更笑顔で会釈する。

どうせまた、桜を知っている人なのだ。

ここに、チヨウウと桜が、星を見にでもきたのだろう。

「荷物これだけ？」

振り返ると、将が絹のバッグを持っている。

「あ、自分で…」

彼からバッグを取り返そうとするが、バッグはひよひよいと逃げ  
げる。

「大丈夫、大丈夫、オレが運ぶから」

さわやかに笑いながら、バッグを持って行かれた。

ここの風景が、妙に似合う男だ。

ぽかん。

振り返ると、ペンションの女性が、そんな顔をしていた。

絹が見ていることに気付き、はっと我に返る。

「ち、朝くん…私いま、二十年前の幻を見たわよ」

チヨウに近付き、抑えきれない音量で訴えている。

「将が、一番オレに似てるからなあ」

チヨウは、苦笑するしかないようだ。

ああ、なるほど。

さっきのやりとりか。

はいはい、とやりすぎそうと思ったら。

ぐい。

腕が取られた。

「んじゃ、行くか」

犯人は京。

にやっとした目が、自分を見ている。

「あー、僕もーっ」

反対側を、了に取られる。

二人のエスコートという豪華さで、ペンションに入れるようだ。

「二人して、何やってんだー」

先を行っていた将が、振り返りながら抗議。

「お前は荷物持ち」

「将兄いは車の中で、ずっと隣だったんだから、いいじゃない」

抗議は、一瞬で二人に踏み潰された。

ベッドの二つある部屋に、案内される。

女は絹だけなので、ひろびろと使えるようだ。

「分からないことがあったら、聞いてくださいね」

やっと、絹の顔に慣れたらしい。

笑顔で出ていく女性を見送って、絹はベッドに腰掛けた。

コンコンッ。

すぐにノックがくる。

「はあい？」

「えへへ…僕」

ひょっこり顔を出したのは、了。

早い訪問だ。

「僕、パパと同室なんだ…だから抜け出しやすいの」  
してやったり。

二人の兄を出し抜いて、さっそく遊びにきたようだ。

確かに、ちゃっかりしている。

「と、言うことは…京さんと将くんが同室なのね」



京の方が力関係は上だろうから、将は苦労しそうだ。

あー。

そこで絹は、ボスを思い出した。

結果、ボスは一人部屋か。

今頃、その事実に関し、さめざめと泣いているに違いない。

おそらくボスの頭では、同室が思い描かれていたろうから。

罪人だ、チョウさんも。

くすつと、笑ってしまった。

「夕食まで、まだ結構あるし、一緒に散歩いこうよー。この辺案内するからー」

絹の心など知らない了に、腕を取られる。

あらあら。

更に、おにいちゃんズを出し抜こうというのか。

絹は、手を引っ張られて立ち上がった。

「誰かに言っていないかと心配されるわ」

後で、京が将がこの部屋に来そうな予感があるのだ。

「大丈夫ーパパに言ってきたからー」

「ここにー」。

さすが、ちゃっかりもの。

抜かりはなかった。

「ただいまーおなかすいたー」

ペンションなのに、まるで自分の家に帰ってきたかのような軽さで、了はドアを開けた。

絹も、その後ろから続く。

「おかえり、了」

「ひっ！」

玄関先に待ち構えていたのは、おにいちゃんズ。

京はにやついているが、将は引きつっている。

「さすが、広井家一番のおいしいとこどりっ子、たいしたもんだ」

京は、了の背中をバシッと一発。

「いつ！」

痛みでぴんと伸びた背筋。

その、伸び上がるうとする頭を、将が上から手で抑えつける。

「了…お前、夜は毛布持ってオレらの部屋な」

おにいちゃんズは、あっさりと末っ子の自由を奪ってしまった。

「そんなあ」

じたばた抵抗する了。

割と、いつも将が二人にいじめられているイメージがあるが、今日は珍しく上二人がタッグを組んでいる。

「お前も…」

まだ、将と了がもめているのを横目に、ぼそっと長男がつぶやく。

「お前も、恋愛慣れしてないうちのチビの誘いに、ほいほい乗りすぎんなよ…暴走したら、面倒なことになんたるうが」

あらら。

釘を刺されてしまった。

「将くんだったら…いいの？」

絹は、余計なお世話という意味を匂わせて、皮肉を言ってみた。

本性出してんじゃねえよ　そんなニヤリを返される。

「あいつは、根が真面目だからな…変に気を遣って出遅れるのが得意技だぜ」

なるほど。

天然わがままの末っ子は、後先考えないというわけか。

子供だと思っただけでも、まばたき一つで大人になることもあるのだ。

「覚えとくわ」

わざと写真の中の桜と同じ笑みを浮かべて、絹は長男のDNAを驚掴みしてやる。

やっぱり余計なお世話の　仕返しだった。

## 誕生会

夕食時。

誕生会の、根回しがしてあったのだろう。

手作りっぽいケーキが、テーブルの上に乗っていた。

その雰囲気、絹は食堂に入るや、気圧されてしまう。

ものすごく、居心地が悪い。

主賓席に京と並んで座る。

ああ。

他の人が、視界の中で席に着いていく中、逃げ出したい衝動にか  
られた。

忘れていたわけではない。

これが、自分の誕生会を兼ねていることを。

しかし、本当に理解していたわけではなかった。

それを思い知らされる。

こんな、暖かく見守られるような視線に包まれるなんて。

た、たすけて。

絹は、席に着いたボスに助けを求めてしまった。

しかし、彼は既にチョウに夢中だ。

落ち着かなく、絹は一人ぼっちでいるしかなかった。

「おい…それが、祝われる人間の顔か？」

隣の、もう一人の主賓が横目で絹を見ていた。

祝われる顔というのなら、京だって落第点だ。

「な、慣れてないのよ、こういうの」

ボスに引き取られる前の話は出来ないが、その言葉で察して欲しかった。

「やれやれ、お嬢様なのは顔だけか」

猫の内側を見せたせいか、結構京は口さがなくなってきた。

反論しようと思ったら。

「たかが、子供だましの誕生会でビビんなよ」

テーブルの下で 手を握られた。

絡み付く、乾いた手。

変わった男だ。

絹の本性を垣間見ていながら、それでも好意があるというのか。

もう、母に似た顔なんかには、惑わされていないくせに。

「ロウソクに火をつけたら、電気消しますよー」

ペンションのオーナーが、会を始めようと仕切り出した。

電気が消されたら。

絹は、思った。

電気が消されたら、手を離そう、と。

蝋燭を、二人で吹き消すという茶番の後。

食事とプレゼントが、動き始めた。

忘れていたわけではない　　が再び。

絹も、もらう立場だったのだ。

ケーキが切り分けられている中、最初に飛んできたのは了だった。

「誕生日、おめでとう、絹さんー」

ぎゅっつと、首にかじりつかれる。

一緒に散歩した時についただろう、夏草の匂いがした。

「はい、これプレゼント！」

可愛らしい包みを渡される。

「ありがとう！」

軽く抱き返した。

今は、この了の軽さがありがたい。

自然に受け取れる。

次に将。

「気に入るといいけど」

照れながら差し出す、小さい包み。

「お前ら、オレに大きなつづらばっか、持ってくんない。邪魔くせー  
だろうが」

隣で、京がぼやいている。

ヘリコプターのラジコンだと言っていた了の、大きな箱に続き、  
将のもかさばるサイズだ。



チヨウが、立ち上がった。

うわ。

さすがに、絹は身構えた。

大御所から、プレゼントが来るとは。

「はい、絹さん…お誕生日、おめでとう」

やはり、小さな包み。

「あ、ありがとうございます」

妙に緊張してしまう。

兄弟にはない、大人のオーラのせいか。

「親父…」

京は、引きつっていた。

「おめでとう、京」

チヨウから息子に贈ったプレゼントも　大きなたづらだった。

さすがの絹も、くすくす笑い出さずにはいられない。

そんな中。

ボスが。

立ち上がった。

あ。

絹は、これだけは完全に忘れていた。

ボスが、京へのプレゼントを準備しているのは、知っている。

だが 自分がもらうかも知れない可能性は、完全に除外していたのだ。

あ、あ、ああ。

ボスが包みを持って近づいてくるのを、絹は椅子の背もたれに、へばりつくように見ていた。

何故に、自分がボスからもらうプレゼントを恐れているのか、分からない。

でも、恐いのだ。

「京くん…誕生日おめでとう。改良したものだよ、今夜使ってくれるかな」

差し出される、長いつづば。

これには、京の目が輝いた。

天体望遠鏡なのだ。

「い、いいなーっ！」

了もカンづいたらしく、飛んでくる。

「ありがとうございます」

さすがの京も、うれしそうだ。

あつ。

絹の願いは、このままボスが席に戻ってくれること。

彼から、何かもらいたいわけではないのだ。

こんな誕生日だって、プレゼントが欲しくてやったわけではない。

ボスが、広井ファミリーと遊びたいだろうから乗っただけだ。

だから、絹にとっては本当に単なる茶番。

彼女の誕生日でさえ、ただの餌。

だから、ボス。

席にもど

「絹」

呼ばれて、びくつとした。

ボスの声だ。

ごめんなさい、ごめんなさい。

反射的に、絹は土下座したい気分ではなかった。

土下座してでも、ボスが差し出すものを辞退したかったのだ。

絹は 彼のただの道具なのだ。

ボスは、別に絹が生まれてきたことを、めでたいなんて思っていない。

ただ、この場の体裁を取り繕うためだけに、何かを渡そうとするのだ。

そして、体裁のためだけに、受け取らなければならない。

なんて 空虚なプレゼント。

「誕生日、おめでとう」

差し出される、小さなつづら。

血の気がひく。

あの、チヨウのついでに作られた、天体望遠鏡の方が、よほど嬉しかった。

「ありがとうございます」

こんなショックな誕生日プレゼントは、生まれて初めてだった。

何の味も分からなかった。

ただ絹は、作り笑いを浮かべて、相づちを打っていただけ。

一度、プレゼントの包みを抱えて部屋に戻る。

テーブルに、それらを置きながら、ため息を一つ。

気力のメーターが、ゼロ近くまで減りきっていた。

これから、天体観測があるというのに。

なけなしの気力を残すため、絹はプレゼントをそのまま放置することにした。

開けると、きつとマイナスまで、落ち込む気がしたのだ。

はあ。

誕生日なんて、素直に教えなければよかった。

そんな後悔さえ、絹の中には生まれていて。

コンコン。

ノックに、はっと顔を上げる。

「はい？」

ドアが開くと、そこには チョウがいた。

おや、意外。

「大丈夫かな？ 顔色が悪そうに見えたけど」

部屋には入ってこず、ドアのところで話しかけられる。

あいたたた。

さすがは年の功。

よく見てらっしゃる。

「大丈夫です、なんともありませんよ」

すらすらと、絹は嘘をついた。

全身、嘘の塊なのだ。

こんなことなど、お手のもの。

「そうか…変なことを言ったね」

一度、チヨウは言葉を切って。

「ところで、絹さんは巧とはうまくいつてるのかい？」

顔色よりも、もっとギクツとすることを聞かれる。

いまの絹の心を、見透かしたわけではないはずだ。

「勿論です、尊敬しています」

それだけは、事実だ。

言葉を、淀ませたりなんかしなかった。

「そうか…昔から巧は風変わりで、女性を毛嫌いしていたからね…  
年月は、巧をいい方に変えたんだね」

チヨウは、嬉しそうに目を細める。

いいえ。

ボスはもっと悪い方になりました      その証拠が自分なんて、  
決して言えなかった。

## 出し抜く男

一面の、星空。

絹は、柔らかい草の上に寝転がって、夜空を見上げていた。

ボスが、また天体望遠鏡を持ってきてくれているが、それを覗き込むパワーが、いまはなかった。

ただこうして、重力に任せるまま空を見るので精一杯。

「ワイルドな観測だな」

もらいたての天体望遠鏡を抱えた京が、それを近くに据えた。

「いや、自然で疲れない見方だよ」

将は、先に絹の側にきていた。

絹が放棄したボス特製の天体望遠鏡を、彼に好きなだけ見ていいと言ったのだ。

将が宣言したとおり、あの停電騒ぎによく似た夜空だ。

ただ、やはりわずかに下界の光があるのか、怖いほどには感じなかった。

「了くんは？」



了が、出遅れるのは珍しい。

「ああ、向こうで先生に望遠鏡をねだってたな…多分、そろそろ親父にハタかれて、こっちに来るだろ」

京の容赦ない読みに、絹は仰向けのまま笑った。

光景が浮かびそつだ。

「了の誕生日…遠いからなあ」

将が、うーんとうなる。

「前の誕生日の分として欲しい…って、どんだけ厚かましいんだ、うちの末っ子は」

通りすがりに聞こえただろう言葉を、京が変な口真似で言うものだから、将も巻き込んで一緒に笑った。

「パパにぶたれたー…いたーい」

そこへ、案の定　一発もらった末っ子が登場したため、今度は京も入れて三人で笑う。

「え？　なに？　なんなの？」

了が暗がりの中で、きよろきよろとしているようだ。

声が、右に左に飛ぶカンジで分かる。

「了くんも、一緒に転がらない？ いい望遠鏡はなくても、星はきれいよ」

スネさせないように、絹はやわらかく呼んだ。

特製望遠鏡を自分のものにした京と、絹から権利を借り受けた将がいるので、それに気づかれるとなおふくれそうだった。

「あ、うんうんー」

しかし、素直な末っ子は、呼ばれるままに絹の横にゴロン。

広井家のおぼっちゃん達は、父親の教育のおかげか、ひ弱で潔癖症な感じはない。

だから草の上とは言え、ほいほい地面に寝そべられるのだ。

「絹さん、頭痛くない？ 腕まくらしたげよっか」

るるるん。

絹と一緒に寝転がるのが、楽しくてしょうがないのだろう。

上機嫌な了の言葉に。

「1000年はええぞ、チビ」

「いたっ、京兄い！ 頭！ そこ頭だつて！」

長男のツッコミは、容赦なかった。

夏の星は、力強い。

消耗した気力を、絹は空から吸収するように、大きく深呼吸した。  
ボス、うまくやってるかな。

結構離れたところに、二人陣取って、何を話しているのだろう。  
よっ。

絹は、寝そべり観測をやめ、上半身を起こした。

「あれ、絹さん……どこかいくの？」

了も、身体を起こす。

「ちょっと、先生のところ」

に、盗み聞きに。

勿論、最後は心の中だけの言葉。

割って入ると、絶対ボスに呪われるので、遠巻きに様子を見てくるだけだ。

多分、うまくやっているだろうが。

チヨウに嫌われると、ボスはまたこの世界の全てを憎むに違いない。

そつと。

一瞬、ペンライトが蛍のように閃いた方向へと歩く。

「が……だな」

風に乗って、微かな声が飛んできた。

チヨウの声のようだ。

「ば……に……るよ」

ボスの声。

語らっているのだろう。

穏やかな声だ。

「けど、うちの息子の誰かが絹さんを口説き落としたら、おまえとも親戚づきあいが出るな、ははは」

もう一歩近づいただけで、いきなり声はクリアになった。

な、なんの話をしているのか、チヨウは。

「親戚づきあい……」

ボスが、真面目に考え込むような声。

いま、「それはおいしい!」とか、考えてませんか? ボス!?  
ツツコみたい気持ちを押さえ、絹は息をひそめる。

しかし、逆に言えば、それは一生ボスの手駒でいられるという  
と。

絹も、真面目に考え込んでしまった。

「まあ……」

低い、ボスの声。

「まあ、絹がお前の息子の誰かに、結婚してもいいほど……惚れたら、  
な」

くくつ、と。

ボスが、笑った。

「オレの息子たちだ、甲斐性はバツチりだぞ」

仲のいい、旧友同士の単なる軽口。

なのに。

絹は、立ち尽くしてしまった。

あれは  どういう意味なんだろう。

観測会が終わり、ペンションに戻った頃には、既に真夜中だった。

「おやすみ」

ばいばいと、三兄弟に手を振って、自室に入る。

鍵をかけ、ふーっと一息。

疲れた。

今日の絹は、本当に疲れていた。

ベッドに、ぱふっとうつぶせに倒れながら。

しかし。

絹は、プレゼントの山を見ていた。

青い包みが、ボスからのプレゼント。

のろのろと身体を起こして、それを手に取った。

ベッドに座り込み、膝の上に置く。

軽い。

ペリペリと、包みをはがす。

何も考えず、頭を空っぽにしながら、四角い箱を開けた。

写真だ さそり座の。

いや、よく見ると写真ではなく、星がまたたいている。

本物の、夜空を切り取ったような、ムービーフォト、とでも言うた方がいいか。

また、こんなところに、最先端技術が無駄遣いしている。

くすつと笑いながら、絹は枕元にそれを置いた。

「島村さんに、作らせたんだろうな」

なんとなく、そんな気配がする。

あれ。

絹は、さそり座をじっとみた。

本物の夜空のように、少しずつ動いているのとは別の、違う気配を感じる。

しかし、それが何か分からない。

ただの星座なのに。

見れば見るほど、懐かしさが込み上げてくる。

何度見ても、やっぱりさそり座。

角度を変えても、薄目で見ても、ただの星座。

でもどうして、こんなに胸が詰まるのか。

じわじわと、込み上げてくるのか。

原因は、分からない。

分からないまま　絹は、泣いた。

朝一でシャワーを浴び、絹は身仕度を整えた。

枕元に伏せてある、問題のさそり座を、見ないように箱に戻す。

一体、何を仕掛けているのか。

玉葱の成分でも、出ているに違いない。

迂闊にじっと見ると、じわじわくるのだ。

絶対、変な実験の副産物だと決め付け、絹はプレゼント類をまとめて、一つの紙袋にしまった。

京のプレゼントは、一つとしてこれには入らないだろう。



コンコン。

随分、朝早くにノックだ。

「はい？」

鍵を開けにドアに近づく。

「おはよ、起きてるなら散歩に行かないかい？」

あらら。

声の主は、将。

二人を出し抜いてくるとは、なかなかやるな。

確かに、彼が一番朝に強そうな気がする。

「はい、すぐ行くわ」

気分を変えたかったので、ちょうどよかった。

一人は気楽だが、余計なことを考えるには向かない。

邪魔するものがないだけに、際限なく沈んでいくからだ。

「おはよう」

鏡で最終チェックして、部屋を出る。

「おはようっ」

嬉しさでいっぱいなのが、気配で分かる。

「よかった…もう起きてて」

行こう、と手を取られる。

了とは別の意味で、テンションが高い。

「おはようございますー」

ペンションのオーナーに、すれちがいざまに挨拶をして、外に出る。

ひんやりした、気持ちのいい空気だ。

「絹さん、夏休みもまた一緒にどこか行かない？ 天文部の観測会もあるけど、それとは別に、さ」

手を引きながら、将が肩こしに振り返る。

「そうね、また誘って」

にっこり微笑みながら、絹が答えると、彼は前を向き直る。

「…二人で、どこか出かけたいなーなんて」

ほそつ。

将が、付け足したそれが耳に入った瞬間。

「きゃっ」

絹はつまずいた　ふりをした。

「だ、大丈夫？　絹さん」

「あは、ごめんね、大丈夫よ…何か言った？」

将の腕を支えに態勢を整えながら、絹は彼を見上げる。

「あ、いや…別に」

将は、言葉をひっこめた。

あぶない、あぶない。

京さん、あなたの弟は、意外と油断なりませんよ。

## 京の夏

家に戻り、再び月曜から学校、という日常に戻ったが、すでにクラスは夏休みの話でもちきりだった。

祭日の関係で、今週が終わればもう、休みに入るのだ。

部でも、観測合宿の日程を決めたり、慌ただしい。

他の部も、同じようにばたばたしていた。

そんな、七月十五日（火）のことだった。

将と部室に入ろうとしたら、京と了が出てくるところだった。

「将、部活休んで帰るぞ…西のバーサンがやばいらしい」

京は、そのまま次男の腕を掴んだ。

あらら。

どつやら、誰か危篤のようだ。

「絹さん、今日送っていけないけど、ごめんね」

了が、ばたばた手を振る。

それに、小さく手を振り返し、絹は部室に入った。

つまらなくなりそうだ。

ふう。

「高坂さん、こんにちはっ…あれ、広井くんは？」

きよろきよろしながら、宮野が入ってくる。

廊下で、会わなかったようだ。

「身内の方が、誰かご病気みたい」

状況によっては、明日も休みかもしれないなあ。

説明しながらも、絹はテンションを下げていった。

広井ブラザーズがいないなら、絹が学校に来る理由もないのだから。

「そうなんですか…あ、じゃあ高坂さん、今日、うちの車で一緒に帰りませんか？」

将がいなかったため、宮野もテンションが下がりがけたようだが、絹に掴まって上げ始めた。

パン（将）がなければ、ケーキ（絹）を食べればいいじゃない戦法だ。

絹は。

「いいわ、たまには歩いて帰るから」

にべもなく、断った。

彼女と同じ車内で、話すことなど何もないのだ。

「そう…ですか」

しょぼん。

パンもケーキも食べそこなった宮野は、さすがに肩を落とす。

後から思えば。

送ってもらうべきだった。

目が覚め 絹は、頭を抱えた。

頭がガンガンする。

いや、それは別にいい。

そのために、頭を抱えているわけではないのだから。

本当の理由は。

「おはよう」

にっこり。

隣に、このにっこり腹黒王子がいることだ。

やられた。

絹は転がったまま、ホールドアップのゼスチャーをしてみせた。

さすが、悪党の本場の人間は、拉致の仕方もうスタイリッシュで完璧だ。

昨日 多分、昨日。

三兄弟が先に帰り、珍しく絹は一人で歩いて帰っていた。

そして。

華麗に拉致されたのだ。

見知らぬおっさん一人に、してやられた。

その飼い主が、渡部というわけか。

しかし、暑い。

見れば、絹は制服から浴衣に着替えさせられていた。

それでも、酷いほどの暑さだ。

セミも少し自重してくれ、と頭痛に響くほどうるさい。

よく反響するのだ、この古めかしい日本家屋には。

絹は、自分を取り巻く環境を、ひとつずつ確認していった。

「今日、何日？」

うちわを優雅に持つ渡部に、ストレートに聞く。

「16日だよ」

やはり、翌日か。

では。

「じじは...どじじ？」

一息ついて 聞いた。

王子が、にっこり笑う。

ラケットを振るように、うちわを一度振り回した。

「暑いでしょー、京都は」

満面の笑顔。

ああ。

ぶっとばしたい。



「心配してるだろうから、先生に連絡取りたいんだけど」

渡部に何の意図があるかは、絹には分からない。

しかし、いきなり命を取る気はなさそうなので、まずはボスに連絡だ。

拉致される瞬間まで、カメラは生きていたはず。

発信機も埋め込まれているので、何があっていまだのあたりにいるかは、分かっているだろう。

「おじさんに？ ああ、心配しないよう、ちゃんとすぐ電話しよたよ」

あっけらかーん。

拉致った人間が、堂々と連絡するのか。

相手が、同じ裏世界の人間だから出来ることだろう。

はっ、まさか！

「先生を脅迫してるの？」

ボスの頭脳を狙っているのかと、絹は思ったのだ。

「なんで？ やだよ、そんなめんどくさい」

パタパタ。

うちわで、服の襟をひっぱって、渡部は風を入れている。

その言葉の、軽いこと。

「ちゃんと、明後日には無傷で返すって言うておいたよ」

紡がれる言葉は、変なことだらけ。

なんのために拉致ったのか。

明後日 18日。

いや、違う。

重要なのは、明日だ。

明日は17日。

そして、ここは京都。

「祇園祭に、なぜ私が招待されるの？」

絹の慎重な言葉に、彼はにこっと笑った。

「ちょっと、その顔が欲しくなってるね……」

作り物だつて知ってるくせに、何を言いだすのか。

しかし、作り物だと知っているからこそ、女としての身の安全は、確保できている気がした。

少なくとも、森村の二の舞はない気がする。

「先生は…なんて？」

反応いかんでは、気合い入れて逃げる方向で考えよう。

絹は、そんな大事な質問をした。

渡部は、一度天井を見て。

「なんだったかなー、覚えてないよ」

あはははは。

軽やかなる　　ウソ笑い。

寝巻の意味の浴衣ではなく、きちんとした浴衣に着替えさせられながら、絹はいろいろ考えていた。

まあ、興味は失ったとはいえ、織田派の懐に連れて来られたのだ。

客として扱ってくれるのなら、情報くらいもらっていいじつ。

カメラもないことだし。

「やーやっぱり、浴衣はいいねー」

着付が終わりきっていないのに、勝手に入ってくるな。

絹は、横目で渡部を見た。

「いきなり、思い付きで私を拉致するなんて…何の冗談？」

私の顔を、渡部は利用したいと言った。

それは、綺麗どころという意味か　桜に似ているという意味か。

「思い付きじゃないよ、ちゃんと計画したさ」

あはは。

心外だな、と笑う。

「計画って、一人で帰ったのはぐうぜ…!？」

そう。

たまたま起きた、出来事のはずだった。

広井ブラザーズが、身内の事情で先に帰宅したのは。

「おばあさんなら、元気だよ…」

ニコリ。

嗚呼。

念入りにハメられた。

広井ブラザーズも、行ってビックリのデマだ。

しかし、彼らもそれが絹を拉致するための伏線などと、気づくはずもない。

そして、その後数日、絹が休むということになるわけだ。

学校には、ボスがうまくごまかしてくれているだろうが。

逆に。

そこまで、計画性をもって絹を京都に連れて来たい理由が、ますます気になる。

この顔が、どんな効果を生むというのだろう。

「あ、そうそう」

思い出したように、渡部が言った。

「どこかでモリリンに会っても、絶対に声はかけちゃだめだぞ」

森村も、京都入りしているようだ。

彼にとっては、忌まわしい地。

「どうして？」

しかし、そ知らぬフリをして聞いてみた。

渡部が、どう答えるか気になったのだ。

「まだ：死にたくないだろ？」

ククク。

優男の仮面がはがれた隙間から 悪人の顔が見えた。

## サクラチル

「天野さんも、祭には来るの？」

うちわをもらった絹は、開け放たれた座敷に座って、ぼんやりと自分を扇いでいた。

ぼんやりするしかない暑さなのだ。

うちわで扇いだ熱は、すぐに華麗にターンして絹の身体に取り付きたがる。

渡部と争う気も、萎えるほどの暑さ。

おそるべき 盆地効果。

「アマの名前は出すなよ…なお暑くなる」

こっちも浴衣に着替え、渡部は無造作に足を投げ出している。

彼女の存在が、気温上昇と結び付けられ、絹は笑ってしまった。

確かに、ここで彼女に会ったら、暑苦しい展開になりそうだ。

「しかし…絹ちゃんが。物分りよくて助かったよ。協力してもらえないと、言うことを聞かせるために、頭使わなきゃいけないからなあ。」の暑いのに「

熱風に乗る、渡部のとぼけた言葉を、絹は右から左に受け流す。

いちいち、突っ込む気も起きない。

「まあ、お礼だと思って付き合っつてよ」

ニヤニヤ笑いに、絹は億劫に反応する。

「お礼？」

彼に対して、絹がお礼など覚えるはずがない。

いまのところ、百害あって一利なし、なのに。

「そう、お礼…君の過去の情報、本当に全部消しといてあげたから」

おじさんも、甘いよね。

眉を顰める。

なぜ、彼はそんなことをしたのか。

渡部にとって、何の利益にもならないことを。

恩を着せるためや、好意なんて　ありえない。

何か意図があるのだ。

「その方が…何か、あなたに都合がいいんだ」

扇ぐ手が、止まる。



絹のものも、渡部のものも。

世界を占めるのは、熱風とセミの声だけになる。

絹の過去がないと、都合がいいということとは。

「他の人に、私の過去を調べられたくないのね」

セミと不協和音を起こしながら、絹はその世界を破る声を出した。

「ほんとに」

ゆっくりゆっくりと、渡部が彼女を見る。

「ほんとに…頭がいいね、絹ちゃんは」

悪党の黒い瞳。

いまはありがたい、気温を2度下げしてくれる色だった。

「さて、出かけようか」

渡部が、すくっと立ち上がる。

スポーツをやっている身体に、浴衣が異様に絵になる。

しかし、口に出された言葉に、素直に従いたくない内容だった。

この暑いのに。

それと。

「どこへ？」

おしゃべりそうに見えて、この男は肝心なところはしゃべらない。

だが、彼がすることなのだから、この顔を有効利用するつもりだ  
ろう。

「どこでもないさ、せつかく祇園祭にきたんだ、観光したいだろ？」

手を差し伸べられる。

さあ立って、と甘い微笑でいざなわれるが 絹は、糸目になっ  
ていた。

絶対、アリエナイ。

それともう一度言おう。

この暑いのにー！

しかし、やなっこったという返事は、受け付けない笑顔だ。

絹は。

差し伸べられた手をガン無視して、自力で立ち上がった。

浴衣の裾を直す。

「どんな観光なのやら」

絹の暗い過去を消し、桜と似た顔で京都を歩かせる。

予測のひとつとしては。

この顔を　誰かに見せたい。

桜の血縁がいるテリトリーだ。

可能性はある。

「日傘を出させよう」

差し出した手を、苦笑と共に引っ込めながら、渡部は先を歩き出す。

死んだ桜にそっくりな自分を見て、「誰か」が驚く。

驚いて、彼女の素性を調べようとする。

しかし、謎。

うーん。

絹の思考は、そこでストップした。

この先が、思いつけないのだ。

どうひねっても、出てこない。

「人が、多いからね」

下駄を履き、日傘を差した絹に、もう一度手が差し伸べられる。

彼女は、あらぬ方を見た。

「強情だなあ」

手首をとられた。

絹が強情なら、渡部は 強引だ。

「夕方から、宵山が始まるけど、人が多くなりすぎるからな」

手首を引かれ、声を聞かされながら、絹はカラコロ歩いた。

京都について、初めて見る景色。

狭い路地に広がる、カラメル色のクラシックな木造の家々。

そこら中から、着物の人が現われそんな錯覚を感じる。

しかし、絹はさっきまでいた家の情報も、外側から記憶していた。

表札は、あの『青柳』

広い家だと、外に出た方がよく分かる。

右手に、延々と続いた塀のせいだ。

「ここはね…祭の時の仮宿になるんだ。広いからね。いろんな人が、出入りするかと思うけど、気にしないでよ」

いろんな人、ね。

絹は、その部分を奥歯で軽く噛んだ。

要するに、織田の悪党どもが集まるわけだ。

「まあ、殿ごとに客は分けられているから、そこにいる分には、人にはそう会わないだろうけどね」

ニヤツ。

渡部が、意味深に笑う。

ああ。

なるほど、と絹は彼のニヤリを理解した。

どつせ、おとなしくしてないだろう？

そう瞳は言っていたのだ。

絹が、あの家でウロつくだろうと　もしかしたら、逆にそれを望んでいるかもしれない、と思える。

でなければ、最初に釘を刺すだろう。

「おや、これは渡部のボン」

日傘の向こう。

こちらへ、歩いてくる人がいたようだ。

「こんにちは…柴田さん」

足を止め、頭を下げる渡部。

「宵山には、まだ早いですぞ…散歩ですか」

「そんなものです」

絹は、日傘をふわりと上げた。

相手の顔を、見ようと思ったのだ。

濃い顔の、五十くらいの男だった。

眉ともみあげの黒々とした太さが、古代の男のような力強さを放っている。

日傘を上げた彼女をちらっとみたので、反射的に会釈してしまった。

一度下げたまぶたを上げると　男は、絹を見て時を、いや、世  
界を止めていた。

「お…かた…さま？」

セミが支配する世界に、彼もまた不協和音を起こすのだ。

「偉い人の奥さんに…似てるんだ」

絹は、日傘を回しながら、冷やかな声を出す。

さっきの男は、彼女を『お方さま』と呼んだのだ。

古い表現だが、屋敷の女主人をそう呼ぶ記憶があった。

「先代の奥さんに、似てるらしいよ、絹ちゃんは」

ふふっ。

日差しをものともせず、渡部は微笑む。

さっきの柴田の顔を、思い出しているようだ。

先代？

一つ前の当主　織田のことか。

いまの織田も知らないのだから、先代と言われても、絹にぴんとくるはずがなかった。

ふうん。

先代の嫁と同じ顔で、古くからの部下を驚かそうというのか。

ん？

絹は、いま考えたことに、ひっかかった。

ということとは。

「望月桜つて…誰の妻になるはずだったの？」

もう一人、同じ顔がいたのだ。

「そっちに行ったか…ははは、お察しの通り、当代のお館さまだよけど、子供ができたことを、ギリギリまで隠してたからなあ、頭よかったよ、あの女…おかげで、結婚話のご破算」

本家が気付いた時には、もうほぼ臨月だしな。

渡部は、おかしくてたまらなそうだ。

「なんで、広井の長男が七月生まれか分かる？」

明日は、京の誕生日。

理由なんか、絹が知るはずがない。



首を横に振る。

「一族は、必ず祇園に顔出ししなくちゃいけないくてね…だからあの人は考えたのさ。妊娠が、ぎりぎりまでバレないようにするために、祇園の終わったすぐ後から、子作りしなきゃいけないってね」

大学卒業したら、すぐ嫁入り決まってたから。

過去の話、だからだろう。

自分の考えていることの邪魔をしないから、渡部はペラペラと桜の話をするのだ。

しかし。

絹には、桜の決意が見えた。

チヨウと結ばれるためには、もう既成事実しかない。

次の祇園までに、必ず子供を産まなければ。

そして 京が生まれた。

母が、京都に行かなくていいように、と。

親孝行にも、祇園祭の日に生まれたのだ。

見えないはずの桜の過去に、色がついていく。

古いしきたりから逃れるため、彼女はおなかの中の京に、全てを賭けたのだ。

「でも…子供ができたからって、よく無罪放免になったわね。悪党らしく、報復くらいするものじゃないの？」

確かに桜は死んだが、それは随分後のことだ。

少なくとも、了が生まれた後。

「ああ、それ？ 最初は、望月の家が娘を死んだ扱いにしたんだよ、青柳を懐柔してね。当主の嫁候補に逃げられたなんて、あまりに聞こえが悪いだろ？」

桜の親心としてか、はたまた保身のためか。

どちらかは分からないが、少なくとも親は、チヨウと別れさせようとは思わなかったらしい。

「ただ、賢い女のはずなのに、彼女はひとつだけミスをした」

少し、大きな通りに出る。

人も多くなり、屋台も並んでいる。

「八坂さんに、お参りに行くっ」

強く手を引かれた。

絹は、八坂さんとやらに興味はない。

それよりも、渡部の言うミスが気になるのだ。

「望月桜は、何をしてしまったの？」

カラコロ。

鳴る下駄と喧騒で、聞こえないフリをされるかと思った。

「家族旅行さ」

だが、彼は答える。

絹の脳内で、猛烈なスピードで記憶がめくられる。

「もう、ほとぼりがさめたと思ったんだろっねー…でも、バカだよ、祇園祭に来るなんて」

ああ。

甦った記憶を確認すると、答えあわせは同時だった。

もう大丈夫、青柳の家に近づかなければ大丈夫。

読み違った桜。

そして、生きていることを知られる。

サクラ

チル。

もう一人

絹は、無宗教だ。

あえていうなら、ボス教。

だから、神社に連れてこられても、ありがたみなんかなかった。参拝より、もっと聞きたいことはたくさんある。

しかし、彼は境内に入ると口を閉ざしてしまったのだ。

「八坂さんの中で、生臭い話はしないよ」

日傘をたたむよう言われる。

絹は、ふうと息を吐きながら、言われた通りにした。

神様を、信じるタイプには見えないのに。

「何を願うの？ テニス？」

彼は、貴重な練習を裂いて、京都入りしているのだ。

「テニスで神頼みを、したことはないな」

ふふん、と鼻で笑う。

全国制覇とかは、狙っていないのか。

「もう一つは、神頼みがいりそうだね…かなり、アクロバットだから」

目を細めながら、渡部は絹に五円玉を差し出した。

お賽銭、と言う意味か。

「アクロバット…綱渡りでもする気？」

受け取るが、また何かキナ臭そうな話に、絹は表情を曇らせる。

「神様とオレだけの、ヒミツさ」

無駄に目をキラキラさせたので、絹は受け取った五円玉を、その顔目かけて投げ付けたい衝動を覚えた。

わざとらしい顔だ。

そんな、彼女の不快感に気付いたのだろう。

「大丈夫…そのアクロバットをする時、絹ちゃんやおじさんは…」

神様の目の前。

ほほ笑いながら、彼はお賽銭を投げた。

「…必ず巻き込むつもりだから、楽しみにしておいて」

啞然としている絹を置き去りに、渡部はすみやかに神頼みを始め

る。

妙に儀礼ばつてるその動作のせいで、絹に頭を抱える時間まで与えてくれた。

一体、何に巻き込む気!?

五円玉を、手の中でぎゅっと握り締める。

そんなご縁は いらない。

渡部は、ボスも巻き込むと言った。

親戚という意味なのか、はたまたマッドサイエンティストとしてか、もっと違うのか。

想像できなさすぎて、絹は頭が痛くなってきた。

「巻き込まれて、命に関わったりしないでしょうね」

帰り道。

境内を出てしまえば、生臭い話をしてもいいのだろう。

再び日傘を差しながら、絹は渡部に語りかけた。

「……………」

珍しく、彼が黙り込む。

「うん。」

質問に、いやな沈黙で答えないで欲しい。

「……どうだろう、おじさんがへまやらなきゃ、大丈夫だと思うよ」

沈黙の後に、しかし軽い声。

そこは 自己責任なのね。

絹は、眉を寄せた。

余りの軽さに、悲壮感がないところがタチが悪い。

さんざん絹を怖がらせることを言えば、彼女は頭に血が昇って、渡部に食ってかかるだろう。

ボスを危険にさらすなんて、と。

しかし、そんな感情の流れを、この男の言葉はぬるりと、ウナギのようにかわしていく。

これもまた、悪党になるために必要な能力なのか。

「巻き込まれるのを、断る方法はあるの？」

どうせ、ないと言われるだろうと思いつつも、絹はイヤミで聞いた。



「あるよ」

なのに渡部は、あっさりと回避について肯定したのだ。

「おじさんが、宇宙にでも逃げていれば、さすがに巻き込まれないかな」

あははは。

自分の言葉に、自分で笑い出す。

絹の白目など、気づいてもいないかのように。

ボス：ロケット作りましょう、ロケット。

絹は、心の中のボスに向かって提案した。

ボスの技術があれば、ロケットくらい作れそうだった。

しかし。

宇宙にチヨウはいない。

三兄弟も。

だから、彼がロケットに乗り込むことはないだろう。

「宇宙ね…逆に、あなたを宇宙に送ってしまえば、巻き込まれることもないんじゃない？」

やっぱり、ボスに一人乗り用ロケットを作ってもらおう。

絹は隣の男に、皮肉と優雅をこめて微笑んでみた。

再び、青柳の家についたのは、もう日が西に傾きかけた頃だった。

渡部が、のらりくらりと絹を違う辻にひっぱり回したからだ。

いきなりいなくなったと思うと、わたあめ片手に帰ってきたり。

しかし、絹はほだされたりはしない。

本当の顔は、いま見せているものとは違うのだから。

門をくぐると。

「渡部のボンーひさしぶり」

突然、目の前の渡部が、誰かに抱きつかれた。

その肩ごしから、知らない顔が絹を見ている。

二十歳くらいだろうか。

半端な長さの髪を、後ろで一つにしばっている。

顔は面長で、シャープな印象を受ける。

彼もまた、青柳のコーディネートベビィなのか。

「蒲生の若さん…いきなり偵察ですか」

べりつと、張りつかれた男の身体を引き剥がし、やれやれと渡部がため息をつく。

「あつたりまえ、柴田のおっちゃん、泡吹いてたぞ」

はがされながらも、蒲生と呼ばれた男は絹から目を離さない。

「いいもん手にいれたなあ、ボン…何？ 殿への献上品？」

しかし、彼女を目の前に、いきなり悪党全開のセリフだ。

既に、彼の中では絹の人権がないのだろう。

「ちがいますよー…この子は、ただの祭観光」

にっこりー。

微笑む渡部に、絹は脳内チヨップを食らわせる。

献上品にしないのは当たり前として、強制的に連れてきておいて、余りの言い草だった。

「ふうん…まあでも、ボンがそんな風に笑う時は、大体、悪いこと考えてる時だよなあ」

ふっふっふ。

怪しげな笑いと同じタイミングで、渡部の肩を叩いて 蒲生は、絹の方へと回りこんできた。

「ボンの顔に飽きたら、お兄さんとおいでねー。高給優遇するよー」

絹は。

これまた、裏の顔があるに違いない相手を前にして、照れもトキメキもなく、目を糸目にしていた。

「どちらもお断りです」

容赦ない一言に。

「ぶわっはっはっは」

蒲生は、顔からはみ出すんじゃないかと思えるほど大きな口で、笑ってくださったのだった。

「さて、オレは御前の宴会に行くけど、絹ちゃんはどうする？」

渦巻きの蚊取線香をつけた後、渡部は立ち上がった。

御前 ということは、織田も顔を出すということか。

見たい気持ちがないわけではない。

しかし、昔自分をないがしろにして殺した女と、同じ顔が現われたら、ひどいとばっちりがきそうだ。

「ここにいるわ」

遠くから、聞こえ始めるお囃子。

「賢明だね…じゃあ夕食は、ここに運ぶようにしておくよ」

浴衣の乱れを直して、渡部は部屋を出て行った。

さて。

一人になった絹は、ただぼんやりしている気はなかった。

制服と携帯とカメラ。

出来れば見つけて、連絡しておきたい。

欠席で、広井ブラザーズからメールも来ているに違いない。

渡部の思惑の中に、絹がこの屋敷をうろつくことも入っている。

顔は知らないが、偉そうな織田っぽい人だけ、気を付けよう。

絹は部屋を出て、縁側の廊下に出た。

純和風というよりも、もっともっと昔の平安ちつくな建物だ。

延々、ふすまの部屋が続いている。

夏という季節のせいか、外に向いた襖のほとんどは開け放されている。

目隠しのついたてが、独特の風情をかもし出していた。

人の気配は、しないなあ。

みな、御前の宴会に行ったのだろうか。

絹のような異端の存在を連れてきているのは、渡部くらいだろう。

仲間内を、この顔でひっかきまわして、あの男は何をしようというのか。

と、あてどなく歩けど、絹の制服が置いてありそうなところはない。

誰かの部屋にでも、しまいこまれてしまったのだろうか。

うーん。

どうしようとかと、絹が思った時。

「ふふふ」

お雛子の音にまぎれて、女性の笑い声が聞こえてくる。

「ああ…なりませぬ」

制止する老女の声。

ぱつと。

少し先の部屋から、浴衣の女が表へ飛び出した。

裸足のまま、庭へと降りる。

「おもどりを」

追って出た老女が、絹に気づく。

しかし、絹はその女性に目を奪われていた。

自分と とてもよく似ていたのだ。

一瞬、桜が生き返ったのかと思った。

しかし、その子はせいぜい、絹くらいの年齢で、彼女であるはずがない。

ではなぜ、そっくりな顔がいるのか。

呆然と絹がつっ立っていると、老女がこちらを見てギョツとした顔をする。

庭に下りた子と自分を、慌てて見比べる。

その反応からすると、老女は「この顔」がもう一人、屋敷にきているのを知らなかったのだろう。

と、老女が絹に気を取られている間に、庭におりた子は、ふらふらとさまよう足取りで歩く。

あらぬところに泳ぐ瞳。

「ふふふふ」

笑う声も、よく聞くと虚ろだ。

「おもどりください」

気づいたようで、老女が縁から降りようとする。

ふむ。

どうやら。

絹と同じ顔の存在は、正常な意識は持ちえていないようだ。

老女よりも身軽に　　絹は、庭へと降りた。

彼女と同じ裸足で。

作り物ではない、本当の顔を見てみたかったのだ。



自分と、どれほど違うのか。

相手に、半分意識がないからできた行動だ。

さまよう手を、捕まえた。

いやいやと、手を振って逃れようとする身体に腕を回す。

そして、自分の方を向かせた。

一瞬だけ。

虚空をさまよう瞳と、絹の瞳がぶつかった。

純粋な黒というよりは、うぐいす色がかって見える瞳。

絹の顔というよりも、もっと幼く感じるのは、意識がはっきりと保てていないせいか。

自分にはない、純真だけでできている存在。

いやがる身体を捕まえて、絹は老女へと引き渡した。

「誰か、誰か」

裸足の女二人のために、老女は人を呼んだ。

すぐに若い女が二人やってきて、手ぬぐいと水を汲んだ桶を抱えてくる。

その間、絹は老女の視線に耐えながら、自分と似た顔を捕まえていたのだ。

「あのお…どちらから？」

おそろおそろ。

自分の氏素性を語れといわれても困るので、絹は曖昧にごまかそうと思った。

しかし、いい言葉が浮かばない。

「あの世からです」

困った絹は、空を指差してみた。

よく考えてみれば。

うぐいす色がかった目を見て毒気を抜かれた絹は、綺麗になった足で部屋に戻ってしまった。

よく考えてみれば、先代の嫁に続き、桜が存在するのだから、青柳がお得意のコーディネートで、よく似た子が生まれるように操作していてもおかしくはなかった。

あの子もきつと、その結果生まれたのだ。

ただ。

正常な意識は、どこに置いてきたのか。

前にボスが、コーディネートで失敗した人間の行方を、聞かない  
ほうがいいと言った。

あの口調からすると、おそらく闇の中に葬られるのだろう。

では、あの子はなぜに、そこにいるのか。

顔はそっくりでも、青柳としては中身は失敗だろうに。

考えられる可能性は 桜の代用品。

妻は、あの顔でなければならぬ、のかどうかは分からない。

しかし、青柳があの顔に固執している気配は、そこはかたなく漂  
っている。

ということとは。

はっと。

絹は、身の危険に気づいた。

もしも、青柳が絹の顔に目をつけたらどうするのか。

既に、柴田と蒲生には顔を見られたし、数人の使用人とも顔を合  
わせた。

それが、青柳の耳に入ったら。

蒲生の言った、殿への献上品にさせられるのではないだろうか。

思い当たる節はある。

渡部が、絹の過去の秘密を、きれいさっぱり消したことだ。

この顔が作り物であるという事実は、ごく一部の人間しか知らないまま。

だから、青柳が生まれつき絹がこの顔を持っていると、勘違いする可能性がある。

ちよ。

相当、ヤバイ気がする。

桜の身代わりに、悪党の嫁なんてまっぴら御免だ。

すぐれるとしたら、渡部が献上品説を否定したことか。

しかし、それはあくまで彼が考えていることであって、この顔にこだわっている人には通用しないかもしれない。

とにかく、渡部にその辺りを確認しなければ。

そう思った瞬間。

人の気配を感じた。

開け放たれた縁の方。

渡部が帰ってきたのかと、はっと顔を向けると。

「ハ〜イ」

物陰から、可愛らしく手を振る　　蒲生がいた。

こ、こっちが来たか。

蒲生

「ボンが宴会にきてたからね、君が一人だと踏んで……夜這い？」

あっけらかーんと。

蒲生は、部屋に入ってくる。

「帰ってください」

絹は、即答で叩き出そうとした。

夜這いを自称する男を部屋に入れたら、何をしてもいいと言っているようなものだ。

大体。

渡部だけでも持て余しているのに、また別の悪党など扱えるものではない。

「あはは、イツツジヨークだよ。何にもしませんよー…多分」

「かえ…ああもういいです」

この人は、どうも疲れるタイプだ。

絹は、構うのをやめた。

構えば構うほど、図に乗っていくお調子者タイプ。

勿論、織田の一派なのだから、それだけではないだろうが。

「まあまあ…：ピーこちゃんに会ったでしょ。さっき、ばあやも腰抜かしてたし」

絹の気持ちだが、防御に働いたのに気づいたのか、蒲生が話題を変えた。

ピーこちゃん？

ばあやというキーワードで出てくるのは 絹と似た顔の子。

「ここは、人間に小鳥みたいな名前をつけるの？」

切り返しに、また蒲生は口をはみ出すほど大きく開けて笑う。

「悪い悪い、ちゃんと名前はあるんだけど、笑うか歌うかしかしないからな、あの子…：でも、何で驚いてないのかね、このお嬢さんは」

笑いながらも、絹の存在を伺いに来たのは分かった。

「この世に、似た人は三人いるんでしょう」

絹は、あえてはぐらかした。

この屋敷に、自分の味方など誰もいないのだ。

「先代のお方様、問題児の女に、ピーこちゃん…：それに君、となるとひとり多いな」

問題児。

それは、桜のことか。

絹は、ふつと微笑んだ。

三人で合っている、と。

その中に、絹を入れてはいけないのだから。

「ピーこちゃんは、えらいさんのお嫁さんになるの？」

あの意識では、遺伝に問題が出そうな気もするが、織田があくまでも顔にこだわらるなら、ありえない話ではない。

「どうか…青柳のおっちゃんとしては、覚醒を待ちたいところだろっねえ」

また、変な言葉が出てきた。

意識がまともに戻るのを、祈っているというところなのか？

それはまた　気が長そつな話だ。

「ところで…名前を覚えてくれないかなー」

蒲生に、今更なことを聞かれる。



「渡部さんに、聞いてください」

しかし、保身のために、絹は答えなかった。

この男が、誰からか情報を聞きだしてこいと、頼まれていないとも限らない。

そうでなくても、いろいろ調べられかねなかった。

渡部自身が、学校で彼女の顔を見てから、全てを調べたように。

絹は、いまとなつては、早くこの屋敷から逃れたくてしようがなかった。

うっかり、地雷を踏んでしまう前に。

普通の人間相手なら、どれだけでも絹は戦える。

しかし、プロ相手ではそうはいかない。

特殊能力を仕込まれたとしても、彼らは決してあの施設では脱走できなかった。

絹は、脱走する気なんかなかったが、他の人間を見ていれば分かる。

新しく連れてこられた人間と、不慮の事故死以外、売られるまで彼らが入れ替わることはなかった。

あんな悪魔のような教官たちが、織田側にいる。

彼らが本気で、絹の顔を欲するなら、障害など何も無いのだ。  
帰れなくなる。

それが　　一番怖い。

「私は、好きでここに来たわけじゃないわ…できれば、早く帰りたいの」

顔を利用されることを、もっとしつかりと考えるべきだった。

「そうだろうね、オレが君の顔でも、絶対にここには来ないな」

この家の名前を知ってるなら、な。

蒲生の言葉が、絹の足に冷たく触れる。

青柳青柳青柳青柳。

原始的な遺伝子コーディネーター。

姿は見えていないが、森村もこの屋敷のどこかにいる。

そして、種馬のように、屈辱的なことを強いられているのだ。

ぞつとする。

渡部が、この顔は作り物だと公言してくれれば、その難は逃れら

れるだろう。

しかし。

彼に自分の命運を委ねるなんて、出来るはずがなかった。

ニセモノの顔の女を連れてきました　そう、渡部は言うだろうか。

いや。

きつと言わない。

だから、過去を消したのだ。

絹のことを調べる人間たちを、騙すために。

「んー…帰りたいなら、送っていいんか？」

青ざめていく絹に、蒲生はいきなりぶっとんだことを提案した。

「送っていく…って」

呆然と、絹は男を見ていた。

「うん、帰りたいんだろ？　車できてるし…酒飲めないから飲んでないし」

あっけらかん。

大したことではないように、蒲生は言い放つ。

「あなたは、ここにいなくていいの？」

義務だから、来ているだろうに。

用心深く、彼を見る。

どれだけ、あっけらかんとしていようと、それに騙されてはいけないからだ。

「んー、まあ、殿にも挨拶したし、一応義務は終わったね」

つまらないじゃん、オッサンたちと話したって。

蒲生は、自分の言葉に自分で笑う。

これは、チャンスなのか。

それとも、将来的な意味のピンチなのか。

絹には、ひとつの分岐点に見えた。

おそらく、渡部の予定に蒲生は組み込まれていない。

それに、ここに長くいればいるほど、絹の人生が歪む可能性があるのもまた、確か。

「制服とカバン…どこにあるか分からないの」

絹は、慎重に即答は避け、言葉を迂回させた。

帰らないにしても、それは必要だったのだ。

「お安い御用だよ」

大きな口が、にーっと横に伸びる。

「保護者に連絡してもいい？」

ひとつひとつ。

条件を埋めていく。

「勿論っ」

即答だ。

では。

「それで…あなたに、どんなメリットがあるの？」

これでは、どうだ。

親切だけで送ってくれるなんて、勘違いしてはいけない。

だから、聞くのだ。

このメリットが、納得できないものなら、ついていけるはずがない。

「んー」

蒲生は、一度天井を見た。

そして言った。

「クソ生意気な、渡部の鼻をあかしてやりたいじゃないか…新参者のくせに」

大きな口が 泥を吐く。

かえりみち

この男は、鋭利な刃物ではない。

絹は、蒲生をそう表現した。

彼は　鈍器だ。

重く野蛮な、棍棒。

スマートな切り口も、すばやい一撃でもない。

しかし、振り下ろされるそれに、一度でも当たれば砕け散る。

その重さ。

昼は、仲が良さそうに感じたが、結局は他人同士の織田の部下。

隙あらば、引きずり下ろそうとしているのか。

「この顔はね」

顎を取られた。

蒲生の方を向かされる。

「この顔はね…殿のステータスなんだ…渡部の小僧ごときが、横にはべらせていいもんじゃない」

ボンではなく、ついに小僧に落ちた。

「…制服とカバンをお願い、着替えないと」

顎を取られたまま、絹はまっすぐに彼を見た。

悪党には違いないが、渡部に対する敵対心は、利用できそうに感じたのだ。

「了解…で、名前は何だい？」

自分側の手札は見せたのだ、と。

蒲生は、絹側の手札を出せというのだ。

「…絹…高坂、絹よ」

ボスからもらった名前を　名乗る。

にやーっと笑って、蒲生は顎から手を放した。

「オーケイ、絹…お前は頭がいいな。オレの方が勝ち馬だぜ」

自信満々の顔。

絹は、その点はノーコメントにした。

織田の世界で、誰が勝とうが負けようが知ったことではないのだ。

絹やボスにちよっかいを出すな。



それだけ。

身を翻した蒲生が、絹の服とカバンを持って帰ってきたのは、ほんの二分後。

「さあて…愛の逃避行と行きますか」

ついたての陰で着替え終えた絹に、彼女の靴をぶらんとさげて見せる。

それを、縁の下に置いてくれる。

愛はないわ。

そう絹は思ったが、構うと面倒くさそうだったので、放置するこ  
とにした。

「もしもし、先生？ 絹です」

車の中で、絹は携帯をかけた。

電話の向こうは、しばらく黙りこんだまま。

声が聞けずに、絹はその時間がとても長いものを感じた。

『携帯を…取り戻したのか？』

ひそめられるボスの声。

絹の周囲が、まだ緊迫した状況だと思っているのだろうか。

しかし、とりあえずボスの声を聞けて、少し安心できた。

「はい、今そつちに帰ってきてます」

遠くなる祭囃子。

もういい。

祇園祭など、こりこりだ。

絹は、まだ完全に悪党の手から解放されたわけではないが、ふうと助手席のため息をもらした。

『戻って…渡部がもういいと？』

戻らないのは、ボスの声。

「いえ、蒲生って人に逃がしてもらいました。車で送ってもらってます」

絹は、いまの状況を的確に伝えた。

『蒲生…』

考え込む声。

ボスが、どれほど織田の部下のことを知っているかは分からないが、その一派だと理解しただろうか。

『カメラはあるか？ 切れているようだ、あるならつけなさい』  
言われて、絹ははっと胸ポケットを探った。

ある。

切れているのは偶然か、はたまた渡部が気づいたのか。

絹は言われたとおり、静かにスイッチをオンにした。

そして、運転手側に身体を向ける。

「ん？ どうかしたか？」

絹の動きに気づいた蒲生が、ちらりと横目だけでこっちを見る。

「保護者がお礼を言いたいって…でも、運転中なものね」

絹は、カメラで彼を映したことを悟られないように、軽い嘘をついて身体を前に戻した。

再び、携帯を耳にあてる。

「蒲生さんは運転中なので…お礼だけは伝えておきました」

嘘の言葉で、自然にコーティングする。

『分かった…こっちで発信機の動きも確認している、気をつけて帰ってきなさい』

淡々としたボスの声。

「はい、ご心配おかけしました」

まだ、帰り着くまで何があるかわからない。

携帯の電池は、温存しておかなければ。

絹は、名残惜しく電話を切ったのだった。

「本当の親じゃないだろ」

電話を切ると、さらっと蒲生に突っ込まれた。

「ええ」

別にそれは、秘密でも何でもない。

絹も、さらっと答えた。

「そうだろうな、親って言わないし、言葉も他人行儀：おまけに、何で京都に連れ去られたのに黙ってるんだ？」

渡部に売られたのか？

蒲生の言葉に、絹は苦笑するしかない。

さっきのボスの、低く淡々とした声が気になる。

あれは、何なのか。

絹を、渡部に売ったことへの罪悪感なのか。

渡部　その向こうの織田に逆らうことは、ボスにとってメリツトはない。

渡部が貸せと言ったのなら、ボスは貸さなければならなかったのだろう。

「多分…渡部さんが脅したんだわ」

絹にいえるのは、それくらいだった。

「ああ、なるほどね…絹の保護者も、織田をまったく知らないわけじゃない、というわけか」

パワーは鈍器でも、頭まで鈍いわけではないようだ。

蒲生は、その事実を的確に捉えていた。

「森村さんって知ってる？」

どうせ調べれば、すぐに分かることだ。

「ああ、あの『森村氏』か」

何か　ひっかかる含みを、それに感じた。

彼の立場を、皮肉って表現しただけだろうか。

「私の保護者は、森村さんの異母兄よ」

そう言えば。

きっと、関係が分かるだろうと思った。

少なくとも、絹の口から『渡部の叔父』とは、言いたくなかったのだ。

「ぶっ」

運転席で、蒲生が吹き出した。

「ああ、ああ、なるほど！　好色渡部翁の！　なるほどなるほど！」  
身内でも、有名なようだ。

「そりゃ、小僧が強気に出られるはずだ…本家だもんな」  
とぼつちり、おつかれさん。

同情しているというより、愉快でしようがない様子だ。

「そうか…森村氏に絹と、ダブルであの小僧はおさえてるのか」

クソ生意気な。

あ、また。

また蒲生は、森村について、変な表現をしたのだった。

「森村氏って…どういう意味？」

絹は、どうにも気になって、それを言葉にしてみた。

「ん？ どういう意味って？」

聞かれる意味が、分からないような返事。

「どういう意味って…何か重要っぽい表現をしなかった？」

青柳の遺伝子材料というだけでは、おさまりきれない何かを感じたのだ。

ああ。

暗い車内。

蒲生は唇だけで、その音をなぞった。

絹は、対向車のライトでそれを見たのだ。

「織田じゃなければ、関係ない話かな。まあ、彼にはがんばっても

らわないといけないけどね」

うひひひひ。

やや下品な笑いになるのは、彼のいまの境遇を思っただろうか。

羨ましそうな響きに聞こえるのが、絹をいやーな気持ちにさせた。

ただ。

織田でなければ関係ないと  
ものだと、彼は表現したのだ。

要するに、絹には話せない領域の

そこは、大きい。

こんがらがってきた。

渡部は、ボスや絹を何かに巻き込むというし、この顔でボスに献上される危険まで出てきたし、森村にはまだ秘密があるみたいだし、蒲生も決して気を許せないし。

「もう、うんざり…渡部さんが、ちょっとい出さなくなる方法ってないかしら？」

高速道路のインターの案内表示を見ながら、絹はいまになってぐったりと疲れてきた。

「小僧の弱みって何か？ それなら、あのねーちゃん人質に取って脅すとかどうだ？」



あのねーちゃん？

誰のことだろうと、絹は首を傾げた。

「ほら…天野組の跡取り娘。ゾツコンだろ？ 渡部の小僧、あのねーちゃんに」

えええー！！

衝撃の事実、絹は目が点になっていた。

ぞっこん！？ あれが、ぞっこんの態度！？

どう思い出してみても、どこをとっても犬猿の仲にしか見えないあれが！

「見てれば分かるだろ？ あいつが、マジもんで絡むのは、あのねーちゃんだけだし」

本当に嫌いなら、さっさと抹殺してるだろうしな。

大胆な観察眼に、しかし、絹はなるほど納得させられた。

本当に目障りなら、もう彼女はこの世にいないはずだ。

あれだけ言いたい放題にさせているのに。

「ええと…渡部さんって…ドM？」

絹の素朴な言葉は、蒲生を爆笑の渦に突き落とすだけだった。

あの男が、天野さんにねえ。

衝撃の事実のせいで、頭の中身がいろいろとブツ飛んでしまった。

しかし、あの天野を人質に取るなど、絹に出来るはずもない。

ん？

ということとは。

「もし、あなたが本気で渡部さんとやりあう時は、天野さんを人質に取ります?」

表だって対立する気があるのかは、分からない。

しかし、こうして絹を連れ出し、渡部の邪魔をしていることで、仲が悪くなることは間違いなかった。

「あー、どうすっかなあ…いきなり誘拐するより、フリーにしつつ、危険な目にあわせ続け、それをずーっと小僧に見せ付けるのが楽しそうだな」

真面目に考え　そして、『THE・悪党』な答えが返された。

聞いているだけで、胃に穴が開きそうだ。

しかし、口調からすると、いまずぐ何か起こそうという気配はな

い。

ただ、大きく発展しない程度に、こぜりあっている感じか。

「ああ、そうだ」

指先が、軽くハンドルを叩いた。

「あの小僧に、何か言われたんじゃないかね？ 悪だくみの話」

教えてほしいなー。

家まで送ってやるという交換条件が、いきなりここできた。

高速道路上の車の中。

走る密室。

ある意味、脅迫に近い状態でもあった。

しかし、それは絹にとって、しゃべってはならない秘密ではない。

それどころか、自分とボスを巻き込むこと必至の話だ。

蒲生に邪魔された方が、相当都合がいい。

「さあ…でも、神頼みしてましたよ。アクロバットなことだから、神様にも頼まなきゃいけないとかなんとか」

とりあえず、自分とボスの話は置いておく。

何が、ヤブヘビになるか分からないのだ。

「八坂さんに？ んー、アクロバットねえ」

少し考え込んだ後。

「あー…それに、絹が関係してるって、小僧言っただけか？」  
どきっ。

さすがに、ボスまで話は発展しなかったが、彼女は蒲生の前足で押さえられたようだ。

「……何か巻き込むって言ってましたね」

ボスの話は出さない。

聞かれていないから、嘘はついていない。

ただ。

これで、絹の立場が更に微妙になった気がした。

「フフーン…何か読めてきたカモ」

少し楽しそうになってきた蒲生の声に、絹はいやいな気持ちを拭えずにいた。

ただいま

「そろそろナビしてくれ」

声をかけられ、絹はびくっと目を覚ました。

「その制服ってことは、学校近辺でいいんだろ？」

運転席もあくびをかみ殺しながら、窓の外を指差している。

はっと外を見ると、学園前に停車していた。

知らない間に、つい眠ってしまっていたようだ。

「あ、ここでいいです」

絹は 反射的に保身に入った。

「ダメ、いま何時だと思ってんだ、絹」

言われて、車内の時計を見ると午前2時。

確かに、制服で一人で歩く時間ではなかった。

「迎えにきてもらいますから」

絹は、携帯を出そうとした。

しかし、カバンに入っていない。

「フフーン」

鼻歌に、はっと運転席を見ると、蒲生の手には燦然と輝く絹の携帯電話。

やられた。

「携番とアドはもらったぞ…それくらいの役得はいいだろう？」

不覚。

気を抜いてしまった自分に、絹はがつくりと肩を落とした。

蒲生が、役得のためだけにそれを抜いたとは思えない。

既に、渡部の手にも一度渡っているので、そっちにも番号は抜かれているだろう。

ボスに頼んで、携帯変えてもらおう。

故障したことにすればいいのだ。

そうすれば、広井ブラザーズに、休み中、メールの返事をしなかったことに対しても言い訳ができる。

「で、家はどっちだ？」

この強引さが、絹をぶん回す。

渡部のような軽やかさはないのに、力強すぎて逆らえないのだ。

「そのまま…まっすぐ」

ボス、すみません。

だんだん、ボスの顔を見るのが憂鬱になってきた。

本当に、失態続きだ。

きつと渡部から、ボスにも何らかの圧力がかけられたろうし。

「そこを左…」

曲がると、玄関が見える。

明かりがつけられていた。

嬉しいような　開けたくないような。

「ありがとうございました」

車から降り、絹は振り返って頭を下げた。

蒲生も降りていて、車ごしに絹を見送っている。

とりあえず、思惑はどうあれ、助かったことには違いないのだ。

将来、同じ口で蒲生を罵ることがあるかもしれないが。

「どういたしましたー、でも貸しにしとく」

にーっとなら口を横に広げながら、それでも言葉の釘を打ち付けてくる。

ここで終わりじゃないと、そうはつきりと言っているのだ。

「その貸し、渡部さんにツケといてください」

絹は、その釘を抜いて、記憶の中の渡部に突き立てて返した。

「オツケー、んじゃ、一緒に小僧を突き落とそう、そんな時は誘いにくるぜ」

ああ。

素晴らしきかな、自己解釈。

自分に都合のいいように、蒲生は言葉をこねくりまわした。

「遠慮しときます、では、おやすみなさい」

これ以上構っても、頭が痛くなるだけだ。

絹は、さっくりと言葉を終了して、玄関へと片手をかけた。

「絹に言うこと聞かせるには、誰をいたぶればいいのか」



その背中に。

笑い混じりの声。

反射的に、絹は振り返っていた。

車の中の、渡部いじめのようなことを、彼女にふっかけてきたのだ。

「おおっと…いい顔。やっぱりその顔は、そうでなくちゃな」

ニヤニヤと。

蒲生は、いやな笑いを浮かべると、車の中へと消えた。

確か。

前に、渡部も似たようなことを言った気がする。

思い出すのは、京都の庭。

裸足の　　ぴーこ。

もしかして。

本当に渡部や蒲生は、彼女が普通の精神に戻ることを、信じているのだろうか。

逆に言えば。

最初から、彼女はああではなかったのかもしれない。

蒲生は言った。

「ぴーこは、歌うと。」

「どうやって、彼女はその歌を覚えたのか。」

動き出す車を、絹は少し呆然としながら見送ってしまった。

「ただいま帰りました」

「こういう時に、なんと言えはいいのかわからない。」

「とりあえず絹は、いつもどおりの言葉を使ってみた。」

「……」

ぬつつと顔を出したのは 島村だった。

「何故か、懐かしささえ覚えるのは、京都が長く感じたせいかな。」

「ボスは？」

「しかし、肝心のボスは出てこない。」

「電話でのトーンも、気になっていた。」

「いま、研究室の方だ。気にせずに早く寝ろ」

島村も、いつも通りというには、声の響きが重い。

絹のいない間に、なにか不幸でも降り掛かったかのようだ。

もしかして、脅しで何かされたのだろうか。

島村を見るが、相変わらず表情が変わらない。

だめだ、読めない。

「私…何か迷惑かけた？」

とりあえず、言葉で探ってみる。

島村は。

「迷惑…と、いうより…後悔だな。その顔にした不利益が、意外に多かっただけだ」

言いおわると、島村はスタスタと行ってしまった。

彼もまた、研究室へ行くのだろう。

絹は、島村の言葉を噛み砕くので忙しかった。

迷惑というより、後悔と。

顔を決めて変えたのは、ボスだ。

島村は、ただ助手をしただけ。

と、いうことは。

後悔しているのは　ボス。

桜の氏素性に興味を持たず、調査しないまま安易に顔を作り替えたことへの。

絹は、歩き出した。

自分の部屋に、だ。

ボスは、科学者で。

彼は、後悔でグダグダ悩んだりしない。

それをきつと科学でフォローするだろう。

ならば。

絹は、次のボスの指示を待てばいい。

素直に、寝ることにした。

いまは、それが自分に出来る大事なことから。

いなかった時のこと

シャワーを浴びて、布団に横になった直後。

目覚ましが鳴った。

予想以上に、疲れていたようだ。

あつという間に朝で、全然寝た気がしなかった。

しかし、学校に行こうと思っていたので、だるい身体を引き起こす。

その前に。

携帯を、どうにかしなければ。

渡部に蒲生と、ヤバい連中に知られてしまった。

昨日、帰りついて電源を落としたままだ。

支度を整え、どっちかがいることを祈って、居間に下りる。

ボスが いた。

ほう、と絹はため息をついていた。

安心したのだ。

いつものように、きれいにヒゲも剃ったボスだったのだから。

「おはようございます」

普通に、あいさつをする。

「ああ、おはよう」

言葉に、わだかまりがないではない。

しかし、いつも通りに戻ろうとする気配は感じた。

それで十分だ。

「ボス、すみません、携帯の番号とメールアドレスを変えたいのですが」

だから、絹は業務連絡に徹した。

こういう事務事項のほうが、自然に処理しやすいのだ。

「分かった、すぐにやらせる。置いていきなさい」

言われるがまま、絹は携帯をテーブルに乗せた。

「あと、学校への私の休みの理由はなんでしょう」

口裏をあわせなければ。

「…風邪だ」

「分かりました、合わせます」

朝食を抜いて行くか。

寝不足もあるため、それで顔色の悪さを演出できる気がした。

ピンポン。

チャイムが鳴る。

「おはよーございますー絹さんの具合どうですかー？」

珍しく、三男坊が丁寧に呼び掛けている。

くすつと、絹は笑ってしまった。

嘘の理由とはいえ、心配してもらえるとというのは、くすぐつたいものだ。

「おはよう、了くん。迎えに来てくれてありがとう」

絹は笑顔で対応した。

「行ってきます」

ボスにも

「まだ顔色よくないよ、大丈夫？」

玄関先の了。

「明日はもう、終業式だもの。大丈夫よ」

その頭に手を伸ばし、軽くなでる。

「大丈夫…オレがフォローするよ」

車に乗り込むと、たのもしい将の言葉。

「ありがとう」

そして。

沈黙の助手席。

「京さん」

動きだす車の背もたれに身体を預けながら、彼を呼んだ。

右手だけが、座席の横から出て、聞こえていると合図。

すう。

絹は、息を吸った。

「誕生日…おめでとう」



京都を逃げ出したおかげで、今日が17日だ。

広井夫妻にとって、運命の日。

彼が生まれなければ、将も了もこの世にはいなかった。

まさしく、運命の一人目。

次男と三男は、その事実には嫉妬さえしていない。

一人産むごとに、夫婦は安心していった。

了を産む時にはもう、穏やかな気持ちでさえあつたらう。

京は、本当に特別な願いがこめられて産み落とされた。

絹の胸にさえ、嫉妬に似たものがある。

自分が昔、誰かにとって特別だったことすら、よく思い出せないのだから。

はみ出していた京の右手が 動きを止める。

「別に、めでたくねえよ」

手は、ゆっくりとひっこめられた。

「京兄い、もしかして照れたの？」

にやにやしなながら、了が前の座席に覆いかぶさるように、上から

侵入を試みる。

ゴン！

そんな領空侵犯の三男の額を待っていたのは、拳のミサイル。

「いつ」

もろに入って、了は押し返され、おでこをおさえる羽目となる。

「京兄いの名前、強いが強か、狂うの狂に改名希望ー！」

ぶーぶーと、了が反撃する。

京。

その名前や、誕生日も全て 母のルーツ。

終業式の朝。

新しい番号とメアドの携帯が渡された。

もちろん、それ以外の小細工もしっかりしてある。

「ただ」

渡す時に、島村が呟くように言った。

「ただ：相手が本当に調べようと思えば、すぐに新しい番号も知られるぞ」

まったく、その通りだ。

だから、番号を変えるなんていう手法では、堂々巡りになるだけだ。

派閥の違う、渡部と蒲生が絹を利用しようとしている。

「ボスと私を巻き込む計画って…何をする気だろう」

絹については、せいぜい顔を利用するくらいだろう。

織田という、ボスの嫁にはこの顔だと 変なこだわりがあるよ  
うだから。

昨日の夜。

ボスや島村を交えて、カメラが記録していない間の見たことや、  
渡部の話を説明した。

本来なら、よそのお家事情など、ボスも聞きたくないだろうが、  
巻き込むと宣言されているのだから、話しておく必要があったのだ。

「先生の血筋的には、利用するところはない。消去法で…渡部が、  
何らかの科学力を必要とする可能性がある」

歓迎しない口ぶりだ。

それもそうだろう。

もしも、誰かのために科学を使おうと思っているのなら、こんな家に引きこもっているはずがない。

彼らは、自分のしたい研究をしているだけだ。

「ただ逃げ続けるより、適当に協力するのもアリだがな」

その唇が、不承不承言葉を続けた。

えっと、絹は島村を見る。

「協力することで、向こうがおとなしくなるなら、それに越したことはないだろう。毎回、拉致られたいのか、お前は」

あー。

耳が痛い。

施設の指導員クラスの相手を出されると、どうにも絹では手に余る。

「ただし、それはあくまで織田からの依頼なら、な…派閥争いして  
るような、神頼み小僧からの依頼を、いちいち受けてたらキリがな  
い」

背中を向けて、彼は行ってしまった。

そうか。

島村の言葉に、ヒントがあった。

彼はあくまでも、織田の手下に過ぎない。

その組織の中から追い出されてしまえば、ボスや絹にちよっかいをかけるどころではなくなるのだ。

渡部の、足元をすくいたい男なら いるではないか。

さーて。

絹には、もうひとつ課題があった。

織田のことに比べると、大したことはないのだが。

携帯の番号やメールアドレスが変わったことを、三兄弟に上手に伝えなければならぬのである。

下二人はいいとして 京が厄介そうだ。

登校の車の中。

「えっ、メールアドレス変わったの？」

予想通りの了の反応に、絹は苦笑しながら自分の携帯を差し出した。

「ちょっと、都合で」

曖昧にごまかして、この話題を終わろうとする。

「三日前…」

助手席が。

ぼそりと呟いた。

三日前？

絹が、言葉を把握するより早く。

「三日前…先生が夜中に、うちにきた。二日前…お前が風邪で休んだ」

京は、言葉を続けた。

「そして今日…携帯を変えました、か」

問い詰める口調ではない。

ただ、匂わせている。

この3つに、関連性があるんじゃないのか、と。

「先生が、夜中って…」

絹が知らないのは、その最初のひとつ。

三日前と言えば、拉致された日だ。

京都についていたか、運搬中だったかは知らないが、その日の夜中、ボスが広井家を訪ねている。

チヨウウに会うためだろう。

でも。

なぜ。

「え、そうだったんだ」

夜中が何時か分からないが、将が驚いた声をあげる。

彼は、気づいていなかったようだ。

「京兄い、夜更かしだしなあ」

聞くだけで眠そうに、了があくびをした。

「何の用だったのかしら」

京は、知っているのだろうか。

席の後姿では、表情がよくわからない。

「さあな……」

絹に心当たりがないことが、逆に京を不思議がらせているようだった。

「絹さん…何か隠してる？」

教室で。

他の人には聞こえないくらいの声で、将がそう言った。

車の中で、京が余計な事実を並べたせいで、彼にまで疑惑を持たれてしまったようだ。

「隠すって…何を？」

絹は、困った風に笑ってみせた。

詮索されないための、予防線だ。

将は、空気を読む次男坊。

聞かれたくないことと察したら、一歩引いてくれるはず。

「うん、いろいろ。兄貴の言ったこともそうだし、時々、絹さんは知らないところで動いてるみたいだから」

だが。

今回、将は引かなかった。



自分の中の疑問を、並べてみせてくれる。

同じクラスというのは、便利と同時に厄介だ。

他の二人より、話す時間が長い。

もし、京が同じクラスなら、いまごろ彼にいろいろ問い詰められていたに違いない。

あっちの方は鋭いが、将はどっしりとして粘り強さを感じさせる。責めたり、きつい言葉は使わないが、しっかりと絹をまきつけるのだ。

こうなったら。

彼女は、秘密の少しを見せて納得させるしかなかった。

隠せば隠すほど、彼の瞳は疑惑を増やすだけだ。

「先生の親戚に…少し困った人がいて…それでトラブルがあるだけ」  
「よ」

絹は。

白状します　　という気配を漂わせ、ため息をもらしてみせた。

「私の携帯番号とか、抜かれてしまったみたいだから、用心に番号を変えたの」

これで。

京の言った物事は、全部つながったはずだ。

ボスが、本当はどういう理由で、チヨウを訪ねたのかは知らない。

だが、こういうことを相談に行ったのだと、将に理解させればいいのだ。

「絹さん…本当は、ものすごく困ってるよね」

絹のコーティングなど無視して、将はそう言った。

核心を突く一言。

「そつね…どちらかという困ってるわね」

観念した。

空気を読める男というのは、心の動きに、誰よりも敏感だ、ということ。

困ってないという嘘を言うと、疑いが増す一方だろう。

「うん、分かった」

将はそれだけ言って、前を向いてしまった。

え？

絹は、あっけにとられた。

もっと突っ込んで聞かれるかと、思っていたのだ。

しかし、困っている事実を確認しただけで、将は話を終わらせてしまった。

聞くだけで、満足だったのだろうか。

将の考えが何だったのか 分かるのは、翌日のことだった。

## 広井家

夏休みー。

と、子供のようにはしゃげない絹は、あくびをしながら部屋から降りてきた。

夏休みということは、本来の仕事である、広井ブラザーズとの交流が一気に少なくなる、ということだ。

たとえば、ちょこちょこ会う口実を見つけたとしても、40日というのは長すぎる。

身を守りつつ、どうやってすごしたらいいものか。

居間を覗くと、ボスと島村がいた。

「おはようございます」

いつものように声をかけたが、何か雰囲気がおかしい。

島村は、しらっとしているが、ボスは微妙な表情だ。

「お前」

しらっとしたまま、先に島村が口を開いた。

「お前…夏休みの間、広井のところで生活しろ」

突然な話だった。

「広井って……」

絹が、戸惑っている。

「今朝、チヨウウから電話がきた…絹が心配なら、夏休みの間くらい、うちに預けないか、と」

夏休みも泊まり込みで、広井ウォッチングができる口実だということに、ボスは複雑な顔だ。

まあ、ボスサイドのお家事情で、チヨウウを巻き込むのがいやなのかもしれない。

しかし、なぜ彼がそんなことを言いだすのか。

そう考えて。

昨日の、将を思い出した。

分かった、と言った彼。

将なりに考えて、その結論を出したのか。

「ボスも、その方がいいと思いますか？」

事実以外、コメントしようとするボスに、絹は聞いてみた。

反対するなら、もっと表情が険しいはずだ。

だが、賛成というにはテンションが低い。

「セキュリティだけなら、うちでもそう変わらないが…いかんせん  
人手が足りない」

微妙な返事だった。

この家には、見えないセキュリティが沢山ある。

しかし、それだけでは絹の安全は、万全ではないと言いたいのだ  
ろう。

夏休み中、一歩も外に出ずに、家にこもっていれば、話は別だ。

「広井家の方が、ボスも楽しいですよね…分かりました、準備しま  
す」

だが、この家に彼女がいない方がきつと、ボスや鳥村の仕事がは  
かどるのは間違いないだろう。

ついでに、いい映像もお届けできるわけだ。

一石二鳥なら、ためらう理由などない。

ただ。

ボスが、その事実にはしゃがなくなってしまったのが　とても、  
気になる。

「迎えにきたよー！」

車に乗っていたのは、了と 将。

夏休みの間の必要な荷物は、結構大きくて。

運転手さんが、トランクに運んでくれた。

「お世話になります」

嬉しくて飛びついてきそうなのに、今日は少しおとなしい対応になってしまう。

乗り込む前に、玄関を振り返った。

勿論、そこは閉ざされたままで、誰も見送ってくれてない。

当たり前のことなのに、いまは何かいやな感じだった。

また、帰ってこられるのだろうか。

そんな、漠然とした不安。

ボスが、広井家に反応しないほど、深く考えている気がするのだ。

もしも。

もしも、ボスがもう広井家のことはいいと言ったら。

絹は、お役御免だ。

「絹さん？ 行くよ」

立ち尽くしたままの彼女は、了に引っ張られて我に返った。

「うん」

将の待つ車内に乗り込む。

了も乗って、いつもの後部座席。

「夏休みの間、よろしく」

この大技をかました張本人に、笑顔で迎えられる。

「こちらこそ…昨日言ったのは、このことだったのね」

絹が、あの時理解できなかったこと。

「そんな、大げさに考えないでいいよ…楽しく過ごせたらいいね」

少しずつ、やんちゃさが抜けていく面差し。

この、どっしり感は、一体どこで育まれたものなのか。

「では、参ります」

運転手さんの言葉で、車が走り出す。



その一瞬だけ。

両側の二人の存在が、吹っ飛んだ。

自分背中に、沢山の糸がある気がする。

その糸は、玄関にくっついていてる。

車が進む度に、その背中の糸が引きちぎられていく気がした。

ブチブチブチッ。

なんだろう。

とても かなしい。

「こっちこっちー」

階段を駆け上る。

彼女の使う部屋に、案内してくれようとしているのだ。

「一番右端の部屋だよ」

将が、うつすら笑いながら、案内より先に場所をバラしてしまっ。

「了の部屋の隣だから、甘やかして部屋に入れないようにね」

そして。

立派な釘が、サツクリ刺される。

「ええそうね、誰も入れないことにするわ」

クスクス、と。

少し調子を戻しながら、将に切り返した。

「うん、そのくらいでいいよ」

なのに。

京とは、また違う反応。

やわらかく、にこっと笑われると 絹の方が、戸惑ってしまい  
そうだ。

「いい人」は、変わっていないはずなのに、妙な貫禄が困る。

「あ、お父さんは？ ご挨拶しないと」

部屋に入るより先に、お世話になる挨拶をしなければ。

カメラもマイクもばっちり。

チヨウウを、ボスに見せるいいチャンスだ。

「ああ、いま仕事行ってる。夜だろうね、帰ってくるの」

一応、土曜日なのだが、社長は気軽に休むわけにはいかないのか。

「あ、そうそう。仕事で思い出した」

階段の途中。

将が、こつちを見た。

「うちの家、夏休みの半分は、親父の会社でアルバイトすることになるんだけど…絹さんも一緒にどう？」

は？

さらりと長文を言われて、絹は一瞬飲み込めなかった。

「行きも帰りもオレ達と一緒にだし、本社はIDカードのいるセキユリティだから、うちにいるのと同じくらい安全だよ」

そして、再び長文でたたみかけられる。

ああ、そう、アルバイト、アルバイトね。

やっとそれを飲み込んで、絹は納得した。

さすが、広井家。

息子三人の労働力を、無駄にはしていないようだ。

「ええ、勿論働かせてもらうわ」

置いてもらって、働きたくないなんて言えるはずがない。

絹にしても、家の中でじっとしているより、遙かに気分がいい。

そう。

やはり、安全に人並みに活動したいと思ったら 「人手」がいるのだ。

ボスの言っていた言葉が、ふっと甦った。

「何してんだ？」

居間に下りてきた京が、室内の様子を見て、呆れたようにそう聞いてきた。

クーラーのよく効いたそこにいるのは、三人。

将、了、そして絹。

「何って…宿題」

了が、ノートをがばつと広げてみせる。

京は、眉間を押さえた。

余りの真面目な空間に、頭でも痛くなつたのか。

この流れになつたのには、ワケがある。

案内された部屋で、やっと落ち着いた頃、とにかく了が部屋に遊びにきたがつたのだ。

將に釘を刺されていたので、「宿題でもしようかな」と、やんわり拒絶したら。

「じゃあ、僕も一緒に宿題やる！」で、居間でこつこつとになつてしまつたのだ。

部屋ではなく、居間なら一緒にいられるので、その方がボスにもいいだろう。

「まあ、いいけどな…」

それでも、京はイヤそうだ。

彼らにとっては、毎年の苦痛だろう。

しかし、絹にとっては、新鮮な感覚だった。

生き残るために、必死でやる勉強じゃない。

なんて、のどかな勉強。

ただ、学んできたのが偏つた知識だったために、足りない部分は自力で補うしかなかった。

歴史や文学といった、絹には無縁な知識が、学校とやらでは必要なのだ。

「女の人のほうが、国語得意そうなのにね」

将が、絹のノートを指差した。

間違えているのだ。

くせのない綺麗な自分の字。

違う。

くせは、消された。

画一化された、個性のない文字。

けしけし。

それを消し去る。

人の心を読み解く国語は、しかし、リアリティがない感じがして好きにはなれない。

夢見がちだろうが、絶望的だろうが、共感できないのだ。

「あ、国語と言えば」

将が、思い出す声で言った。

「暇なときは、母さんの部屋の本借りるといいよ」

おっと。

複雑なことに。

桜の部屋の出入り許可を、いただいてしまった。

宿題は、了が最初に飽き始め、ついにグダグダになってしまった。

居間なら、絹と一緒にいられると学習したらしく、自慢の物をあれやこれやともってくる了。

それに付き合っている間に、すっかり夕方だ。

「あ！ パパの車の音！」

耳聴く、了が反応する。

「今日は早かったな」

将は、ソファから立ち上がった。

絹も立つ。

ボスお待ちかねのチョウだし、お礼も言わなければならないので、玄関まで行くつもりだった。

「出迎えなら、僕も行く！」

了が、絹を見てついでにこようとしたが。

「お前は、ここの片付けが先だ。何でも持つてきすぎだろ」

しかし、将に叱られて置いてけぼりになる。

苦笑しながら、廊下へ出た。

「おかえりなさいませ」

「ああ、ただいま」

既に、チヨウは玄関に到達していると分かる声。

「おかえり、父さん」

こつちへ向かってくるチヨウに、将が片手を上げる。

「お邪魔してます」

絹は、自分に視線が飛ぶ前に慌てて頭を下げた。

顔を上げると。

「ああ、絹さん、よく来たね。自分のうちだと思って気楽にして」

嬉しそうに、チヨウはここにしている。



社交辞令というより、何だか本当に嬉しそうだ。

「本当に、お手数かけます」

自分の家のようにと言われても、正直困る。

ボスの家ですら、そういう意味では違うのだから。

「ホント固くならないで…今日は絹さんの歓迎会で、ごちそうを頼んでおいたからね」

さあ、夕食にしよう。

にこにごちョウに、いざなわれる。

歓迎会。

聞いていない事実には、正直困った。

本当に絹は、厄介なものをしよいこんでいるのに。

「気にしなくていいよ、何か理由をつけてみんなで騒ぎたいだけなんだから、父さんは」

将にまた、空気を読まれフォローされる。

ますます、絹は困ってしまいそうだった。

広いダイニング。

そのテーブルの上には

「何で、この暑いのに鍋なんだよ」

京が、呆れた声でつつこむ。

「親睦を深めるには、鍋パーティーに決まってるじゃないか」

だが、チヨウはまったく動じず、自分の主張を並べるのだ。

「片付け終わったーパパ、おかえりー…って、なべー!？」

遅れて駆け込んできた了も、最後の声が裏返る。

「鍋、いいじゃん。オレ、暑くても鍋食べられるよ」

そして。

嫌がる理由が分からない男が、もう一人。

いや、彼の空気読破センスを考えると、分かってはいるはずだ。

ただ、この場面では父親側につくことに決めたのだろう。

「どうせ、一日クーラーの中で過ごしたんだろ…夏はちゃんと汗を  
かけ」

結局。

チヨウの、父親としての権威は素晴らしかった。

不満を言っていた二人も、ぴたりと黙ったのだ。

「さあ、具を入れるぞ…鍋奉行は父さんだ」

ワイシャツの袖をまくりあげ、チヨウはやる気を見せた。

絹は　この辺で、やっと広井家のテンションに慣れはじめる。

さつきまでは、ただ広井劇場を見るので精一杯だったのだ。

これは。

人の家庭に入り込むというのは、こんなにも戸惑うものなのか。

ボスや島村との生活は、とても「家庭」なんて言葉は使えないので、戸惑いも半端ではなかったのだ。

「絹さん、鍋は好き？」

一言もしゃべらない彼女に、将が聞く。

「えっ…ええ、好きよ」

慌てて返事をするが　かなりの部分で嘘だった。

こんな家族的な鍋など。

もう、覚えてはいなかった。

アキ

部屋に戻って、絹は一言。

「切りますね」

ペンのスイッチを落とした。

ちゃんと、ボスは見てくれただろうか。

大好きなチヨウを。

コンコン。

ノックされて、絹は慌てた。

「はい？」

また、了だろうか。

「お風呂のご説明に参りました」

女性の声だが、少し若い。

この家で、雇われているのは五人。

運転手の男性が二人と、家を取り仕切っている年配の男性が一人。

桜のことを教えてくれた、年配の女性が一人。

後一人は。

「はい、お願いします」

絹がドアを開けると、予想どおりの最後の一人だ。

二十代後半くらいの、しっかりして見える女性。

「各部屋にバスはありませんので、高坂様は二階のゲストバスルームをお使いください」

ちょうど、絹の斜め向かいのドアを指し示す。

「ぼっちゃま方は、出入りなならないよう釘を刺されてますから、安心してお使いください」

くすつと。

釘を刺されているシーンを、見たに違いない。

真面目な表情が、少し緩んだ。

「いつでも、お湯は出ますので…あ、それから」

表情を再び真面目にもどしながら、彼女は絹の方へ向き直った。

「男性には言いづらいことは、遠慮なく私におっしゃってください」  
「ときばきつ」。

ちょっと角張った感じはするが、逆に言えば頼もしい。

「お買物などの時は、私がボディガードも努めさせていただきます」  
拳げ句。

どついう指示を受けているのか、ボディガードなどと言いだす。

逆に危ないのではと、心配になった絹だったが。

「空手、剣道、合気道…すべて三段ですので、安心してお任せください」

彼女は　大きな手を、見せてくれた。

「アキさんは、ほんとすごいよ！　強いしカッコいいし！　合気道も教えてくれるし！」

翌日の居間。

絹の質問に、了は手放しであの女性のことをほめたたえた。

女性をほめる形容が、入っていない気がするが。

絹は、昨夜、部屋で考えていることがあった。

アキと呼ばれる女性が、それに見合う人か。

それを、確認したかった。

「いつから、ここで働いてるの？」

この家に、若い女性の使用人がいることがおかしいわけではないが、少し違和感がある。

「ぶふっ！」

すると。

了が、ほとんど反射とも思える速さで吹き出した。

「あはは！ それは！ ぶふっ！」

ソファの上を、転げ回って笑う。

そんなに、変なことを聞いたのか。

「おい、了…！ ついにネジ、とんだか？」

居間に入ってきた京が、弟の錯乱ぶりに驚いている。

「あはは！ だって、絹さんがっ！ アキさんが、いつうちに来たか、聞くんだもんっ！」

ひゅーひゅーと、呼吸困難の息で、了が理由を話す。



「ああ…なるほど…ぶふっ！」

あの京が 吹いた。

こらえきれないみたいだ。

「あ、アキさんね…うちの前で、行き倒れてたのっ！ や、山ごもり、帰りっ！」

息も絶え絶えに、了が言葉を絞りだす。

ちよっ。

なんか、変な単語が聞こえた。

「このご時世に、山ごもりだぜ…帰りに、ここまで走ってきて力尽きたとか…ありえねえだろ」

京すらも笑わせる、その破壊力。

「学校を卒業したら、武者修業に行けっ……どういう親だよ」

えーと。

つつこみどころが、満載のようだ。

しかし、素性は怪しい。

「何年前のこと？」

もしも、最近なら

「もう、四年か五年くらいか？」

セーフ。

半端な期間が、逆に彼女の身元を保障してくれた。

織田でも何でもなく、ただの野性の不審人物なのだ、と。

「アキさん、すみません」

昼食が終わった後、絹は端の方で彼女に声をかけた。

女同士の話が、したかったのだ。

「はい、何でもおっしゃってください」

しゃきつと、彼女の背筋が伸びる。

「アキさんは、いつもどこでお稽古してらっしゃいます？」

絹の質問に、アキは表情を険しくした。

「お稽古、といますと？」

表現が、回りくどかったようだ。

「身体を鍛えてらっしゃるところです…いまも、欠かさずトレーニングされてますよね？」

山ごもり、などという単語が出てくるのだ。

今は腑抜けになってます、なんてありえなかった。

「早朝、一階の広間で、ですが…テーブルを片付けると広いので  
言いながらも、まだ絹の意図を掴みきれしていない声。

「ご一緒させてもらえませんか？ 高校に入って、さぼりすぎて、  
だめな身体になってるみたいで」

ただ、広井ブラザーズの相手だけしていればよかったので、もはや  
体術の訓練などしてもいなかった。

この訓練ばかりは、相手がいるのだ。

アキが、うつつつけに思えた。

「あの…何か身に付けられてるのですか？」

格闘歴を聞かれる。

「護身術のような、ものです…何かあったら、自分で守らないとい  
けませんから」

言い終わるや。

がっし！

アキの大きな手が、絹の両手を握り締めていた。

「素晴らしいです！　そうです、自分は自分で守れるのが一番です  
！」

新陳代謝のいい、温かすぎる手。

生命エネルギーさえ、そこにほとばしっているかのようだ。

「では、明日朝5時から…大丈夫でしょうか？」

手を放し、再びきりつとしたアキに問われる。

朝5時。

明日から、アルバイトも始まるらしいので、ちょうどいい時間だ。

「はい、お願いします…あ、できれば他の方には秘密で…心配され  
そうなので」

格闘において、ド素人ではないことを、見られるのはありがたくなかった。

まだ、絹のかぶっている皮が、はがれてしまうのは早すぎる。

アキは、心配しなくていいという風に　目を細めて見せた。

「おはようございます」

Tシャツに、学校のジャージで絹は、アキに挨拶をした。

彼女の方は、もっと早く起き出していたようで、身体をほぐしている。

「おはようございます、時間通りですね」

にこりと。

動きを止めて、アキは大きく息を吐き出すように応えてくれる。

「失礼して、身体を少し見せていただきますね」

アキが近づいてきて、絹の手首を取った。

そのまま、ズーっと上に引き上げられる。

「痛かったら言うてください」

その腕を、更にゆっくりと後ろの方に反らす。

「やわらかいですね」

引き続き、二の腕、背中、脚 脱がされはしなかったが、透視するかのよう確認される。

「スポーツをやっていた身体ですね。よく締まっています」

絹から何も聞かず、アキは自分を納得させるよう呟いた。

正確には、スポーツとは違うが、絹は否定しない。

「身体をほぐしたら、軽く組みましようか…その方が、良さそうです」

「どうやら。」

アキの視点から、彼女の身体は合格点だったらしい。

お嬢様相手というよりは、きっちり相手をしてくれる気持ちに切り替わったのか。

「お願いします」

間違いなく、相手は絹よりは上。

上の人間は、手加減の仕方を知っているから、彼女にとってもやりやすいのだ。

身体を温め、絹はアキと向かい合った。

「合わせますから、好きなように打ち込んでみてください」

大きく見える人だ。

ガッチガチのゴツッゴツ、という身体ではないのだが、軸がしっかりとしている。

すうっと、息を吸い込む音でさえ、すぐ側にある気がする。

「胸を借ります」

崩しの格闘技、打の格闘技、足の格闘技。

ひとつおり、身にはつけている。

ただ、余り正々堂々としたものはなかった。

真正面まで迫っても、アキは微動だにしない。

ビュッ！

右足を、前に蹴り出した瞬間　アキは消えた。

真横に移動したのだ。

宙に浮いた脚をひねり、そのまま横蹴りに切り替える。

ずどん、という音を聞いた。

アキがその脚を、がっちり腕でガードしたのだ。

「……………」

彼女が、何とも言えない顔で　絹を見た。

急いでシャワーをひねる。

早朝とは言え、真夏だ。

既に、全身汗だくだった。

色男たちには、とても見せられる姿ではない。

頭から、熱いお湯を浴びながら、絹は身体のあちこちのヒリつきを感じていた。

手加減はしてもらえても、格闘なのだ。

まったく無傷、というワケにもいかない。

しかし。

「何か、事情がおりなのですね」

蹴りを止めたまま、彼女が神妙な表情になって言った言葉。

誰かに狙われていることは、既に聞いているようなのに、今更彼女が、そんなことを言い出すのが奇妙だった。

「あなたの護身術は…暗い匂いがします」

ああ。

その言葉で、絹は理解したのだ。



彼女は、本当の武道家なのだ。

絹の習った裏世界の動きを、あっさり見抜かれたのである。

要するに。

普通のお嬢様なんかではないことを、気づかれたのだ。

まあ、もともと拾われっ子であることを、広井家には公言しているのだから、問題はないのだが。

「それに…」

そこで、終わりならよかったのに。

脚を下ろした絹に、今度はアキが間合いを詰める。

「それに…あなたの目にも、暗いものがあります」

疑うでも、情け深い目でもなく まっすぐな目がすぐ側だ。

「知りたいですか？」

どうして。

どうして、絹はそんなことを言ってしまったのだろう。

本当のことなど、話せるはずないというのに。

言葉は的確でも、何の偏見も感じないこの人に、どこか好感を持つてしまったのだろうか。

「いいえ、必要ありません。暗さそのものは、悪いことではなく…  
使い方次第というだけです」

凜と　アキは、言い切った。

素晴らしきかな、陽の人。

考え方も行動も、何もかも健康的だ。

絹とは、真反対。

だからか。

シャワーを浴びながら、絹は思った。

自分の中に、憎らしさと好ましさ、同時に存在してたのだ。

## 電気屋

何事もなかったかのように、髪を乾かし、制服に着替え、身支度を整える。

アルバイトは、制服でいいと言われていたのだ。

7時半。

朝食の時間だ。

廊下に出ると 少し向こうに、制服姿の将がいた。

ああ、出てくるのを待っていたんだろうかと、分かる。

「おはよう」

「おはよう」

なんだろう。

また、昨日と将が違って見える気がするのには 彼にもアキと同じ『陽』を、はっきりと認識したからだろうか。

「おっ…おはようっ！」

二人の間のドアが開いて、いきなり了が転がり出てくる。

結びかけのタイ、はねたままの髪。

いかにも寝坊しましたという了は、二人の声を聞いて慌てて出てきたのだろう。

「おはよう、了くん」

くすくすと笑っている。

将よりも、もっと奥でドアが開く。

こっちは、タイはぶら下げたまま。

ふわあと、大きなあくびをしている京。

「何だ、ガン首揃えて…」

ボタンを締め切っていないシャツの襟元を、無造作にかく仕草。

彼もまた、まだはつきり覚醒しきっていない気がする。

「おはよう、京さん」

くすつと。

絹は笑った。

車や学校で見かける彼らとは、また違う雰囲気だ。

カメラは、部屋を出る寸前にオンにしていたので、きつとこの光景はボスも見ているはず。

「絹が、どこの部署行くか聞いてるか？」

手だけで軽く絹にあいさつした京が、次男坊に問いかける。

「いや、聞いてないよ。父さん、もう出社してるみたいだから、会社で言うんじゃない……」

「実は、絹さんを僕のいるエンタメ部にしてって、パパに言ったんだ」

将の言葉を、途中で叩き割る弟がいた。

えへへー。

朝日以上に、眩しい笑顔の了。

上二人の目が、一瞬糸目になった。

「親父が、了の希望を聞かない方に賭けるぞ」

「兄貴…それ、賭けにならない」

「ええー!!!」

朝から絹を笑わせて、どうしようというのか、この兄弟は。

もらったIDを首からさげ、絹は広井電気の本社に入った。

地下駐車場からエレベータで上がってすぐの、役員用通路からI  
Dをかざして入る。

役員用とは言っても、視界の端には一般社員が、次々と出勤して  
いるのが見えた。

「おっ、ぼっちゃん達！ アルバイトへようこそ！」

こっちに気付いた社員の一人が、大声で手を振る。

豪快な人もいるものだ。

と思ったら。

「今年は是非、動力部に来てください！」

「家電部を忘れないで！」

「これからはAV部の時代ですよーっ」

ナニコレ。

みな兄弟に向けて、自分の部署のアピールを始めるではないか。

上二人は会釈を。下は、ぱたぱたと手を振って、声に応えている。

エレベータに乗り込むまで、大騒ぎだった。

「えっと…なに？」

ドアが閉まり、上昇が始まって、絹は聞いてみる。

三人は、慣れた様子だった。

「良品部、つてやつのせいだろ」

京はため息混じりに言ったが、声に嫌悪感を感じない。

「りょうひんぶっ？」

復唱するが、ぴんとこない。

「半期に一度認定される、いいものを作った優秀部署のことだよ」

へえー。

将の、シンプルな説明に、絹は感心の声をあげた。

そんなシステムがあるのか、と。

「良品部には、金一封が出るし、開発費ももらえるから、みんな頑張ってるんだよ」

あの了の口から、開発費というものが出るなんて。

「おかげで、うちの会社は、自分の部署を愛する馬鹿でいっぱいになりましたとさ」

京が、にやにや笑う。

「しかもね、良品部の指定は、ひとつの部だけじゃないからね。他の部と争う必要はないんだよ」

将の補足に、チヨウの経営手腕というものを垣間見た。

三兄弟が、会社のシステムを把握しているのもすごい。

しっかり、叩き込まれているようだ。

良品部、ねえ。

明るい企業姿勢だ。

他の部署との軋轢を生まず、なおかつ自分の仕事に情熱がわく。

だから、あんなに活気があったのか。

最上階で、エレベータが開く。

「おはようございます」

総合秘書、というプレートの女性が頭をさげる。

「社長は在室です、どうぞ」

真正面の社長室のドアを開けると、そこは社長秘書室。

なかなか、チヨウまでたどりつけないようだ。



「社長…ご子息がお見えです」

そしてようやく、社長室へと到着するのだ。

「お、きたな」

ワイシャツ姿で、チヨウが出迎えてくれる。

「パパ！ 絹さんは何部に行くの!?!」

大事なことといわんばかりに、了がいきなり切り出す。

「ああ、言ってなかったな…絹さんは…」

一度、チヨウがこっちを見る。

「絹さんは…私の秘書をしてもらおう」

にっこり。

「えー」

「ありえねー」

「パパ、ずるい」

チヨウの提案は、三人の恨みを買ったようだった。

「よろしくお願いします」

三人が、それぞれの部署に行ってしまった、絹は社長室に残された。秘書なるものが、どんなものか想像つかないが、とりあえずやってみよう。

「まあまあ、そう固くならずには…まずは、各部署の見回りから行くか」

大きな手が、ぼんぼんと絹の肩を叩く。

「北さん、業務バインダーを出してあげて」

社長室を出て、チヨウは秘書に指示を出す。

「はい、こちらです」

差し出されるバインダーを受け取る。

「これから回る部署の様子を、観察してそれに書き込むのが、最初の絹さんの仕事…オケ？」

「はい、わかりました」

絹に、一体どんな観察を求めているのかは分からない。

まさか、良品部の査定ではないだろうから、思うままにやってみよう。

そういえば、良品部で少し気になるところがある。

エレベータへ向かいながら、絹は聞いてみることにした。

「あの、良品部について伺ったのですが、何も作成しない部署は、何もないのですか？」

素朴な疑問だ。

たとえば、さっきの秘書たちや、総務部なんかはカヤの外なのだろうか。

「あはは…目のつけどころがいいね、大丈夫、ちゃんとあるよ」

エレベータが開き、チヨウが乗り込む。

絹も慌てて続いた。

「他の部署は、自分が一番良いと思う部署を応援させるんだ。これは個人別だね」

二階、と言われて、絹はボタンを押した。

「それって…賭けみたいな感じですか？」

思いつくのが、その言葉しかなかった。

「ぶっちゃければそうだね…でも、他部署も参加することで、皆が社内の製品や開発に敏感になる」

ふらふらと応援する部署を変えるのは、最初だけらしい。

そのうち、ごひいきが出来て、ひとつの部署を応援しはじめる。

飲み会にも呼ばれるし、遅くまで頑張っていれば差し入れもする。

「連帯感を大事にしているんですね」

二階につく。

エレベーターが開く。

絹は「開」を押して、チヨウが降りるのを待った。

「私にとって、居心地のいい会社でなければ、イヤなだけだよ」

ワガママなオジサンでね、私は。

振り返って、にこりとチヨウが笑う。

人と、上手につながって生きていきたい人。

それが、少しうらやましい気がするのはいは絹が、変わりつつあるせいだろうか。

## アルバイト中

各部署を回る。

それは、挨拶程度かと思っていたが とんでもない。

どの部署も、社長をひっ捕まえて、いま開発しているものを、猛アピールするのだ。

これが素晴らしいんです、ここがすごいんです。

大人の人たちの、目の輝きっぷりに、絹が逆に圧倒される。

と、ぼーっとしているワケにはいかなかった。

彼女の仕事は、部署ごとの観察記録をつけることなのだから。

社長が捕まっている間に、部署の仕事を見させてもらう。

『夏休みの間、私の秘書見習いをしてもらうアルバイトの高坂さん』

そう、最初にチヨウが絹を紹介してくれたので、どこを見ても怒られることはなかった。

「絹さん」

昼前についた部署に、将がいた。

小さく手を振ってくれる。

『動力部』と書かれた、赤枠のプレートがかかっている部署だ。

この赤枠プレートが、今期の良品部の証。

社長は、さっそくとつつかまっているので、絹はすすすつと将の方へと近づく。

「何してるの？」

見ると、将の手元に豆粒みたいな部品が、たくさん転がっている。

「超小型モーターの組み立てだよ…小さすぎ」

ピンセットに固定拡大鏡という、素晴らしいオプションつき。

将には、苦手分野のようだ。

「絹さんは平気？ 連れまわされてるみたいだけど」

父親のモミクチャっぷりを見ながら、ふーっと将は吐息をついた。

「どこいっても、ああなのね」

くすくす笑いながら、絹もチヨウをちらつと見る。

「羨ましいよな…あんな、好かれて」

「良品部のアイディアは、実は母さんが出したんだよ…社長になったばかりの父さんが、社員との折り合いに困ってたから」

早くに父が亡くなり、社長に就任したチヨウの前にあったのは、前社長派の壁。

ほとんど会社に顔を出していなかった彼は、最初はお飾りのお客様状態だったという。

「だから、オレたちは子供の頃から、ここにアルバイトにこさせられてるんだ」

自分の二の舞にならないように。

もし、チヨウに何かがあったとしても、社員がすんなり子供たちを迎え入れるように。

すごいなあ。

ボスが　チヨウを好きになる理由を、ひしひしといま感じる気がした。

「大きい人ね…」

しみじみと、言ってしまう。

本当にそう感じたのだから、しょうがない。

「どつやって、父さんを抜けばいいんだろっな…」

将はピンセットで部品をつまみ上げながら、うーんと唸る。

兄弟たちの越えなければならぬ壁は、とても高いようだった。

「多分、息子たちは社食に行ってるな…一緒に昼食でもどうだい」

最後の部署を出た時、チヨウは腕時計を見てそう言った。

気づくと、12時10分。

お昼休みの時間だ。

さっきいた部署からも、次々と食事へと人が出て行く。

昼休みになっても、社長を引き止めていたのだから、やはりすごい熱意である。

「はい、一緒に帰ります」

絹は、チヨウについて行くだけだ。

「社食では、仕事の話は持ってこないように言ってるから、ゆっくりできるよ…ははは、騒がしかったらどう？」

しかし、もみくちゃにされるのは嬉しそうだ。

イヤなら、巡回などするはずがない。

「元気な、いい会社ですね」



絹の知識では、他社と比較できないが、個性的な会社だと伝わってくる。

ここに勤めた後、他の会社に入ったら、退屈でしょうがなさそう  
だ。

「極上のほめ言葉を、ありがとう」

にここにこと上機嫌。

絹まで、つられそうな影響力のある笑顔だ。

社食につくと。

「こっちこっちー」

了が、手をぶんぶん振っている。

将もいるが、後一人は見えない。

「京さんは？」

「まだ部署じゃないかな…温P、だっけ兄貴は」

おんぴー。

また、変な略語が出てきた。

「ああ、今の温Pはすごいからな…京も興味が尽きないんだろう」

食事を取りに行きすがら、しみじみとチヨウが呟く。

「温Pって、なんですか？」

わかめうどんを頼みながら、絹は聞いた。

チヨウは、がつつり定食を掴んでいる。

「ああ…地球温暖化防止プロジェクトの略称だよ」

だから、温Pなのか。

「巧のおかげでね…プロジェクトはいま大わらわさ」

そこに、ボスの名前が出てくるとは思わなかった。

あのボスが、地球を救うプロジェクトに貢献？

これは なんとという笑い話なのだろうか。

午後。

その温Pとやらについた。

赤梓プレートではない。

「社長！ 長期実験の試案が出来てます！」

わーっと、また社長の周りに人ばかりだ。

ぼいっちょと、群れから弾かれた絹は、京の姿を探す。  
いた。

パソコンの前だ。

「ご飯も食べずに、熱心ね」

覗き込むと、画面には世界地図が表示されていた。

その上を、さまざまな色が這っている。

「すごい代物だからな。きちんと管理して使わないと、かえって危険だ」

マウスを操作しながら、目もそらさずに京が言う。

微妙に、言葉が飛んでいる気がした。

「何のこと？」

疑問に、ようやく京は椅子を回して彼女を見た。

「ああ…先生の作った発電機の話だ」

何でお前が聞く、と言わんばかりの唇。

んー。

ボスの作った発電機と言えば、気温や体温を利用して発電できるシステムだ。

それが地球温暖化と あ。

つながった。

熱を奪って発電するのだから、発電機がある場所の周囲は熱を奪われ温度が下がるのだ。

なるほどー。

確かに、これを使えば、人工的に気温を下げる事が可能だ。

しかし、あくまでも人工的な介入になるので、下手な使い方をすると、温度が下がりすぎてしまう。

それはそれで、環境に悪影響を与えるのは間違いなかった。

「個人に販売するのは、危険だからな…最終的には、政府とか自治体とか、他国が商売相手になりそうだぞ」

再び、マウスをカチカチ鳴らしながら、京は壮大な話を言い出す。

「政府：ああ、そうね。一般人が使い放題だと、気温を下げすぎちゃうわね」

国単位の話になってきた。

ボスの科学力が、世界のためになろうとしている。

今頃、聞いている本人も、苦笑していることだろう。

さすがは、健康的な広井家の発想だ。

「産業スパイも動いてるらしいから、とりあえず構造だけ来週公表するそうだ…大騒ぎになるぞ」

先に発表しておかないと、盗まれてからじゃ遅いからな。

どンドン、話が進んでいる。

もう一度、京の手が止まった。

「本当に、先生の名前を出さなくてもいいのか…聞いていてくれ」

手柄を全部、広井がもらうことに引っかかりを覚えている声。

絹は、にこっと笑って　　ダーメ、と指で×を作って見せたのだ。  
った。

ほとんど丸一日、立ちっ放しだった。

朝、久しぶりにトレーニングをしたせいもあって、かなり足の方  
にきている。

「おつかれさまー」

退社時間になって、将と了と合流する。

しかし、一人足りない。

「京さんは？」

まだ、温Pだろうか。

「ああ、父さんの車で帰ってくるって…初日から頑張るね」

そっか。

来週、発表と言っていたので、その準備でおおわらわなのだろう。

チヨウが、一番長くいた部署でもあった。

それだけ、気にかけているということだ。

「絹さん、ナンパとかされなかった？ 大丈夫？」

車に乗り込みながら、了が頓狂なことを聞いてきた。

ぶっと吹き出してしまふ。

何の心配をしているのか、と。

「社長とずっと一緒だったのよ、私」

その環境で、ナンパをしかけてくる強者は、さすがにいなかった

ようだ。

それどころか。

社長と並ぶと、社員にとっては「社長>>(越えられない壁)>>絹」だった。

皆の目は、社長しか見えていない状態で、一体絹にどうしろと。

「そっか、パパとずっと一緒だったんだ……」

パパのバーカ。

最後の最後で、消え入るほど小さく、了がぼやいた。

絹がナンパされなかったことより、父親への嫉妬が噴出したよう  
だ。

困った甘えん坊だ。

「エンタメ部で、了は何やったんだ？」

将は、弟の鬱を取り払おうと、別の話題を持ち出した。

それは、絹も気になっている。

今日一日あっても、全部の部署は回れなかったのだ。

了のいる、エンタメ部は一体どんなところか。

「えへへー、新作ゲームのテストプレイ！」

なぜか、Vサインをする了。

とりあえず　とてもとても楽しかった、ということとは伝わって  
きた。

「それって…遊びじゃないか？」

「ちつがーう！　ちゃんと意見書も書いてるー！」

将の穏やかなツツコミに、了は頭から湯気を出す。

あらら。

話をすり替えたつもりが、了のご機嫌は更に急降下していった。



ただ平穏な日々

「おかえりなさいませ」

帰宅を、アキたちに迎えられる。

アキ、という存在を、大きいものに感じた　朝。

そのせいで、誰よりも彼女に目がいつてしまう。

自分より強く、凜とした存在。

今まで、彼女の周囲にはいなかったタイプだ。

「おなかすいたーっ」

了は迷う事無く、ダイニングに向かうつもりのようにだ。

「着替えてきますね」

弾丸小僧の背中を見ながら、絹は先に部屋に戻ることにした。

「了、お前も着替えてこいよ」

将が、一応引き止めてみている。

「えー」

不満の限りを詰め込んだ顔が、二人を振り返る。

いつもの可愛い了を、維持できないほどおなかがすいているのか。しかし、二人とも二階に向かおうとしているので、しぶしぶ戻り始める。

そんな了をおかしく思いながら、絹は部屋に入った。

ふと。

違和感を感じた。

ああ、そうか。

この家では、使用人たちが普通に人の部屋に入るのだ。

掃除やベッドメイクや、洗濯物など。

その感覚に、絹が慣れていないだけ。

朝、訓練に使ったシャツやジャージも、綺麗に洗って畳んである。

きつと、アキがやったのだろう。

ふと。

枕元に違和感があつて、絹は視線を投げた。

あ。

倒していたはずのものが、すっと起き上がったのだ。

それは さそり座のフォトフレーム。

つい持ってきてしまったが、見ると自爆なので、倒しておいたのだ。

アキが、きつと「倒れた」と勘違いして、戻してくれていたのだろつ。

絹は、ダツシュでそれを倒した。

持っていたのに、直視できないという、矛盾のシロモノ。

ふう。

絹は、ベッドに腰かけながら、ため息をこぼしていた。

ボスは今頃、何をしているだろう。

まだほんの数日なのに もう、何ヶ月も会っていない気がした。

朝、アキとトレーニングをし、アルバイトへ行く。

それを繰り返していた数日後。

朝。

「あの写真は、何かあるのですか？」

身体をほぐしている絹に、アキが聞いた。

絹が、さそり座のフォトフレームを、いつも倒しているせいだ。

最初の二回は、アキが起こしていたようだが、その後はもう倒したままにしてくれて。

不思議だったのだろう。

家から持ってくるほど大事なものののに、倒したままというのは。

「あれは…その…」

絹がいいよどむと。

「すみません、立ち入ったことを聞いたようですね」

すつと、アキが言葉を引いた。

星のフォトフレームだったので、そんなに重い意味を持たないものだと思っていたのだろう。

彼女なりの、軽い話題。

「いえ、いいんです…誕生日のプレゼントにもらったものなんです  
が…見るたびに、何だか泣けてしまうので」

絹は、苦笑でごまかした。

「誕生日…ああ、あの時の」

アキの頭の中で、何かつながったようだ。

「坊ちやま方も、張り切ってましたからね…よく覚えています」

誕生会は、この家ではしていない。

彼女が言っているのは、その前段階の話だろう。

そういえば、三兄弟のプレゼントは、なかなか曲者だった。

いや、将はいい。

彼がくれたのは、シルバーのネックレスだ。

問題は。

京は、ピアス。

あー、ピアスホールないんですが。

これは、ピアスのできる耳になれ、ということだろうか。

逆に言えば、もらったピアスをはめられる状態になれば、京の思  
いを受け入れたと判断するぞ、と言われている気がした。

了は、ピンキーリング。

単なるファッションリングなのは、よく分かっている。

分かっているが 指輪だ。

おかげで、将からもらったネックレスも、つけづらくなってしまった。

将のネックレスはできて、他のはどうしてダメなんだと思われそう。

うーん。

「では…始めましょうか」

にこり。

話題がそれたことを満足したように、アキは腰を落として構えた。

絹の仕事は、毎日各部署を回ること。

チヨウは、いつも一緒にいられるわけではないので、総合秘書の女性がついてくれている。

おそらく、絹を一人にするな　そういう命令が出ているのだらう。

一人で大丈夫ですと、さすがの絹も言えなかった。

いくら広井の会社内とはいえ、本当に侵入しようと思えば、織田派なら可能な気がしたからだ。

まあ、それはおいておくとして。

「資料ー！ パワーポイントの最新の資料ドロー！」

「招待メールのあて先候補、まだ上がってないのか!？」

温Pは、日に日に殺伐としていく。

もう公式発表まで、日がないからだ。

京は、一人もくもくとPCの前で作業をしている。

「発表って、京さんも出るの?」

とことごとくと、彼のところに近づきつつ聞く。

「行くが、表には出ないぞ…オレがやった仕事じゃないからな」

ふと。

京が、ピタリとマウスを止めた。

「で…お前は何やってんだ?」

見上げる目には 少しの不審。

「何って…ええと、各部署の視察?」

「そうじゃない」

絹の言葉は、即殺された。

「腕にあるアザはなんだ？」

あらっ。

制服は、夏服で半そでだ。

おかげで、アキとのトレーニングでぶつけたアザが「こんにちは  
っ」「している。」

「ぶつけたの」

うふふっと、絹は猫を背負い込んで微笑んだ。

「おまえなあ……」

あきらかに、まったく信じていない目とぶつかる。

「本当よ、運動しててぶつけたの。たまには、身体を動かさなきゃ、  
ね」

絹の言葉の最後に、京が一回だけマウスをクリックした。

カチッ。

「たまに、アキさんと話してるよな……お前」



京の更なる一步に、絹はもう少しニッコリした。

「一番年の近い女の人、彼女だけなんですもの…いい人ね、アキさん」

さあ。

猫をへっばがせるものなら、はがしてごらんさい。

そんな笑顔をちらっとだけ見て 京は、はあと呆れたようなため息を吐き出した。

「やあ、高坂さん…今日も視察かい？」

バインダーを持って歩き回る絹に、声がかけられる。

制服姿の人間は、三兄弟と絹だけなので、すぐに誰からでも名前を覚えられてしまった。

「あ、エンタメ部の…こんにちは」

了のいる部署の人だ。

足を止めて、挨拶をする。

「覚えててくれたんだねーうれしいなあ」

にここにしながら、寄ってくる。

「今日はエンタメ部に顔を出してくれるよね？ いつも下の階から視察始めるから、いつも高坂さん、来るの遅いんだもんなあ」

早口でまくしたてられ、ああ、と納得した。

エンタメ部は上階にあるので、時間配分を考えて回らないと、たどりつけないことがあるのだ。

「この時間なら、この階あたりにいるんじゃないかって、見にきちやったよービンゴ？」

だが。

話が、モーレツに続いていくあたりから、絹は「んー」と心の中で呟いていた。

「いつも、高坂さんは社食だよね…もうすぐお昼だし、よかつたら、外のおいしいカフェで昼食でも…」

立て板に水で続く言葉が　プチンと途切れた。

絹に同伴している総合秘書の女性が、一步前に進み出たのだ。

「まだ、業務時間中ですわよ…カドカワ君」

語尾が、キラーンと乱反射した気がした。

あー。

そうか、と。

ナンパしにきただけなのだ。

学校では広井家コーティングのおかげで、最初のバカ以外、ほとんど絡んでくる男はいなかったが、ここは会社。

大人のオニーサマ方が、いっぱいいるのである。

しかも、いま絹は社長と一緒にいるわけではない。

総合秘書の女性なら、やりすごせるとでも思ったのだろうか。

エンタメ部の男性 VS 総合秘書の睨みあいの構図に、絹は割って入ることにした。

簡単に、断れる方法があるのだ。

「すみません、昼食は広井君たちと取る約束をしてるんです」

ぺこり。

頭を下げた後、男性を見ると。

ガビーン。

シヨック、と顔にかいてある。

反論はできまい。

社長令息たちとの食事の約束に、かなうはずがないのだから。

## 平穩の終わり

『はろー』

携帯電話に舞い降りたのは 蒲生。

いつか来ると思っていたが、ついに来た。

「いま、アルバイト中なので、またにしてください」

ちょうど、お昼休みの終わりかけ。

秘書控え室に帰ってきた頃だった。

『そう、思いつきり警戒すんなよ……ちょっと聞きたいことがあるだけだ』

しかし、相手は自分のペースで生きる男。

『絹んとこの保護者が、渡部に何度か呼び出されてるんだが、ありやなんだ？』

えっ！？

しばらく連絡を取っていない、ボスの行動を聞かれたのだ。

しかも、渡部絡み。

『あ、渡部の親父の方な』

すぐに追加情報が出る。

親父と言えば、ボスの異母兄にあたる人だ。

兄弟で仲良く、酒でも酌み交わそう　なんてありえない。

そう思ったからこそ、蒲生も連絡してきたのだろう。

『お前の保護者が、科学者なのは分かった。前に石橋の下で学んでいたのも調べた…ただ、何の技術を今回必要としているのか、わからねえ』

えっ、えっ？

絹の考えが、追いつかない。

「石橋って？」

一体、誰なのか。

まずは、そこからだ。

『ああ？　絹は、保護者のこと知らなすぎだろ？』

そこからかよ、と突っ込まれる。

『織田のお抱え科学者…だった危ない爺さんだ。もう、おっ死んだがな』

蒲生の言葉で、ボスの空白の時間が埋められていく。

大学を卒業して、すぐにマッドサイエンティストになったとは考えにくい。

ボスは、その石橋という人の元で、危ないことを学んだのだ。

そこまで考えた時。

午後の始業チャイムが流れる。

「また後で連絡するわ」

絹はそう言うや、携帯を切った。

多分、今頃蒲生が切れた電話に、毒づいているだろう。

しかし、気になる。

石橋という人はともかく、渡部父が動いたことだ。

織田からの、正式な仕事の気配がした。

「絹です」

家に帰り着いて部屋に戻ると、蒲生より前に 島村に連絡した。

いま、向こうがどういいう状況か知るためだ。

島村に電話するのは、これが初めて。

「蒲生から電話が来たの…渡部がボスに絡んでるって」  
とにかく、ボスの安否が気になる。

蒲生の連絡は、カメラからの情報で、大体把握はしているはずだ。

『先生なら無事だ…渡部のことも気にしなくていい』

淡々とした口調。

いつもどおりだが、内容が気に入らなかった。

渡部のことは、気にしなくていい。

絹を拉致した、明らかに何か悪巧みをしている人間を  
気にしなくていいなんて！

ありえない！

逆に言えば、そのありえない状況がありえるのは。

ボスが、渡部に協力すると決めたことだ。

「ボスは…何をさせられるの？」

ため息をつきながら、絹は結論を口にした。



『お前は、無事夏休みをすごせ』

解答は、なかった。

絹に おそらく、拉致されたりするな、という意味合いの言葉をこめただけ。

「隠されると、動きようがないわ」

もう一押し。

『……動くな』

プツッ。

話は終わりだとばかり、携帯電話は切れた。

彼も、ボスの件で機嫌がよくなかったのかもかもしれない。

とりあえず、わずかな情報を汲み取ろうとしてみた。

ボスは渡部側につき、何かをする。

絹がさらわれずに夏休みを過ごせば、その間にその何かが終わるのだろうか。

「んー」

しかし、要領を得ない。

あんな古式ゆかしき織田が、ボスの未来的マッドサイエンティストの力を必要とするなんて。

調べる糸口があるとするなら、蒲生も言った『石橋』という科学者だ。

織田のお抱えだったらしいし、ボスはその弟子で。

そこで学んだ何かが、必要とされているのかも。

「……………」

絹は、携帯電話を見つめる。

蒲生にかけなければならぬのだが　いやだなあ、という気持ちと軽く葛藤したのだった。

『きたきた、まってたよー』

電話の向こうは、相も変わらず軽いノリの蒲生。

本当はかけたくなかったと言いたいが、言つと余計な時間を取られそうである。

「先生が渡部のところで何をするか…まったく分からないの…本当よ」

自分もカヤの外であることを、絹は主張した。

『はっはっは…石橋のことも知らないんだから、それもあるかもな  
』』

本当に信じたのかは分からないが、絹がボスのことを実はよく知らない、という事実だけは認識しているようだ。

「その、石橋って人の研究と関係あるんじゃないかと思うけど…何をしていた人？」

こうやって、敵側の人間と話しているのは、妙な気分だ。

敵の敵は味方とはいうが、気は許せない。

この男だつて、その気になれば絹やボスを平気で害せるのだから。

『さーじっさんだし、もうおっちんでるしなあ…織田の内部のことは、オレも調べにくいんよ』

蒲生もお手上げか。

『あ、しかし、絹んとこの保護者を調べてて、面白いものが引つかかったぞ』

電話の向こうが、ニヤツとした気がした。

面白い？

まさか、チヨウに恋慕しているホモということがバレたのか？

絹は、一瞬頓狂なことを考えてしまった。

いや、実はそれは真面目な話だ。

ボスを殺すなら、刃物はいらぬ。

チヨウの身の安全を盾に取れば、何だって言うことを聞くだらう。

『保護者んとこの助手…あいつ…絹と同じ嘘の戸籍だな』

ああ。

ボス自身の話ではなく、島村の話だった。

嘘の戸籍などお手の物だから、そういうこともあるだろう。

絹は、その点にはまったく驚いていなかった。

『いろいろ突っ込んでたどったら…不思議なことに…二人の人間に  
行き着いたぞ』

途中で、枝分かれするんだ。

面白そうに、蒲生が笑う。

二人？

『その内の一人が、また傑作でさ…』

はっはっは。

笑うかしゃべるか、どっちかにして。

一人で電話口でウケている蒲生に、本当に突っ込もうかと思った。

『なんと、ボンが大好きな天野っちの兄貴だぜ』

瞬間。

絹の意識は、カメラの連続撮影みたいな、コマ送りになっていた。

死んだように眠る島村。

そばに落ちていた 天野女史の写真。

顔

完璧につながった　　という感覚とは、少し違う。

島村が、天野の兄説のことだ。

あの歩くゴージャスと、余りに似ていない。

似ていない兄弟など沢山いるのだから、それだけで決められるわけではない　　それは、分かる。

関わりがあるのは、あの写真からも間違いないだろう。

ただ、蒲生はいったのだ。

島村の過去をたどっていくと、『二人』の人間に行き当たると。

絹は、天野の兄ではない方の人間も、ちゃんと彼に聞いたのだ。

もう一人は、絹の知らない人間だった。

三度の自殺未遂の後　　病院から謎の失踪をした男。

大卒ではあったが、科学者ではない。

ああもう。

考えていても始まらないし、本人に聞いたところで教えてもくれない。

そして、この件については、渡部とボスのことにはおそろく無関係だろう。

だから、後回しだ。

永遠に、後回しかもしれないことでもあった。

もし、島村が本当に天野女史の兄であったとしても、だからそれがどうだというのだ。

本人の意思でボスの元にいるのだから、人の勝手ではないか。

絹はそう割り切ったのである。

その割り切りを待っていたかのように、ドアがノックされた。

「はい？」

はっと、意識を広井家用に戻す。

でないと、怖い顔を見せることになりそうなのだ。

「失礼します」

ドアを開けたのは、アキだった。

絹は、ほっと息をつく。

「高坂巧さまがおいでになられたので、お知らせするよう言われて

参りました」

その安堵が、一瞬にしてひっくり返る。

自分の心臓が、激しく飛び跳ねたのだ。

「先生が!？」

この瞬間の、絹の裸の目を　きっと、アキには見られてしまったことだろう。

しかし、それに構っていられる心情ではなかったのである。

「いま朝様とお話中です…終わったら、また呼びに参ります」

既に、アキの言葉は絹の耳を素通りしていった。

本人が来たのだ。

目の前にして、ちゃんと話が聞きたかった。

絹に用事があったワケではない。

それは、分かっている。

チヨウのおまけでもいいのだ。

とにかく、無事をこの目で見たい。

「では…後ほど」



ドアが閉ざされても、絹の心臓はすぐにはおさまらなかつた。

一時間たつても。

二時間たつても。

アキは、絹を呼びに来なかつた。

浮いていた気持ちが、だんだん下へと降りてゆく。

地面に降り立ってなお、更に沈んでいく気分だ。

二時間半ほどたって、ようやくノックがきた。

慌てて立ち上がると、返事より先にドアが開けられる。

「申し訳ありません…急いで」

ただ、呼びに来たのではない。

アキは絹の腕を取ると、そのまま部屋を飛び出し、階段を駆け下りたのだ。

理由は分かつた。

階段の踊り場を回ったら、見えたのだ。

ボスは、帰ろうとしているところだった。

「先生！」

腕を引かれながら、絹は彼を呼んでいた。

振り返る眼鏡の縁が、明かりに反射する。

「先生！ 少し私とお話を！」

「巧……」

引き止める絹に、見送りに出ていたチョウも、呼び止めようとしてくれた。

「すまないが……時間がない……また来る」

軽く片手を上げて　ボスは、ドアを出て行ってしまった。

ああ。

無事なのは、姿を見て分かった。

しかし、それを手放しでは喜べない。

絹を、避けているように感じたのだ。

階段の一番下で。

動きを止めたアキに腕を取られたまま、絹は立ち止まった。

「アキさん…私の部屋にお茶を二つ、新しいのをお願いできるかな」  
チヨウが、彼女に頼む。

「はい、了解いたしました」

返事をしながらも、絹から手を放すべきか、彼女は少し逡巡しているように思えた。

しかし。

絹の手は アキから、チヨウへと受け渡されたのだ。

「絹さん…少し話があるんだが、時間は大丈夫かな？」

にこり。

アキの手とは違う、少し低い温度の手。

絹は、それに手を引かれて二階へ戻ったのだった。

「夏休みになる前にね…」

お茶を出したアキが下がると、チヨウはゆっくりとしゃべり始めた。

絹をソファに座らせ、自分は窓辺の方を向いている。

「巧が、一度うちに来たんだ」

聞いたことのある話だ。

確か、車の中で。

三兄弟の誰かが、そんなことを絹に言ったのだ。

「あの時の巧は、見たことがなかったな…とても弱っていた…事情は余り話さなかったが、とにかく疲れ果てていた」

それが、京の誕生日の前日だと、チヨウウは言う。

「絹さん…その日、君はどうしていたのかな？」

答えなど、考える必要はなかった。

京都にいた時だ。

しかし、答えられるはずもない。

表向きは、病気で欠席の日だったのだから。

答えない絹に、チヨウウは返事を強制したりはしない。

ただ、話が続く。

「そのもう一日前…不思議なことがあった。親戚の危篤の知らせだ…私は、息子達にすぐに病院に向かうよう告げた。私も向かった…」

しかし、その連絡は…嘘っぱちだったんだよ」

長い言葉の中に、疑惑の種が見える。

チヨウが、たくさんの違和感を覚えている気配が、一言ずつにこめられているのだ。

「その翌日、君は病気で休み…巧が青い顔でこの家に転がり込んできた」

ああ。

絹は、ゆっくりと目を閉じた。

チヨウが、言葉をつなげていつているのが分かったからだ。

「私はね…推理したんだ。あの危篤の連絡は、いたずらでもなんでもなく、息子達を君からひきはがすために仕組まれたことなんじゃないか、ってね」

かちつと。

パズルピースを、はめおえた音がする。

絹は目を閉じたまま、その微かな音を聞いていた。

「そして…将が言った。『絹さんが、危ないみたいなんだ』、と」

目を閉じていても、チヨウがすうっと動いたのが伝わってくる。

絹の側にくる。

そして、膝をついて目の高さを下げる。

「間違っていたら済まない…」

前置きがなされた後。

こう聞かれた。

「もしかして、危ない理由は…『桜』のせいかい？」

何て 聡明な男。

絹は、どう答えればいいのか。

ボスが話していないことならば、彼女もきつと話すべきではない。

絹は、ゆっくりと目を開けた。

右手に、チヨウの瞳がある。

深くやさしい瞳だ。

「巧の様子がおかしかったから、巧の過去を調べてしまったんだ、おじさんは…」

悪いおじさんだね。

「そうしたら、渡部建設が出てきたよ…」織田『も、出てきた」

ゆったりとしたチヨウの言葉が　痛い。

死んだ妻を、踏みしめているような音がするのだ。

「まさか、巧が織田の血筋だとは思わなかったよ…でもね、それで何故絹さんが危険なのか…分かった気がした」

チヨウは、経験で知っている。

妻の桜が、どこまで彼に話したかはしらない。

しかし、彼女が命を落としてしまうほど、追い回す連中だということは、よく知っているはずだ。

「おじさんに…君を守らせてもらえないかな？」

くらっと。

絹が、目眩を覚えるほどの吐息の声。

色はない。

でも、心がそこには残されていた。

桜を守れなかったという心が。

絹は　立ち上がった。

心の中には、葛藤がある。

彼女の持つ、この顔のせいだ。

絹は、初めてこの顔に嫉妬した。

チヨウに愛され、織田に必要とされる顔。

それにそっくりな、まがいものの自分。

絹は、この顔をボスのために利用してきた。

しかし、本当はこの顔に振り回されていただけだ。

「私に…」

声が、震えた。

それを噛み締め、ドアへと向かう。

「私に…守ってもらおう価値などありません」

ああ。

なんて憎い　この顔。



## トレーサー

「気分が乗らないなら、無理しないほうがよいですよ」

翌朝の稽古中、アキがそう言って組むのを止めた。

絹は、ふうと息を吐く。

昨日は、あまり眠れなかった。

自暴自棄になりそうな自分と戦っていたら、朝になっていたのだ。

身体も心も、ずしつと重い。

「昨日いらっしやった保護者の方も…暗い目をしておいででしたね」

絹の不調の原因が、ボスにあると見られたのだろう。

彼女は、チョウとの話は聞いていないから、そう思って当然だ。

確かに、半分はそう。

ボスや島村に遠ざけられると、絹にはもう居場所がなくなる。

広井家では、このまがいものの顔がのさばり、自分を殺すのだ。

「織田、って聞いたことあります?」

絹は、ぼつりと言った。

「…信長しか知りません」

ボスでもなく、チヨウでもなく　まったくの部外者のアキ。

この顔にも、死んだ桜にもまどわされない者。

誰かに、少しでも吐き出さなければ、内側から自分が壊れそうな  
気持ちに、絹は逆らえなかった。

「織田っていう悪者が…この顔を利用したがつてるんです」

絹は、つくりものの自分の顔に触れた。

「理由が、過去の織田の嫁とよく似ているから…ただ、それだけで  
すよ」

時代錯誤も、はなはだしい。

顔が同じでも、中身はまったく違うというのに。

桜はあらがって死に、ピーこはただ生かされている。

絹は、本来ならその枠には入らない。

まがいものだからだ。

しかし、その記録は渡部に消された。

あたかも、最初から絹がこの顔であったかのように仕組まれたの

だ。

彼女を、巻き込むために。

「人は…昔から外見に惑わされやすいものです」

アキは、一度言葉を切った。

「もし、目の前に保護者と同じ顔の悪者が現われたら…どうしますか？」

彼女の言葉は、真つすぐだ。

絹は、ふっと笑った。

「確かに…何も出来ないわ」

それと同じことを、絹はしているのだ。

真実を知れば、いま彼女を擁護してくれている広井が敵になりかねない。

綱の上に立っている気分だ。

黙り込んだ絹に。

「一度、自宅に戻られたらいかがでしょうか？ 私がガード致しますので」

ホームシックもあると、思われたのだろう。

しかし、ありがたい申し出でもあった。

ボスや島村と、ちゃんと顔を合わせて、話がしたかったのだ。

カメラで、予告はしていた。

一度、帰ると。

このカメラのいいところは、あくまでも一方向からしか情報が伝達できないことだ。

もし、カメラに返事ができたなら、おそらく島村につれなく「来るな」と言われたことだろう。

携帯をかけてまで、禁止にはならなかったことだけが救いだ。

三兄弟を会社に送っていった車が帰ってきた後、絹とアキは家へと向かい始めた。

今日は、会社は休ませてもらったのだ。

家の用事で、アキをガードに借りると言ったら、とりあえず三兄弟は異を唱えなかった。

それだけ、アキの腕に信頼があるということか。

久しぶりの、家の玄関。

彼女に付き添われ、絹はドアに手をかけた。

開いている。

いや、玄関が絹の手を覚えているだけだ。

この家の三人には、自動でちゃんと開くようになっている。

ただし、決まりごとがあった。

もしも、誰かに開けさせられるような、何らかの緊急事態が起きたなら　左手で開ける、と。

中に入るまでもなく、島村が立っているのが見えた。

アキが、一瞬意識を緊張させたのが分かる。

ボスと絹は見たことがあるが、もう一人いるとは知らなかったのだろう。

「ただいま、島村さん」

そんな彼女の警戒を解くために、絹は穏やかな声を出した。

「…居間で話そう」

ふいっと。

アキに挨拶もせず、島村は居間へと消えてゆく。

勿論、アキ抜きでしか話せないことだ。

「すみません、車で待っていたただけですか？ 家の中は安全だと思いますし、もし何かあったら叫びますから」

絹の言葉に、彼女はすつと身体を引いた。

「少し長くなると思います」

絹のこの声はきつと、居間にまで届いているだろう。

きちんと話をつけるまで、帰る気がないということだ。

アキが扉を閉ざしてから、絹はふーっと大きく深呼吸をする。

一歩目を踏み出す。

これが、仲間への一歩となるのか、それとも別のものなのか  
まだ、分からなかった。

居間にいたのは、島村だけだった。

「ボスは？」

久しぶりに、自分の声がボスと音にした。

外では「先生」と呼ぶせいだ。

絹の唇には、ボスの方がしっくりくる。

「京都だ」

忌まわしい地名が出てきた。

やはりボスは、織田のところか。

「情報がとびとびなの…私が拉致されたあたりから。話してくれない？」

島村が待っていた、ということは、話をする気が多少なりともあるということだ。

しかし、すぐに彼は返事はしなかった。

ボスに止められているのかもしれないし、彼自身、話すことに迷いがあるのかもしれない。

「石橋、という人の弟子だったところまでは…聞いたわ」

その名前に 島村の目が、反応した。

蒲生への電話は、自室からかけたので、カメラは切っていた。

会話の内容を、他の人間は知らないのだ。

「石橋という科学者は…」

ずっしりと。

そんな重さで、彼は唇を開いた。

「死ぬまで、トレーサーという装置の開発をしていた」

聞きなれない横文字が出る。

「人の身体を複製するには、クローン技術がある。しかし、これは単に同じDNAの『身体』を作るだけだ」

ズシン、ズシンと ゆっくりと重い足取りが、地面を踏みしめる感じがした。

「トレーサーというのは、『ここ』を複製する技術だ」

鳥村の指が。

静かに。

自分の。

こめかみを。

指した。

絹は 鳥肌を立てていた。



ざわつと、一瞬にして自分を冷気が包み込んだ気がしたのだ。

頭の中に巡る、記憶の羅列。

その中のいくつかが、島村の言葉に過剰反応した。

明確な形ではない。

はつきりと、どれか、というわけでもない。

しかし、本能的に『トレーサー』という物の影響物に、自分が触れていることに気づいたのだ。

「人の脳というものは、膨大な量ではあるが、結局は三次元ハードディスクだ。その情報を、立体的にトレースできれば…別の人間に複写できる」

島村が、重い足を止めて絹の前に立つ。

見下ろす、ただ黒い瞳。

声や音など、所詮空気の振動。

見えるものなど、所詮光の反射。

『自分』など、所詮脳活動の副産物。

ああ。

ざわり。

全身の毛が逆立つ。

分かった。

多分、絹は分かった。

頭の中を、断片的な記憶が駆け抜ける。

余りの速さで捕まえそこなうばかりで、明確に音には出来ない。

しかし、絹は手を伸ばしていた。

島村の 左手を強く握った。

彼は、それに過剰反応したりしない。

視線を、ただ手元へと落とす。

ああ、ああ。

自分は、何をしようとしているのか。

黒い長袖。

夏なのに。

ただの黒好きの変人とかばかり、思っていた。

その袖口を、ぐいっと引き上げる。

傷だらけの、手首。

何度も、自分で死のうとした跡。

蒲生が言った。

島村を遡れば、『二人』につながる、と。

自殺未遂ばかりして、行方不明になった男と。

「天野…さん」

絹の呼んだ名前に 島村は、ゆっくりと目を閉じた。

二人の男がいた。

一人は、天野の兄。

もう一人は、見知らぬ死にたがり。

天野の兄は、おそらく科学者になりたかったのだ。

家を出て、彼はボスのところへ弟子入りした。

そして、何か起こった。

少なくとも、命にかかわる事件。

ボスは、天野の脳にレーザーを使った。

そして、手に入れた死にたがりの脳に 移したのだ。

出来上がったのは。

死にたがりの身体と、天野の思考を持つ生き物。

「いつ…調べた」

絹の手から、自分の左腕を離しながら、『島村』は呟く。

「蒲生が…あなたを調べたら、『二人』の人間に行き着く、と言っ  
たから」

絹は、自分の心臓の音を強く感じながら、正直に答えた。

ここにいる人間は、天野であって天野ではない。

その事実を噛み締めると、心臓が強い音を立てるのだ。

複製の思考と、複製の心を持つ別の人間。

黒い服は 誰への追悼の表れなのか。

死にたがりの男の心へか。

それとも、死んでしまった天野という男へか。

「蒲生か…トレーサーのことは聞かされていないようだな」

そんな心臓でも、絹は島村の言葉を聞き、理解し、そしてボスのことへとつなげていかなければならなかった。

「ボスが呼ばれているのは…誰かをトレースするため？」

誰かが、死にそうなのか。

織田の誰かが。

あっ！

「…織田!？」

連想ゲームで、即座に言葉が出ていた。

そこまで大物の命に関わることならば、ボスを脅してでも連れて行くだろう。

仕切っているのは 渡部一族か。

自分をよく思っていないさそうな蒲生に、トレーサーの話を見せてやる義理などないだろう。

渡部の息子は、それを知っていたのだ。

まだ、彼の言葉の全てとはつながらないが、ボスを巻き込むという事実のみは、納得できた。

それに、織田ならトレース先の身体は山ほど持っている。

青柳系列から、いくらでも選り放題だろう。

そして、石橋という科学者が死んだ後、トレーサーの技術者として、ボスが選ばれたのだ。

これ以上ない、人選だった。

トレースは、生き延びることとは違う。

本体は死に果て、消滅するというのに、意思のコピーが残るに過ぎない。

しかし、そのコピーは自分が生き延びたと思うのだろう。

過去の記憶を持ったまま、そこに『自分』が存在するのだから。

だが。

それは、本当は『自分』ではない。

島村はそれを知っているから、真っ黒な服を着る。

織田も死ぬ。

彼は、何色の服を着るのか。

ピンポン。

チャイムが、居間の静寂を切り裂いた。

時間がかかりすぎているので、アキが心配して鳴らしたと思った。

インターフォンのカメラから返事をしようと、画面を見ると。

ニヤッと笑っている男がいた。

渡部だ。

部活帰りにそのまま寄りました風の、ラフなスポーツウエア。

こんな時に。

いや、こんな時だから来たのかもしれない。

絹の動向をチェックしていたのなら、いい機会だろうから。

アキが、すぐ真後ろにいた。

カメラ越しにも、警戒の色が赤く見えるほどだ。

渡部に対しては、島村以上の警戒色を発している。

すばらしい判断だ。

「渡部よ」

絹は、島村に告げた。

「家には入れない…玄関にも、だ。こっちが招き入れなければ、この家は誰も入れない」

島村は、渡部と話すことはないようだ。

「ボスは、トレーサーの仕事が終われば、無事帰ってくるのよね」

絹は、島村に確認をした。

ボスは、血筋から一応織田側だ。

素直に仕事だけこなして口をつぐめば、命までは狙われないだろう。

トレーサー技術を持っている人間だからこそ、余計に。

また織田が、いつそれのお世話になるとも限らないのだから。

「ああ、それが条件だ」

島村の言葉に、ふっと自分の足に力を込めた。

「分かったわ…じゃあもう、渡部と話すことはない」

絹も、そう判断した。



## アクロバット

絹は、玄関を開けて外に出た。

「やあ」

カメラより鮮明な色の渡部が、近づいてくる。

絹は、それを片手で制止した。

側によらないで、という意味を込めて。

「これから出かけるの…」

話す時間はない、という意味を込めた。

アキがすつと。

渡部の横についた。

夏の日差しの中、そこにひやっとした空気が流れる。

「いい番犬だね…いつ飼ったの？」

猫もかぶらずに、渡部が横を親指で指す。

「いきましよう」

絹は、それに答えずにアキを促した。

本当に、渡部と話すことはないし、話したくはなかった。

一番大きな疑問が解けた今、もう渡部も蒲生も織田もうんざりだったのだ。

さつさと悪人のコピーでもなんでもして、ボスが戻ってきて、いつもどおりの生活に戻ればそれでよかった。

悪人は、悪人らしく闇夜にいればいいのだ。

「インターハイね……」

渡部の横をすりぬけようとする時。

彼が、ぼそつと呟いた。

京都のことでも織田のことでも、ボスのことでもない。

インターハイ。

渡部個人の話。

何故だろう。

だからこそ　それが、怖さをかもしだした。

絹は、足を止める。

「インターハイ……シングルスだけしか、出ないことになったよ」

嘘くさい、さわやかなスポーツマンの言葉。

しかし。

「……！」

絹の耳には、ドス黒い悪人の声以外の、なにものにも聞こえなかった。

カンのいい自分を呪いたくなる。

ダブルスは出ないと。

そう、言っているのだ。

渡部の、ダブルスの相手は誰だ。

絹の頭の中で、ガンガンと鐘が打ち鳴らされる。

森村が。

出られなくなったのだ。

夏休みのいい天気の日は、「暑い」と同義語だ。

その熱風が、絹の皮膚を撫でる。

玄関先。

絹は、ゆっくりと渡部を見た。

いま、彼の発した森村について問おうとするが、どう聞けばいいのかわからない。

しかし、島村と話をしてきたことと、無関係とは思えなかった。

絹が、ついさっきその話を聞いてきたのだと 知っているかのようなタイミング。

そして、馬鹿馬鹿しい織田派の「偶像崇拜」。

この顔にこだわるように、彼らはあの顔にもこだわるのではないのか。

「森村さんは…誰かに似てるんじゃない？」

ボスの言葉が、頭をよぎる。

初めて、子供たちが顔を合わせた時。

周囲の大人たちが、ざわついていたと。

あのざわつきは 森村を見たからではないのか。

にじつ。

渡部の、さわやかでドス黒い笑み。

「もう、ビックリするほど…そっくり」

決定的だった。

森村に関する全てが、ここで連結できた。

考えたくもない、おぞましい事実。

森村は 織田に似ているのだ。

そのせいで、渡部家は彼を利用することにした。

種馬にしたのは、よく似た子供を作るためか。

そして、織田の命が危ない今 彼が、織田のトレース先として  
決定してしまったのだ。

青柳の所持している誰か、ではなく、森村に。

ボスは、異母弟の心を殺す仕事をしなければならぬのだ。

「夏休み明けに、もしかしたら会えるかもよ…学校で」

ふふふっ。

何という悪趣味。

森村の顔をかぶった織田のコピーが、学校に通うなど。

おそろしすぎて、考えたくもなかった。

「そう…それじゃ休み明けは、あなたが森村さんのパシリになるのね」

そんな皮肉しか、返せない。

しかし、そんな皮肉でも 渡部の頬の皮一枚くらいは、引きつらせたようだった。

「あの男は…だめです」

車の中で、アキが言い切った。

絹は、苦笑するしかない。

渡部のことだ。

あの男がダメなのは、絹が何より知っている。

森村のことを、わざわざ広井家から離れた絹に言ってきたことは、多分意味がある。

絹に、ボスや森村のことを止めさせようとしているのか。

少なくとも、京都へ引つ張る餌にしていることだけは確かだ。

それに、ほいほい乗るわけにはいかない。

だが、気になる。

蒲生は、森村のことはよく知っていた。

特別な表現で、呼んでさえいた。

だが、森村「トレース先、という図式は成立していない。

そっくりな顔、というだけの認識だったのだろう。

替え玉くらいには、考えていたかもしれないが。

そして、今にして思えば、京都で渡部が言った言葉も、納得がいく。

『もし、森村を見ても声をかけるな』、というものだ。

年齢は違うから、多少面変わりはしているだろうが、絹が森村ではなく、織田と鉢合わせる可能性もあった。

殺した桜と同じ顔が、ピーコ以外に現れたとすると、心中穏やかではないだろう。

あの時点で、渡部は絹と織田を接触させたくなかったのだ。

しかし、そんな男が、絹を京都へと呼ぶ。

それは、彼女を今度こそ、『織田』へ献上することのように感じる。

新しい織田 森村と絹なら、年齢的にも合つし、見た目にも皮肉なほど、織田派の理想どおりだ。

こんな、茶番はない。

ニセモノの織田と、ニセモノの絹を祭り上げ、織田の時代が永遠に続くことを高らかに叫ぶ気か。

「クーラーが効きすぎていますか？」

絹が、身を震わせたことに、アキが問いかける。

彼女には、渡部との会話は、まったく意味が分からなかっただろう。

だから、この震えの意味が、理解できていない。

「いえ……」

絹は、おとなしく広井家で夏休みを過ごすべきだ。

それが、一番いい。

だが。

夏休み明けに、学校で森村に会えば 全てが終わる気がする。



いやです

これが、渡部の言っていたアクロバットか。

森村に織田をトレースして、その事実を渡部家が独占し、他の部下達と一線を画すること。

広井家に帰り着き、絹は部屋に引きこもった。

そして、ひたすらに頭の中で考えをめぐらせていた。

しかし、トンデモ話すぎて、どこから手をつけたらいいのか分からないのが事実だ。

このトンデモ話は、ボスというマッドサイエンティストに出会ってから始まった。

人間、ありえないほどの科学に出会つと、それを使わずにはいられないのか。

電話、してみよっかな。

絹は、自分の携帯を見た。

ボスに、だ。

心配だった。

織田に仕事を強要され、異母弟を手にかけるのだから、参っ

てもおかしくない。

ボスが、本気で自分だけ逃げる気になれば、可能なように考えた。だが、ボスにはチヨウがいる。

おまけに、島村も絹もいる。

それらが、ボスの足を引っ張っているのは、おそらく間違いなかった。

携帯を取る。

登録している、ボスの番号を呼び出す。

発信を　押す。

コールは、長く続いた。

長く長く。

そして。

『私だ』

ついに、ボスとつながった。

「絹です…島村さんから全部聞きました」

最初に、絹は結果を話した。

もうボスが、何も隠さなくてもいいのだと、それを伝えたかったのだ。

絹は、彼の味方なのだから。

『そうか』

しかし、ボスは何ら変わることもなく、その事実を飲み込んだよ  
うだ。

「それと…渡部の息子が接触してきました」

これには、微かに反応する気配があった。

『絹…』

ボスが、彼女の名を呼ぶ。

渡部についての、コメントがくると思っていた。

だが。

ボスは、こう言った。

『私は…お前の顔を、変えようと思っている』

たたり続ける桜の顔を　変えると。

思った以上に、ショックだった。

絹は、部屋に引きこもり続ける。

この顔を、変えようとボスが提案してきたのだ。

確かにそうすれば、絹が織田に狙われることはなくなる。

しかし同時に、それ以外のものを捨てるのだと、言われもしたのだ。

広井家とも縁を切り、学校もやめ　それは同時に、ボスが絹の利用価値を放棄することでもあった。

そのための絹の、存在意義がなくなる、ということ。

利用価値がなくなるからといって、廃棄されるわけではない。

もしそうなら、ボスは顔を変えるなんて回りくどいことは言わないだろう。

絹を殺した方が、よっぽど後腐れがないからだ。

しかし、別の人生を歩めと言われるだろう。

利用価値のない女を、いつまでも側に置いておくようには思えなかった。

ボスは、女性嫌いなのだから。

この顔だったからこそ、側にいられたのだ。

それは、三兄弟やチヨウについても一緒。

彼らのDNAを突き動かすこの顔がなくなったら、きっと彼らは誰も絹だと分らない。

振り向きもしない。

声もかけない。

同じ心を持つ人間だというのに、外見が変われば、それを認識さえされないのだ。

実質 高坂絹が死ぬ、ということである。

なんとという皮肉。

同じ外見で、京都では心を入れ替えようとしている。

一方、絹は同じ心なのに、顔がすげ替えられようとしている。

それほど。

面の皮というものは、人間にとっては大事なものだとか、この瞬間、絹は痛いほど知った。

織田が「顔」というものにこだわり続ける意味が、はっきりと分かった気がしたのだ。

簡単に言えば。

絹は。

この顔を 捨てたくなかったのだ。

桜の亡霊がつきまとう、忌まわしい顔だというのに。

いま、彼女が彼女であるためには、この顔がなければならなかったのである。

いやです…ボス。

終わった

ノック。

絹は、ふつと顔を上げた。

一体、どれくらい考え込んでいたのだろう。

夏の夕日が、なくなりかけて、部屋を薄暗くしていた。

のろのろと立ち上がり、ドアのそばの電気をつけに行く。

先にドアを開けると、部屋の暗さを怪訝に思われるからだ。

パチンと電気をつけ、それからドアを開ける。

「はい？」

誰が来たか、聞くのを忘れていた。

ドアが開くと、少し驚いた将が立っている。

声より先にドアが開くとは、思わなかったのだろう。

「夕食の時間だから、迎えにきたよ」

にこにこ。

微笑む将の目が、絹を見ている。

手放して笑っていない目。

今日、アルバイトを休んで自宅に帰ったことで、多少の不審を覚えていたろうし、アキに何かを聞いたのかもしれない。

「ありがとう」

絹は、にこっと微笑んだ。

彼女は、ちゃんと目まで笑ってみせた。

疑惑の服の裾を、掴ませないために。

部屋を出ようとしたら、でも、腕を掴まれた。

「大丈夫？」

低い、声。

自分でも信じられなかった。

よろけてしまった、のだ。

ちゃんと、足を踏み出したはずなのに。

「ええ…今日も暑かったわね」

絹は、もう一度微笑んだ。



今度は、問題ない。

ちゃんと、足を踏み出す。

支えてくれた腕を、ゆっくり離そうとしたら。

改めて、もう一度腕をとられる。

「そうじゃなくて…大丈夫？」

そうじゃないことなど　ないのだ。

「絹さーん、おなかすいたー」

階下から駆け上がってくる了。

「待たせてごめんね、ご飯食べましょう」

その三男の元気な声に、絹は将の手を逃れられた。

了に手を取られる。

背後に将の視線を感じるが、振り返らなかつた。

しかし。

ダイニングに向かう途中に、京がいた。

将と違って、彼は言葉にはしない。

ただ、その目が絹を追っているのは気づいていた。

「お仕事、おつかれさま」

大体。

彼の部署は、こんなに早く仕事が終わって帰れるはずない。

その事実だけでも、絹のことに引っかかっているのが分かった。

だが、いまの絹には、三兄弟の思いや優しさが、虚しいものにさえ感じるのだ。

だって、私じゃなかったら 違っでしょ？

違っでしょ。

ボスときちんと話をするつもりだが、夏休みが終わったら、絹と  
いう存在は消えるかもしれない。

学校で、森村に会うワケにもいかないし、変わった顔で通うワケ  
にもいかない。

前も後ろも、断崖絶壁になった気分だ。

ボスの言うように、顔を変えて学校をやめて、別の人生を送るのが  
最良の方法の気がする。

ボスの足手まといにも、ならない。

了に微笑みかけながら、絹の中ではどんどん煮詰まっていく。

「絹さん」

遅れた将が追いついてきた。

腕を取られる。

振り向かせる、強い力。

了から、もぎはがされる。

引き寄せられる。

あっ。

抱きしめられる。

「う…うわあ！ 何やってんのさ、将兄い！」

大声で、時を動かしたのは了だった。

京も、すぐそこにいる。

ここは、広井家の廊下。

そんなところで 絹は抱きしめられていたのだ。

「何かあった…でもオレ達には話せない…分かる、分かるけど、絹さん…だめだよ」

絞り出す、声。

「それじゃだめなんだ…」

将の声は、絹の足元に火をつけた。

彼女の身体の中には、いくつもの秘密という爆弾が詰まっているというのに。

それを、爆発させる気なのか。

ただでさえ、絹は追い詰められている。

その不安定な状態でも、平静を保つには、とてつもないエネルギーを消費していた。

そんな絹の均衡を。

将が、ゆさぶる。

うるさい。

うるさいうるさい。

知らないから、言えるのだ。

彼女にさえ投げ飛ばされそうな、ぼっちゃんが何を言うのか。

「私を…助けてくれるの？」

将の胸の中で、絹は笑った。

全身が引きつるほどの、震える笑い。

「じゃあ…じゃあ、織田っていう悪党を、この世から消して！  
いますぐ消して！そして、先生と私を自由にして！」

彼のシャツに、その下の肉もろとも、強く爪を立てるようしがみ  
ついた。

唇が、わななく。

歯の根が合わない。

爆発した。

いや、爆発させてしまった。

ボスが、この世で一番巻き込みたくない家族に、織田の名をわめ  
いたのだ。

終わった。

また。

人生を、  
変えなければならぬ。

## 流転

「アキさん……」

目を開けると、彼女がいた。

部屋のベッドで、絹は横たわっている。

ああ、そうか。

余りの激昂で、脳の配線がショートしたかのように、絹は意識を失ってしまったのだ。

「は……あはは……」

思い出してしまった。

自分のしたことを。

おかしくて、笑いが出るほどだ。

「織田の名前を……言ってしまったわ」

アキには、少しだけ話をしたことがあった。

でもそれは、彼女が完全なる部外者だから。

だから、言えたことだったというのに。

「……全員、織田の名前はご存知でしたよ」

ピシッ。

空気に 亀裂が入った気がした。

「ぼっちゃま三人とも…知っておられました」

絹の目を見て、アキはもう一度繰り返した。

全員、という意味合いを間違いなく伝えてくる。

京だけならまだしも。

将も、そして了も!?

「奥様の生まれや死について、そこが絡んでいると…それぞれで調べられておいででした」

了も。

知らないままでは、いられなかったのだ。

母の記憶もほとんどない彼さえ、桜の命の行方を追い求めていた。

あの笑顔の陰で。

絹に、嘘の笑顔があるように、彼らにだけあってあるのだ。

爆弾を抱えていたのは、彼女だけではない。



その導火線に。

絹が、逆に火をつけてしまった可能性がある。

『織田』、という名前を出したせいだ。

これは　　まずい。

絹は、少しだけ冷静になった頭で目を細めた。

三兄弟に何かあったら、彼女がボスに殺される。

「きちんと、お話されたいかがですか？」

アキが、前向きな提案をしてくる。

絹は、苦笑するしかなかった。

「アキさんは、彼らに仇討ちをさせたいんですか？」

全部、話せるわけがない。

「そう…ですか」

アキは、目を閉じた。

「やはり…坊ちゃんま方の仇なのですね、織田という人間は」

目を　　開いた。

「朝様は…」

なん、だろう。

アキの雰囲気、変わった気がした。

「朝様は…奥様の死を、誰にも泣き付かれることはなさらなかった」  
淡々と、しかし、何かがばりばりと破れていく。

「本家にも反対されていた結婚ですし…朝様も、仇討ちを思いとどまられたのでしょう」

ちがう。

そんな話、アキが知るはずなどない。

いま彼女が話していることは、桜が死んだ頃の話。

アキは、まだ小さかったはずだ。

しかし、チヨウウがこんなことを、人に話すだろうか。

ありえない。

「その時の朝様の我慢のツケが…いま、あなたがたにきたのですね」

絹は 落ち着かなければならない。

そして、警戒しなければならぬ。

アキは、野生の不審人物ではない。

その事実を、ゆっくりと飲み込む。

本家という言葉も、絹の頭の中で宙ぶらりんだ。

しかし。

どこかで、疑問に思っていたのだ。

何故、チヨウや会社は無事なのか。

桜を奪った事実が知られ、桜は追い回され殺されたのに、チヨウは生きているし、会社もつぶされなかった。

織田の怒りに触れたのなら、無事のはずがないだろうに。

そうか。

本家   いわゆるバックがついていたから、織田も広井家そのものに、手出しができなかったのか。

本家と織田の間で、桜だけが犠牲になったのだ。

そこまで考えて、絹はアキの素性をつっすら気付いた。

「その…本家から、来たんですね…あなたは」

「絹は、アキを見上げる。

正確な表現ではないことは、分かっていた。

彼女の目は、使う側の色ではない。

しかし、使われる側にも見えない。

だから、絹は彼女を見た時に、野生だと思ったのだ。

「本家は…今はもうありません…解体されました」

あっさりと。

突然出てきた『本家』とやらは 突然、消えた。

無茶苦茶な、話を聞かされている。

織田さえも、直接手出し出来ないようなバツクを 解体した？

「私は、織田は知りません…いえ、知りませんでした。ここで働くようになり、あなたに聞いてから調べました」

アキが、見る。

絹を、見る。

まっすぐというより、直線の目。

「そして相対的に、私の家が一体何だったのかを知りました。何故、鍛え続けなければならなかったのか」

「何故、すぐに朝様が私を雇って下さったのか」

「何故、子供の頃の記憶が歪んで見えるのか」

直線の言葉。

絹に向かう、重い槍のような声。

「私は、何の保護もなく生き残れる人間になるため…強くならなければなりませんでした」

陽が、見える。

重い言葉の向こう側に、その目の奥に。

地から天を目指す 迷いのない目だ。

「こうして私は生きています…古めかしい組織などなくても、何ら問題などありません」

アキの迫力と、周囲から押し寄せる断片の情報が、絹の思考を妨げる。

本当は、彼女が何者なのかまでは理解出来ていない。

ただ。

使うものでもなく、使われるものでもなく。

ただ、アキは 立つものだと分かった。

行くものだと分かった。

そうだ。

広井の人間たちも、陽属性。

立つものであり、行くもの。

アキに見えたものが、彼らにも見えるはずだ。

同じ系列の人間。

同じ種の。

「あなたは広井の男達に、助けを求められた… 応えますよ、彼らは  
要は。」

アキの唇が、ゆっくりと動いた。

「要は… 織田ではなく… その組織が、なくなってしまえばいいので  
しょうから。」

迫力を押し込めるように、アキは目を閉じた。

めまい。

ベッドに横たわっているというのに 天井が回る気がする。

自分は、どこにいるのか。

ぼっちゃんたちのいる、広井家ではないのか。

将来、大きな電気屋を継ぐ子たち。

その子たちに、アキは何を見ているのか。

ドンっと、ドアが開いた。

ノックもなしに。

落ち着かない視界で、音を追いかけると。

京が入ってきた。

「返すぞ」

ベッドに放り投げられたのは 絹の携帯。

ボスや島村、そして蒲生のものも入っているそれ。

気を失っている間に、持って行かれたのか。

そのまま、ざくざくと部屋を出て行くこととする。

「あっ」

やっと、我に返ることが出来た。

だが、言葉は呼び止めるには弱すぎるのか。

いや。

あえて 無視された。

京は、またドアを閉めて行ってしまふ。

無言を貫くアキ。

そんな彼女の横で、絹は携帯をつかんだ。

発信履歴を見る。

ボスにも、島村にもかけた跡があった。

アキが横にいるにもかかわらず、絹は震える指で島村にリダイヤルする。

「島村さん！」

向こうが電話を取った直後、大きな声を出していた。



『…怒鳴るな』

いつも通りの、島村の声。

「何を…何を言われました!？」

制御を離れようとする、自分の唇をねじ伏せる。

答えが返るまで、ほんの数秒。

長い長い 数秒。

『織田を…ぶつつぶすそうだ』

いつてきます

「そんな…馬鹿なこと…」

真つ白になる意識を、絹は自分のほの暗い吐息で止めた。

そんな馬鹿なことを、本当にして欲しかったわけじゃない。

将が、知った顔でかき回すから。

絹の火薬庫を、暴こうとするから！

『先に、先生に話つけてきてるぞ』

携帯は、まだつながったまま。

島村の言葉が、絹を揺り動かす。

発信履歴は、確かにボスが先だった。

「先生は何て!？」

島村は、個人的な恨みなど織田にはない。

兄弟に加勢する理由もない。

だが。

だが、ボスが。

『手を出すな、と』

絹に、一筋の光が見える瞬間だった。

ボスと島村が参加しないのなら、兄弟を止めるだけ。

それなら、なんとかかなりそうだった。

なのに。

『織田本家は、先生が始末をつけるから、本家だけは手を出すな、と』

話が 引っ繰り返った。

ボスまで！

逆に言えば、本家以外は手出しをしてもいいと言ってるようなものだ。

ボスが動けば、島村も動く。

絹では、ボスは止められない。

ということとは。

全員を、止められなくなったということだ。

『ああ、先生から伝言だ』

呆然としている絹に、恐怖の一瞬が訪れる。

今回の、最悪の自爆について、ボスから一言来る、ということだ。それこそ。

クビを覚悟すべきだ。

ボスの大事な、広井一家を思い切り巻き込んでしまったのだから。神妙に待っている彼女に。

『言いたいことは、ちゃんと私に言いなさい…だそうだ』  
駒に、何て無茶を言うのか。

どう、しよつ。

切った携帯を手に、絹は言葉を失ったまま。

アキは、黙っているのが苦にならないのだろうか。

存在感こそ消えてはいないが、ぴくりともせず、ただそこにいる。

わめいてひっくり返って、起きるまでの間に、みんなが動き出してしまった。

みんな？

いや。

まだ、あと一人。

絹が、それを考えかけた時。

ノックが聞こえた。

京ではないだろう。

さっきの彼の様子を見る限り、ノックをする気はなかったようだから。

将か、もしくは了か。

「どうぞ」

絹ではなく、アキが許可を出す。

「絹さん、大丈夫かな？」

ドアの向こうにいたのは チョウ。

そう、この騒ぎに加わっていない最後の一人。

「お帰りなさいませ、朝様」

アキは立ち上がり、彼の帰りにきちんと挨拶をする。

どんな状況でも、きっと彼女はそうなのだろう。

「あはは、エマーゼンシーコールで召集されたよ」

軽やかに笑いながら入ってくるが、その言葉の内容は、絹を追いかけるものであった。

最後の一人までも、引つ張り込むというのか。

「いいえ！」

絹は、大きな声を出していた。

やっと、話の出来る相手がここにきた。

チヨウならば、兄弟も、そしてボスも止めることが出来るではないか。

一番強い、影響力を持つ男。

「いいえ、いいえ…止めてください！ 先生も、みんなも！ お願いです！」

本当に、これが最後の砦だ。

来週、会社の命運を駆けるような仕事があるというのに、こんなことに関わっている暇などないではないか。

必死な絹に、チヨウは少し困った顔になった。

そして、頬をかく。

「あー…それは、出来ない相談だなあ」

絹の足元を崩す、言葉。

「おじさんはね…本当は、この日を待ってたんだよ」

にこつと笑いながら、チヨウは一枚のまあるいディスクを閃かせてみせた。

「まだ…止めますか？」

チヨウが出て行ってしばらく、絹は動けなかった。

そんな彼女に、アキが問う。

もう止められるところなど、ありはしない。

広井の人間たちは、彼らのやり方で。

ボスや島村は、マッドサイエンティストとしてのやり方で、行動を始めてしまうだろう。

でも。

駒が、足りない。

絹には、それが分かった。

平和的組織にはないものが、織田にはある。

それが動き出してしまえば、どんな平和的行動もひっくり返される。

そうになったら、きっと命にかかわるだろう。

誰が傷ついたとしても、絹の中に黒い色が塗られる。

そして、きっとボスに殺される。

いや。

ボスが、一番危ないところにいるのだ。

もしボスに何かあったなら、絹に生きている価値など ない。

それが、「歩」なのだから。

「このままじゃ……」

足りない。

「ええ…だから、行きましようか」

アキが言う。



え？

「弟たちと、知り合いを呼びました」

何を。

アキは、何を言っているのか。

「足りない駒を…増やしに行きましょう」

手を、差し出される。

何故、絹を呼ぶ。

どこへ行くのか。

「私たちは…戦えるでしょう？」

大きな手。

違う。

アキは、こう言っているのだ。

絹も 戦え、と。

どこで、覚悟を決めればいいのかだろう。

もはや、止まらない。

止まらないというのならば、これは 絶対に成功させなければ  
ならない、ということだ。

サイを振ったのは、絹。

出た数字を、勝利の数字に変えるための足りない駒に、絹がなれるというのならば。

アキの手を、掴むべきだ。

危険な仕事。

いや、アキでなければ、きっとみな絹を後方へ押し込めておいた  
だろう。

さらわれないように、危なくないように。

女だとか、顔がどうか、アキには関係ないのだ。

だから。

いくべきだ。

手を 掴む。

ぐっしょ。

絹の身体は、まるで軽い繊維のようにベッドから引き上げられた。

「では、準備して参ります」

手を離しながらも、アキの目はすぐには離れない。

アキが準備をしている間に、絹にもそうしると。

彼女の言葉の影にある、本当の言葉が聞こえてくる。

言われないことをするのは、自分の意思だ。

絹にとっては、厳しい決断の必要なその部分。

ボス、すみません。

後でクビにでも、実験材料にでもなります。

必ず　そこから助けます。

アキが出て行くや、絹はどうでもいい服を脱ぎ捨てた。

いまの自分に必要なのは、こんな服ではない。

戦える服だ。

シャツとジャージでいい。

それと、しっかりした靴があれば十分だ。

脱いだ服もそのままに、絹が部屋を出ると。

了の部屋から、将が出てくると鉢合わせた。

一番、顔を合わせづらい相手。

「どこへ？」

見慣れない姿の絹に、彼は動きを止めた。

「自分の仕事をしに」

それでも、絹はしっかりと将の顔を見る。

嘘の微笑みなんて　　一緒に脱ぎ捨ててきてしまった。

「絹さんも、アキさんと行くの？」

絹と将の間を割ったのは、了だった。

ドアの陰から、ひよいと顔を出している。

「僕、アキさんのバックアップ頼まれてるんだ…エンタメ部の問題  
児に、一人応援頼んだから、絶対うまくやるよ」

大丈夫、まかせて。

ポパイのように、力こぶを見せる腕をしたが、細っこい腕がある

だけだ。

アキが何を頼んだかは知らないが、会社の人間を一人引つ張り出すほどなら、本格的なことなのだろう。

「気をつけてね…」

ほんの少し。

了は、声を低めた。

いつもの、跳ね上がるテンションの声じゃない。

本当に、気をつけて欲しいと願う声。

アキが何をするのか、大体聞くだけでも、荒っぽいことだと分かる。

それに絹が同行するというのに、気をつけて、と言えるのだ。

止めるではなく、いつてらっしゃいと。

アキの、信頼度の高さのおかげか。

「ええ」

了の容認の言葉があるうちに、絹は将の脇をすり抜けた。

気をつけて、と言えない次男坊に、何か言われる前にアキと合流したかったのだ。

「絹さん！」

でも、それは無理。

ぼーっと見送る男ではなかった。

でも、今度は腕をつかまれたりはしない。

「絹さん…ちゃんと帰っておいでよ！」

彼女の、首筋に刺さる言葉。

荒事だが、絹に死ぬ気はなかった。

少なくとも、ボスを助けて、決着をつけるまでは。

だが。

終わった後に、自分の人生が『高坂絹』のままであるかどうかなんて、分かるはずもなかった。

そういう意味で、帰れるかどうか分からないなんて 言えやしない。

ああ、そうだ。

この荒事のどさくさにまぎれて、高坂絹は死んだことにも出来る。ボスへの提案事項の一つとして、絹はそれをピンで脳裏に留めた。

だから、ただ将に振り返って、こう言った。

「いってきます」

階下に降りたら、玄関先に京とチヨウがいた。

チヨウは、携帯を顎に挟んで電話中。

京は、電話を切ったところだった。

「島村さんとこに行ってくるが、お前もく…こねえな、そのカツコじゃ」

携帯をポケットにねじこみながら、京は一瞬にして絹の姿を上から下まで舐めた。

「私は、アキさんと行きます」

絹は、深くつつこまれるより先に、顎を巡らせて彼女を探す動きをした。

「アキさん…って」

京が、ちらつと電話中の父親を見る。

チヨウが、斜め向こうを向いたのを確認した京は。

信じられないことをした。

絹に向かって、拳を振り出したのだ。

顔面めがけて。

絹は。

動かなかった。

本気でぶつける気がないのは、感じていた。

鼻面の、少し手前でそれがぴたつと止まったかと思うと、父親が視線を戻す前に、すぐに引っ込める。

「動けなかったのか？ それとも…動かなかったのか？」

この男は、どこまで絹の猫をひっぱがそうなのか。

既に、今の状態で猫はほとんど残ってはいないが、それでも今後  
のことを ああ。

絹は、自嘲した。

まだ自分は、今後のことを考えているのか、と。

だが。

「……………」



絹が答えるより先に、電話を切ったチヨウのパンチが、京の脳天に炸裂した。

「女性に手を上げるような子に育てた覚えは…」

「ちよっ…本気じゃねえ」

「お前は、早く島村さんところに行ってこい」

革靴が。

長男の尻に、足型をつける。

ま、さ、に、蹴り出す、だ。

チヨウは、上着のポケットへと携帯をしまう。

「私は、渡部建設のところへ行ってくるよ…織田の仲間をやめてもらいに、ね」

まあるいディスクをひらひらさせて　チヨウも出て行く。

あの中身は、さしづめ渡部家の弱みになるようなものなのか。

昨日今日、集めたのではないだろうかそれ。

ずっと、仇討ちの口実を待っていたのだろうか。

「お待たせしました」

チヨウの背中を見送っている絹は、肩をたたかれた。

袴姿のアキが、いた。

## 陽の一族

迎えのバンに乗り込むと、中には五人いた。

袴姿の、がっしりした男二人が、アキの弟たちだろうか。

問題は、残り三人。バンの後方スペースいっぱい、銃火器を並べている。

しかし、それらは旧式に見えた。

大事に使い込まれてきたのか、美しく磨かれている。

「銃砲隊の一族です…こんなことに呼んで、喜ぶ人間はここだけですよ」

くつと、アキが笑う。

「人数制限しないなら、あと十人はきたぞ」

旧式とはいえ、バズーカまである。

その砲身をなでながら、若い男がにやりと笑う。

「武術隊と違って、銃砲隊は活躍できる場所が限られてるからな…随分、海外へ行ってしまったよ」

この中では、一番小さい男がアキを見上げる。

彼女の目の奥に、何かを見つけようとしていたのか。

苦笑混じりに、首を横に振って顔を下げた。

「そちらは？」

弟の一人が、絹を見る。

車内で唯一、空気を共有しない者。

「絹です…よろしく」

この感覚に、覚えがある。

訓練で、まったく知らないチームに放り込まれた時と似ている。

目で会話できる連中の中に、入った異物なのだ、自分は。

「武術はほどほど…射撃はひととおりできます」

スキルを明確にし、お客さま状態を早く脱すること。

皮肉だ。

まだ、訓練の基本が身体にしみついている。

しかし、それがいま、唯一絹に出来ること。

「こんだだけの銃見て、普通に話せる日本人なんて、まともじゃないのは分かってる…よろしく、絹…歓迎するぜ」

「ここは。」

銃を扱う人間でさえ 陽の目を持っているのか。

行き先の話聞いて、絹は愕然としながらも納得していた。

『養成施設』をつぶす、というのだ。

簡単に言おう 絹のいた施設である。

「養成されている人間は、ほとんど非合法で連れてこられている。要するに、強制収容されてるわけだ」

目元がアキに似ている、年若い男。

外部地図、そしてどこから手に入れたのか、内部地図まで、彼が広げてみせる。

「指導教官を押さえ、彼らを解放して味方に吸収します」

続けられた言葉に、恐ろしいほど納得する。

こちらは、たった六人。

一つの施設を制圧するには、全然足りない。

しかし、向こうは一枚岩ではない。

教官クラスを除けば、逃げることに絶望し、ただ生き残るためだけに生きている者たちだ。

施設そのものに張り巡らされているセキュリティと、教官をなんとか出来れば、内部崩壊が導ける。

「だから、了くんのバックアップがいるのね」

セキュリティは、内部から以外に外部接続もしてある。

もしも、教官たち全員にトラブルが発生したら、遠隔で蟻一匹出入りできなくなるのだ。

そのシステムをハッキングする人間が必要だった。

だから、了は応援を呼んだのだ。

「角川がサポートに入るんだろ？」

「ああ、そっぴや広井んトコで働いてたな、あのバカ」

密やかに、かわされる言葉。

聞き覚えのある名前だったが、絹は思い出すのはやめにした。

いまは、かつての自分の巣を睨みつけるので、精一杯。

ただ。

「ここなら、誰よりも戦える。

絹は　　そう確信していた。

夜なら、教官は三人くらい。

ただし、アキクラスの腕だし、武術も火気もお手のものだ。

高速を経由し、長く長く車で揺られ、一時過ぎに見覚えのある山道に入った。

忘れられない、忌々しい山。

売られて出ていったとしても、絶対に戻ってくるもんかと、誓う場所だ。

「角川…もうつくぞ、終わったか？」

携帯を顎で挟み、バックアップの状況確認をしている。

「はいはい、もう少しね…わかったわかった」

携帯を切った男は、状況をいちいち復唱したりはしない。

手間取っているようだ。

「角川の腕も鈍ったなあ」

「ゲームばかり作ってるからだろ？」

「オタクの割に女好きだからな、女ボケもありだな」

言いたい放題言われてますよ。

絹は渡されたハンドガンを確認しながらも、苦笑してしまった。

思い出そうとしなくても、勝手に頭に顔がよぎったのだ。

絹に声をかけてきた男は、軽そうに見えて肝が座っていた。

アキ側の人間だったなら、納得もいく。

絹に、違う匂いを感じたのかもしれない。

絹の携帯が、振動した。

了からだ。

『絹さん、こっちオツケーになつたよー！』

明るく笑顔で 角川の手柄を横取りだ。

きっと了は、チョウとは違うタイプの大物になるだろう。

「ありがとう」

笑いながら、絹はそう確信した。



「バックアップ、いけるそうです」

彼女は、きちんと報告したが、既に気配を感知していたのか、銃砲隊は準備完了状態だった。

「地雷に注意してください。板を渡した跡の場所は安全ですが、狙い撃たれる場所でもあります」

絹は　　言わなければならなかった。

それが、自分の本当の身元を明らかにしてしまったとしても。

「なるほど、じゃあ狙い打たれるような、開けてる場所が安全ってことだな」

詳細情報として、絹を知らない人たちは、素直にそれを受け入れる。

アキは　　絹を見ないでくれた。

## 傑作

「養成員宿舎、ロック固定。外門開放固定！」

携帯に向かつて、作戦開始の指示が出される。

幸い、真夜中。

絹の元お仲間たちは、ほとんどが眠りの底だ。

宿舎さえロックしてしまえば、彼らの参戦は止められる。

実質敵は、教官のみになる。

後の説得の心配は、ある程度のコントロールを制圧した後だ。

「行くぞっ！」

銃砲隊三人が、先に飛び出す。

絹が、次に続いた。

夏の夜なのに、刺すように冷たい空気に感じる。

自分の命を、秤に乗せている時にしか感じない冷たさだ。

絹は赤外線スコープ越しに、薄暗くうごめく先行の三人を追う。

夜目の利かない絹に、銃砲隊が貸してくれたのだ。

重火器担当が一人。

後の二人は、瞬発力重視だ。

マシンガン系がないのは、命中に自信があるのか、はたまた彼らのポリシーか。

門に踏み込んだ三人が、一瞬で左右に散会し　伏せた。

はっと、絹は門に身をひそめる。

チュイン、チュインと跳弾が火花を散らした。

不意打ちのこちらを、更に出会い頭に不意打ちしようとした奴がいたのだ。

地雷の関係で、正門から入ってくることを見越された。

教官に決まっている。

とりあえず、一名が軽装備のまま侵入者を足止め。

残りの教官が、いま武器及び養成員の準備をしようとしているはずだ。

しかし、後者は不可能。

「遠慮なしだ！　ブチこめ！」

火線で位置を確認し応戦しながら、銃砲隊は大物をすかさず出した。

バズーカー閃。

轟音と共に、総合棟が火を吹いた。

「突入！」

間髪入れずに、全員駆け出した。

今度は、アキたちも合流している。

熱風が、絹の前髪を跳ね上げる。

それさえも 冷たく感じた。

午前四時。

管理棟に立てこもり、教官たちは抵抗を続ける。

武器室があるため、こちらから大物では攻撃出来ないため、長引いているのだ。

逆に言えば、向こうにはそれだけの装備がある。

長期戦にして、応援待ちの姿勢だ。

こちらが少人数なのを把握したせいもあるだろう。

教官をあきらめさせるには、圧倒的な駒がいる。

「アキさん」

駒を動かすには、自分では足りない気がした。

だから、彼女を呼んだ。

「すみません、一緒に来てもらえますか」

東の空が、薄い紫をたたえ始める中、二人は走った。

たどりついたのは 養成員宿舎。

絹は、携帯を出した。

「了くん、養成員宿舎のロックを解放して」

いまもなお、寝こけているのは、鉄の心臓を持つ鈍いバカくらいだ。

他は、外の異変に気付いているし、上位の奴らはこのドアの、すぐ向こうで待機しているはず。

重い、重い鉄の扉。

いまの上位は、誰だろう。

売れやすいところだけに、入れ代わりも激しい。

たとえ、見知った人間がいたとしても、向こうは自分を分らないのだ。

あと、教官に取り入る少数の人間もいる。

何にせよ。

彼らを説得して味方につけられなければ、やはり勝利はない。

『絹さん、宿舎開けるよ!』

了の、ゴーサイン。

息をつく。

さあ。

絹が役立てる時だ。

ドアを　　少しだけ開ける。

「今からドアを開けます。敵ではありませんので、攻撃もしません」  
声を、先に入れるためだ。

ギギイ。

重々しいドアを、絹はゆっくりと開ききった。

絹くらいの年ごろの子たちが見える。

自分と、同じ目の人間だ。

「いま、私たちは教官らと戦闘中です。あなたたちもここから解放します。ただ、その前に、力を貸して。教官との戦闘を、終わらせたいの」

信じられない話だろう。

絹が、この中の一人なら、とても正気の話とは思えない。

だから、反応はとても鈍かった。

時間がないのに。

彼らの行動スイッチを入れるには、こんな実態のない言葉ではダメなのだ。

荒技でいくしかない。

「最上位は誰!?!」

やさしい敬語では、届かないというのなら。

気合いを込めて、絹はそう言った。

「オレだ」

知っている男が、前に踏み出した。

親しかったわけではない。

しかし、過去が一瞬絹の意識をよぎった。

振り払う。

絹は、後方のアキを手で指した。

「彼女が、うちの大将よ。あなたが勝ったら、みんなで逃げればいい。こっちが勝ったら…味方になってもらうわ」

最上位が負ければ、他の誰もかなわない。

そして、教官とやりあえる人間だと理解される。

みんなの意思、では彼らは動けないのだ。

最上位が、絹の提案に乗れば、必然的にそれが全員の意思になる。

「分かった…ウチ流だからな、こぎれいなことは言つなよ」

彼は、そういうなり 絹に腕を伸ばしていた。

あっ！

戦う相手はアキだというのに。



いや、違う。

分かってやっているのだ。

どんな勝ちでも、勝ちが勝ち。

絹を締めあげても、アキに参ったと言わせればいいのだ。

そうね。

そういうところだったわね。

絹が、ここ出身でなければ、このままパニックで捕まっていただろつ。

悲しいかな、身体は自然に飛び退いていた。

「アキさんっ！」

叫ぶまでもなかった。

既に、彼女はその大きな手を突き出していたのだ。

最上位の男が、手を引ききるより先に、がっしりと掴み  
より重い身体を、片手で引きずり寄せようとした。 自分

一瞬の態勢の崩れでいい。

アキには、それで十分に違いなかった。

まるでコマ送りのように、男が綺麗に体落としを決められる様を、絹は見ていた。

気合いの掛け声一つなく、アキは息ひとつ乱していない。

だが。

絹は、恐れていた。

アキの技は、綺麗すぎるのだ。

勝つか死か、をたたき込まれるこの人間には、まだ負けた、ではない。

彼がどこまで抵抗するか、そこがカギだ。

「そんなお綺麗な技じゃ、勝ったとは…！」

案の定、彼は足を跳ね上げ、真下からアキを蹴りつけようとする。

その足を、腕でガードしたアキは　しかし、構えを解いて彼に詰め寄る。

「この決闘に、益などありません」

あの陽の目が、まっすぐに彼を見た。

「あなたが倒したいのは、私ですか？　教官ですか？」

まっすぐすぎる言葉。

ああ。

絹は、半分だけ覚悟した。

アキの言葉や行動は、おそらく彼には届かないだろう、と。

彼女の目を、まっすぐ見返せるものなど、ここにはいないのだ。

「はっ！ はははは！ 傑作だ！」

ヒステリックに、男は笑った。

「だから、あんたらはここを陥とせないんだ！ そんな、ナマっちょろいことを言ってるから！」

目の前で、怒鳴りつけられても、アキは微動だにしない。

あと少し、アキが針を振れさせたら、きっと彼は爆発しただろう。

だが。

「やれやれ……」

声が、聞こえた。

絹たちより、もっと後方。

知らない声。

誰でもない声。

振り返る。

男が三人いた。

いずれも三十前くらい。

普通の人間じゃないことが、ただ立っているだけでも伝わってくる。

「千載一遇のチャンスと聞いて駆けつけたら…後輩どもは、今の時代もモグラ野郎か」

「門、開けてくれたのあんたらだろ？　ありがとよ…後から、またオレらみたいのが来るぜ」

「やっと、ここと本当にオサラバできる」

ああああ。

絹は、震えが走った。

彼らの、名前を問う必要はない。

まさかの駒が、来たのだ。

ここから売られていった、いわゆる卒業生たちに違いない。

絹たちの襲撃の情報を、手に入れてくれたのだ。

強く生き延び、年を重ね、それぞれの組織の中で、自由に動けるようになったのだろう。

何年たっても、ここのことを忘れきれずにいたのだ。

こんな心強い駒は 他になかった。

蛾

「いつくぜえええ！」

武器室の位置を、完全に把握している一斉射撃。

いや。

いつそ、それをも巻き込んでも構わないと、本人たちは思っていたのかもしれない。

三人だった応援が、一人、二人と増えていく。

既に十人はいるだろう。

総合棟も、炎上を始めた。

卒業生たちが、ここの施設すべてをつぶしていこうとしているのだ。

一方。

呆然と、その光景を見ている者たちもいる。

現在、ここで養成されていた者たちだ。

自分の周囲の檻が壊されていくのに、それをきちんと把握できないでいる。

絹は、最上位の男の横に立った。

「宿舎は、あなたたちの手で壊していいのよ…指揮できるならね」

ここは、本当の彼らの巣ではない。

心よりどころでもない。

そんなこと、本人たちが一番よく知っているだろうに。

「ああ…そうだな…」

ゆっくりと、彼は動き出した。

「あ、あの女に言っとけ…お前たちの大将」

振り返りざま、苦い響きの音。

「あんなんじゃない、いつか死ぬぞ、ってな」

絹は　悲しくなって目を伏せた。

アキの心配をしているのではない。

この国は平和だが、確かにそんな危険な裏道はいくつもあるのだ。

こうして、織田がのさばっていたように。

確かに、アキのやり方では通用しないだろう。

何度、力でねじ伏せても、背後から撃たれたらおしまいだ。

だから、とりあえずここできつちりと。

織田をつぶそう。

それで少なくとも、脅威のひとつは消える。

そして　ボスを迎えに行かなければ。

増殖していく卒業生たちは、養成所だけにとどまらなかった。

島村からの連絡で、織田の持つ非合法施設が、次々に急襲されていることを知ったのだ。

『アングラネットが、祭り状態だぞ』

苦笑混じりの島村だったが、その声を一度ぴたりと止める。

『だからこそ、先生が心配だ…織田本家も襲撃されるかもしれない』

そうね。

既に、彼らの計画は予想外の増援のため、山津波のような状態だった。

誰も、すべてを把握していないし、そして、コントロールできない。



濁流のように、目に見える敵を押し流していくだけ。

「先生の居場所：詳しく分かる？」

行かなきゃ。

絹は、足を必要としていた。

京都までの移動手段だ。

しかし、これだけの増援の中なら、行き先さえはっきりすれば、調達できそうな気がした。

何しろ。

織田本家だ。

是非、行きたい人間もいるだろう。

『発信機だけはつけてもらってるからな…すぐ位置をメールする』

携帯を切って、絹は周囲を見回す。

アキたちが一番頼みやすいが 連れて行く気はなかった。

彼女とは、きっと相性の悪い世界だ。

織田をまた、正面から見据えられては困る。

そんな絹の視界に、最初の応援組が映った。

増援数を見て、他へ転戦する気になったのだろうか。

あの速さで来られたということは、一番近い人間のはず。

西寄りのこのエリアを考えると、関西方面の地理にも、おそらく  
明るいただろう。

「私を、織田本家へ連れて行って欲しいの」

そんな彼らに、絹は単刀直入に言った。

難しい表情が、返事として返される。

「織田本家って言うてもね、知られているだけで15あるぜ…本当に  
にそのどれかに織田がいるかも分からない」

居場所の特定が、彼らでさえ難しいというのだ。

「それなら…分かるわ」

絹の手の中で 携帯が激しく震えた。

「京都と言うつより、ほとんど滋賀じゃねえか！」

派手にボヤきながら、運転手は4WDのハンドルを、オモチャの  
ように転がす。

彼が山道のカーブを、猛スピードのまま曲がるため、絹はドアにしがみつくの余儀なくされたのだ。

「オツケー…あんたは、雇い主と坊やを引き取れば、後は用はないんだな」

そんな、左右への遠心力のかかる中、他の二人は平気そうな様子で、絹の状況を把握した。

ボスと森村。

その二人を、無事に確保して欲しいとお願いしたのだ。

「織田は、うちのボスが始末をつけると言ったもの」

ボスは科学者だ。

しかも、相手はこの場合被検体。

目的そのものを、達成するのは可能だろう。

だが、生きて逃げるには、ボスにも駒が足りない。

だから、絹がその駒にならなければ。

「まあ、誰が始末しようが、織田が消えれば、オレらも文句はない」

見届けさせてもらうぜ。

同種の過去を持つ彼らと一緒にいると、たとえようない安心感を覚える。

やっぱり、自分はこっち側の人間なのだと、奥底の部分で感応してしまうのだ。

「おまえさんも、あそこ出身か？」

絹の心を見透かしたように、男に聞かれた。

「ええ」

周囲を気にせず、本当のことを言える。

「ふーん、出所したのはいつだ？」

言いながら、男はじつと絹の顔を見る。

「…五カ月前よ」

この顔から、あらぬ連想でもされているのかと思いきや。

「ハッ！ たった五カ月でこうなのか！ そら、いいとこに売られたらしいな、ついてたじゃねえか」

絹は、バンバンと肩を叩かれた。

それだけで、肩が抜けそうだ。

「最初、おまえさんがモグラ出身か、分からなかったぜ…一緒にい

た、傍迷惑な太陽みたいな女のせいかもしれないが」

齒に衣着せない物言いに、絹は笑ってしまいそうだった。

「まあ、これが終わって、おまえさんに許されるなら、向こう側の人間になっちまいな……」

なかなか、なれる奴はいねんだから。

絹は、複雑すぎて何も答えられなかった。

なれない人間が多いというのは、よく分かる。

向こう側は、明るすぎて不安なのだ。

蛾の姿をしている自分が　　どうしてそこで生きていけよう。



どうか、無事で。

途中で車は林道へと突っ込み、煙に向かって間違いなく進む。

木々が開けた時、突然白壁の塀が現れる。

庵というほどごちんまりとはしていないが、それに近い侘び寂び感の建物が 燃え上がり始めていた。

着物の老婆が、こけつまろびつ飛び出してくるのに、車は急ブレーキをかけた。

半回転して止まった車。

「先行け！」

運転手の男が、怒鳴った。

「あたぼつよ！」

二人が飛び出すのに遅れないよう、絹もドアを開けた。

老婆など、無視でつつこんでいく。

しかし、一瞬だけ絹の意識にその存在が残った。

もしかしたら、と。

確認する暇などない。

「ボス！！」

開け放たれている門に飛び込み、そう絹は叫んだ。

だが。

「ハッ…ハハハハハッ！」

彼女の叫びに応えたのは　咆哮とも取れる、笑い声だった。

庭に面した縁に　「それ」はいた。

抜き身の日本刀を畳に突き立てて、柄に手をかけたまま膝をついている。

ジャツと砂を鳴らして踏み込んだ彼らを、ゆっくりと見やる。

ああ。

年齢が違つと分かっているのに、絹でさえ見間違つほど、「それは森村だった。

あの氷点下の目と、同じ目だったのだ。

しかし、違つ。

まどつているものの、根本から違つ。



「招かれざる客が来たな…」

柄の手に力をこめ、「それ」はずっしりとした身体を上へと引き上げた。

「桜の亡霊も見えるようになったか…ジャージで迎えとは粹だな」  
ずずずと。

背後で炎が燃えているというのに、何も感じていないかのように、畳から日本刀を抜く。

チャツと、二人が銃を構える。

この男を見て、構えられるだけでもすごい。

絹は、気を抜けば後方へよろけそうだった。

ボスを、助けなきゃ。

まだ、どこにいるかも分からない。

いまだという状態なのかも。

なのに！

なのに　　一步も踏み出せない。

「それ」のせいだ。

人の姿をしているのに、人を感じられない。

「おい…あれが、雇い主じゃないだろうな」

彼らがトリガーを引けずにいるのは、「それ」が絹側の人間と誤解しているからではないはずだ。

彼らだって、気がついていて。

自分らが、得体の知れないものの中にいることを。

答えなきや。

違う、と。

あれは、味方でもなんでもないと。

そうしたら、彼らが撃ってくれる。

それで、脅威は去る。

なのに。

声が、声が。

「亡霊は……こっちよ」

燃え盛る座敷の奥から、浴衣の裾を焦がしつつ、誰かが現れる。

目を疑うしかない。

ぴーこだった。

「ひなこか…お前が寝ている間に夏になったぞ」

揶揄する奇妙な言葉を口にしながら、「それ」が振り返る。

もう一步。

ぴーこ いや、ひなこが「それ」に近づいたら、食われるのではないかと思うほどの獣的な笑み。

唇の中に、牙がないことが不思議なほどだ。

「違うわ…」

ひなこは、「それ」を前にしても怯まない。

その一步を、踏み越えた。

「違うの…分かるわよね？」

まっすぐに、自我のある意思で「それ」をみつめるひなこ。

祇園祭で見た、あの雲の上を歩くような気配は、もう微塵もなかった。

「ああ…なるほど」

ククッと。

「それ」は笑った。

笑みに、火の粉が絡んで消されるほどの低い音。

「なるほど、なるほど…そういうわけか…お前がアレの置き土産か」  
何の。

何の話をしているのか、この二人は。

絹は、炎の舞台で繰り広げられる劇を、ただ見せられていた。

「久しいな…会いたかったぞ」

ひなこに、手を伸ばす。

愛情はない。

優しさもない。

本当に会いたかったなんて、かけらほども思っていない。

伸ばされる手は　むしりとる手にしか見えなかった。

ひなこは、その手を見る。

そして、微笑んだ。

「あなたの手は…取らないわ」

稲妻が。

絹の中に、稲妻が落ちた。

その微笑が、絹の脳髓を激しく揺さぶったのだ。

あ、あ、あ。

今ほど、記憶がつながるなと願った時はない。

ひなこを見る。

違う。

そうじゃない。

そうじゃなくて。

「やっぱりか…残念だな……桜」

ああああ。

本当に 亡霊が出た。

## 女が二人、男が二人

「まだ…あんなものを作っているのね」

呆然と動けない絹を、ひなこ　いや、「桜」を見た。

そうだ、桜だ。

さつき見たあの微笑を、絹は写真で見た。

だが。

常識で考えれば、桜が生きているなんてありえないし、ひなこは桜よりもっと年若い。

だが、絹は知ってしまったのだ。

「トレーサー」という存在を。

桜の死体は、どうなったのか。

そう、織田側に持ち去られた。

死して崩れ行く脳を、おそらく石橋という人間がトレースしたのだ。

トレース情報が、ただのデータというのならば、それ以上崩れることなく永遠に保管が出来るはず。

どの段階かは、分からない。

だが、石橋という人間は、少なくとも死ぬ前には、そのデータをひなこにトレースしたのだ。

死後経過のため、損傷した脳のデータのせいだろうか。

意識の接触は悪く、ずっと彼女はあんな状態だったわけだ。

そして。

覚醒した。

これが 桜。

トレースされた複製物、ということは頭では分かっている。

分かっているのに、目が離せない。

「さあな…どうでもいいことだ」

「それ」は、絹を一瞥もしない。

「お前は、あの世から何をしにきた？」

しなやかに腕が動いた 刀を持つ方が。

切っ先が、その喉元につきつけられる。

「もう一度、死にきたか？」

その時、絹は隣から引つ張られ、ハツとした。

「相方が、裏に回ってるはずだ…とりあえず、これ以上火が回る前に、おまえさんの雇い主を探すぞ」

冷静に戻り切れていない声だった。

百戦錬磨に見える彼らさえも、「それ」は動揺させるのか。

だが、いまの絹には必要な言葉だ。

ボスがまだ出てきていないということは、火以前に危険な状態に  
違いない。

声は出ないが 頷くことは出来た。

彼らは、まだ火のきていない勝手口側に駆け出した。

絹も、追おうとしたのだ。

ボスを助けなければ、と。

だが、がくがくと膝が笑い、まともに歩けない。

この世のものとは思えない光景のせいだ。

よろつきながら、それらから逃れる。



許されるなら、吐いてしまいたかった。

本当に、「あれ」は死にかけているのだろうか。

それに、覚醒した桜の存在をどうしろ、と。

広井家に連れて行くのか？

はい、お母さんのコピーですよ、と。

込み上げる嘔吐感をこらえながら、絹は歩いた。

あの二人が、いつそ差し違えてくれた方が、絹としては助かるくらいだ。

いまは、誰に罵られてもいい。

罵られてもいいから、あの二人をどうにかして欲しかった。

「ねーちゃん、裏に回ってこい！」

炎に負けないほど大きな声で、誰かが叫ぶ。

先に行った彼らだ。

何か見つけたに違いない。

走れ、走れ！

絹は自分の足に、必死で命令した。

やっと裏手に回ると。

裏庭に倒れている背広姿。

血、まみれの。

仰向けの肩から胸に、袈裟懸けの 刀傷。

一瞬で、頭の中に映像が構築される。

「あれ」だ。

「あれ」が、ボスを斬ったのだ。

「ボス！ ボス！」

駆け寄り、やっと出た声を振り絞る。

「大丈夫…じゃねえが、とりあえずまだ息はある。心配する価値はあるから、落ち着け」

バンバンと、抜けるほどの力が、また絹の肩を叩く。

その痛みが、絹の動揺を少しだけ止めてくれる。

「誰かに、ここまで運び出されたようだな」

ボスは、靴も履いていないし、ほとんど泥もついていない。

ああ、それは多分。

絹は、震えるまっげを伏せた。

それは、多分　森村だ。

「それじゃ、ひとつ走り行ってくるぜ！」

ボスに乗せた車が、泥を跳ね上げる。

この辺は、幸い彼らの顔の効くエリアで、もぐりの腕のいい医者  
が近場にいるというのだ。

「いいのか？」

聞かれて、歯を食いしばって頷く。

絹は　残った。

自分でも、ボスと行くべきだと思ったのに。

ざあっと、炎の上昇気流が、絹の産毛を逆立てた。

あの。

あの、吐き気のある結末を、自分の目で見て帰らなければ、一生  
の悪夢になりかねなかったのだ。

「それなら戻るぞ…アレがどうなってるのか、オレも気になる」

「アレはもう死んでくれよ…ぞっとするぜ」

銃を持っている、人間さえ脅かす存在。

ここにいる全員、「それ」の名に気づいているはずなのに、呼ぶことが出来ない。

「お前さんと同じ顔の女は…助けないのか？」

行くぞ、と促されて動き始めるが、その問いに足が固まってしま  
いそうだった。

答え、られない。

「……敵じゃ、ないわ」

言えたのは、それだけ。

煮え切らない返事に、彼は横目で絹を見た。

「まあいいさ…残る問題はアレだけだ」

そして、彼らが再び縁という舞台に戻った時。

途中退席していた彼らを尻目に、演目は進んでいた。

立ったままの桜だけが、変わらない。

だが、「それ」が刀を突きつけている相手は 新たな俳優、だ  
った。

「森村さん！」

血まみれの姿。

しかし、どこも怪我をした様子はない。

おそらく、ボスを担ぎ出した時についた血だろう。

絹の呼びかけに、森村は答えなかった。

「それ」を見ている。

そして。

奇妙な舞台が完成した。

同じ顔の女が二人、男が二人。

来てはならないもの

「何だ：オレを殺しにきたのか？」

突きつけた刀を、「それ」は軽く放り出した。

森村の側に、弧を描いて突き立つ刃。

何を考えているのか。

どっちも、だ。

「それ」は、自分の命に執着を見せないし、森村はここに登場する  
必要がない。

二人の間に、突き立つ刃。

「やめなさい…刀を取ってはいけないわ」

ぴくつと右腕を動かした森村を、桜が止めた。

「織田を殺した者が、織田になるのよ…絶対にやめなさい」

言葉が続く度に、森村の右腕が微かに反応する。

これまで織田の話の中で、ただの一度も世襲制という話はなかつた。

継いだ者が「織田」になるのだと。

そんな、変な話だけ。

しかし。

桜の言葉を聞いてなお　森村は、刀を取る。

「織田になる…それはいいな」

低い低い、呟くような声。

ああ。

ここにいるのは、憎しみを持った男だった。

間接的に、目の前の「それ」が森村を不幸にしたのだ。

そして彼は、復讐する覚悟がある。

絹は、半歩だけ前に出られた。

それだけで、燃え上がる建物の熱風が、10度も絹への温度を上げた気がする。

その熱風に負けないよう、絹は唇を開いた。

「織田というシステムは、もう終わりよ！　織田になったって、何の力もないわ」

有益なことなど何も無い。

いま、織田になっても、文字通り火中の栗を拾うようなものだ。

だが、絹の声など、森村の頬をなでただけだった。

ちらりと。

彼女を見た彼の目は 笑ったのだ。

「けど…あいつを殺せるくらいの力はあるだろう?」

刀は。

まるで、ラケットのような動きをした。

ぱあっと。

絹の視界に、血の飛沫が広がった。

何が。

何が起きたのか、一瞬彼女には分からなくて、熱風で乾く目を何  
回か瞬かなければならなかった。

崩れ落ちていくのは 桜。

何故、彼女が森村と「それ」の間に割って入ったのか。



「それ」にもたれかかるように、ずるずると彼女は畳まで落ちた。

森村は、驚きに目を見開いている。

「もう…この世に、織田なんていらないのよ！」

血飛沫で汚れた顔を、それでも桜はキツと上げた。

「あなたが、誰に復讐したいかなんて知らないわ！ それは、あなたが自分の力で勝手にやりなさい！」

斬られた人間とは思えない、生命エネルギーが、桜からほとばしっている。

畳に、どんとんと血を吸わせていくのに。

「それ」の足を背もたれに、座り込んでいるしかないというのに。

「この男は…私が一緒に連れて行くの。ちゃんと一緒に地獄まで、ね」

すさまじい、執念の気迫。

初めて 桜の存在を聞いた時は、もっとはかない、金持ちのお嬢様だと思っていた。

だが、彼女の死の謎から遡っていくと、まったく違う女性が現れてきたのだ。

そして。

ここに、オリジナルの心を残した女がいる。

その気は、はかなくもかよわくもない　女王のような力だ。

「大丈夫よ……」

そして。

彼女は、森村に微笑んだ。

「大丈夫、あなたは…まだ誰も殺していないわ。私は、亡霊だもの。ただ、お化けを斬っただけ」

カクンッ。

桜の笑みが　ついに、絹の膝を壊した。

彼女ののように、地面にへたりこんでしまう。

しかし、意味はまったく違った。

美しくも凄まじい光景に、身体力が奪われたのだ。

両脇の　もはや、傍観者にしか過ぎない彼らが、絹を起こそうとしてくれた時。

「絹さんっ!」

誰かに、名前を叫ばれた。

ああ。

その声は、今ばかりは　ただただ残酷なものに、聞こえた。

何故　来たのか。

何故、ここに来たのか。

来る方法や、手段を問うていてのではない。

居場所は、島村が知っているし、今の彼なら教えかねなかった。

性格を考えたら、一晩おとなしくしているタイプでもない。

だが。

だが　将が、ここへ来てはならなかった。

「…朝？」

血を流す女王が、呆然とした女の声になる。

絹に駆け寄ろうとした足音が。

止まった。

「やだ…これは夢？　朝に会えるなんて」

桜は、瞳いっぱい涙を溢れさせる。

振り返れない。

後ろに将がいるのが分かっているのに、いまの彼を見られないのだ。

「つまらんな…」

だが。

桜の幸福の時間は、たった一言で粉々に砕け散った。

無慈悲な手が、彼女の浴衣の襟首を掴み上げたのだ。

「あっっ！」

もたれているので精一杯だった彼女は、その突然の狼藉に苦悶の声を吐いた。

「広井が絡むと、お前はいつもくだらない女になるな」

のけぞる桜の顔についた血を 舐める。

「うっっ！」

うめく桜を、そして炎の近づく畳に放り投げるのだ。

「そっだ…お前が死ぬ前に、お前に広井が死ぬところを見せてやる

う

次に吹っ飛んだのは、森村だった。

一蹴りで、庭まで突き落とされる。

そして、庭に落ちるのは 刀。

「やめ……」

身を起こして叫ぼうとする桜。

しかし、声が途切れる。

「それ」は、絹を見た。

いや、彼女の後ろの、将を見ているのだ。

裸足が庭に下り立ち、刀を拾い上げる。

倒れたままの、桜と森村。

絹は、そんな二人の姿を確認していた。

何故か。

そう。

こつと言つたためだ。

「撃つてー!!」

悲鳴に、なっていた。

## 死と生

銃声は 聞こえなかった。

何かが、飛び出したせいだ。

泥と埃で汚れた袴が、刀を持つ腕を蹴り上げていた。

ア、キ、さん。

「ハアアアアツ!!!!」

「それ」が支配していた空気が。

砕け散る。

いや。もつと重い破壊。

冷たく分厚い、そして灰色で無慈悲なコンクリートの塊を、アキは止まることなく砕き続けた。

怒りはあるが、憎しみはない拳。

刃でも、鉛弾でもなく、人の体温を持った体。

一番、「それ」の存在と対極にある力。

その力が、ただひたすらに、北風の王を打ち据える。

ふわっと。

彼女の袴の裾が、熱風に翻った後。

振り上げた足が、「それ」を地に蹴り落としていた。

ドオンっと。

大きな音があがる。

蹴りの音でも、落ちた音でもない。

火に耐え切れず、建物の梁が燃え落ちた音だ。

アキは、一瞬の迷いもなかった。

足元の「それ」を見やることもせず、動けない桜をそこから抱え出してくる。

そして。

そして、その身を 将へと受け渡すのだ。

彼女の血はアキを汚し、そして将を汚した。

絹は、へたりこんだまま、後方のその光景を振り返っていた。

見えない線が、引かれているのが分かる。

絹の入ってはいけない、血のサークルの中に彼らはいる。



「朝…朝……」

もはや、桜の目はうつろだった。

指先も顔色も、青ではなく白。

パチつと、火の粉が降る。

絹は、顔を上げた。

飛び火したのだろう。

庭の大きな木が、葉や枝を燃やしている。

それが、彼らの側に不思議な火の粉を散らすのだ。

はらり、はらりと。

「あれが…血桜よ……きれいでしょ。やっとあなたに見せられた……」

微笑む、桜。

花など、どこにもないのに。

将は、動けない。

言葉も発しない。

ただ、じつと。

まばたきもせず、腕にかき抱いている桜を見ている。

「私…ちゃんと死に直すの…よかった…今度は寒くないもの…」

震える指が、将のシャツを握る。

「子供たちにも伝えてね…愛してるわ…愛してるわ…あい…し」

力を失いゆく身体。

すべり落ちる指。

将は、無言のまま　ぎゅうつとその身体を抱いた。

アキが、頭をゆっくりと垂れる。

本当の意味で、現状を理解しているのは絹だけだというのに、彼らは本能で察していたのだ。

それが、「誰」なのか。

まがいものだ。

トレーサーは、まがいものを作る装置だ。

人の、心や個性を踏みにじるもの。

だが。

ほんの短い時間だったが。

それは 桜だった。

北の女王の顔と、広井家の女の顔を持つ、誰にも真似できない存在。

絹は、目をそらした。

見ていられなかった。

目をそらすのは、なんて簡単なのだろう。

ただ、身体を前に戻すだけでいい。

そして燃えゆく建物や、桜の木を見ていればいいのだ。

だが、自分が目をそらしたのには、理由があったのだと 絹は、  
遠い意識で気づいた。

誰かが、その運命を彼女に握らせたのだと。

ああ。

運命に導かれるまま、絹は動いていた。

へたりこんでいた自分の足に、力を吹き込まれる。

『あんなんじゃない、いつか死ぬぞ』

声が、フラッシュバックする。

そして。

割って入っていた。

人としての気配すら置き忘れた「それ」と、アキの背の間に。

振り下ろされる、きらめく光。

パァァンと。

自分の仮面が真っ二つに割れた 音がした。

赤く散る視界。

あーあ。

他人事のように、絹は思った。

どうせなら、ボスの盾になりたかったな。

女の盾になったと知ったら。

きつと…ほめてくれ…。

ない。

「あなたも、桜？」

教室に入ると 絹がいた。

いや、絹は自分のはずだ。

「もう、あなたで30人目よ、いやになる」

見ると、教室中にこの顔が溢れていた。

ああ。

絹のコピーではなく、桜のコピーか。

遠い感覚で、そう思う。

「クローンの身体に、トレースの心で、いくらでも作れちゃうから、すっかり価値が下がったわ」

整形しようかしら。

コピーの言い様に、絹はつい笑ってしまった。

整形して、この顔になった自分の前で言われたからだ。

自分の意思ではなかった。

ある人の、ほんの悪戯心。

笑ったら、ずうんと身体が重たくなった。

床に、足が沈み込んで行く。

「あら、あなたはもっと下に行くのね…ごきげんよう」

腰まで沈み、そのまま上半身を一気に飲み込まれた。

暗いところ。

沈んでいきながら、絹は頭上に星がまたたいているのに気づいた。

無意識に、さそり座を探す。

赤い 星。

またたくアンタレスを見つけて、絹は手を伸ばそうとした。

何故だろう。

その星とは、まったく無関係なはずの、両親の顔が見える。

ずっとずっと昔に、死んでしまった人の顔。

なんだろう。

この感覚は。

アレに似ている。

そう　　あの人にもらった、星の写真を見た時の感覚。

ちぐはぐな感覚だと、思った。

死んだ両親と、さそり座なんて関係ない。

なのに、涙が出た。

死んだ人が、お星さまになるなんて、そんなメルヘンな感覚など  
持っていないはずなのに。

その星も、遠く遠く掠れていく。

絹は沈み続ける。

このまま　　奈落までいくのだろうか。

それから。

長く長く暗い時間を、絹はすごした。

すごしたことさえ、彼女は意識できなかった。

その暗さの中に、自分のすべてが溶け出していったせいだ。

限りなく無に近い状態。

いや、既にそれは無、だったのかもしれない。

だが 永遠ではなかった。

永遠という言葉は、絹を置き去りにしたのだ。

白い白い、光が差ししてくる。

ああ、朝か。

気泡のように、言葉がわいた。

星、夜、朝。

断片的な情報が、わいては消える。

すぐそこが、水面なのだ。

気泡が消える、ほんのすぐそこ。

浮き上がればいい。

白い光の方へ。

朝だ。

絹は。

生まれ落ちるように、目を開けた。





## 自分の証明

目を開けたといっても、すべてがいつも通りだったわけではない。うまく考えられなかったし、まったく動けなかった。

それが、何故かさえ考えられなかったのだ。

ぼんやりと白い蛍光灯を見て、ぼんやりとまばたきをする。

「おはようございます」

声が、自分の頭蓋の遠いところで反響した。

首さえ曲げられないため、声の方を向くことも出来ない。

生まれたばかりの赤子でさえ、これはないだろう。

「薬で動けないだけです。少しずつ自由が効くようになりますよ」

五感のコントロールがおかしく、声を聞いている感じがしない。

ただ、音の塊が当たっているだけ。

「いろいろ聞きたいこともあるでしょうが、もう少し回復を待ってください」

その、音のつぶてが頭に当たった時。

絹は 聞かなければならないことに手を伸ばしていた。

頭が考えるより、反射的に掴もうとしたのだ。

それを、形にしようとする。

思考にしようとする。

だが、霧のように掴めない。

掴めたところで、唇も動かない今、どうやって聞くのか。

あ、あ。

だが、絹は必死で霧をかき集めようとした。

それは、とてもとても大事な事。

指をすりぬけ続ける霧を、絹は必死ですくう。

ああ。

ほんの少しだけ、握ることのできたそれを、絹はゆっくりと噛み締めた。

声には出来ない。

ただ、額に浮かび上がらせるだけ。

だが、ようやく思考にはできた。

細く、頼りない心の粒。

わたしは。

わたしは　わたしですか？

その変な粒が。

いまの絹には、一番大切なことだった。

いろいろなことが、出来るようになるまで、長い時間が必要だった。

脳が、自分の扱い方を忘れたかのように、言うことをきいてくれないのだ。

その間、物語のように過去の出来事を語ってくれたのは　アキだった。

ボスは、入院してはいるが、無事なこと。

織田は解体され、あの男も死んだということ。

広井家はみな無事で、温Pの発表も成功したこと。

アキが、家政婦をやめたこと。

それらを聞きながら。

やっと、ゆっくり動かせるようになった手で、自分の顔を触ろうとしたら。

「再生手術は終わってますが、まだ包帯は取れませんよ」

少し、困った声のアキ。

この顔は。

一体、どうなったのだろう。

絹は、あの男に額をかち割られたらしい。

丈夫な頭蓋骨だったおかげで、命はとりとめたという。

だが、絹は疑いがあった。

それは、本当だろうか、と。

実は、絹は助からずに死んだのではないかと。

いまの自分は自分ではなく、トレースされたコピーではないのか。

ボスが動けなくても、島村だって出来るかもしれないのだ。

だが、それをアキには聞けない。

彼女はただ、自分をかばった絹の看病をしてきているだけなの

だから。

「包帯が取れたら、広井家の方々がお見舞いにきますよ」

みなさん、早く会いたがってます。

きっと、いまはアキが止めているのだろう。

顔中、包帯を巻いたミイラみたいな姿は、見せたくないに違いないと、気を利かせてくれたのだ。

だが。

本当に、会えるのだろうか。

この身体が、自分かどうかも分からないし、包帯を取ったら違う顔かもしれない。

傷が残っているくらいなら、可愛いものだ。

いっそ、傷があったほうがいい。

それが 自分の証明のように思えた。

そしてついに その日がやってきた。

絹の、顔の包帯が取れる日だ。

リハビリも進み、とりあえず絹は自分で歩けるくらいには回復していた。

今日は、ボスと島村が来ることになっていた。

本当に久しぶりに、二人に会うことになる。

絹のリハビリ中、ボスも退院できていたのだ。

少しずつ動けるようになって、絹自身で知ったこともあった。

彼女がいるところは、病院というよりは、田舎の療養所レベルのところだ。

しかし、そこはアキの故郷でもあった。

下手な病院より、よほど安全な彼女のテリトリー。

織田は解体されはしたが、つぶされたほとんどは非法施設のみで、表の仕事をしている渡部建設などは、いまでも存在している。

ほとぼりがさめるまで、匿われている、という方が現状としては正しいのだろう。

そこに、二人がやってくる。

見舞いではなく、この包帯を直々に取ったださるのだ。

どんな顔で会えばいいだろう。

そう思って、絹は苦笑した。

文字通り、「どんな顔」だ。

それは、絹の方がよほど気になっている。

そして。

今日こそは、きっと聞くことが出来る。

自分が、本当に自分なのか。

ノックが聞こえる。

「はい」

絹は応えた。

アキは、席を外してくれている。

絹たちの持つ、独特のサークルを理解しているのだろう。

あの時、自分が将やアキに対して感じたもののように。

ドアが開くと、島村がいた。

相変わらずの黒い服に白衣。

その後ろに。



きつちりと背広姿のボスがいた。

ああ。

少しやせてはいたが、身なりをきちつと整えた、いつものボスの姿に、絹はほつとする。

お久しぶりです、とか。

「ご迷惑をおかけしました、とか。

最初にふさわしい言葉が、いろいろ頭を横切っていく。

でも。

それよりも一番最初に。

「『高坂絹』は、まだ生きていますよね？」

「再会には、まったくふさわしくない言葉が出ていた。

ボスと島村が、一瞬顔を見合わせる。

怪訝な目で。

「本当に、脳外科の手術はうまくいったのか？」

島村が　自分の頭の横で、指をくるくると回して見せてくれた。

## 糸

「取るぞ」

ボスではなく、島村が絹の包帯に手を伸ばした。

どうやら。

自分の顔から、白い布地が取り払われていく中、絹は静かにそう考えていた。

どうやら、自分は本当に運よく生き延びたようだ。

ただ、この二人が本気で絹を騙そうと思うのなら、おそらく一生騙せるだろう。

だから、本当の意味では、どっちが答えなのかは分からないのかもしれない。

だが、彼らが違うというのなら「違う」のだ。

するりと。

最後のあたりの包帯は、外すまでもなく、絹の首の周囲に輪を作るように落ちた。

額から頬にかけて、密封されるように貼られた、テープのようなものがはがされる。

「ああ……いいな」

ボスが、絹の額をじっと見た。

「そうですね」

島村が、白衣のポケットから小さい鏡を取り出す。

絹は、それを受け取った。

久しぶりの対面ね。

絹は心の根底に残る怖さを、そういう言葉でごまかした。

そして鏡に　自分の顔を映す。

「……………」

なんだか。

拍子抜けするほど、そこには、ただ『高坂絹』がいた。

桜の顔そつくりの、そして、傷ひとつない。

本当に、自分は額をカチ割られたのだろうか、不思議になるほど綺麗な皮膚。

「傷は…どうなったんですか？」

触れてみる。

額に違和感はない。

「お前の寝てる時間が長かったからな…脳の手術が落ち着いてから、形成もしておいた」

島村が、ちらりとボスを見る。

ボスは、その視線には反応しなかった。

何だろう。

少しの違和感。

島村が、そんなボスの様子に、ゆっくりとため息をついて。

こう言った。

「ボスが、病院を抜け出してやってくれたんだ…礼を言っておけ」

「島村…」

島村にしては珍しく 余計な言葉だった。

ボスが？

絹は、眼鏡の男を見上げる。

彼女の方を見ない、ボス。

「この顔のままでも…いいんですか？」

確かに、もう織田はなくなった。

しかし、この顔が織田の残党にとっては、忘れられない顔のはずなのに。

トラブルの種を、残していることにはならないのか。

「お前が…」

ボスが。

ゆっくりとゆっくりと、息をついた。

「お前が…その顔でいたいんだろう」

絹を見ない、目。

一瞬。

絹の中から、全ての言葉が失われた。

白い白い脳内から、「ああ」と言葉が降ってくる。

ああ、と。

この気持ちを、絹はどう表現すればいいのだろう。

ボスから自分につながる、一本の糸が見えたのだ。

ないと、思っていた。

そんなものは。

絹は、ただの駒で。

いつか不要になったら、出て行かなくてはいけないと思っていた。

なのに。

ないと思っていた、一本の線がそこにはあったのだ。

彼は、ただの自己至上主義の、マッドサイエンティストではなかった。

死にかけて助手を、「生かしたい」と思った人だ。

その形が、正しかったかどうかは分からないが、島村はいまそこにいて。

そして。

絹が　まだこの顔をしている。

ああ。

どうにか、この白い白い気持ちをし、ボスに伝えたいと思った。

ゆっくりと、身体に命令を出して、絹はベッドから足を下ろす。  
立ち上がる。

何もかも、ゆっくり。

しかし、ボスは動かなかった。

多分。

何をされるか、分からなかったのだ。

そのやせた身体に 絹は抱きついた。

「ありがとうございます」

精一杯の、感謝の言葉。

ボスは、動かなかった。

絹に抱きつかれ、驚いて動けないのかと思っていた。

だが。

その身体が、ピクピクと震える。

震えるというより。

痙攣？

「言っておくが…」

島村が、横からぼそつと呟く。

「先生は…本当なら、まだ入院してないといけない身体だ」

ぼそぼそつ。

何を、言っているのか。

「何度も、病院を抜け出して無理をしたせいで…開いては縫い、開いては縫いのいたちごっこだったからな」

ええと。

絹は　そーっと、抱きついているボスを見上げた。

「要するに…立って歩くのが、いまは精一杯、ということだ」

ボスは。

顔が、真っ青になっていた。

奥歯を強くかみ合わせて、激痛に耐えている、という風だ。

そんな人間に、絹は抱きついたのである。



慌てて、ボスから離れる。

「気が済んだでしょう…帰りましようか、先生」

痛みで、痙攣以外ぴくりとも動けないボスに、島村がしれっと言った。

おそらく、ボスは相当彼にも心配をかけたのだ。

そのせいか、その自業自得の部分については、少しあきれているように見えた。

絹が寝ている間に、この二人の人間関係も、少し変わったのかもしれない。

「大丈夫ですか？ ボス」

病室に入ってきた時の彼は、まったく普通の動きに見えた。

しかし、そう振舞っていたのだと分かる。

いつも通りの自分であるように、絹に見せたかったのか。

何故か。

その理由は、もうどうでもよかった。

絹にはもう 糸が見えてしまったのだから。

京

「よう」

見舞いの一番手は 京だった。

兄弟がまとめて押し掛けると、絹を疲れさせるといふ配慮かららしい。

「久しぶり…って気がするわ」

随分、長く会っていない感じがした。

新しい人間は、まったく出入りしないので、京の顔がとても懐かしく感じる。

「気、じゃねえよ…久しぶりなんだよ」

ベッドの側の椅子に腰掛けながら、京はいやそつに言った。

ほれ、とベッドに置かれる花束。

赤中心の、京らしい大人びた色。

「もう11月だぞ。寝すぎだ、バカ」

なんだろう。

悪態が心地いい。

バカと言われているのに、にこにこしてしまつのだ。

「もっと悲壮なツラしてるかと思つたら、まともすぎて拍子抜けしたぜ」

ふーっと。

ため息をつきながらも、しかし、京は目を細めた。

「ニヤツとは、また違う笑み。」

「だって、楽しいもの」

ふふふ、と絹はベッドにしながら、心がふわりと浮いたのに気付いた。

生きていて 誰かが自分を必要としてくれているのが、こんなにも嬉しいことなのか。

この気持ちを手に入れただけ、額をかち割られた甲斐もあった。

「じゃあ、頼んでもいいか？」

ふと京が、音程を変える。

低くなる音。

「なに？」

なんだろう。

京の音に、微かな不安がよぎる。

目を、見られた。

「その調子で…将を引っ張り上げてやってくれ」

まったく。

京が、本当に困っている眉を見せた。

あ。

よみがえる記憶。

あの日のことは、忘れていたわけではない。

ただ、あまりのいびつな情報に、おそらく全てを吸収してしまうのは無理だろうと、時の風化に任せていたのだ。

だが。

将が、いた。

彼が見たものの本当の意味を、絹以外の誰が説明できよう。

京を見る。

「お母さんの話…してた？」

その目の中に、自分が見える。

「ああ……」

彼の瞼の中に　絹は消えた。

「おふくろの話もそうだが」

京にも、何か話をした方がいいかと、絹が考えていた時。

彼の瞼が、上がった。

「目の前で、お前が斬られたんだ……普通へこむだろ？」

皮肉っぽい言い方。

自嘲めいても聞こえる。

「アキさんからの悪い報告で、留守番組のオレと了は思った……」  
「将は何をしてたんだ」ってな

キツイ言葉。

アキでさえ、動けなかったあの時、誰が将を責められるのか。

「けど……あのバカが、お前を守るうとしないはずがないんだよな……  
それが出来ないくらい、異常な事態だったのは……分かった」

帰ってきた将を見たら、な。

『ありもしないものを抱いた…だから、両手がふさがって絹さんを  
守れなかった』

将が、最初に言った言葉だそうだ。

血が、真っ黒にこびりついたままの姿の弟を 京は見たのであ  
る。

ありもしないもの。

難しい言葉だ。

かの存在の定義は、絹でも正確にはできない。

だが。

「あの時だけは…あつたわ…確かに」

桜には、死に直す時間が与えられた。

言い遣したかった言葉を、伝えるだけのレコーダーのような存在  
だったのかもしれない。

ただ、残酷な話だが、それは彼女が死んだからこそ成り立つ話だ。

現実には、陶酔の言葉では済まされない。

島村を見れば、それがよく分かる。

「じゃあ……」

絹の言葉を噛み締めるように、京が口を開く。

「じゃあ……おふくろは、ちゃんと死ねたんだな？」

変な言葉だ。

とてもとても、変な。

けれども、子供の頃からずっと、彼を縛り付けていたものだ。

「ええ……」

京の、鎖が切れる。

「そうか」

少し、笑った。

絹の前では　泣かないのだ。

了

「絹さんっ！」

三男坊は、病室に入るなり、滝のように泣き始めた。

「よかった、よかったよー！」

絹の布団を、水びたしにさせる勢いだ。

「ごめんね、心配かけて」

よしよしと、その頭を撫でる。

「絹さんが、死んじゃったら、僕、僕！」

物凄い顔を向けられたので、絹は苦笑しながら箱ティッシュを渡した。

チーンッ！

絹に背中を向けて、盛大に鼻をかむ背中。

なんだか、ちょっと印象が違う。

「了くん、背が伸びてない？」

よきつと、頭半分くらい高くなった気がする。



「うん！ 手も大きくなったよ！」

赤い鼻のまま振り返る了は、手を開いて見せた。

確かに、大きい。

「僕ね、アキさんの紹介してくれた空手道場に通ってるんだ」

ついでに袖をまくって、あざだらけの腕を見せる。

えへへー、っと。

泣いたり笑ったり忙しいのは変わらないが、そんな了が武道とは。

「うちの家族って、みんなよわっちーでしょ」

全員、自分より年上なのに、容赦なくぶったぎる。

ひ弱ではないが、確かに趣味は天文だし、仕事は機械いじりだし。

マッチョになる要素はなかった。

「だから僕、強い役をやるところにしたんだ」

役？

自分で言うには、妙な表現である。

「頼りがいのあるパパに、意地悪な京兄い。明るい将兄…そして、あまったれな末っ子」

自分について、見事に言い切った。

だが、何が言いたいかは分かる。

新しい自分に、変わりたいと思っているのだ。

しかも、家族の誰ともかぶっていない方向に。

「マッチョであまったれな末っ子ってのも、意外性があっていいよね？」

あれ？

絹は、笑った。

あまったれは 残すんだ、と。

多分。

了が、強くなりたいと思ったきっかけは、あの日にも関係しているのだろう。

了が、それを口にしない事実の方が、実は重かった。

少年は 決意してしまったのだ。

男として。

「そういえば絹さん、ママのユーレイに会ったんでしょ？」

あっけらかんと、了はすごい質問を放り投げてきた。

一体、どんな解釈をしたのか。

「僕も京都に行けばよかった。ユーレイのママにも会えたのに」

無茶をいう末っ子だ。

だが、それだけ会いたいと願っているのだろう。

「強い人、だったわよ」

それは、間違いない。

言葉に、了がにこつと笑った。

「うん、分かるよ。僕らを産んだママだもん」

にこにこ。

本当に、嬉しそうだ。

「パパがよく言った。『了のママは、とっても強かったんだぞ』  
って」

彼の言葉が、映像を作る。

まだ小さい了。

母を恋しがって泣く了。

抱き上げるチヨウ。

そして、母のことを話すのだ。

「僕の話は、何か言ってなかった？」

そんな、人づてからしか母を知らない彼にしてみれば、ユーレイでも構わないのだろう。

「『みんな愛してる』って…」

了個人に、宛てた言葉はない。

喜ばすためだけに、捏造も出来ないので、絹は素直にそう言った。

「ちえ、みんなかあ」

了は、少し不満そうだ。

しかし、その目がキラーンと絹を見た。

「じゃあさ、じゃあさ、絹さん…絹さんは僕のこと、どう思うてる？」

ひょいっと。

了は話を軽く飛躍させた。

あらあら。

京がないので、その線を簡単に踏み越えてきたようだ。

相変わらず、ちゃっかりしている。

絹は、にっこり微笑んだ。

「みんな、大好きよ」

明らかな 盗用だった。

将

ついに、将がきた。

ドアを開けた彼は、心配したほどやつれてはいない。

少なくとも、その事実にはっとする。

「久しぶり…」

絹の呼び掛けに、「うん、久しぶり」と返す将。

奇妙な間は、お互い言葉を考えていたせいだ。

ふーっと、将が息をつく。

「どうやって謝ろうかとか…たくさん考えてたけど…」

少し、伸びた感じのする髪。

ゆっくりとした、言葉。

「本当に…治ってよかった」

最初についた息よりも、ずっとずっと深い吐息。

自分の目で見えるまで、信じられなかったのだろう。

罪悪感が、その目にはある。

ただ、アキもそうだったように、将も目の前で怪我をした絹から、罪悪感を言い訳に逃げたりはしなかった。

「あの時ね…」

絹は、苦笑する。

つくづく、前向きな人間たちだと。

「あの時…初めて運命が目に見えたの。すべての時間が遅くなって、その中を私は動いてたわ」

今でも、しっかりと覚えている。

「誰かを守ろうとか、自分が盾になろうとか、これっぽっちも思っ  
てなかったの…斬られて逆に後悔したわ」

思い出すと、笑ってしまう。

あれが、自分の最後の思考だったら、なんてくだらない、と。

将が、見ている。

絹の言葉の意味を推し量るように。

「後悔したまま、死ななくてよかったわ。運命なんか殺されなくてよかった…これが、本音よ」

分かりやすい、リアルな言葉がいい。

絹は、聖女でも、桜の代わりでもなくて、生にしがみつくと、だだの泥臭い人間なのだ。

「私が生きていて…嬉しいでしょ？　嬉しいなら、もっと嬉しい顔をしたら？」

こんなしゃべり方を、将にしたことなどなかった。

どちらかというと、京向け。

しかし、地面に足をつけて将に向き合うには、猫は邪魔だった。

その、地に落ちた猫の皮を　将が踏んだ。

誰にも似ていない、将にしか出来ない笑みを見た。

かすれるような、切ない笑み。

「うん…嬉しいよ」

不合格の笑み。

目が　潤みすぎだ。

「ひとつ…酷いこと聞いていい？」

空気が、ゆっくりと穏やかに戻りゆく途中、絹はブレーキを踏ん



だ。

この質問が、再び彼を突き落とすかもしれない。

顔を上げた将に。

「あの男は…あの日あの場所で死んだの？」

「あの」をうつ並べる。

アキは、詳しくは語らなかった。

まさかと思うが、彼女がとどめを刺したのでは、と疑惑があったのだ。

「あ…うん…自分で火の中に歩いていったよ…彼女を抱いて」

将の言葉は、重く 痛い。

血と熱に包まれた、ありえない日を思い出している声。

彼は、その記憶をこれからずっと持っていくのだ。

「そう…ありがとう。安心したわ」

ただ、確実にあの男は死に、アキは手を汚していない。

それならいい。

本当に、安心したのだ。

彼女の亡骸を、一緒に連れていった理由は、分からない。

自分の死を前に、酔狂なことを考えただけなのかも。

そのおかげで。

将が、母に限りなく近いものに会った事實は、うやむやになったのだ。

了に至っては、ユーレイ扱いだっただ。

「俺も…酷いことを聞いていい？」

ふっと、将が目を細める。

「なに？」

絹は、内心身構えた。

自分の正体について、聞かれそうな気配がしたのだ。

もし聞かれたら。

自分の口が、うっかり言ってしまうかもしれない気がした。

どこの馬の骨ともしれない人間だ、と。

将は、ゆっくりと口を開く。

「絹さん…学校、どうするの?」

考えてもいない常識的な話が振られて  
まっただ。 絹は、思わず吹いてし

ああ、そうそう…学校ね。

復学しても、多分留年だなあ。

今の今まで、完全にその存在を忘れていたのだった。

学校へ

「さむ…」

12月1日。

絹は 復学した。

留年は确实だが、今年度の残りの期間を通っても別に問題はない。本当はどうしてもよかったのだが、退院してボスの家に戻った絹は、学校へ行くより他、することがなかったのだ。

何というか。

正直、どうしたらいいのか分からないところがある。

あの家での、絹の居場所について、だ。

後から島村に聞いた話だが。

顔の形成手術の時に、ボスは彼女の身体に埋め込んだ発信機を外してしまっただけらしい。

そして絹は、新しいペンを支給されなかった。

広井ウオッチングに必要な、カメラ&マイクが、だ。

これは。

絹を自由にする、準備段階のように思えた。

もうボスは、絹をカメラ台として使わないのだろう。

身の振り方を、考えないとなあ。

広井家の車を降りて、将と教室に向かう途中に、そんなことをぼんやり考える。

せっかく、使える顔をもらったわけだから、何とか食べていく道もありそうな気もする。

自分では、結構前向きな思考だと思っていた。

方向性は非常識だったが。

そんな絹は。

すごいものを見てしまい 思考停止した。

「やあ…絹ちゃん。復学おめでとう」

お久しぶりの、渡部様だ。

彼の実家は、まともな商売だったおかげで、難を逃れている。

だが。

すごいものというのは、渡部そのものではない。

彼の、右腕だ。

冬服の袖が。

だらん、とぶらさがっている。

どう見ても 袖の中身は空だった。

「ああこれ？」

彼が腕を持ち上げると、袖が途中から折れて、肘から下の不在を見せ付ける。

「ちょっと、飼い犬に食いちぎられてね」

ニヤッと笑う神経が、とても信じられない。

「おまけに、腕をくわえて…そのままどこかへ行ってしまったよ」

犬の話なんか、していないのは最初から分かっている。

そうか。

絹は、表情に困った。

そうか 森村はもう、この学校にはいないのか、と。

森村は、どんな身の振り方をしたのだろうか。

渡部に復讐をしたのは、その右腕を見ればよく分かる。

ただ、命を取らなかった事実には、思うところがあった。

多分。

あの日、彼もまた何か変わったのだ。

桜という亡霊を斬った日。

そして 愛するテニスを、渡部から奪った。

生きている間、テニスと自分の腕を見比べる時、そこで必ず足取りが一時停止するように。

それを、森村は自分の復讐として片付けたのか。

「報復しないの？」

将がいる横で、ずばっと聞く。

してほしいワケではないが、文字通り「飼い犬に手を噛まれた」男が、それを甘んじて受けているのは違和感があったのだ。

「あ？ うーん…そうだね…でも、これはアクロバットの代償だしな。賭けに負けたら、何かで支払わなきゃならないだろ？」

本人の性格はいたって最悪だが、その覚悟だけは感心する。

少なくとも、甘ちゃんではない。

「おじさんに、暇なら面白い義手でも作ってって言うといつてよ」「ひらひらと。

自虐的に空っぽの袖を振って、渡部は三年の廊下へと消えて行った。

「すごいな…」

将が。

「ぐくりと唾を飲んで言う。

同じ男として、絹とはまた違う思いがあるのだろうか。

「自分の命を、チップとして賭ける人間には…ならないほうがいいわよ」

くすつと。

絹は、彼を促して階段へと向かった。

態度も言葉も、ほぼ自分の猫は剥げ落ちている。

それが、元々の絹の性質であると気づいたのか、彼は決して絹に「変わったね」とは言わなかった。



「でも…そういう日が、いつか来るかもしれない」

笑わない、声。

実際、彼はその場面に一番近いところに立ち会った。

賭け金を放り投げたのが、あの時は絹だっただけ。

「勝つように、根回ししてからやる賭け以外は…無謀っていうのよ」

渡部は、根回しをしても負けた。

絹がやったのは、最初からただの 無謀。

「やせたわね」

教室の前。

久しぶりの委員長にそう言われたが、そのまま言葉を返してやりたかった。

いない間、彼女も気苦労があったのだろう。

部長は片腕を失い、副部長は失踪。

テニス部だけ見ても、十分スキャンダラスだった。

部長びいきの委員長には、つらいことだろう。

もう、三年の部活は引退しただろうが。

「高坂さんっ」

委員長に話しかけようとした時。

後方から、驚いた声が上がった。

振り返ると。

目に涙を浮かべている女生徒が、いるではないか。

存在のかけらも忘れていた 宮野だ。

なんで、涙目。

「よかったあ」

その涙を飛ばしながら、絹目がけて駆け出してくる。

ちよっ。

これではまるで、感動の再会ではないか。

長く離れていた親友との。

絹には、到底理解できない。

どこをどう考えても、それは宮野の一方的なものなのだから。

ただ、場所的に絹には不利だった。

学校で、相手は女で、委員長と将に見守られているのだ。

結果。

絹は、両手をホールドアップする形で、胴体を宮野に奪われることとなった。

深い深いため息をつきながら、将を見る。

空気が読めるはずの男が、微笑んで見守っていた。

絹が、現状に不満があるのは、一目で分かるだろうに。

「止めてよ」

猫のはげた絹は、将にはっきり言ってみた。

すると、なおさら微笑み。

「いやだよ。絹さんには、そういう正反対の友達も必要だからね」

見事な拒否を、食らわされた。

今まで、宮野が擦り寄ってくるのを一度も止めなかったのは、そんなことを考えていたのか。

「高坂さん……」

くすつと、委員長に笑われた。

「高坂さん…ほんと元気になったみたいでよかったわ」

はげた猫を見て、そう言われたのには 少しばかり異議があった。

天野

「あ、ほんまにおった」

昼休み。

冬になっても、自前のスポットライトは健在のようだ。

ゴージャス天野が、一年の教室まで訪問してくれた。

お節介な性格なので、わざわざ心配して見にきたのか。

「ちよーっと、話したいことあるんやけど…ご飯、一緒とかあかんか？」

おや。

これは、意外だった。

長期欠席していた病み上がりの絹に、何の話があると言っのか。

ちらりと将を見る。

一緒に、食事をする予定だったのだ。

「いっておいでよ」

彼も、天野は安全だと思っているのか、あっさり許可が出た。

「ありがとう」

絹は、お弁当を持って立ち上がる。

話も気になるし、天野自身も気になっていた。

島村的意味で。

詮索する気はないと言えば、ウソになる。

だが、彼の存在が余りに宙ぶらりんで。

そこが、絹の気になる　いや、心配しているところだった。

本人にしてみれば、余計なお世話だろうが。

「入院してたんやてなあ…名簿調べて訪ねて行ったんやけど、入院先教えてくれへんかったで。無愛想なあの人、にーちゃんか？」

昼食の場所に案内しながら、ゴージャス天野は軽く言葉を振る。

「え？」

しかし、それは先制のパンチに等しい。

ノーガードの絹に、クリーンヒットだ。

「うちに…来たんですか!？」

驚く以外にない。

「ん？　なんか、あかんかった？」

その上、島村とも会ったというのだ。

あかんです。

兄ではないが、兄の記憶を持つ存在である。

妹の訪問に、島村もキモをつぶしただろう。

そして、さぞや複雑な心境を味わったはずだ。

「ええと…私には兄弟はいません」

微妙に表現に困りながら、絹は答えた。

「あ、そーなんや…ふーん…にーちゃん、ちやうんか」

絹と島村の關係に首をひねりながら、ゴージャス天野は先を歩く。

あなたのにーちゃんだよ。

正確さに欠ける言葉が　頭をよぎった。

案内されたのは、科学準備室。

勝手知ったる様子で、ゴージャス天野は、すみっこのストープに

火をつける。

「すぐあつたまるから、待ってな」

そのストーブの近くに、科学室から椅子を引っ張ってくる。

慣れたものだ。

「何で科学準備室に？」

カギも持っていた。

「うち、科学部やってんねん…もう引退したけどな」

まだ顔効くから、出入りは自由なんや。

それはそれは。

意外と地味な部活に、絹は驚いていた。

理系の人とは、思わなかったのだ。

「建築部とかあつたら、そっち入ってたけどな…似合わへんやろ？  
うちに科学なんて」

天野節は、変わっていないようだ。

ポップコーンのように、次々と言葉が跳ねだす。

「うちのーちゃんがな…科学バカやってんねん。高校でも大学で



も、変人扱いされとつたわ」

ある程度。

絹が、頭の隅で描きかけた話へと流れていく。

全て、過去形で語られる話。

「顔はうちに似てて、色男やったのに、変人すぎて彼女も作れへんし…家も継がんゆつて、とーちゃんに勘当されて、出てつたわ」

ささ、食べよ。

あつたかい、ストーブの傍の席を勧められる。

話に聞き入っていた絹は、これが天野にとっては単なる雑談なのだど気付く。

もしかしたら。

彼女の兄は、今でも失踪扱いなのだろうか。

天野は、今でも兄がどこかで

「ま…もう死んだんやけどな」

あつさり。

あはははと、湿っぽい話を叩き壊すように、天野は笑った。

「やりたいことやってたんやから、悔いはないやろ」

絹が固まったのに気付いたようで、天野は彼女の肩をばんばんと叩く。

いや 悔いを残してるかも。

絹は、うつすらと汗をかいた。

「あかんあかん…話がそれてもうた」

お弁当のふたを開けながら、天野が話を元に戻そうとする。

戻せないのは、絹だ。

しかし、もはや話の流れは別方向へ。

「それより…高坂さん、あんたやない？」

絹に、お弁当を開けるよう箸で促される。

「何が、ですか？」

すでに胸がいつぱいな気分を味わいながら、絹も昼食へと取り掛かった。

「あんたが、あのバカの腕、斬り落としたん？」

カシャーン。

箸を 取り落とした。

はぁ？

天野の中では、一体どんな想像が走っていったのか。

「ありゃ、その顔はハズレやね…ごめんごめん、箸落としてもたな」

謝るところは、箸なのか。

絹は、それを拾い上げた。

小さな手洗い場があるので、そこで洗うことにする。

頭の中は、さっきの話でいっぱいだった。

天野は、渡部の右腕について思うところがあるのか。

「本人に聞いた方が、早くないですか？」

きれいになった箸を持って戻りながら、絹は提案してみた。

「犬に噛まれたしか言わへん」

ああ。

不謹慎なことだが。

笑いかけてしまった。

確かに、絹にもそうとしか言わなかったのだ。

事情を知らない天野が、それですぐ森村とつなげられるはずがなかった。

「夏休み終わってみたら、あのバカは片腕になっとるし、森村は行方不明。あんたは入院やる？」

ウィンナーに箸を突き立てながら、天野はため息をつく。

だから、絹が質問されたわけか。

行方不明の森村には、聞きようがないだろうから。

「気になります？」

多分、入院先を尋ねにきたのも、渡部の腕が原因だろう。

「そらな、くされ縁やけど、長い付き合いやし……」

天野の唇が、少し淀んだ。

「あのバカは、尻軽でド悪党な奴やけど……テニスだけは妙に真面目やったし」

重く、彼女の口は閉ざされた。

そんなド悪党でも 心配してしまうのか。



## 家

「ただいま帰りました」

盛りだくさんの、復学一日目だった。

いろんな意味で疲労感を覚えながら、絹は帰宅する。

自分がいない間にも、時が動いて他の人たちが生活を続けていたのだと、今日の怒涛の情報で、いやというほど思い知らされた。

自分と同じように、自分と違うことを考え、思い、動く。

ただの、脳活動の副産物。

それは分かっているのに、確かに今、そこにある個性。

「ああ、絹」

居間にいくと、ボスがいた。

まだ、多少動きに制限はあるものの、とりあえず彼も日常に戻りつつある。

「なんででしょう」

少し、ボスとの間の空気が穏やかになった気がする。

ボスがもう絹を駒として使う気がない、というのを感じたからだ

ろう。

それは、確かに寂しいこともある。

最初の頃なら、その事実には絹は絶望したかもしれない。

自分は、不要なのだ。

そういう形でしか、人から必要とされないと思っていたせいだ。

だが。

形のないものが、あの時確かに見えた。

自分の何もかもを知るボスが、「それ」を思ってくれた。

女嫌いでもある彼が。

その事実の大きさを、絹はしっかりとかみ締めたのだ。

「それ」は、不安定だった彼女に足場を作った。

しっかりと足元を固め、ぐらつかずに立てるようになった。

その上で見る景色は どれも鮮やかで。

いままで、同じものを見ていたのかと驚くほどだ。

嫌われてはいけないと着込んでいた、厚い猫を脱ぎ捨て、絹は身  
軽になる。

それでも、広井兄弟は離れていかなかった。

気がついたら、絹にとっては楽園のような場所になっている。

モグラだった彼女が、地上でお日様を浴びているのだ。

まだ、少し落ち着かない。

しかし、しっかりした足場が、絹を支えてくれる。

いつか。

ここを出て行く日が来ても、大丈夫だと自分が感じるほど。

「今夜広井家で、快気祝いをしてくれるそうだ。支度をしなさい」

車の中で、兄弟は何も言わなかった。

変な秘密を持つものだ。

くすつと、絹は笑う。

「はい、すぐ支度します」

すぐには動き出さず、絹はふつと足元を見た。

正確には、この床のもつともつと下。

絹がほとんど出入りしない、地下の研究室だ。



そこに、もう1匹モグラがいる。

絹とはまた、違う闇を持っている存在。

いつか。

いつか彼も、そこから出られる日が来るだろうか。

いま抱えている記憶も、腕の古傷も、黒い服も。

全部、日の下にさらせる時がくるだろうか。

「島村さんも…来ませんかね」

ダメモトで口にする。

「…どこで、自分の過去が明るみになるか分からんからな」

前に、ボスが広井家に発明品を抱えていった時、島村はついて行かなかった。

二つの過去を、探られるのを恐れたのか。

実際。

蒲生は、それを調べた。

ただ、彼には科学的想像力はなかったのだ、不思議な過去から事実を構築出来なかったのだ。

「綺麗に…消せませんか？ 過去」

それが邪魔だと言うのなら、いっそ消してしまおう。

絹の過去は、渡部が勝手に消したようだ。

不可能ではないのなら。

「私の管轄外だな…本家…ゴホン…渡部家なら、出来るだろうが」

ボスが頼む、というのには抵抗のある声。

頼むのではない。

取引ならどうだろう。

「ボス…義手を作る気…ありませんか？ すごいやつ」

天野の表情が、頭を掠める。

空っぽの袖を、彼女はどんな気持ちで見たのか。

「ああ…なるほど…それもありがた」

ボスは、少し考え込む仕草を見せる。

義手について、あっさり理解したということは、情報は入っていたのだろう。

そして彼もまた、絹と同じ想像をしたはずだ。

「森村さんのこと…何か聞いてます？」

義手について思いめぐらせているボスに、ふっと思ったことを聞いてみた。

渡部は甥、森村は弟、という複雑な関係のボスは、腕の事をどう感じたのだろう。

「大丈夫だ…腹立たしい話だが、渡部の血はしぶとさが売りだ。嫌でも寿命まで生きてしまいうらしい」

結局、私も生きているだろう。

三途の川を渡りかけた男が、微かに口元で笑った。

ボスが、大丈夫というのなら　きっとそうなのだろう。

「さあ、支度をしてきなさい」

いろんな人間に、自分の髪を絡めたままの絹を、自由にするかのように声で押し出す。

「はい…」

髪を、すべて振りほどくことは出来ないが、絹は居間を出た。

一步、居間を出たら。

涙が出た。

自分が、幸せになろうとしているのを感じる。

行き先は、どこか分からないが、すくなくとも太陽は差している。

こんなワケありな自分が、いびつな自分のまま、幸せの道を行く  
うとしているのだ。

哀しい涙でも、嬉しい涙でもない。

ただの 涙。

強いて言うなら。

この世に生れる時の、涙。

一度生まれ、権利という意味で一度死に。

そしてまた 生まれ落ちた。

これから、やっと彼女は生きるのだ。

たくさんの人との、しがらみを絡めながら。

それすら。

いまの絹には、幸せという名を持っていた。

ワケは、山ほどある。

でも。

抱えられないほどの愛も、そこにはあった。

終

Ver・森村エンディング（前書き）

\*\*\*\*\*注 意\*\*\*\*\*

ここからは、おまけのエンディングです。

絹の未来のひとつひとつに分岐していきますので、サブタイトルから好きなものを選んでお読み下さい。

\*\*\*\*\*

Ver・森村エンディング

「久しぶり」

偶然、というには変な話だ。

こんな山奥で、たまたま会えるはずがない。

彼は。

ゆっくりと、絹の方を見た。

「ああ…久しぶりだな」

しかし、驚く様子はなかった。

穏やかとは言いがたいが、自分を包む棘を、自分で折り続けてい  
るのが分かる瞳。

若いのに、綺麗に丸められた頭が、彼の心の現われか。

3年たった。

正直に言えば、猛烈に探したかったわけではない。

ただ。

心のどこかに、ずっと引っかかっていた。

当事者というよりは、織田の犠牲者だった彼のことを。

「兄さんは、元気かい？」

絹に話すことは、きっとそれくらいしか思いつかないのだろう。

高校時代も、同じだった。

「ええ、皮膚の再生手術を自分でやって、綺麗に身体の傷を消すくらい元気よ」

大きな大きな身体の傷を、そうしてボスは消した。

あの日のことを、なかったことにしたかったわけではない。

もう、いらないのだと。

誰もが、過去の記憶から抜け出てゆく。

「……」

あの日と、もうひとつ別の業を背負ってしまった男が、そこにはいた。

何かを聞くようにして。

しかし、唇を閉じてしまった男が。

「そういえば、ボスがすごい義手を作ったのよ…人の手に限りなく近い奴」



絹は、くすつと笑いながら、話題を変えた。

不自然な話題の転換だ。

「……」

彼が、コメントしないことなんか、分かっている。

だが。

頭の中で、何かを思い描いているのだけは、痛いほどよく分かった。

そんな絹の足元に。

ひよこ。

ちっちゃい子供がいた。

あら。

ひよこひよこ。

しかも、増える。

「おねーちゃん……だあれ？」

無邪気な目が、珍しいもののように絹を見上げてくる。

「お客さまだよ……あいさつをしなさい」

静かな静かな、声。

子供らには、それがまっすぐに耳に入るらしい。

「こんにちはー」

ぴよこつと、素直に頭を下げる。

「中の方に行ってなさい、すぐにゆくから」

彼は、子供らを寺の方へと促す。

「はい」

はしゃぎながら、はねながら、ちびっこたちは奥へと駆け出した。

「……………」

そしてまた、沈黙。

あの子たちの、説明はしないんだ。

くすつと、絹は笑った。

あの中に。

もしかしたら、森村の子供がいるのかもしれない。

行く当てのない、青柳の子供たちなのかも。

とりあえず、森村は自分なりに、生きる意味を手に入れたのだらう。

それが、幸せなのか償いなのか弔いなのかは 分からないが。

「お邪魔したわ……」

帰ろうと、絹は別れの挨拶を言いかけた。

「いや……」

ようやく、彼女のために唇を開いてくれる。

それに、少し嬉しくなって。

「そのうち、また顔を出してもいい？」

言ってみたら。

少しの沈黙の後。

「……ああ」

と、答えてくれた。

Ver・島村エンディング

「はい」

絹は、包みを彼に手渡した。

居間で、ちょうど一人ぼりとしていたので、そこを彼女が捕まえたのだ。

「なんだ？」

うるんな目で、包みと絹を見比べる目。

「プレゼントよ」

きっぱり。

絹は、はっきりと言い切った。

「はあ？」

ますます、目がうるんになっていく。

それもそつだ。

プレゼントをもらつ言われなどない　そつ思っているのだらう。

「だって、誕生日でしょ」

もう一度、きっぱり。

瞬間。

目じりが、ぴくっと反応した。

分かっている。

分かっている、絹は言っているのだ。

彼は、二つの命の複合体。

身体と心が別の生き物。

どっちでもあり、どっちでもない、「自分」を確定できない人生を送っている。

その複雑な糸を、絹はあえて解こうとはしなかった。

単純に。

いま、彼の記憶と人格を構築している方の、誕生日を取っただけだ。

「誕生日じゃない」

ずいっと。

包みを突っ返された。

むっとした顔だが、絹だっけむっとした。

「いい加減にしなさいよ。もう、どこでも歩けるようになったのに、いつまで引きこもってんの」

絹のストレートパンチに。

「お前は、自分が陽の下を歩けるようになったから、日陰の人間を哀れんでいるだけだ」

容赦ないジャブの応酬。

「オレが日陰にいたいんだ、構うな」

痛烈な、アッパーカット。

むかむかむか。

「哀れんでなんかいないわよ…日陰になんかいたくないくせに！」

絹は、更に包みを突っ返す。

「日陰にいた方が楽なだけでしょ！」

瞬間。

彼は 言葉を失った。

フルヒットした、手ごたえ。

人の傷口を抉っている自分を、絹は強く踏みしめた。

たった一步。

あと一步踏み出せば、そこに太陽はあるのに。

呆然とした彼の手にある包みを、絹は上から引きちぎった。

とても、人にあげたものの扱いではない。

白い、シャツ。

包装の残骸の中から、長い袖がこぼれ落ちた。

彼の目が。

その白いの袖の、ボタンを追う。

「そろそろ…出なさいよ」

包装の残骸が、床に着地しきるより前に。

絹は、最後の一発を打ち込んだ。

じっと、シャツを見る瞳。

「それ着たら…デートくらい、してあげるわよ」

上から目線で、絹は彼に言った。

こんな言葉に、彼が乗ってこないのは知っている。

だから、あえて言ったのだ。

はっ、と。

彼は笑った。

「それは、こっちからお断りだ……」

そして。

黒い服の引きこもりは　　白い服の引きこもりになった。

半歩だけ。

彼に、陽が降り注いだ。



## Ver.了エンディング

「勝利の女神ーっ!」

すごい単語を叫びながら、絹は飛び付かれた。

その勢いと重さに、よろめいてしまう。

強い男を目指してきた彼は、たったいま高校生の頂点に立った。

そんな身体で、昔と同じノリで飛び付かれると、絹も支えきれなくて当たり前だ。

「すごかった？ 強かった？ かつこよかった？」

汗びっしょりのまま、全身で褒めるとアピールが押し寄せる。

「うんうん、すごかったし強かったしかつこよかったよ」

タオルで汗を拭いてやりながら、絹は笑った。

昔、宣言した通り、中身は可愛いままだ。

「やったーわーい!」

無邪気に、思い切り抱きしめられる 人目があるにも関わらず、  
だ。

「ちょ…ストップ。周りを見て」

絹は、慌てて彼を制止した。

このまま、キスまでされそうな勢いだったのだ。

「えー…」

しかし、まったくもって周囲の空気を感知せず、彼は頬をふくらませる。

「じゃあ、誰もいないとこいいー！」

その目が。

一瞬できらつと光る色をたたえ、絹の腕を引っ張って会場を後にする。

あ、あからさますぎる。

引っ張られながらも、絹は爆笑したい気持ちを抑えるので大変だった。

本当に、自分の生きたいように生き、やりたいようにやる男になったものだ。

強引でワガママで、それでいて、どうしても憎めない。

「これで大会も終わったから、絹さんとどこへでも行けるよ…待たせてごめんね」

会場裏手に、てきぱきと絹を連れ込む手際とは裏腹に、本当に嬉しそうに言葉を吐く。

「海がいい？ 山がいい？ 星を見に行く？」

「ここにこしながらも。」

更にてきぱきと、絹を抱きしめる。

ギャップが、おかしくてたまらない。

「進路はいいの？」

学年的には、ダブリの絹よりひとつ下になる彼は、いま高校三年生。

夏の大会が終わったら、次は進学が待っているだろうに。

「うん、大丈夫…僕、進学せずにアキさんとこいくから」

笑顔で とんでもないことを言い出した。

「アキさんにとって…」

具体的な想像がつかずに、絹は眉をひそめる。

「いまね、武道家を指導員として、世界に派遣してるんだよ、アキさんって」

そういえば。

昔に起きた、あの事件の後。

絹の後輩たちの半分近くは、アキの里に引き取られたと聞いた。

社会にすぐに復帰できない子らを、彼女が面倒を見ていたのだ。

武道の才能のある子は、その方向で育てているとも聞いた。

そうか。

あの子たちも、ちゃんと社会へ戻っていつているのか。

「ぶー…絹さん、いま遠い目をした…僕、それ嫌い」

遠い思い出に引つ張られかけた絹は、一瞬にして彼に足を掴まれ、引きずりおろされた。

暑いのに、ぎゅっぎゅっくに抱きしめられる。

日陰なのが、唯一の救いか。

「僕をちゃんと見てよ！ かつこいい僕を！」

本人が至ってまじめに言えば言うほど、どうしてこうおかしくなるのだろう。

確かに、彼を見ていると、遠い目をする暇もなさそうだ。

「  
見てるわよ」

くすくす笑いながら、絹は答えた。

「ほんと？」

疑いのまなざしが、真正面。

見ていると言った手前、この近距離でも目はそらせない。

「ほんとほん…」

笑いながら、肯定しようとしたのに。

我慢のきかない可愛い坊やは　ちうちくと、ねずみのようなキスを始めている。

口紅、塗ってるのに。

自分の口紅が、はげる心配をしているのではない。

彼が口紅をつけたまま　表彰台上がってしまう方を心配したのだ。

## Ver・京エンディング

「おい…絹!」

呼び掛けに、絹はフーンとあらぬ方を向いた。

三ヶ月、音沙汰ナシで世界中を飛び回っていた唐変朴には、これくらいでちょうどいいのだ。

社長代理で、死ぬほど忙しい思いをしたのは、百も承知。

「地球が冷えるより早く、私に氷河期がくるわよ」

しかし、多少のグレくらい許されるはずだ。

温Pの仕事に、本格的にハマった彼は、例の装置のエキスパートになった。

そのため、技術指導などで、世界中から引つ張りだこなのだ。

「分かった分かった、悪かった」

ずさんな謝りがきたので、文句を言おうと振り返ったら。

驚いた。

「なんで、怪我してるの?」

吊られた左腕。

「自然環境に、科学が入ってくるのを、嫌がる奴らがいるってことだ」

たいしたこたねえよ。

暴力的な脅しにも、まったくブレのない男だ。

おもしろくないのは、絹だ。

どこの誰だか知らない奴に、ボスの発明品とそのエキスパートが傷つけられたのだから。

「今度から、私も連れてって」

そんじょそこらの素人よりは、よほど役に立つ。

少なくとも、みすみす怪我させたりはしない。

「おまえなあ」

なのに、彼は物凄い嫌な顔をした。

「オレが、うんと言ったと思ってるか？」

ずいっと、顔が近づいてくる。

両目に、拒否の色がありありと浮かんでいた。

「私が女だから？」

女にボディガードされるのは、お気に召さないのか。

「違う。おまえが絹だから、だ」

揺るがない、男。

絹を危険な目にあわせるのは、イヤだと思っているのだろう。

「オレに同行したいなら、ボディガード以外の立場を狙えよ」

その目が、にやっと色を変える。

絹は、軽く虚空を見た。

ははーん。

「秘書になれ、と?」

それはそれで、楽にボディガードを兼任できそうだ。

絹が、いい案だと考えていたら。

「おまえ…絶対分かってるだろ」

冷やかなツツコミに、絹はもう一度虚空を見た。

ああ、そつちか。

「はてさて…秘書以外になにかあったかしら」



にっこり笑顔で、すつとぼけてみせる。

「たまーに、オレに拳を固めさせるよな、おまえ」  
引きつった笑み。

「言えないような事なら、大したことないんでしょ」  
音信不通で怪我までしてきて、偉そうな男だ。

彼との関係は、カ比べのようなもので。

うかつに力を抜くと、一瞬で壁ぎわ行きだった。

だから、同じだけの力で押し返さなければならぬ。

「ほー…それじゃ、覚悟しとけよ」

上等だ、という瞳。

ぎくり、と。

絹は、いやな予感がした。

顔が、どんどん近づいてくる。

「来週には、もう逃げられなくしとくからな」

「ちょ…何する気!?!」

狼の尻尾を踏んだことに気づく。

いきなり、何かを決意させてしまったのか。

「今か？ 今なら…キスだ」

ちがう！ そっちじゃない！

絹の叫びは 彼の唇の中に消えてしまったのだった。

## Ver・将エンディング

「絹さん、足元気を付けて」

手を引かれながら、雪原を歩く。

冬の北海道。

息も白くならない澄んだ空気の中、手を引かれて雪を踏む。

少しだけ眉間が痛いのは、皮膚のしたの古傷のせいか。

開けたところに出ると、彼は担いできた大荷物を下ろし、シートや毛布を敷き始める。

『何にもないところに、行かない？』

絹が高3の冬、そう誘われた。

留年した絹と違って、既に彼は大学生だ。

金持ちのボンボンなのだから、スキーとかに誘うのが王道だろうに。

曖昧で奇妙な誘いに、絹は笑いながら乗った。

そして、北海道に来てしまったのだ。

本当に、何もないところだった。

町は遠いし、携帯は入らないし、二人きりだし。

夜になって、極寒の外に連れ出される。

大体、想像がついたので、絹は下ばかりを向いて歩いていた。

自分だって、とても楽しみだったのだ。

だから、ぎりぎりまで取っておきたかった。

「いいよ、こっちにおいで」

先に座った彼が、肩にかけた毛布を広げながら待っている。

照れるようなことも、彼は容赦なくやってしまうのだ。

苦笑いしながらも、絹はその毛布に入った。

「見ていい？」

絹は、うずうずとときどきの間を行ったり来たりしている。

早く、どちらかを抑えたかった。

「じゃあ、一緒に見よう…オレも我慢してるんだ」

くすくす笑われて、絹は恥ずかしくなる。

「じゃあ、せーの、でね」

上ずりそうになる声で、台図を決めた。

「せーの！」

見上げた 空。

雪雲のない、快晴の冬の空。

「……」

声なんか出ない。

そこには。

原始の空があった。

この空に、近いものを前に見た。

街が真っ暗になった夜。

しかし、それよりももっとすごい夜空。

この空気が、冴え渡っているせいだ。

あれを超える空には、もう出会えないと思っていたのに。

「いつか、さ…」

見上げたまま、彼は呟いた。

「いつか、一緒に宇宙に行こうよ」

大学生になった男が、本気でそれを言っている。

行けたらいいね、ではなく、行こうと。

工学科に進んだ彼の、それはきっと目標になったのだろう。

夢、なんてふわふわしたものではなく。

「そうね…宇宙では、また違う星空が見えそうね」

それはもう原始ではなく、未来的な星空になるだろう。

星を見上げている男は、きっと星へ征く者になるのだ。

「あー…えっと…キスしてもいいかな？」

しかし、今はまだ。

星よりも、地上の女にとらわれている。

こっちが片付かないと、空にいけなくなってしまいそうだ。

絹は、小さく笑ってしまった。

「これから、全部ひとつずつ確認を取るなら…断り続けるわよ」

笑いながら、隣の男の足元に火をつける。

いちいち聞かないで、と。

「あ…うん…そうだよな」

一度空を見て、彼は地上の絹に戻ってきた。

冷えきった唇と共に

Ver . . . エンディング

昔。

少女を一人、買った。

女という生き物は嫌いだが、駒として役立つ教育をされているなら、いいだろう、と。

顔をいじり、発信機を埋め込み　ちよつと融通の効く、アンドロイドくらいに考えていた。

彼女は、よく働いた。

犬のように忠義を示し、想像以上の結果を出したのだ。

だが。

予想外の存在が、忠犬の心を乱した。

既に、この世にいない存在。

その女の謎の死を手繰り寄せたバカ犬は　最悪のカードをくわえて帰ってきた。

織田の描かれたカード。

そして。



彼の予定は、めちゃくちゃに引きちぎられた。

立場的に、自分が犬一匹守れない人間だと、思い知らされた。

そして。

馬鹿なことをした。

たった一度だけ。

犬のために、あらがったのだ。

本当に、馬鹿なことだった。

おかげで、痛い思いどころか、生死の境をさまよう羽目になったのだから。

同じ頃、犬も三途の川の手前をうろろろしていた。

たいした忠犬だ。

先に、この世に還ってきたのは彼の方で。

犬の魂はまだ、どこかをさまよっているようだった。

その額には、大きな傷が残っている。

犬は、傷など気にしないように思えた。

逃げなかった証の、向こう傷。

そんな 忠犬が、欲しかったわけではないのだ。

ただ、いうことをきくロボットであればよかったのに。

額の傷跡を、きれいに消してやったら。

犬は、目をさました。

なんら変わらない、彼に向ける瞳。

ああ。

自分の近くにいることを、誰よりも誇らしそつにする瞳。

無機質な駒を買ったのではなく、自分は犬を飼ってしまったのだ。

「ボス、準備できました」

いまも。

犬は、そこにいる。

「では、出かけよう」

女は、とても愛せない。

「楽しみですね、チヨウさんのバースデイ」

だが。

「そつだな」

犬なら 愛せる自分を知った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6033u/>

---

ワケあり！

2011年9月6日22時12分発行